

瓜 生 堂

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本 文 編 —

大 阪 府 教 育 委 員 会
財団法人 大阪文化財センター

瓜 生 堂

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本 文 編 —



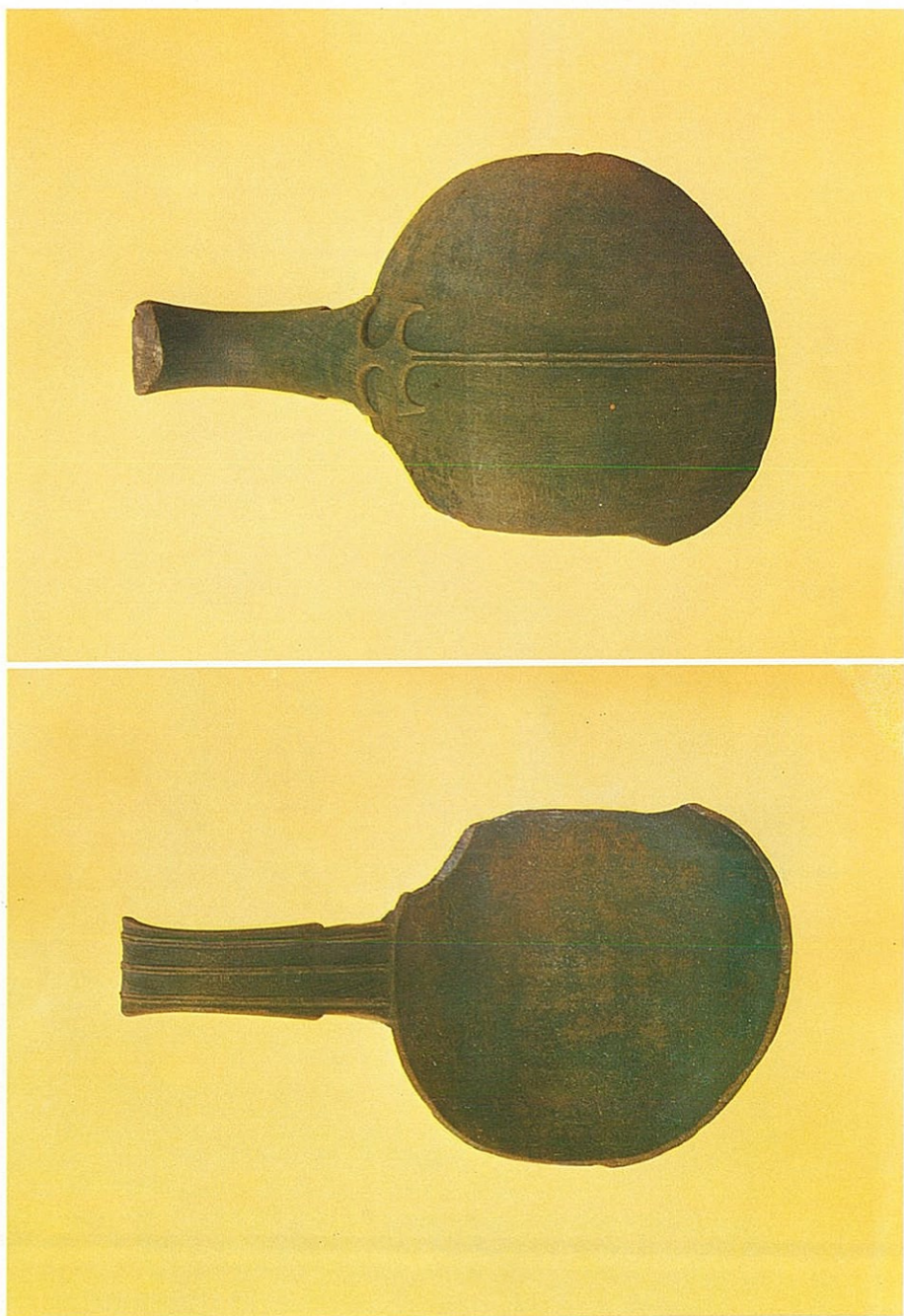
第1図 瓜生堂遺跡全景（南から）



第2図 B地区出土銅戈(右), 石製鑄型



第3图 E地区出土銅鐸形土製品



第4图 A地区出土横杓子

序 文

“瓜生堂”は、弥生時代以来の河内の歩みと河内平野の生成を刻み込んだ代表的な遺跡である。当遺跡の地層断面にみられる砂や粘土の幾重もの堆積から当時の人々が、一大勇気を奮って如何に初期水稻農耕の適地を求めて河内平野の中ほどへ足を踏み入れていったか想像されると共に、それはまた、当時の人々が、陸化したばかりの低い自然堤防あるいは三角州の先端に住居を定め、厳しい自然環境と調和し、また対決・克服を繰り返し経験しながら如何にその集落を維持し、構築発展させてきたかを物語っている。

瓜生堂遺跡は、近畿自動車道天理・吹田線（松原～東大阪間）が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施工されるに及んで確認された13遺跡の内の1つで、一昨年3月、調査を終了した大阪市長原遺跡に次いで発掘調査を実施したものである。

本書は、このような経緯を経て実施する予定の13遺跡の概要報告書の第2集で、昭和53年2月から昭和55年1月まで発掘調査を実施してきた東大阪市所在、瓜生堂遺跡の調査概要を収録した。今回の調査によって、砂と粘土に刻み込まれた河内の歴史を更に明らかにし得たものと確信する。また、調査の結果をもとに協議した結果、方形周溝墓等の重要な遺構については、橋脚予定位置を変更して保存をはかることとなった。

これらは偏に、日本道路公団、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに一般多数の方々のご協力、ご援助の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜われるよう切望してやまない。

昭和55年1月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 谷川 秀 善

序 文

人間の営みは歳月の流れと共に歴史となる。大和盆地と金剛山系の水を集めて流れる古大和川によって形成された河内平野に生活の場を求めた人々も、例外なく彼らの歴史を土中に遺した。

豊葦原と唱われた肥沃な河内平野は、一面自然的な環境の変化に脆い面を持っていた。従って彼らの歴史は自然との闘いと調和の歴史と言えよう。自然環境の変化に戸惑い、それを克服した人々の歴史を河内平野は各所に埋め込んで現在に至っている。

当センターは、設立以来、埋蔵文化財の保護、普及事業を積極的に実施する中で、その使命を果しながら、着実に発展してきた。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡の調査も、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的な調査を依頼され、長原遺跡の調査を初めとして、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、西岩田遺跡、新家遺跡、若江北遺跡、亀井遺跡、友井東遺跡、山賀遺跡と、順次9遺跡の調査を完了若しくは実施している。

本書は、上記の各調査のうち、昭和55年1月すべての調査が完了した東大阪市瓜生堂及び若江西新町所在の瓜生堂遺跡の発掘調査の概要を記したものである。調査に要した期間、費用も膨大ならば、検出した遺構、遺物も膨大なものであり、そのすべてを本書に収録したものではないが、河内平野の特殊性や、そこに生活をした人々の歴史を肌で感じ取っていただけるものと確信するとともに、瓜生堂遺跡という河内最大の複合集落跡の実態の解明に大きく貢献出来得るものと確信する。

昭和55年1月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

例 言

- 1、 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市瓜生堂3丁目及び若江西新町1、2丁目に所在する瓜生堂遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2、 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
- 3、 本調査に要した費用、577,840,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
- 4、 本調査は、昭和53年2月18日から昭和55年1月31日までの間実施した。
- 5、 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も、発掘調査と並行して実施した。
また、遺構図面や写真資料等の概括的な整理業務は、現地における発掘調査の合間と昭和54年12月1日から昭和55年1月31日までの2ヶ月間に実施した。
- 6、 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄
	主幹兼庶務係長	阪上允代、主事 田中喜代子、秋山芳廣、嶋中紀代、灰本明子、千野和久
	普及係長	福岡澄男、技師 片山彰一、平井貞子
調査総括責任者	業務課長	堀江門也
瓜生堂分室	主幹兼業務第1係長	中西靖人、技師 岩崎二郎、赤木克視、藤澤真依、入江正則、上西美佐子、石神幸子、村上年生、西口陽一
	業務第2係長	瀬川 健、技師 今村道雄、大谷治孝、杉本二郎、松村隆文、亀島重則、森井貞雄、藤田雅子、村上富喜子、清原弘美、奥 和之
	業務第3係長	玉井 功、技師 小野久隆
	業務第5係長	酒井龍一、技師 森田義孝

また、調査に際して多数のため個々別記することは出来ないが、日本道路公団大阪工務所、大阪府八尾土木事務所及び河内警察署等に格別の配慮を受けると共に近畿大学、奈良

大学、岡山大学、大阪経済法科大学、大手前女子大学、四天王寺女子大学、樟蔭女子大学、関西女子短期大学等の学生諸君の協力を得た。

- 7、 本書の遺構実測図の方位はすべて真北をさす。
- 8、 本書に記載した各遺物は、記載した順に一連番号を与え、実測図と写真を対照できる様にした。また土器は数字のみで表わしたが、石器は頭にS、木器は頭にWを付して表示した。
- 9、 遺構の実測図（付図）の縮尺はすべて $\frac{1}{200}$ である。ただし本文中挿図の縮尺は任意である。
- 10、 遺物の実測図の縮尺は、土器がすべて $\frac{1}{4}$ 、石器は $\frac{2}{3}$ と $\frac{1}{2}$ 、木器は、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{8}$ とした。
- 11、 土器の器種分類、形式分類は池上遺跡発掘調査報告書“土器編”に準拠した。
- 12、 本調査では、自然遺物を中心に以下の諸氏の御指導、御協力を受けると共に鑑定を依頼した。

池田次郎（人骨）、粉川昭平（植物種子）、西田正規（獣骨）、平沢彌一郎（足跡）、藤下典之（ウリ科植物）、松田隆嗣（木材）、安田喜憲（花粉）

また、出土木製品の保存処理についても財団法人元興寺文化財研究所に委託をした。

- 13、 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カールスライドを多数作製したが、そのすべてを本書に掲載することが不可能であるため、本書記述以外の資料については、財団法人大阪文化財センターで保管している。広く利用されることを希望したい。

瓜 生 堂

近畿自動車天理～吹田線建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

巻頭原色写真図版 第1図～第4図

序文

例言

第Ⅰ章	はじめに	堀江門也	1
第Ⅱ章	調査の方法	堀江門也	4
第Ⅲ章	河内平野の形成と遺跡地周辺の環境	堀江門也	7
第Ⅳ章	層序の概要	瀬川 健	10
第Ⅴ章	調査の成果		
第1節	A地区の調査	赤木克視、上西美佐子	13
第2節	B地区の調査	藤澤真依、上西美佐子、入江正則	83
第3節	C地区の調査	岩崎二郎、藤田雅子	241
第4節	D地区の調査	今村道雄、石神幸子、大谷治孝、奥 和之	291
第5節	E地区の調査	杉本二郎	337
第6節	F地区の調査	松村隆文、村上富喜子	355
第7節	G地区の調査	松村隆文、村上富喜子	365
第8節	H地区の調査	瀬川 健、小野久隆、村上富喜子	373
第Ⅵ章	まとめ	中西靖人	421
付 章	(自然科学の調査成果)		
I	瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析Ⅱ	安田喜憲	427
II	瓜生堂遺跡出土の植物種子	粉川昭平	437
III	瓜生堂遺跡出土の <i>Cucumis melo</i> (メロン仲間) および <i>Lagenaria siceraria</i> (ヒョウタン仲間) の種子について	藤下典之	441
IV	木製遺物の樹種について	松田隆嗣	445
V	瓜生堂遺跡方形周溝墓出土の人骨について—1978～1979年度	池田次郎	449
VI	瓜生堂遺跡出土の動物骨	西田正規	451
VII	スタシオロジー(身体静止学)から見た瓜生堂・巨摩廃寺両遺跡の足跡	平沢彌一郎	452

挿 図 目 次

第 1 図	近畿自動車道東大阪～松原間遺跡分布図	3
第 2 図	瓜生堂遺跡トレンチ配置図	5
第 3 図	瓜生堂遺跡地区割図	6
第 4 図	周辺遺跡分布図	9
第 5 図	瓜生堂遺跡の層序	11
第 6 図	A地区弥生時代南北断面略図	13
第 7 図	A地区土層断面模式図	14
第 8 図	弥生時代前期包含層出土遺物	15
第 9 図	溝15出土土器	17
第 10 図	土壙1出土土器	18
第 11 図	土壙2出土土器	18
第 12 図	土壙3出土土器	19
第 13 図	土壙4出土土器	19
第 14 図	土壙11、落込1出土土器	20
第 15 図	溝3溝中5A-1足跡面平面図	21
第 16 図	弥生時代中期下部包含層出土土器	22
第 17 図	弥生時代下部包含層出土土器	23
第 18 図	第1号方形周溝墓盛土内出土土器	25
第 19 図	第2号方形周溝墓盛土内出土土器	26
第 20 図	第4号方形周溝墓主体部及び盛土内出土土器	27
第 21 図	第4号方形周溝墓主体部平面、断面図	28
第 22 図	4A-1足跡面足跡1	29
第 23 図	第1号方形周溝墓北周溝出土土器	30
第 24 図	第1号方形周溝墓北周溝出土土器	31
第 25 図	第1号方形周溝墓北周溝出土土器	32
第 26 図	第1-2号方形周溝墓間周溝下部出土土器	33
第 27 図	第1-2号方形周溝墓間周溝下部出土土器	34
第 28 図	第1-2号方形周溝墓間周溝上部出土土器	35
第 29 図	第2号方形周溝墓北、西周溝出土土器	36
第 30 図	第2号方形周溝墓北、西周溝出土土器	37
第 31 図	第2-3号方形周溝墓間周溝出土土器	37
第 32 図	第2-4号方形周溝墓間周溝、第4号方形周溝墓西裾部出土土器	38
第 33 図	第4号方形周溝墓東周溝出土土器	39
第 34 図	方形周溝墓周溝断面図	40
第 35 図	第1-4号方形周溝墓間周溝出土土器	41
第 36 図	第1-4号方形周溝墓間周溝出土土器	42
第 37 図	土壙250実測図	43

第 38 図	土壙 250 出土土器	44
第 39 図	土壙 250 出土土器	45
第 40 図	土壙 262、263、265 出土土器	46
第 41 図	土壙 263 実測図	47
第 42 図	落込11出土土器	48
第 43 図	5 A—2、3 足跡実測図	48・49
第 44 図	弥生時代中期上部包含層出土土器	49
第 45 図	A地区出土石器(1)、土製品	55
第 46 図	A地区出土石器(2)、土製品	56
第 47 図	A地区出土石器(3)	57
第 48 図	A地区出土石器(4)	58
第 49 図	第1号方形周溝墓北周溝及び第1—2号方形周溝墓間周溝最上層出土木器	61
第 50 図	第1—2号方形周溝墓間周溝最上層出土木器	62
第 51 図	第1—2号方形周溝墓間周溝最上層出土木器	63
第 52 図	土壙 263、第3号方形周溝墓西周溝出土木器	64
第 53 図	第1—2号方形周溝墓間周溝、下部包含層、土壙3及び河川7出土木器	65
第 54 図	弥生時代後期遺構面Ⅰ包含層出土土器	66
第 55 図	弥生時代後期遺構面Ⅱ出土木器	68
第 56 図	河川7出土土器	69
第 57 図	青灰色微砂層出土土器	70
第 58 図	6 A—1 足跡及び畦畔状遺構1実測図	70
第 59 図	井戸15及び落込出土土器	71
第 60 図	溝230及び沼沢1実測図	71
第 61 図	沼沢1出土遺物	72
第 62 図	1 A—1 足跡面実測図	74
第 63 図	黒褐色粘土層出土木弓	83
第 64 図	B地区南北土層断面略図	85
第 65 図	灰色粘土層出土管玉	85
第 66 図	溝19出土土器	87
第 67 図	溝21出土土器	88
第 68 図	溝30、溝31、溝32出土土器	89
第 69 図	溝33出土土器	90
第 70 図	溝37出土土器	91
第 71 図	溝46出土土器	92
第 72 図	溝47、溝54、溝56、溝61、溝62出土土器	93
第 73 図	溝69、溝72出土土器	94
第 74 図	溝76、土壙128、隅丸方形周溝出土土器	96
第 75 図	土壙17、土壙41、土壙42出土土器及び土壙41木製品出土状況図	99
第 76 図	土壙43出土土器	100
第 77 図	土壙48、土壙53出土土器	101
第 78 図	土壙63、土壙65、土壙81出土土器	103

第 79 図	土壙 104、土壙 105、土壙79、土壙 125、土壙 130 出土土器及び土壙 125 遺物出土状況	105
第 80 図	土壙 140、土壙 141 出土土器	106
第 81 図	弥生時代中期遺構面 I 包含層出土土器	108
第 82 図	弥生時代中期遺構面 I 包含層出土土器	109
第 83 図	第 1 主体部平面、断面図	110
第 84 図	第 5 号方形周溝墓盛土内出土土器及び第 1 主体部甕棺	111
第 85 図	第 6 号方形周溝墓盛土内出土土器	112
第 86 図	第 7 号方形周溝墓供献土器	113
第 87 図	第 7 号方形周溝墓盛土内出土土器	114
第 88 図	第 8 号方形周溝墓周溝内出土土器	115
第 89 図	第 8 号方形周溝墓第 1 主体部、第 4 主体部、第 6 主体部、第 7 主体部出土土器	116
第 90 図	第 8 号方形周溝墓盛土内出土土器	117
第 91 図	第 8 号方形周溝墓盛土内出土土器	118
第 92 図	第 9 号方形周溝墓周溝内出土土器	119
第 93 図	第 9 号方形周溝墓盛土内出土土器	120
第 94 図	第 9 号方形周溝墓盛土内出土土器	121
第 95 図	第 10 号方形周溝墓盛土内出土土器	122
第 96 図	土壙 270 出土土器	124
第 97 図	土壙 270 出土土器	125
第 98 図	河川 1 内出土銅戈実測図・拓本	127・128
第 99 図	弥生時代中期遺構面 II 包含層出土土器	130
第 100 図	弥生時代中期遺構面 II 包含層出土土器	131
第 101 図	弥生時代中期遺構面 II 包含層出土土器	132
第 102 図	B 地区出土石器 (1)	135
第 103 図	B 地区出土石器 (2)	136
第 104 図	B 地区出土石器 (3)、土製品	137
第 105 図	B 地区出土石器 (4)	138
第 106 図	B 地区出土石器 (5)	139
第 107 図	B 地区出土石器 (6)	140
第 108 図	B 地区出土石器 (7)	141
第 109 図	B 地区出土石器 (8)	142
第 110 図	B 地区出土石器 (9)	143
第 111 図	B 地区出土石器 (10)	144
第 112 図	B 地区出土石器 (11)	145
第 113 図	溝 31 出土木器	152
第 114 図	土壙 41、中期遺構面 I 包含層出土木器	153
第 115 図	溝 19、溝 29、土壙 270、中期遺構面 II 包含層出土木器	154
第 116 図	土壙 16、土壙 125、土壙 270、中期遺構面 III 包含層出土木器	155
第 117 図	土壙 43、隅丸方形周溝、第 9 号方形周溝墓盛土内、中期遺構面 III 包含層 出土土器	156

第 118 図	溝 220 出土土器	158
第 119 図	河川 3、河川 4 出土土器	160
第 120 図	河川 3、河川 8 出土土器	161
第 121 図	弥生時代後期遺構面 I 包含層出土土器	162
第 122 図	弥生時代後期遺構面 I 包含層出土土器	163
第 123 図	弥生時代後期遺構面 I 包含層出土土器	164
第 124 図	溝 222 出土土器	165
第 125 図	河川 8 出土土器	167
第 126 図	落込 15 出土土器	170
第 127 図	井戸 8 平面・断面実測図	171
第 128 図	溝 224 埋土断面図	172
第 129 図	河川 9 出土土器	174
第 130 図	井戸 12 出土土器	175
第 131 図	井戸 13 平面、断面図及び出土土器	176
第 132 図	井戸 14 平面、断面図及び出土土器、土壙 331 出土土器	177
第 133 図	落込 20、河川 10 出土土器	178
第 134 図	弥生時代中期遺構面 I の足跡実測図	185
第 135 図	弥生時代後期遺構面 I の足跡実測図	186
第 136 図	溝 29 出土広口壺形土器 B	189
第 137 図	溝 29 平面・断面図	197
第 138 図	溝 29 出土土器	198
第 139 図	溝 29 出土土器	199
第 140 図	溝 29 出土土器	200
第 141 図	溝 29 出土土器	201
第 142 図	溝 29 出土土器	202
第 143 図	溝 224 出土土器	212
第 144 図	溝 224 出土土器	213
第 145 図	溝 224 出土土器	214
第 146 図	溝 224 出土土器	215
第 147 図	溝 224 出土土器	216
第 148 図	溝 224 出土土器	217
第 149 図	土器溜 1 出土土器	219
第 150 図	土器溜 2 出土土器	221
第 151 図	土器溜 3 遺物出土状況図	223
第 152 図	土器溜 3 出土土器	224
第 153 図	土壙 330 出土土器	225
第 154 図	甕分類図	229
第 155 図	高杯分類図	232
第 156 図	土器セット分類図	235
第 157 図	古墳時代前期包含層出土土器	236
第 158 図	古墳時代前期下層出土土器	237

第 159 図	古墳時代前期下層出土土器	238
第 160 図	古墳時代前期下層出土土器	239
第 161 図	古墳時代前期下層出土土器	240
第 162 図	弥生時代後期、古墳時代前期包含層出土土器	242
第 163 図	溝78出土木器	243
第 164 図	溝78出土土器	245
第 165 図	溝82出土土器	246
第 166 図	溝82、溝86出土土器	247
第 167 図	溝84、溝93出土土器	248
第 168 図	溝92、溝94、溝99出土土器	249
第 169 図	土壙 152、土壙 157 出土土器	250
第 170 図	土壙 142、土壙 146、土壙 148、ピット 738、ピット 739、ピット 767 出土土器	251
第 171 図	落込 4 出土土器	252
第 172 図	第11号方形周溝墓墳丘断面図	253
第 173 図	第11号方形周溝墓西裾 2号土壙平面、断面図	254
第 174 図	第11号方形周溝墓西裾 1号土壙、2号土壙出土土器	254
第 175 図	第11号方形周溝墓西裾 2号土壙出土木器	255
第 176 図	第11号方形周溝墓周溝内遺物出土状況平面、断面図	258
第 177 図	第11号方形周溝墓周溝内出土土器	259
第 178 図	第11号方形周溝墓周溝内出土土器	260
第 179 図	第11号方形周溝墓周溝内出土土器	261
第 180 図	第11号方形周溝墓周溝内出土土器	262
第 181 図	第12号方形周溝墓第 1 主体部平面、断面図	263
第 182 図	第12号方形周溝墓盛土内出土土器	264
第 183 図	第12、13、14号方形周溝墓墳丘断面図	265
第 184 図	第13号方形周溝墓第 3 主体部甕棺	266
第 185 図	第13号方形周溝墓第 3 主体部平面、断面図	266
第 186 図	第13号方形周溝墓周溝内出土土器	268
第 187 図	第13号方形周溝墓周溝内出土土器	269
第 188 図	第13号方形周溝墓周溝内、及び盛土内出土土器	270
第 189 図	第14号方形周溝墓盛土内出土土器	271
第 190 図	第14号方形周溝墓周溝内出土土器	272
第 191 図	弥生時代中期包含層出土土器	273
第 192 図	C地区出土石器 (1)	276
第 193 図	C地区出土石器 (2)、土製品	277
第 194 図	C地区出土石器 (3)	278
第 195 図	C地区出土石器 (4)	279
第 196 図	1 Cトレンチ出土足跡長出現頻度数分布グラフ	282
第 197 図	1 Cトレンチ弥生時代後期足跡面平面図	283
第 198 図	1 Cトレンチ古墳時代前期足跡面平面図	284

第 199 図	落込28遺物出土状況平面、断面図	286
第 200 図	落込28出土土器	289
第 201 図	落込28出土土器	290
第 202 図	D地区土層断面模式図	291
第 203 図	弥生時代中期遺構面Ⅰ遺構断面図	293
第 204 図	井戸 1、井戸 2、井戸 3、土壙 169、土壙 176 出土土器	294
第 205 図	土壙 179、溝 110、溝 111、溝 112、遺構面Ⅰ小溝、遺構面Ⅰ包含層 出土土器	295
第 206 図	大溝（溝 201）土層断面図	296
第 207 図	大溝（溝 201）下位、上位出土土器	298
第 208 図	大溝（溝 201）上位出土土器	299
第 209 図	第15号方形周溝墓第 1 主体部	300
第 210 図	第15号方形周溝墓土層断面図	300・301
第 211 図	第15号方形周溝墓、第16号方形周溝墓出土土器	302
第 212 図	第16、17、18、19号方形周溝墓出土土器	303
第 213 図	第19、20号方形周溝墓出土土器	304
第 214 図	第20号方形周溝墓土層断面図	305
第 215 図	第20号方形周溝墓供献土器出土状況	305
第 216 図	第21号方形周溝墓土層断面図	306・307
第 217 図	第21号方形周溝墓第 4 主体部人骨出土状況	307
第 218 図	第21号方形周溝墓東北周溝遺物出土状況	308
第 219 図	第21号方形周溝墓第 1 号土壙土器出土状況	309
第 220 図	第22号方形周溝墓西南周溝遺物出土状況	311
第 221 図	第21号方形周溝墓墳丘上供献土器	312
第 222 図	第21号方形周溝墓墳丘上供献土器、東北周溝、土壙 5 出土土器	313
第 223 図	第21号方形周溝墓第 1 号溝、西北周溝出土土器	314
第 224 図	第21号方形周溝墓東北周溝第 1 号土壙出土土器	315
第 225 図	第21号方形周溝墓東南周溝、第22号方形周溝墓周溝中層・上層出土土器	316
第 226 図	第21号方形周溝墓東北周溝、第22号方形周溝墓周溝中層・上層出土土器	317
第 227 図	第23号方形周溝墓土層断面図	319
第 228 図	第23号方形周溝墓主体部木棺出土状況	320
第 229 図	第23号方形周溝墓、壺棺墓出土土器	321
第 230 図	壺棺出土状況	322
第 231 図	弥生時代中期包含層出土土器	322
第 232 図	D地区出土石器（1）	326
第 233 図	D地区出土石器（2）	327
第 234 図	D地区出土石器（3）	328
第 235 図	D地区出土石器（4）・土製品	329
第 236 図	畦畔状遺構土層断面図	332
第 237 図	弥生後期・庄内式包含層、布留式自然河川出土土器	333
第 238 図	D地区出土木器（1）	334

第 239 図	D地区出土木器(2)	335
第 240 図	D地区出土木器(3)	336
第 241 図	E地区土層断面模式図	337
第 242 図	弥生時代中期遺構面 I	338
第 243 図	大溝(溝 115)土層断面図	338
第 244 図	大溝(溝 115)出土土器	339
第 245 図	大溝(溝 115)出土土器	340
第 246 図	大溝(溝 115)出土土器	341
第 247 図	第24号方形周溝墓主体部	342
第 248 図	第24号方形周溝墓土層断面図	342
第 249 図	第25号方形周溝墓土層断面図	342
第 250 図	第24号方形周溝墓、第25号方形周溝墓出土土器	343
第 251 図	土壙 276 遺物出土状況実測図	344
第 252 図	弥生時代中期遺構出土遺物	345
第 253 図	弥生時代中期包含層出土遺物	346
第 254 図	弥生時代中期包含層出土遺物	347
第 255 図	畦畔状遺構	349
第 256 図	砂層出土土器	350
第 257 図	土壙 365 出土土器	350
第 258 図	E地区出土石器	352
第 259 図	E地区出土石器	353
第 260 図	E地区出土木器	354
第 261 図	F地区土層断面模式図	355
第 262 図	4 F トレンチ弥生時代中期遺構実測図	356
第 263 図	弥生時代中期包含層出土遺物	357
第 264 図	1 F トレンチ足跡実測図	358
第 265 図	灰白色粗砂層出土土器	359
第 266 図	灰白色粗砂層出土木器	359
第 267 図	4 F トレンチ遺構実測図	360
第 268 図	4 F トレンチ畦畔土層断面図	360
第 269 図	1 F トレンチ足跡実測図	361
第 270 図	古墳時代出土遺物	362
第 271 図	暗灰褐色粘質土出土遺物	363
第 272 図	線刻画のある須恵器	364
第 273 図	G地区土層断面模式図	365
第 274 図	土壙実測図	367
第 275 図	土壙出土土器	368
第 276 図	土壙出土土器	369
第 277 図	溝 119、中期包含層出土土器	370
第 278 図	土壙 184 出土石器	370
第 279 図	黄褐色細砂層出土土器	371

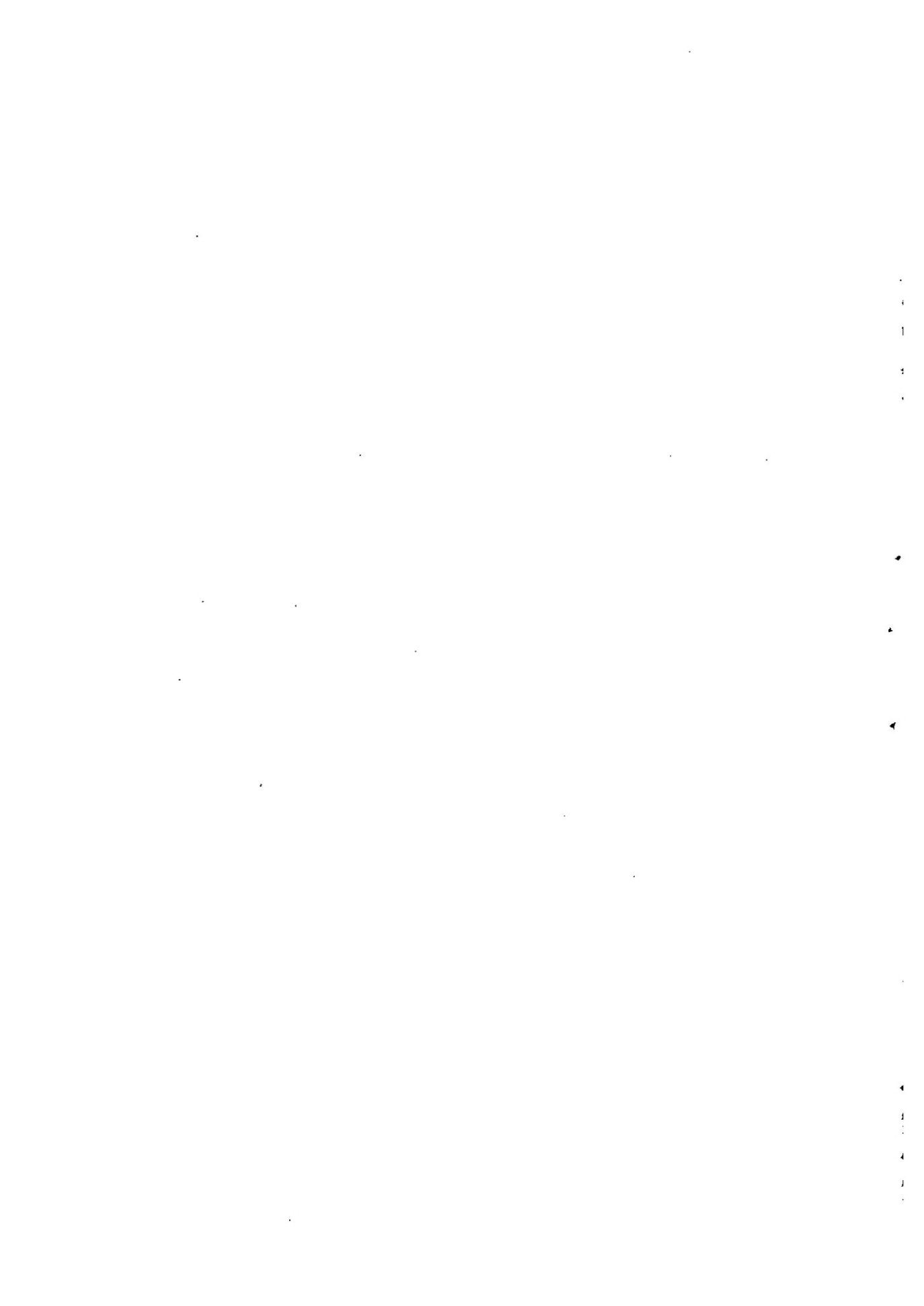
第 280 図	暗灰褐色粘質土出土瓦	372
第 281 図	H地区土層断面模式図	373
第 282 図	包含層出土土器	374
第 283 図	住居址 1 (上)、住居址 2 (下) 実測図	376
第 284 図	住居址ピット実測図	378
第 285 図	住居址 1、2、土壙 215 出土土器	379
第 286 図	ピット 141 出土の石器	380
第 287 図	井戸 4、井戸 5	381
第 288 図	土壙 215、建物 4、溝出土土器	386
第 289 図	土壙 194 土器出土状況実測図	389
第 290 図	土壙 196、土壙 197 土器出土状況実測図	390
第 291 図	土壙 202 土器出土状況実測図	392
第 292 図	土壙 205 出土土器	393
第 293 図	土壙実測図	395
第 294 図	落込 7 土器出土状況実測図	398
第 295 図	落込 8 土器出土状況実測図	398
第 296 図	土壙 190、192、193、194、197、落込 7 出土土器	399
第 297 図	土壙 197 出土土器	400
第 298 図	土壙 197 出土土器	401
第 299 図	土壙 197、200、201 出土土器	402
第 300 図	土壙 196、202、205、207 出土土器	403
第 301 図	土壙 208、210、211、212、219 出土土器	404
第 302 図	土壙 212、井戸 4、落込 7・8、ピット 142 出土土器	405
第 303 図	包含層出土土器	408
第 304 図	落込 7 出土土器	410
第 305 図	H地区出土石器 (1)	414
第 306 図	H地区出土石器 (2)、土製品	415
第 307 図	包含層出土土器	416
第 308 図	包含層出土木器	417
第 309 図	砂層上面土器出土状況	418
第 310 図	自然河川12遺物出土状況実測図	419
第 311 図	自然河川12出土土器	420

表 目 次

第1表	A地区出土石器類及び土製品一覧表……………	59～60
第2表	A地区足跡検出数一覧表……………	73
第3表	1 A—1 足跡計測一覧表……………	75
第4表	弥生時代中期足跡計測一覧表……………	76
第5表	弥生時代後期足跡計測一覧表……………	77
第6表	現代人の左足、足長、足幅、年令別平均表……………	79
第7表	現代人の身長……………	79
第8表	1 A—1 足跡面第1足跡列計測表……………	80
第9表	1 A—1 足跡足示数一覧表……………	81
第10表	現代人年令別平均足示数一覧表……………	81
第11表	B地区出土石器類及び土製品一覧表……………	146～151
第12表	溝29出土土器器種構成表……………	188
第13表	溝29出土土器紋様構成表……………	194
第14表	第11号方形周溝墓周溝内土器群出土土器器種構成表……………	256
第15表	C地区出土石器類及び土製品一覧表……………	280・281
第16表	第22号方形周溝墓周溝出土土器器種構成表……………	318
第17表	D地区出土石器類及び土製品一覧表……………	323～325
第18表	銅鐸型土製品出土地名表……………	348
第19表	E地区出土石器類一覧表……………	350・351
第20表	G地区土壙一覧表……………	366
第21表	H地区出土石器類及び土製品一覧表……………	412・413

付 図 目 次

付図1	A地区	弥生時代中期遺構面Ⅰ	実測図
付図2	A地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	実測図
付図3	A地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	方形周溝墓測量図
付図4	B地区	弥生時代中期遺構面Ⅰ	実測図
付図5	B地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	実測図
付図6	B地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	方形周溝墓測量図
付図7	B地区	弥生時代後期遺構面Ⅰ	実測図
付図8	B地区	弥生時代後期遺構面Ⅱ	実測図
付図9	B地区	古墳時代前期遺構面	実測図
付図10	B地区	古墳時代前期遺構面Ⅱ	溝224土器出土状況実測図
付図11	B地区	古墳時代前期遺構面Ⅱ	溝224土器出土状況実測図
付図12	B地区	古墳時代前期遺構面Ⅱ	溝224土器出土状況実測図
付図13	B地区	古墳時代中期遺構面	実測図
付図14	B地区	奈良・平安時代遺構面	実測図
付図15	B地区	鎌倉・室町時代遺構面	実測図
付図16	C地区	弥生時代中期遺構面Ⅰ	実測図
付図17	C地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	実測図
付図18	C地区	奈良時代以降遺構面	実測図
付図19	D地区	弥生時代中期遺構面	実測図
付図20	D地区	弥生時代中期包含層上面	測量図
付図21	E地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	実測図
付図22	E地区	弥生時代中期遺構面Ⅱ	測量図
付図23	E地区	中世遺構面	実測図
付図24	F地区	中世遺構面	実測図
付図25	G地区	弥生時代中・後期、古墳時代中期、中世遺構面	実測図
付図26	H地区	弥生時代中期、古墳時代中期、中世遺構面	実測図



第 I 章 は じ め に

瓜生堂遺跡は、近畿自動車道天理・吹田線建設予定地内松原～東大阪13.5Km区間に存在する新家、西岩田、瓜生堂、巨摩廃寺、若江北、山賀、友井東、美園、佐堂、久宝寺、亀井、城山、長原の13遺跡の内の代表的遺跡で大阪府東大阪市瓜生堂1～3丁目から若江西新町1～2丁目にかけて所在している。

近畿自動車道天理、吹田線建設予定地内13遺跡の取扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として協議を重ねてきたが昭和48・49年の財団法人大阪文化財センターに委託実施された試掘調査を基に、基本的には発掘調査結果を尊重し、工法を検討しながら橋脚位置を決定し、高架道路を建設していくということで協議が整い、この協議結果を基に日本道路公団から文化庁へ文化財保護法に基づく協議文書が提出され、文化庁からの事前の発掘調査の徹底と遺構保存に十分配慮すべき旨の回答を受け、大阪府教育委員会は、財団法人大阪文化財センターに現地調査の協力を求めて、昭和51年4月、日本道路公団大阪建設局との3者で、調査についての協定書を締結した。

そして、昭和51年7月、長原遺跡の調査についての契約を締結し、同年8月、現地調査着手、昭和53年3月、数回の契約変更を重ねながら現地調査終了、同年5月、概要書作成のための整理を完了し、概要報告書「長原」を刊行したことは記憶に新しいところである。

この長原遺跡の調査の終了を待って、今後予定されている12遺跡の調査について、昭和58年末を目標とした5ヶ年計画を作成すると共に、次の調査対象に選ばれたのが瓜生堂遺跡である。

瓜生堂遺跡は、昭和9年3月、遺跡内を流れる楠根川の改修工事の際、多量の弥生式土器をはじめ土師器や須恵器等の遺物が発見されたことに端を発する様であるが、昭和40年頃までは現地表下3～4mもの深いところに、大規模な弥生時代以降の集落が埋没しているとは誰もが予想もしていなかった。

ところが、昭和40年2月、府道大阪中央環状線建設に先立って行なわれた工業用水管理設工事現場において、多量の弥生式土器等と共に青銅製利器の鋒先（戈あるいは剣）が採集され、掘削工事こそ完了していたが、掘削断面の観察から、遺物包含層の範囲が数100mにも及ぶことが知られ一躍注目を浴びることとなった（第Ⅰ地点）。

引続き、昭和41年9月、楠根川を大々的に改修する第二寝屋川改修工事が行なわれた際には、組合式箱形木棺や甕棺や壺棺等が次々と発見され、この地域が弥生時代中期の墓域であることが明らかとなった（第Ⅱ地点）。更にこの第Ⅱ地点の西北約300mの地点では、弥生前期の土器を包含する貝層中から弓弭状鹿角製品が発見されると共に、大阪府、東大阪市両教育委員会によって初めて発掘調査が行なわれ、弥生時代前期の遺構、遺物が検出された（第Ⅲ地点）。

昭和45年12月には、府道大阪中央環状線南行車線に接した中央分離帯部分で寝屋川南部流域下水道計画事業中央南幹線下水管渠築造工事が始まり、大阪府および東大阪市教育委員会が「中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会」（現瓜生堂遺跡調査会）を組織して調査を実施した結果、弥生時代中期の住居跡とみられる柱根や溝など多くの遺構の他、盛土が良好に残存した方形周溝墓や土壙墓群が検出され、益々、瓜生堂遺跡の名を高めた。また、この際更に、古墳時代～奈良時代の遺構も存在することが明らかとなった（第Ⅳ地点）。

昭和46年12月～47年12月には、東大阪市建設局下水道部によって計画された公共下水道中部第2排水区若江分区分下水管渠築造工事に先立って、同じく瓜生堂遺跡調査会によって発掘調査がおこなわれ、遺跡の東限を明らかにすると共に、今回のC、Dトレンチ間を横断する部分で、木棺、人骨、壺棺などを検出し、この地域にも弥生時代中期の墓地が存在することが明らかになるなど多くの成果をおさめた（第Ⅴ地点）。

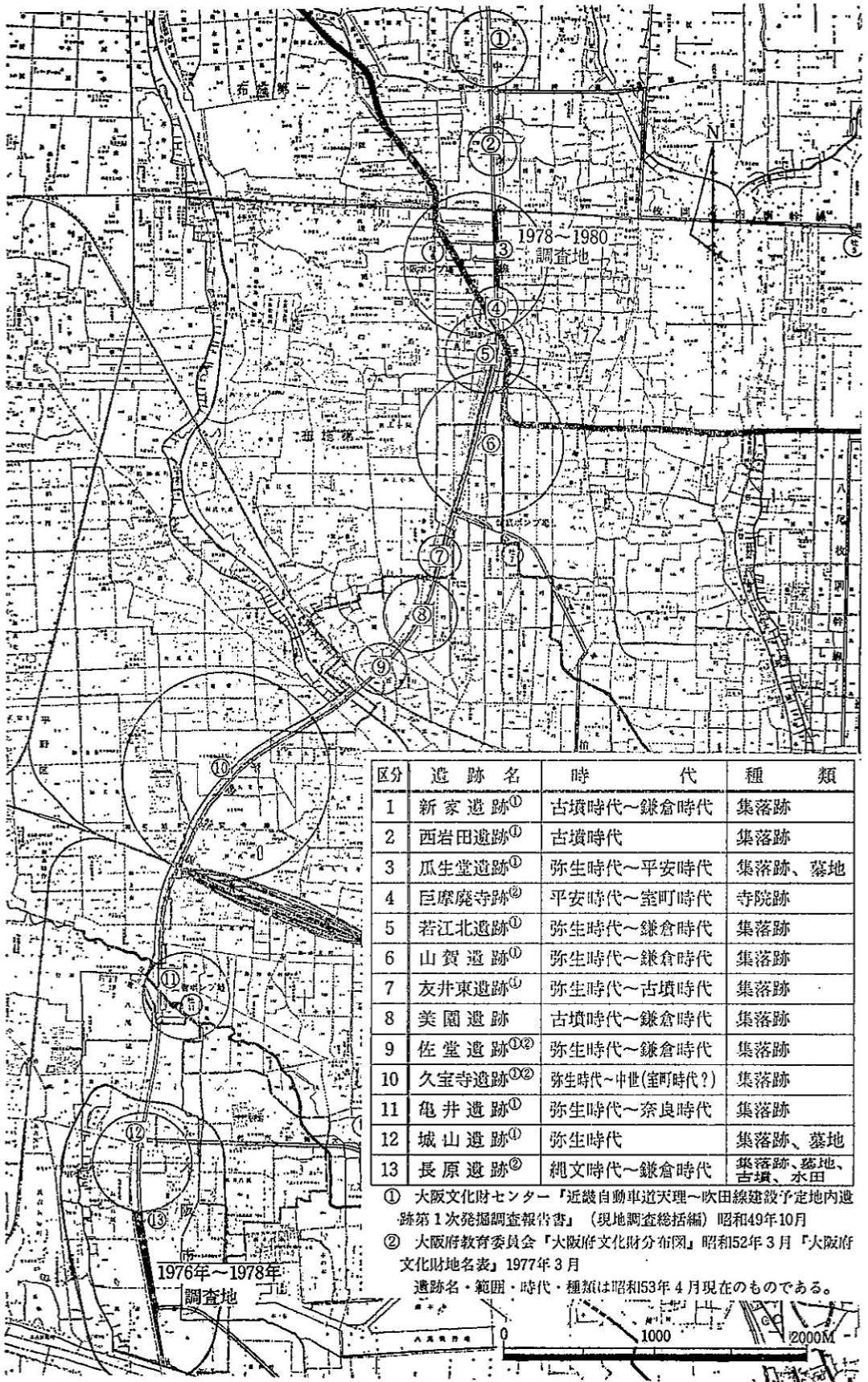
昭和49年5月～同年9月には、先述した様に当センターによる府道大阪中央環状線中央分離帯内に日本道路公団によって計画されている近畿自動車道天理・吹田線内瓜生堂遺跡の範囲確認調査が行なわれた結果、当遺跡の南北範囲は、北端が近畿日本鉄道奈良線附近、南端が一応、巨摩廃寺遺跡までの約550mと限定すると共に、引続き実施された巨摩廃寺、若江北、山賀遺跡の範囲確認調査によって巨摩廃寺以南山賀遺跡までの下層にも弥生時代の包含層の存在が明らかとなり、将来、瓜生堂から山賀遺跡まで一連のものとして考える必要のあることを示唆する成果が得られた。

昭和48年10月～49年3月、昭和50年10月～51年3月、昭和53年8月～54年3月の3回、小阪ポンプ場増設に伴う調査では、更に保存状態の良い方形周溝墓15基と土壙墓や甕・壺棺等が多数検出され、当時の墓制、社会構造等を究明する良い成果が得られた（第Ⅵ地点）。

昭和53年4月～53年8月には、当該遺跡北東隅と考えられるマンション建設予定地内での調査が行なわれ、ここでも弥生時代中期の方形周溝墓が検出され、墓域の拡がり、墓制、集落構造を究明する新たな結果が得られた。

瓜生堂遺跡は、このように、これまでの大阪府・東大阪市教育委員会並びに瓜生堂遺跡調査会の調査によって、方形周溝墓や土壙墓、甕棺、壺棺と住居跡や大溝等の遺構の検出と弥生式土器をはじめとする各種土器、石器、木器、骨角器に加えて青銅製利器の発見等によって河内平野における最大規模の弥生時代以来の大集落として全国的にもその名が知られている。

瓜生堂遺跡の調査は、昭和53年2月、調査についての3者契約を締結し、同年3月現地調査に着手し、数回にわたる契約変更を重ねながら昭和54年12月、現地調査を終了した。



第1図 近畿自動車道東大阪~松原間遺跡分布図

第Ⅱ章 調査の方法

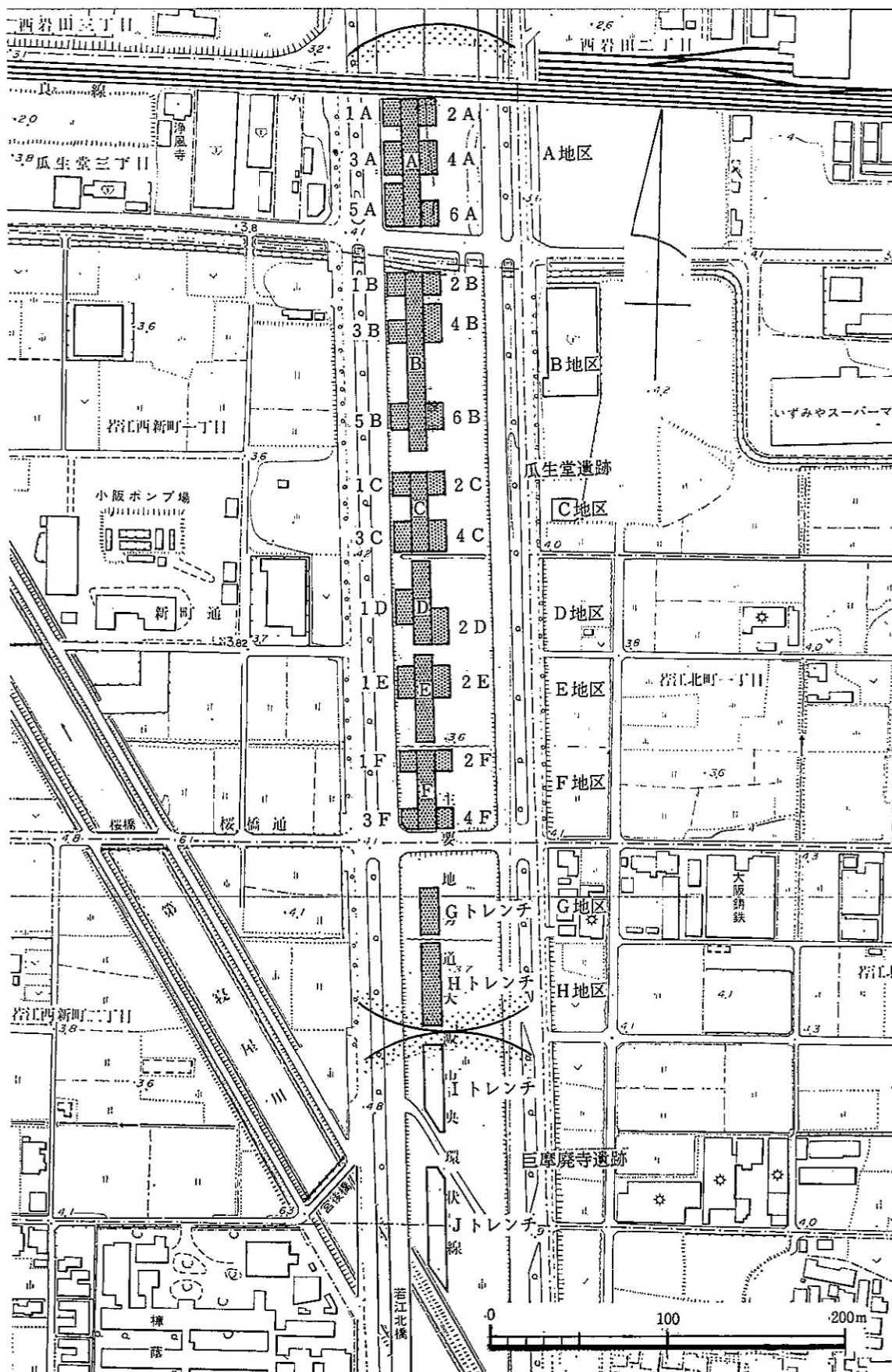
瓜生堂遺跡の発掘調査は、日本道路公団から全面委託を受けて実施するもので、調査に先立ち大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センター、日本道路公団大阪建設局の3者による契約を締結し、現地調査は、大阪府教育委員会から数名の職員の派遣をも得て、財団法人大阪文化財センターが担当実施した。なお、調査作業の内、機械・人力掘削、土止め支保工はじめ準備工事等は、調査に伴う補助作業として土木工事施工業者に請負わせる形で実施していった。

調査は、道路が高架道路であり、相当地下深く遺構、遺物が埋設していること、その他、経費、期間、安全面等の諸条件を考慮して、全面発掘調査より現況保存を優先した必要最少限度の調査を目的として発掘面積を極力限定する方法がとられた。長原遺跡では、それが橋脚予定位置のみに限定されたわけであるが、古墳等の重要遺構が検出されるたびに、その予定位置の変更を繰り返すばかりで期間的にも経費面でも反省すべき点が多かったため、今回の瓜生堂遺跡以後の調査予定遺跡については、調査に先立つ5ヶ年計画の策定にあたり調査方法の再検討がなされ、まず最初に路線中央の遺跡全長に南北方向に幅10mのトレンチを設定し、その部分の調査結果を検討、判断して橋脚予定位置を決定するという、いわゆる“トレンチ調査方式”が採用された。このトレンチ方式では、本来的には、全域1本のトレンチが設定されるわけであるが、途中、電気、ガス、水道、電話等の地下埋設物や横断道路等によって分断されるのは止むを得ないところで、結局、瓜生堂遺跡では、横断道、下水道管、用水路等によって、北からA～Hの8本のトレンチに分断され、各トレンチの長さは、Aトレンチから順に70m、100m、45m、48m、50m、45m、26m、46mとなった。

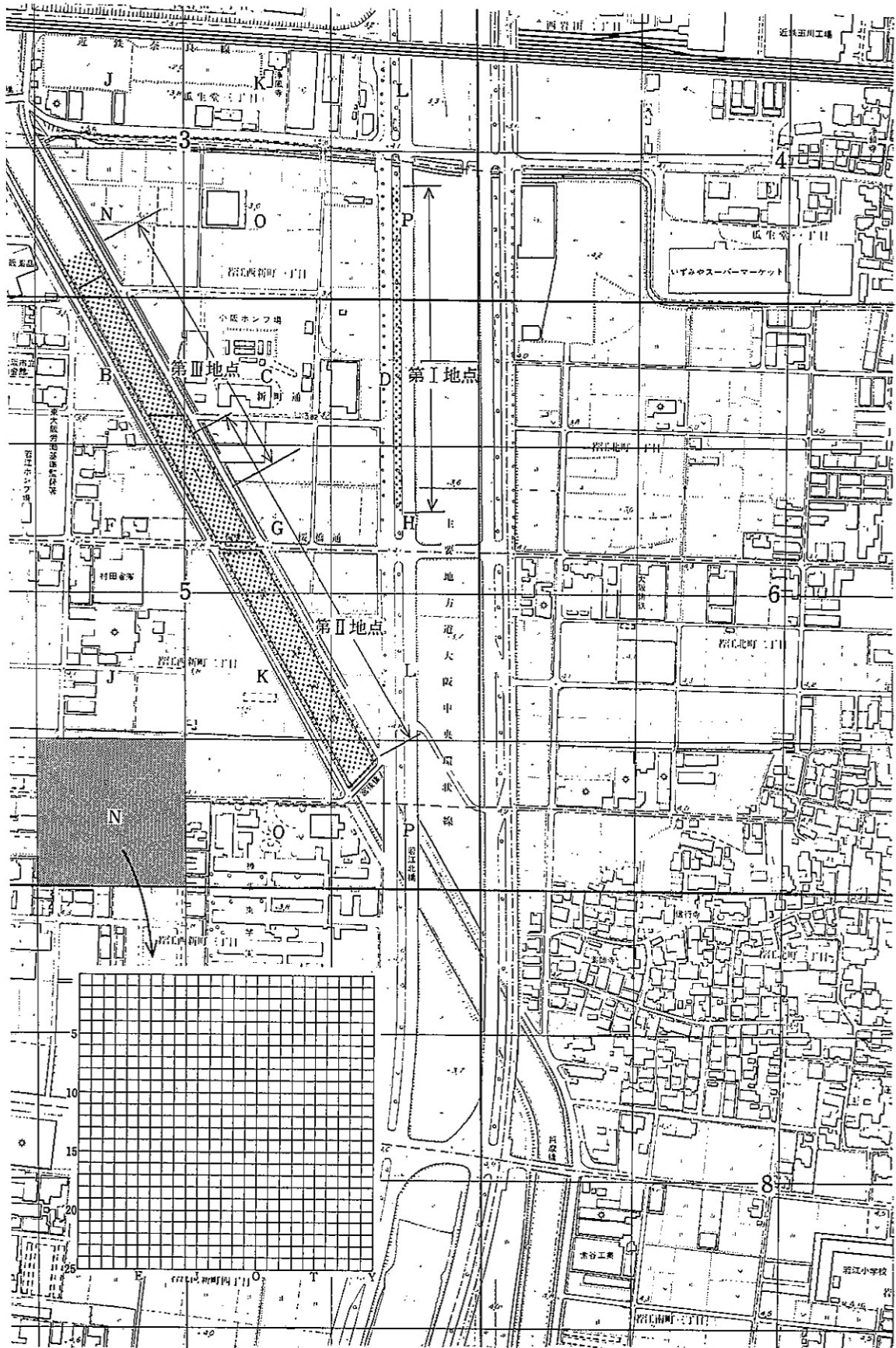
また、当遺跡では埋設深度が試掘調査結果によっても、現地表下3.2～3.6mと深く、湧水等も激しいところから各トレンチ、橋脚予定（切抜）位置共、鋼矢板でもって土止めし、仕切る方法がとられた。また、当初予定より更に深くなったり、矢板のたわみが生じた部分については切梁腹起し材を使用した部分もある。

調査の実測基準線並びに地区割については、これまでの調査地区との関連性を保つため瓜生堂遺跡調査会が昭和45年に付近の地割に合わせて設定した地区割並びに基準線を踏襲することとした。すなわち、最大地区を500m四方とし、この大地区をアルファベットによって125m四方の中地区に分割し、更に5m四方の小地区に分け東西方向は、西からA～Yのアルファベット、南北は、北から南へ1～25までの数字で5m毎の基準線を表わしたものである。

今回の調査では、いわゆる現地での発掘調査だけでなく、花粉、種子、樹種の同定や人骨、足跡の鑑定等、各専門分野からの参加を得て、当時の生活、環境の復原にも努めた。



第2図 瓜生堂遺跡トレンチ配置図



第3図 瓜生堂遺跡地区割図

第 III 章 河内平野の形成と遺跡地周辺の環境

瓜生堂遺跡は、大阪府東大阪市瓜生堂 1～3 丁目から同市若江西新町 1～2 丁目に所在し、近畿日本鉄道奈良線八戸ノ里、若江岩田駅間高架の南方一帯に広がる遺跡で、これまでの調査の結果、遺跡の範囲は、北こそ先述した近畿日本鉄道奈良線を越えないが、南は、巨摩摩寺遺跡の下層から更には若江北遺跡に連続し、東西は、府道中央環状線、第 2 寝屋川を若干越えた地点まで、南北 800m、東西 500m にわたる河内平野の中でも最大規模を有する弥生時代以来の大集落遺跡であることが知られている。

そして、当遺跡の所在する現地盤の標高は、T. P. 3 m 前後と低く、弥生時代に集落を営み始めた頃の地盤は更に低く、現在の地盤沈下を考慮に入れても T. P. 0～1 m と、当時の海水面がどの程度のものかわからないが、それ程高い立地にはなかったものと思われる。

瓜生堂遺跡が所在するこの河内平野は、東が生駒山地に、西は上町台地に囲まれ、旧大和川（恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川）やその他の中小河川によって形成された三角州平野で、大きく自然堤防、氾濫原、潟湖性低地の 3 つに地形分類できる。

特にこの河内平野の形成が進むのは、縄文後、晩期以降の海水準の低下する海退期で、内湾から潟湖、更に潟湖性の低湿地へと変化していく時期に、この低湿地に向って鳥趾状に押し出された砂の堆積により形成されたものといわれている。

これより以前、縄文後、晩期以前は、縄文前期頃を 1 つのピークとする海進期で、いわゆる「河内湾」の時期である。

このことから、河内平野に人々が足を踏み入れたのは、前述した海退期に潟湖性の低湿地に向って鳥趾状に押し出され堆積した砂の上である。時期的には、弥生時代の前期の頃である。このことは、これまでにこの河内平野内並びに縁辺で発見されている遺跡を概観することによっても窺われる。ただ、この瓜生堂をはじめとして周知されている遺跡は、比較的埋没深度も深く、その実体のよく知られている遺跡は、瓜生堂遺跡を除けば比較的調査が数多く行なわれている亀井遺跡等ごく限られたものとなる。それ故、現段階では、各遺跡を時期別、水系別、立地環境別程度に分類出来る位であるが、それでも河内平野のなかほどへアプローチしていった様子と、瓜生堂遺跡の歴史的環境は窺われるものと思う。

縄文晩期を主とした遺跡として知られているのは、国府、船橋、長原、恩智、馬場川、縄手、日下、岡山、森の宮等で、やはり羽曳野丘陵の縁辺や生駒山麓線や上町台地の縁辺ばかりで河内平野の内の沖積地や三角州には、その足跡は認められない。

弥生前期の古段階にあっても、国府、船橋、鬼塚、森の宮遺跡等は、丘陵台地縁辺や生駒山麓線上で、河内平野の内へは足を踏み入れた跡は認められない。

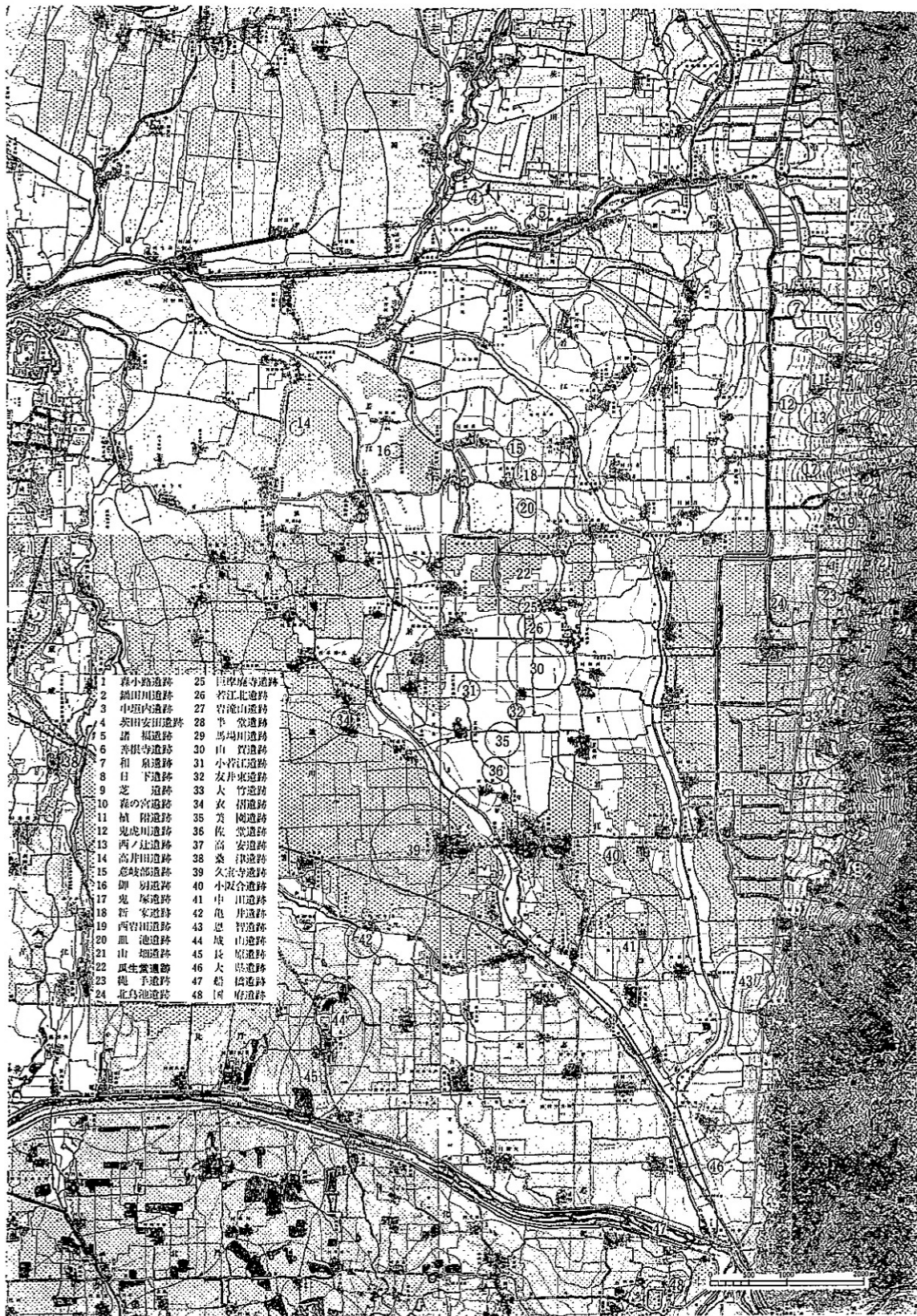
河内平野の中程へ最初に足を踏み入れたのは山賀遺跡の人々で、恐らく稲作農耕の伝播に伴うもので、弥生時代前期の新段階の頃である。続いて、同じ楠根川水系では、瓜生堂や高井田遺跡に、平野川水系では、亀井遺跡、その他、森小路遺跡等に、その足跡を残すようになる。そして以後、これらの遺跡を核にして各水系毎に新たに足跡を印した遺跡が形成されてくる。勿論、この河内平野の縁辺にも前代に引続き、その足跡をとどめていて、生駒山麓等縁辺部では、恩智、鬼虎川、芝、中垣内遺跡等多くの遺跡が数えられる。

弥生時代中期になると河内平野では、前代の遺跡の他に楠根川水系の若江北、長瀬川水系の小若江や衣摺、寝屋川水系の諸福遺跡等が新たにその足跡を印すようになる。瓜生堂、巨摩廃寺、若江北遺跡の最近の調査では、この辺りは完全に陸化し、弥生時代にあっては最も活発な集落生産活動が行なわれ最も大規模化する時期である。同じ頃、生駒山麓では、やはり前代からの遺跡に加えて、新たに下泉、和泉、善根寺、植附、西ノ辻、山畑、縄手、高尾山遺跡等非常に増加する傾向が認められる。

弥生時代後期になっても同様、生駒山麓等縁辺部の遺跡は、国府、船橋、恩智、高安、岩滝山、半堂、縄手、北島池、皿池、鬼塚、西ノ辻、芝ヶ丘、日下、中垣内、鍋田川、野崎等非常に集落遺跡の数を増すが、河内平野では逆に、長瀬川水系の中田、小阪合、久宝寺、友井東、楠根川水系の瓜生堂、若江北遺跡等で遺物の出土は認められるが、遺構としては余り明瞭かつ大規模には確認されず、瓜生堂、巨摩廃寺、若江北遺跡等の調査で明らかのように、この時期の厚く覆う砂の堆積等を勘案すれば、平野部の遺跡環境がかなり不安定な条件に置かれていたことが考えられ、水田跡等への顕著な変化も観察される。

古墳時代以降になると河内平野でも前代に比して環境条件が安定してくるようで長瀬川水系の中田、久宝寺、美園、小若江、御厨、楠根川水系の若江、瓜生堂、西岩田、意岐部遺跡等比較的大規模で、現代まで集落として存続するものがみられる。しかし、遺跡の調査が行なわれたものは少なく今後の調査成果に期待される。

瓜生堂遺跡他河内平野内の上記した諸遺跡の立地環境は、河内平野の形成の中でも述べた様に、これまでの地質学、歴史地理学、花粉分析学等の成果によって、河川の自然堤防上あるいは三角州の先端に立地し、灌木や草本植物が繁茂し、その前面には初期水稻農業を生業とするのに最適な後背低湿地が拡がっていたことが明らかにされている。しかし一方では、雨や洪水等気候その他の自然条件の変化に伴う影響を最も直接的に受けていたことも明らかにされている。したがって逆に、このような立地環境にあっては治水面にしろ、道具類の原材料の入手にしても、各集落遺跡単独では決して成立しえず、足跡を印した当初より同一水系あるいは山麓台地縁辺の集落との関連は断ち難く、併せて自然との闘いと調和を反復、経験、克服することによって大和と並ぶ先進地として大きく発展していったものと思われる。



第4図 周辺遺跡分布図

第IV章 層序の概要

瓜生堂遺跡は、前章でも述べられたように、河内低地のただ中に位置する。国土地理院発行の土地条件図によると、南から続く低地一般面（旧大和川の形成した氾濫平野）から、北方、淀川の氾濫平野にかけて広がる低位面（三角州）に移る境界付近に立地している。すなわち、旧大和川の沖積作用をもっとも強く受けている地域に含まれるのである。今回の調査の結果明らかになった、遺跡の南北500m以上に及ぶ層位の様相も、この立地条件による沖積作用の激しさを如実に示している。この章では、弥生時代以降連続と続く複合遺跡である、瓜生堂遺跡の変遷をたどる基礎となる、基本的な層序について今回の調査結果をもとに概況を述べる。

A 弥生時代前期まで（以後第5図参照）

瓜生堂遺跡付近の、沖積層の基底部、すなわち洪積層と沖積層の境界は、ボーリングデータによると現地表下15~20mに達する^(註)。約10,000年の堆積の結果である。

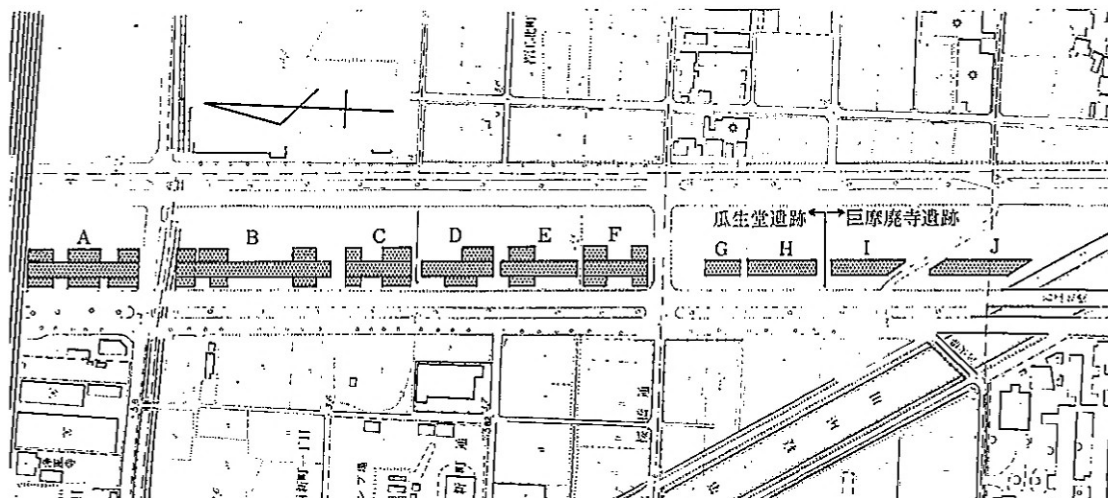
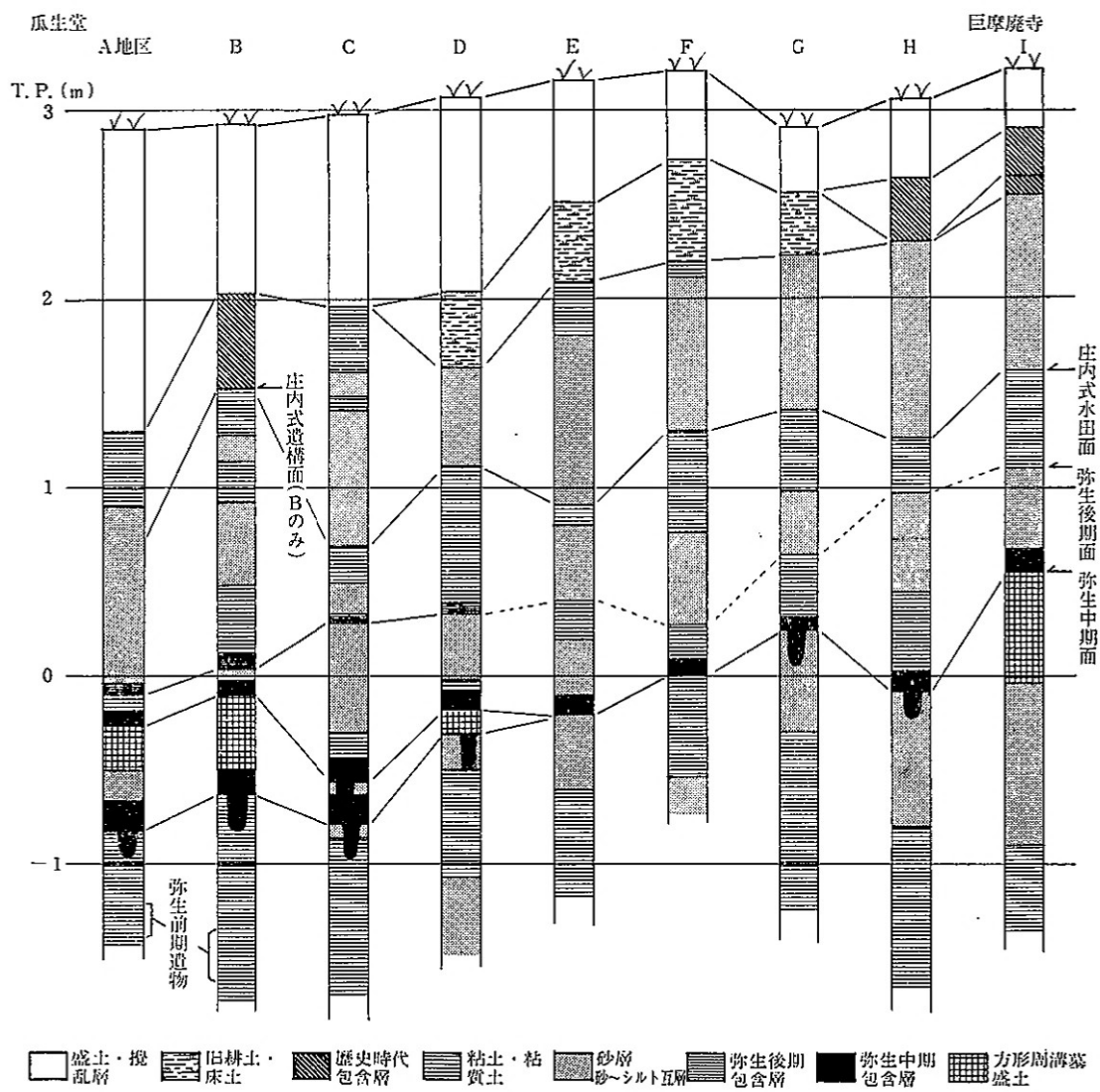
縄文時代はじめの、いわゆる縄文海進により、河内低地は海水で覆われる。南は八尾付近、北は高槻付近にまで達したとされる。その後、淀川、旧大和川の激しい沖積作用によって、この河内湾は急速に埋まっていき、縄文時代晩期~弥生時以前期までには、淡水化が進んで「河内潟」と呼ぶべき姿になる。瓜生堂遺跡の地で、人々が米作りをなりわいとする生活を始めた弥生時代前期には、河内潟の汀線は、瓜生堂ムラの付近にあったのである。この時期の遺構は、今回の調査範囲からは検出されていないが、A、B両地区のT.P. - 1.5~-2mの深さで畿内Ⅰ~Ⅱ様式の弥生式土器をわずかに含む黒灰色~暗青灰色粘土が見られるのは、村はずれの、河内潟による堆積層である可能性が高い。

B 弥生時代中期（畿内Ⅲ~Ⅳ様式）

この時期になって遺跡付近は完全に陸化し、人々はムラの規模を拡大して定住を計る。遺構の検出された範囲はA地区南半からH地区、さらには巨摩麿寺遺跡まで、南北の拡がり600mに及ぶ。

この遺構面を、本書では「弥生時代中期遺構面Ⅰ」と呼ぶことにする。遺構面Ⅰを覆うのは、黒色~灰黒色砂質粘土層であるところが多く、この層が中期包含層である。

A地区の南部よりE地区の北部までの間では、上記の包含層上面から切込まれた遺構、また同面上に盛土を施した方形周溝墓が検出された。これらは、下の遺構面Ⅰの時期と大きな時間差はもたないが、遺構の性格は大きく異にする。これを「弥生時代中期遺構面Ⅱ」と呼ぶ。同面上には中期包含層がもう一層加わるが、E地区南部以南の、遺構面が単一であったところには、これに対応する層は見られず、遺構面と包含層それぞれ一層のみで終わっている。この、単一の中期遺構面の時期は、出土遺物から、今のところA~E地区の遺構面Ⅱの時期に相当する可能性が高いと考える。



第5図 瓜生堂遺跡の層序

中期遺構面の標高は、A地区はT.P. - 1 m前後、H地区はT.P. ± 0 m前後、すなわち今回調査地の南北両端では、約1 mの比高で、南が高い（この傾斜は、以後の各時期の面でもほぼ同様に受け継がれていく）。弥生中期遺構面Iのベースは、A、B、F地区の一部を除いて、おおむね0.2~1 m位の厚みの砂あるいは砂質土である。このことは、ムラの地が、陸化の後に一定期間流水による堆積をうけていたことを示すと共に、人々が、水はけのよい砂質土壌の微高地を選んで定住したであろうことをも示している。

C 弥生時代後期

弥生時代中期包含層のすぐ上層には、20~50cmの暗灰色粘土層が堆積しているところが多い。これは、河川の流路の移動が起り、ムラが水没をきたした結果であろうと考えられる。粘土層の上には、暗灰色~灰色の粗砂や砂の堆積が見られ、粘土層と合わせると後期の間で約1 m程も堆積が進行している。その間、A~C地区では遺構も検出され、またA・B・F・G地区等では足跡のついた面もあることから、人々の生活は近隣で続いていたと考えられる。

D 古墳時代（庄内式）

この時期のまとまった遺構は、B地区で検出された。また、D・Fおよび巨摩廃寺I・J両地区では、庄内式期のものでほぼ誤りない一連の水田遺構を検出した。水田は、厚さ20~30cmの暗青灰色粘土層を耕土と考えることができ、畦畔も同様の土である。水田面の高さを見ると、巨摩廃寺遺跡でT.P. +1.5~+1.6 m、D地区でT.P. +1.0mとなだらかに傾斜し、畦畔の状況とも合せてかなり大規模な整地の行われていた可能性が高い。またB地区の遺構面は、T.P. +1.5m前後と高く、水田に対応する居住域であったとみられる。

E 古墳時代（布留式）以降

C地区以南では、古墳時代中期も沖積作用の非常に激しかった時期であったと見られ、布留式土器の細片を含む砂~シルトの互層が0.6~1 m以上に渡って堆積している。T.P. + 2 m前後（現地表下約1 m）が歴史時代の遺構面であり、B~C地区には奈良~平安時代の掘立柱建物群が検出されている。D地区以南では、古墳時代中期~中世に至る雑多な遺物を少量ずつ含む中世以降の整地層が、5世紀後半までに形成された堆積層の上に直接接しているので、中世~近世にかけての時点で微地形をかなり変化させるような整地が行なわれたと考えられる。

以上のように、瓜生堂遺跡の層序は、各時期の遺構・包含層が、ほとんど削平を被ることなく、逆に砂層やシルト層の厚い間層が各層を保護して現在に至っている。このため、各層位の遺構は多くの場合明確に一時期を示し、層位的に緻密な発掘調査を可能にしている。このことが、次章以下の記述にみられるように、時間の経過と共に変化していく様々の生活の痕を、豊富に我々に提供することに結びついているのである。

（注） 河内瀉については、市原 実・梶山彦太郎〈大阪平野の発達史—¹⁴C年代データからみた〉「地質学論集7」に依拠した。

第V章 調査の成果

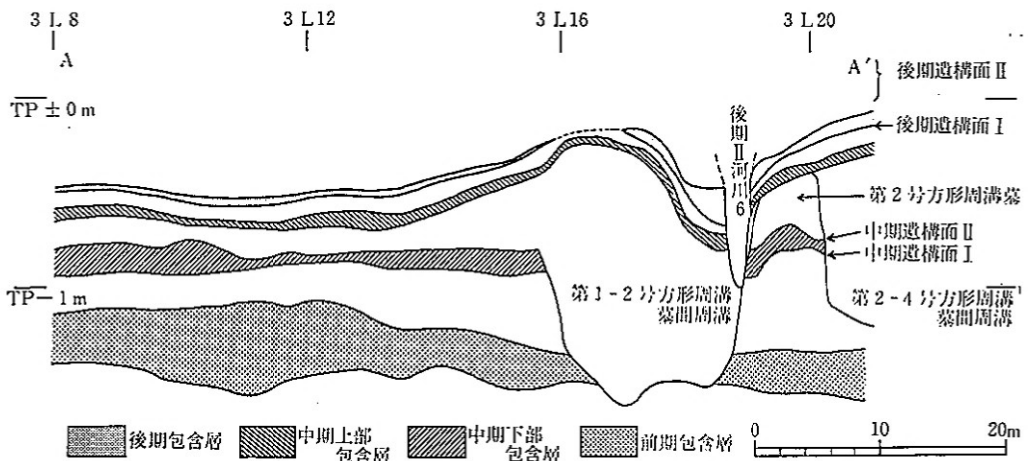
瓜生堂遺跡の今回の調査は、道路予定地内に幅10mのトレンチ8本(A~H)と、橋脚予定位置12ヶ所(24ビット)を対象に実施したものであるが、記述の都合上、トレンチを単位として8地区(A~H地区)にまとめて、その詳細を以下記してゆくこととする(第2図参照)。

第1節 A地区の調査

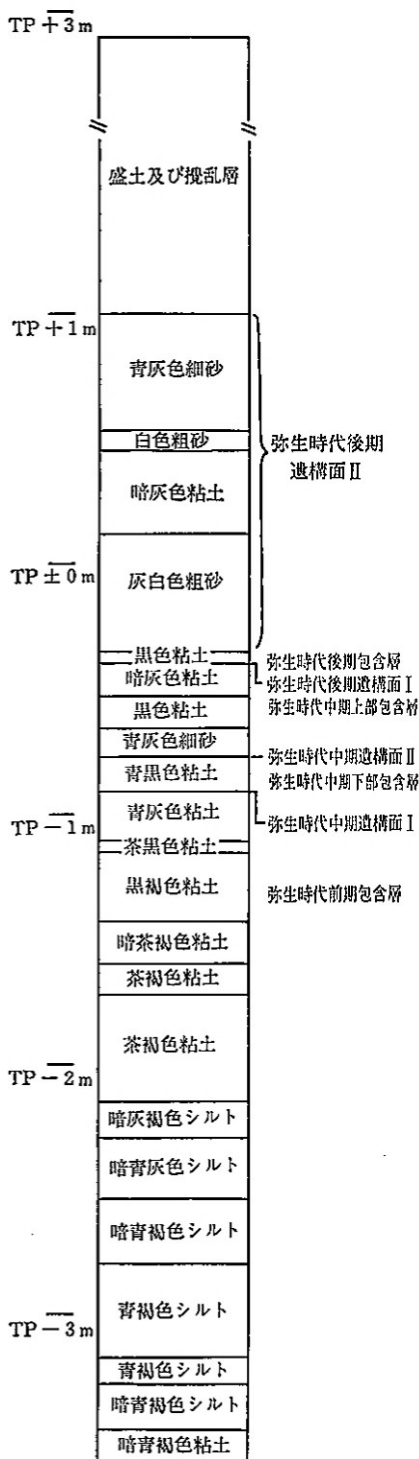
1 層序

A地区において、今回の調査で確認された最深部は、2Aトレンチで行なった筋掘時のT.P.-3.7mである。これよりT.P.-2.0m前後にある砂混りの茶褐色粘土までは、各トレンチとも層厚10~30cmほどの青灰色や青褐色を呈する粘土とシルトの互層になり、層の変化も漸移的で、堆積もほぼ水平である。砂混りの茶褐色粘土の上は、植物遺体に富む茶褐色粘土になる。その上面はほぼT.P.-1.6~-1.7mで水平であるが、下面の凹凸のために層厚に変化がある。3LR8付近では15cmほどであるが、3LR14~15付近では60cmを越える所もある。この一番厚くなった部分で、多量のヒシの実が検出された。この層より一枚間層を挟んだ上面に、弥生時代前期包含層である黒褐色粘土が形成される。T.P.-1.5~-1.1mほどの深さにあり、ほぼ水平に堆積している。この上層の茶黒色粘土は泥炭質であり、ひと目でそれとわかる特徴的な層であるところから、瓜生堂遺跡周辺の前期と中期を分離する鍵層になる可能性がある。

弥生時代中期遺構面IはT.P.-1.0m前後にある青灰色粘土と、3LR20以南でその粘土の上面を薄く覆う青灰色微砂の上で検出される。遺構の分布はその内でも砂上部分に集中している。



第6図 A地区弥生時代南北断面略図



第7図 A地区土層断面模式図

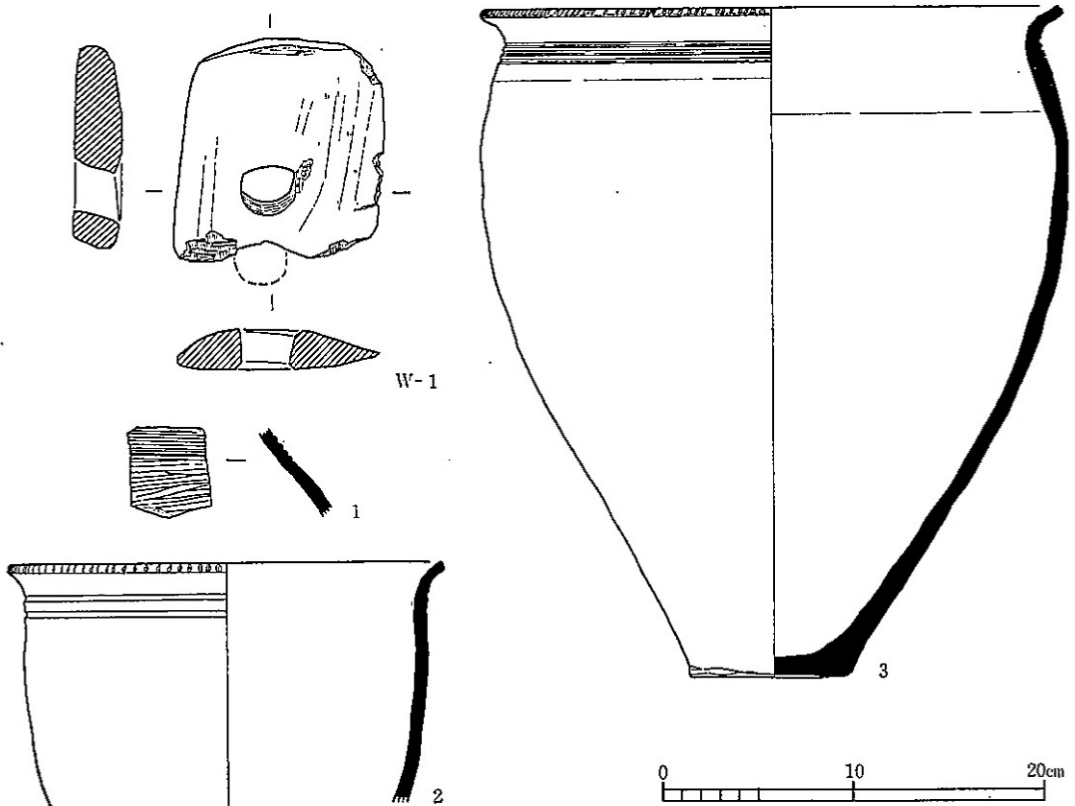
中期遺構面Ⅱは遺構面Ⅰに伴う中期下部包含層上面にあり、方形周溝墓群と、その盛土上面や周溝底に掘削された土坑等が検出されている。遺構は遺構面Ⅰのそれと重なるように、南半部にのみ分布している。中期下部包含層は南半部においては、方形周溝墓が築かれた時点でその盛土下に封ぜられてしまうが、北半部では同一環境のもとで引き続き形成されていたと考えられる。そのために北半部の下部包含層中には、遺構面Ⅱまでの遺物が混入しているものと思われる。方形周溝墓は浸食等によって徐々に埋没していくが、その後、青灰色砂を大量に搬入する洪水のために、一気に埋没してしまう。この洪水の後、砂の上面で中期上部包含層が形成されていく。層厚が5～10cmのこの包含層は、A地区南端部の3LR 22ではT.P.-0.3m前後であるが、途中若干の凹凸を繰り返しながら北端部の3LR 8ではT.P.-0.9mにまで下降する。この層はやや泥炭質であり、アシの地下茎等の植物遺体を豊富に含む所から、洪水後この地域が居住には適さない湿地帯に変化してしまっただことがわかる。

中期上部包含層の上面には5～10cmほどの暗灰色粘土が覆い、さらにその上面に後期包含層が形成される。この包含層は3～5cmほどの層厚を有し、中期上部包含層と同じく、緩やかにうねりながら南から北に下降していく。両者は共に泥炭質の黒色粘土であり、同一条件で形成されたものと考えられる所から、この地域では後期に入ってもしばらくは湿地帯の状態に留まっていたものと思われる。この包含層の形成された後、幾本かの河川がこの地域に大量の砂を搬入するようになり、地盤を一気にT.P.+1.0m前後にまでかさ上げしてしまう。この堆積層は灰白色砂を主にして粘土との互層を発達させている。

A地区においては、古墳時代以降の堆積層は近年の土木工事によって削平されており、地中深く穿たれた井戸等を除けば、遺構は検出されなかった。

2 弥生時代前期の遺構と遺物

弥生時代前期の包含層の存在は、Aトレンチ北半部での筋掘時に、前期に属する土器片を検出したことから明らかになった。この包含層は下面がT.P. - 1.5m前後にあり、層厚は20~40cm程度で、ほぼ水平に堆積している。色はやや茶味を帯びた黒褐色粘土であるが、下部は斑状を呈している。一部、泥炭化の進んだ黒色粘土の薄い層の入る所があり、層をさらに細分できる可能性がある。瓜生堂遺跡の前期における居住域は、昭和41年度に調査されたC地点（第3図第Ⅱ地点）が中心と思われ、そこでの地山面は青灰色砂層であり、高さはT.P. - 0.3m前後であったと報告されている。この調査以降における地盤沈下等を考慮に入れても、A地区とはなお数10cmの比高差があり、A地区周辺は当時広い湿地帯を形成していたと思われる。そのためか遺物の出土も極めて少なく、第8図に示す甗形土器2個体、壺形土器1個体、及び木製の鋏と若干の加工木が出土したのみである。A地区で検出された土器はすべて前期に属しており、前期でも新しい様相を持っている。しかし他地区の出土例から見て、この包含層が前期の単純層としては限定できず、少量ではあるが畿内第Ⅱ様式の遺物も含んでいることが明らかになっている。このことはC地点においても、同様のことが報告されている。



第8図 弥生時代前期包含層出土遺物

3 弥生時代中期の遺構と遺物

1) 遺構面 I

中期遺構面 I の時期の生活は、青灰色粘土と、3 L20以南において、青灰色粘土の上を薄く覆う青灰色微砂の上で営まれる。この A 地区南端部で見られる微砂層は、通常瓜生堂遺跡中期遺構面の地山として認識されている青灰色砂と一連のものであり、その堆積の広がり北辺部にあたる。A 地区においても、南東側で層厚を増し、しかも砂の粒子が粗くなる傾向が見られる。青灰色粘土の上面はほぼ水平で T. P. -0.9~-1.0m ほどであるが、砂の堆積している所はその分高くなり、一番高い 6 A トレンチの 3 L S~T21~22 では T. P. -0.5m まで上昇する。柱穴、及び土壙群が検出されるのもほとんどこの微高地上であり、当時の人々も粘土上よりは乾燥しやすい砂上を居住の場として選択したことがわかる。この遺構の広がり北に行くにつれ疎になっていくが、3 L O15 から 3 L Q16 にかけて検出された溝 1 を最後に、それ以北では遺構は検出されなかった。この遺構面は方形周溝墓の周溝掘削時に相当部分を破壊されており、残されているのは方形周溝墓の盛土下のものが大半である（付図 1 参照）。

A 溝 遺構面 I では 18本の溝が検出されたが、おおむね小さく浅いものが多かった。特にピット群中で検出された溝は、幅 0.5m、深さ 0.2m に満たぬ短いものが多く、溝内埋土も一様に灰黒色砂質土が堆積していた。そのため遺物がほとんど出土していないものは、今回の記述の対象から外した。

<溝 1> 3 L O15 から 3 L Q16 にかけて検出された、西北西より東南東に延びる浅い溝である。第 1 号方形周溝墓の周溝によって切られているために、それより以東は不明である。3 L O15 では幅 0.8m、深さ 0.15m ほどであるが、周溝に切られる 3 L Q16 付近では幅 2.0m、深さ 0.3m ほどになる。東に行くにつれて幅と深さを増していくようである。溝内埋土は暗青黒色粘土が下層に、灰黒色砂質土が上層に堆積していたが、ともに遺物は出土しなかった。

<溝 2> 3 L Q19 で検出された東西に延びる溝である。両端を第 2 号方形周溝墓の周溝によって切られており、続き具合は不明である。幅 1.0m、深さ 0.2m ほどの不整形な溝であり、底は東に向かってやや下降している。溝内埋土は灰白色砂質土が堆積していた。遺物は磨滅した土器の細片が数点出土しただけである。

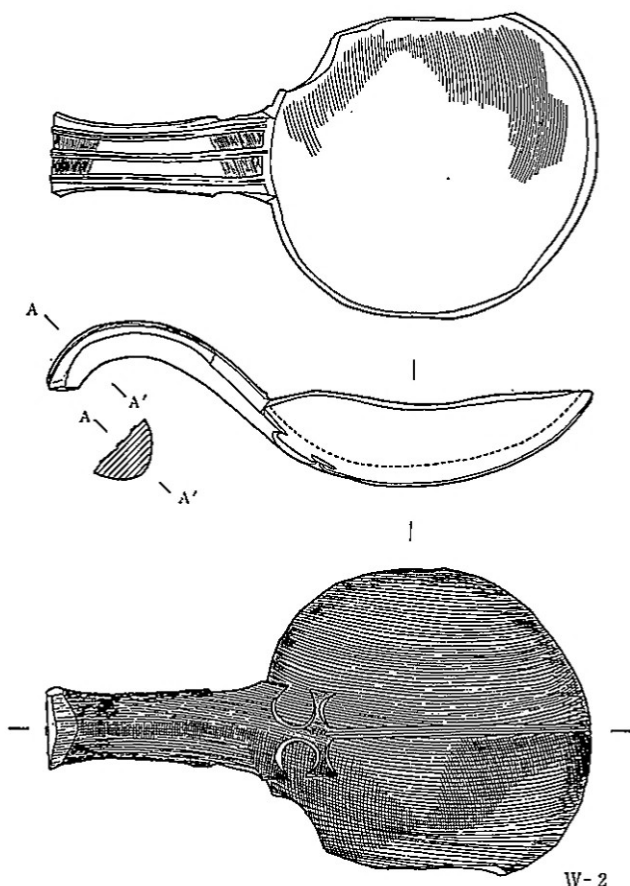
<溝 3> 3 L O19 から 3 L P20 にかけて検出された、東西に延びる溝である。第 2 号方形周溝墓の西周溝に切られているため、それ以東は不明である。そのため今回調査されたのは、3.5m ほどの長さだけである。また上部を弥生時代後期遺構面 II の河川 7 によって削割されているため、正確な規模は不明であるが、5 A トレンチ西端部で計れば幅 3.0m、深さ 0.3m の幅広く浅い溝である。溝底は西より東へ下降しており、西端部より東端部の方が 0.2m ほど低くなっていた。溝内埋土は、砂混りの暗青黒色粘土が主であり、周溝底に堆積する粘土とほぼ同質である。この溝の東への続き様は、第 2 号方形周溝墓下では検出されず、また周溝中で消滅したとも考えにく

い所から、向きをやや北に振って、後に掘削される第2号方形周溝墓の周溝に重なるように北東に続いていたものと思われる。なおこの溝では、3面にわたって足跡が検出されている。溝底で検出された5A-7足跡面は灰白色微砂の詰った40個ほどの小さな砂溜りの中に、4個の左右の判別できる足跡があった。中層の5A-6足跡面は、灰褐色微砂の詰ったもので、左右の判別できるものは8個であった。上層の5A-4足跡面は、5A-6よりも5cmほど上で検出され、灰褐色微砂の詰ったもので、比較的保存状態がよく、13個が左右の判別の可能なものであった。これらの足跡中には同一人物が連続して歩いたと思われるものは確認されなかった。

〈溝7〉 3LQ20の交点付近から始まり、3L20のラインに添って東西に延びる溝である。第2号方形周溝墓の西周溝によって切られており、その先は不明である。最大幅1.0mおおむね0.6~0.7mの幅を持ち、深さは0.25mほどである。溝内埋土は灰黒色砂質土が主であるが、溝底の東半部では、一面に薄く広がった植物遺体の痕跡が残っていた。遺物は少量の土器片が出土しただけである。

〈溝13〉 3LS20の交点付近より始まり、南に延びてトレンチ外に続く、幅2.0m、深さ0.15mほどの幅広く浅い溝である。溝内埋土は灰黒色砂質土であるが、途中に不連続ながら数枚の薄い炭化物の層を挟む。この溝はこの周辺では最も古いものの一つで、大多数のピットはこの溝が埋没した後に掘られている。遺物は少量の土器片が出土しただけである。

〈溝15〉 3LT21のTライン付近より始まり、西に延びて中期遺構面Ⅱ土塋265に切られてしまう幅0.3m、深さ0.15~0.2mの小溝である。溝内埋土は灰黒色砂質土である。この溝の東端部で、柄の上面と受部背面に陽刻のある横杓子(第9図)が出土している。この横杓子は柄を東に向け、背面を上にして、溝の南壁にもたせ掛けるように、斜めになった状態で検出されている。

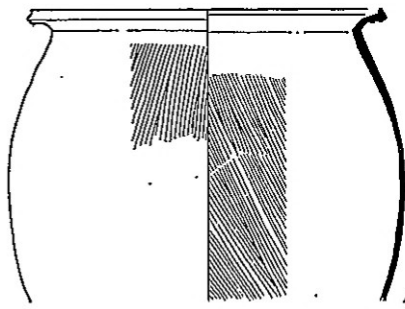


第9図 溝15出土木器(Ⅳ)

B 土坑 A地区においては計13の土坑が検出されたが、そのほとんどが南端部に集中しており、ピット群の分布と一致する。土坑の形態は、類別を有意義にするほどの検出数はなかったが、おおむね3種類に大別できる。一つは径1m強の円形のプランを持つ土坑2、3のグループ。もう一つは長さ3mを越える大形の土坑4。残りは不整形なプランを持つ比較的浅い土坑群である。記述しなかった不整形な土坑は、すべて6Aトレンチで検出されたもので、おおむね埋没土に灰黒色砂質土を含み、遺物もほとんど出土しないものであった。

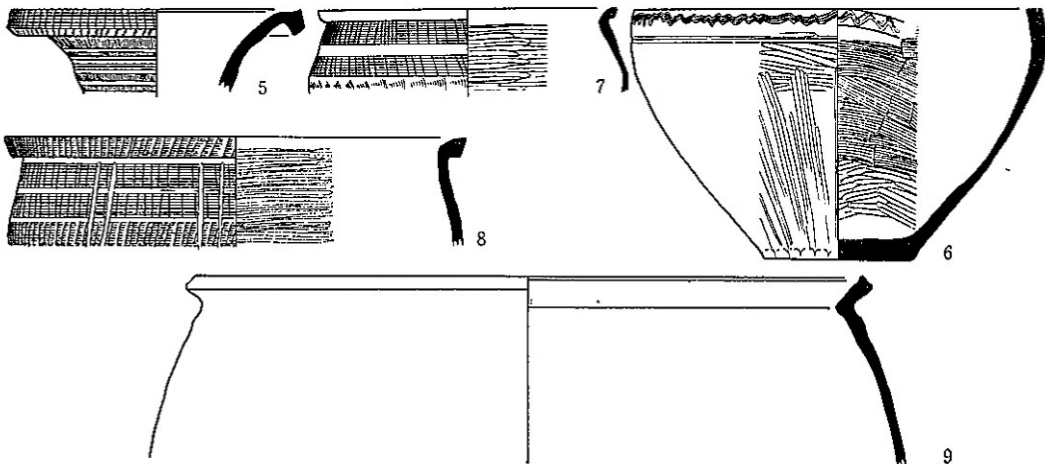
<土坑1> 3LR18で検出されたもので、第1号方形周溝墓の西周溝によって西側部分を切られており、全容は不明である。東西に長く、現存長1.4m、幅1.05m、深さ0.2mを測る。底には一面に厚さ5cmの炭化物を含んだ腐植土層があり、木葉等が多数検出された。この腐植土層は自然に形成されたとは考えにくく、人為的に敷きつめたものと思われる。この土坑は、その腐植土層の上に、北から茶黒色粘質土等が流れこみ、最後に暗灰色粘質土で完全に埋没してしまう。遺物は主に第10図に示す土器が出土している。

<土坑2> 3LO~P22で検出された長径1.4m、短径1.2m、深さ1.0mの東西にふくれた楕円形の土坑である。上部東半を第3号方形周溝墓の東周溝によって切られている。埋没土は下層が炭化物の多い灰黒色砂質土と暗青灰色砂質土の互層状堆積であり、上層が層厚20cmほどの炭化物で充填されていた。この土坑の性格としては井戸とも考えられるが、この土坑の底面ではまだ湧水層には達していない。この地点での湧水層は、T.P.-2.3~-2.4mの青灰色シルト層以下であり、この土坑の底面のT.P.-2.1mでは少し届かない。遺物は主に第11図に示す土器が出土している。



第10図 土坑1出土土器(4)

楕円形の土坑である。上部東半を第3号方形周溝墓の東周溝によって切られている。埋没土は下層が炭化物の多い灰黒色砂質土と暗青灰色砂質土の互層状堆積であり、上層が層厚20cmほどの炭化物で充填されていた。この土坑の性格としては井戸とも考えられるが、この土坑の底面ではまだ湧水層には達していない。この地点での湧水層は、T.P.-2.3~-2.4mの青灰色シルト層以下であり、この土坑の底面のT.P.-2.1mでは少し届かない。遺物は主に第11図に示す土器が出土している。

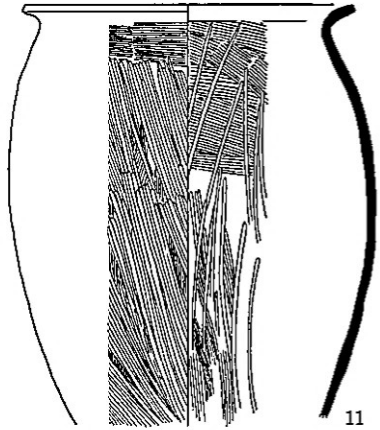
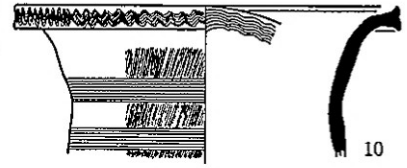


第11図 土坑2出土土器(4)

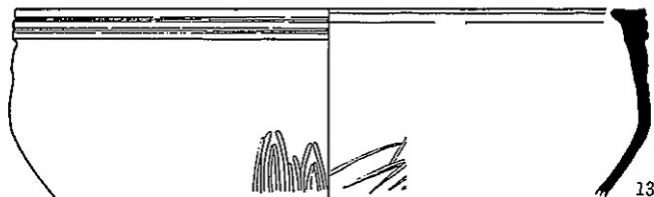
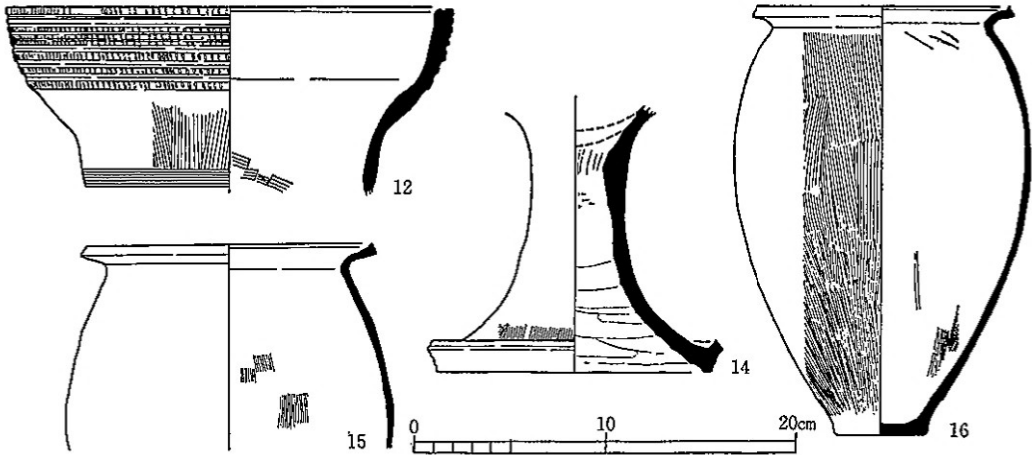
〈土坑3〉 3LP22において、土坑2の東に隣接して検出された長径1.3m、短径1.2mの南北にややふくれた土坑である。土坑2に切られており、また上部を第3号方形周溝墓の東周溝によって削除されているため、正確な深さは不明であるが、周溝墓下の地山面より切り込まれていたとすると、1.95mの深さがある。底面はシルト層に達しており、湧水は見たようである。

埋没土は、最下層には25~30cmの厚さで炭化物が堆積し、この上には灰黒色砂質土と青灰色粘土の互層状堆積があり、最上層には再び厚い炭化物の堆積が見られる。土坑2と同一性格のものと思われる。遺物は土器では主に第12図に示すもの、木器では第53図(W-13)に示す杵が出土している。

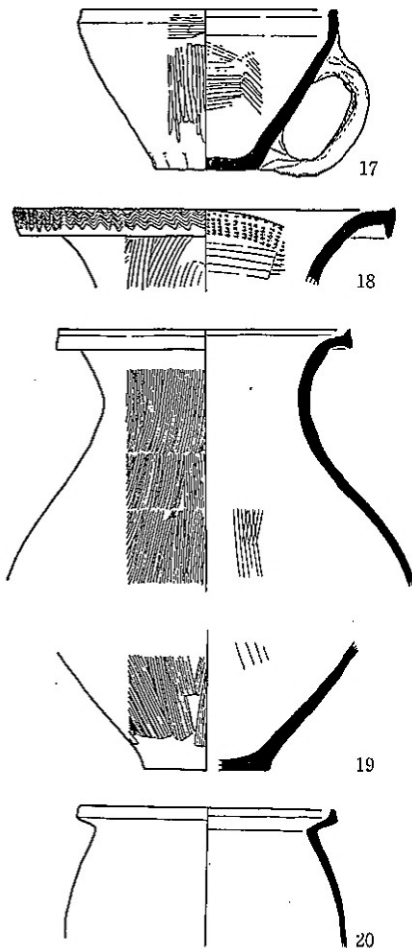
〈土坑4〉 3L21で検出された長さ3.5m、幅2.0m、深さ0.5mの南北に長い隅丸長方形の土坑である。Aトレンチと6Aトレンチを隔つ鋼矢板のために、西側壁面の検出は出来なかった。この土坑の南側、3LS21~22にかけては、炭化物を多く含む植物遺体の堆積層があり、土坑の底



第12図 土坑3出土土器(4)



第13図 土坑4出土土器



第14図 土壙11 (17)、落込1 (18~20) 出土土器(坪)

かの部分しか検出されず、遺構の形態を確定しえなかった。いずれも極めて緩やかな傾斜面を持った浅いものである。

〈落込1〉 3LP~Q19~20で検出された落込で、第2号方形周溝墓の周溝によって、西側部分を切られている。現存長4.5m、幅2.4m、深さ0.1mほどの東西に長い不整形なものである。南側壁は比較的急な傾斜面を持つが、北側は非常に緩やかな傾斜面を持っている。底部はかなり凹凸が激しい。埋没土は灰黒色粘土と暗青灰色粘土が互層状に堆積している。遺物は主に第14図(18~20)に示すものが出土している。

D ピット A地区では南端部、特に6Aトレンチを中心に、多数のピットが検出されている。検出されたピットは総数300を越えるが、建物を構成すると思われるセット関係が、明瞭に捉えられたものはなかった。ただ3LT21で検出されたピット251、252、253、254で構成されるセットを、1間×1間の建物と想定しえなくもないが、柱間がそれぞれ1.1×1.4×1.3×1.5mとばら

にもこの植物遺体が流れ込むような形で堆積していた。この堆積は南端部の厚い部分では10cmを越すが、北端では2cmほどになる。この植物遺体の中には一辺数cm大の薄い木屑が多量に含まれており、この場所で木の加工が行なわれたものと思われる。この木屑が、木器の製作時に生じた削りかすなのか、あるいは建築用材の整形で生じたものなのかについては、木屑の削痕等を含めてもう少し資料の検討が必要であろう。木屑の量からすると、その加工が長期間にわたって持続的に行なわれたものではないようである。この土壙は植物遺体の堆積後も、灰黒色砂質土等によって周囲より徐々に埋没していくが、上部20cmほどは青灰色粘土や微砂、及び灰黒色砂質土等の混在した土によって覆われており、人為的に埋められたものと思われる。遺物は主に第13図に示す土器が出土している。

〈土壙11〉 3LS21で検出された長径1.0m、短径0.8m、深さ0.45mの南北にふくれた土壙である。埋没土は灰黒色砂質土が主であるが、中に青灰色粘土のブロックが混入している。この肩部で第14図(17)に示す完形に近い把手付鉢形土器Aが出土している。

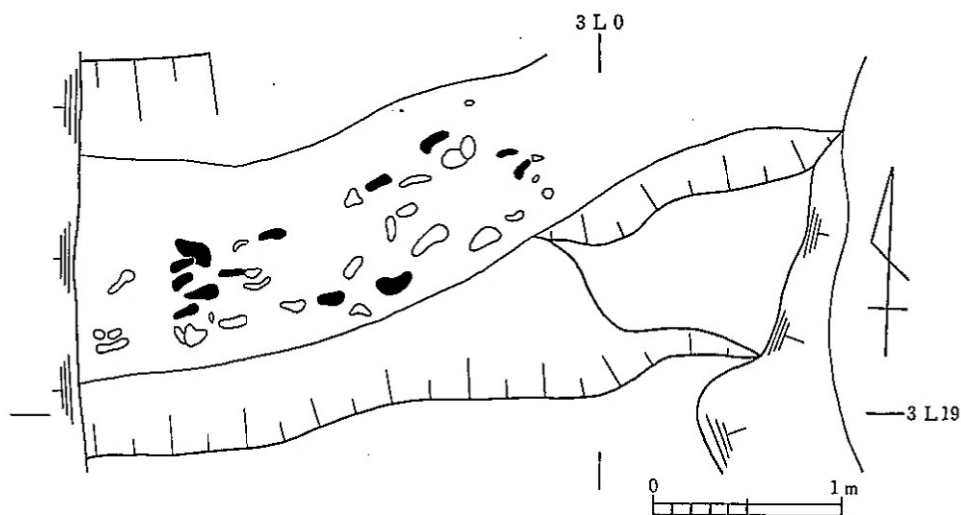
C 落込 A地区において検出された落込は計3ヶ所であるが、落込1を除いて他の2つは調査区域内ではわず

つきがあり、それと断定することはできなかつた。柱根の残っているものも幾つか見られ、また中に礎板を敷くものが1個検出されている。

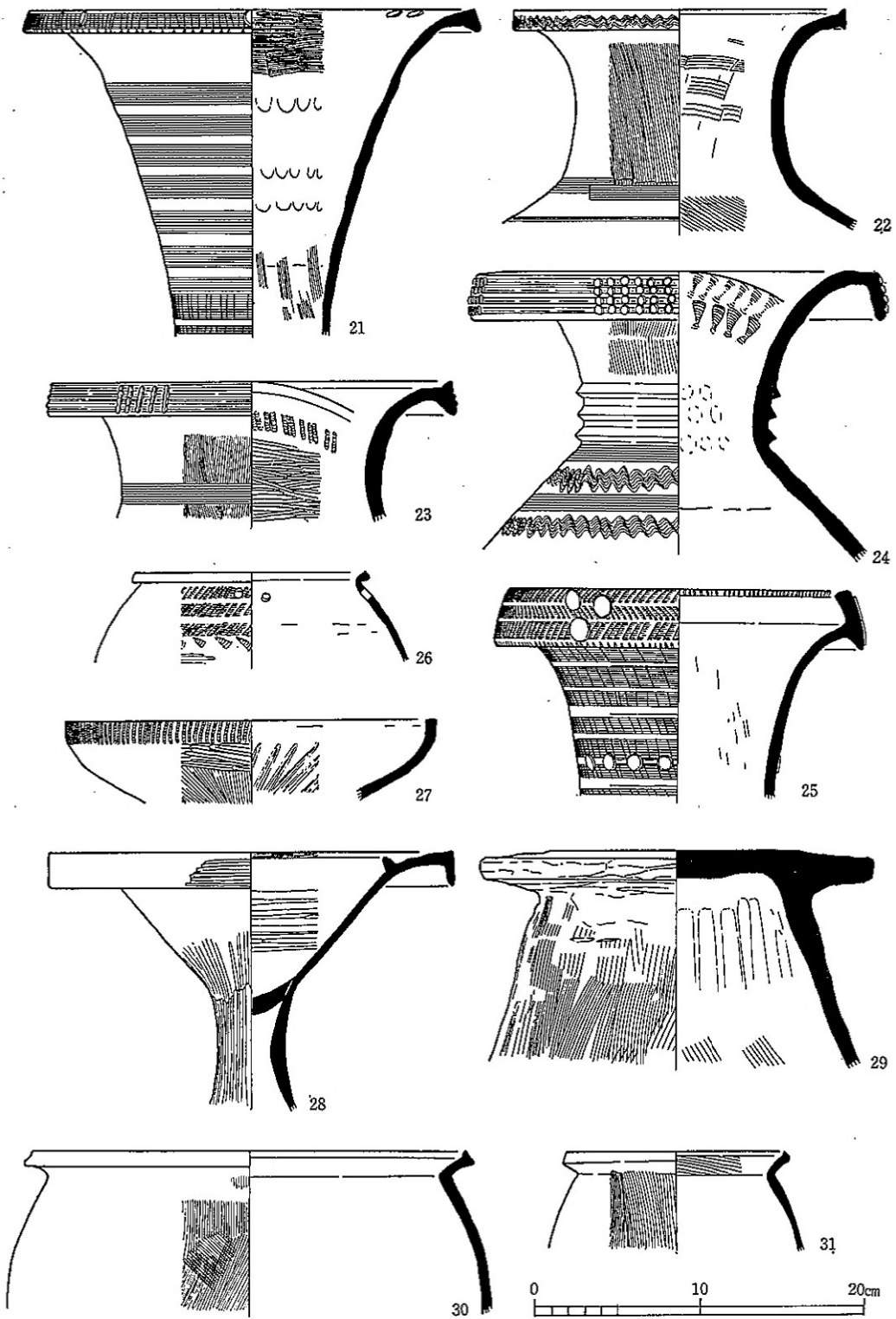
E 足跡 A地区において、中期遺構面Ⅰで検出された足跡は、溝3において計3面検出され、その内の5A-4足跡面として第15図に示すものを除けば、5Aトレンチ北東隅の3LP~Q18付近のものだけである。青灰色粘土の地山面が、北東方向に低くなる所に、青灰色砂が堆積しており、その斜面上で5A-5足跡面が検出された。東西4m、南北1mほどの範囲に青灰色砂の詰った23個の砂溜りがあり、その中の3個が左右の判別が可能な足跡であった。

F 中期下部包含層 中期遺構面Ⅰ上に形成される包含層は、南端部の砂上のものと、それより以北の青灰色粘土上のものとは、漸移的であるが若干質を異にしている。砂上のものはB地区以南の中期包含層と共通する砂混じりの黒色粘土であるが、粘土上のものは上下層との境も明瞭ではない青黒色粘土である。色調も北に行くにつれ、黒味を薄くし、遺物の出土も減る傾向を見せる。層厚はおおむね5~10cmである。南半部は方形周溝墓の築造時に広範囲に破壊されており、残されているのは方形周溝墓の盛土下に封ぜられたものだけであった。この盛土下の包含層はこの時点で形成を停止するが、北半部の方形周溝墓の築造されない地域では、引き続き形成が進んだものと思われる。この状態は南半部の方形周溝墓が埋没し、その上に青灰色粘土や青灰色砂が堆積する寸前まで続いたものと思われる、この部分の包含層には、中期遺構面Ⅱまでの遺物が混在している可能性が強い。遺物は主に第16図、第17図に示す土器が出土している。

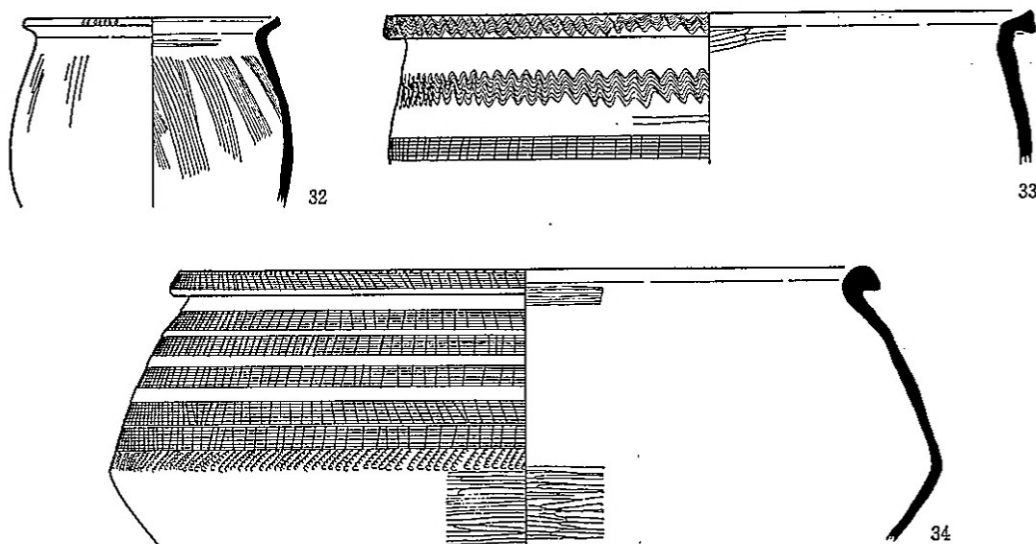
G 小結 A地区は、瓜生堂遺跡における弥生時代中期遺構面Ⅰの遺構分布の北限部にあたり、北半部ではまったく遺構は検出されなかつた。この遺構分布のあり様は、おそらくは旧楠根川より押し出されてきた青灰色砂層の広がりにより規制されており、居住に関連する遺構のほとんどが、



第15図 溝3溝中5A-4足跡面平面図（黒は左右の判別された足跡）



第16图 弥生時代中期下部包含層出土土器



第17図 弥生時代中期下部包含層出土土器 (以)

この微高地上に営まれたものと思われる。A地区においても、南端部の砂層上にピット、土壙群が集中しており、粘土上に穿たれているものは数少ない。これらのピットの幾つかに柱根の遺存していたことから、建物が建てられていたことは間違いないと思われるが、ピットの配列が乱雑で規則性に乏しいため、居住形態を解明することはできなかった。またピット群中を縦横に走る小溝群も、そういった建物との関連の中で考える必要があると思われるが、これも規則性を摘出することは出来なかった。

水田耕作は、この砂の堆積の跡絶える周辺の低湿地で行なわれたと思われるが、A地区北半部の青灰色粘土上面では、畦畔等の施設は認められなかった。またこの粘土面に掘削された幾本かの溝が、水田耕作に関連する施設と結びつくのかについては、もう少し広範囲での検討が必要であろう。

弥生時代中期遺構面Ⅰで検出された遺物は、土器がコンテナ4杯分、石器が4点、木器が2点である。遺構面Ⅰにともなう包含層から検出された遺物は、土器がコンテナ6杯分、石器が2点である。

土器は遊離破片がほとんどを占め、完形品になるものはごく少量である。その器種構成は、広口壺形土器(A・B・C)、水差形土器、無頸壺形土器(B)、鉢形土器(A・B・C)、高杯形土器(A・B)、甕形土器、蓋形土器(壺用、甕用)等である。甕形土器が多く、次いで広口壺形土器、鉢形土器等がある。水差形土器、無頸壺形土器、高杯形土器、蓋形土器の占める割合は少ない。

各遺構ごとの土器の出土量は少なく、遺構によってはかたよった出土のしかたをしているため、セット関係をみるには難しく、各遺構ごとの土器の特徴を明確にすることができなかつた。

た。遺構から出土した土器と包含層出土の土器とは、同様な傾向を示すものと思われ、両者をあわせて器種ごとの概要を記述してゆく。

広口壺形土器は、Aが主にあり、B・Cの占める割合は少ない。

広口壺形土器Aには、口頸部の短いものが主にあり、口縁部端面に波状紋を施すものが多く、少数ではあるが凹線紋を施すものや無文のものもある。口縁部部の下方への拡張が大きいものは少ない。頸部には、櫛描直線紋を施すものが多い。生駒西麓産の土器は、口縁部を下方へのみやや拡張させる。紋様は簾状紋を多用している。なお、頸部が長く裾すばまりのものもある(第16図21)。

広口壺形土器Bには、口縁部を上方へのみ拡張させるものがあり、口縁屈曲部が丸味をもつものもある。口縁部端面には、波状紋、凹線紋等を主に施し、頸部には櫛描直線紋を施している。生駒西麓産の土器は、口縁部部を上・下に拡張する。口縁部端面には簾状紋、列点紋を施し、頸部にも簾状紋を施している。

広口壺形土器Cは、広口壺形土器Aと形態がさほど差異がない無紋の土器である。

水差形土器の口縁部は水平で、把手側に抉りをもつ。口縁部に凹線紋を施すものもあり、波状紋等を組合わせて装飾性に富む土器である。

無頸壺形土器は、出土例が少なく、Bのみが出土している。

鉢形土器には、A・B・Cの3種があり、A・Cに凹線紋を施す場合が多く、Bは、簾状紋を施すものが多い。生駒西麓産の土器には、A・Bがあり、Aには、やや深めの体部をもち、凹線紋、波状紋を併用するものがあるが、凹線紋の条数は2条までである。Bには簾状紋を施すものも多く、大型のものが多い。

高杯形土器には、A・Bの2種があり、両者とも出土例は少ない。Aには、凹線紋を施すもの多く、Bには、水平口縁部がやや内傾し、垂下部が拡張しているものが多い。生駒西麓産のAには、口縁部に簾状紋を施すものや無紋のものもある。Bは、水平口縁部に斜格子紋状にヘラミガキするものもある。

甕形土器には、口径20cm以内の小型のものと25cm以上の大型のものがある。口頸部は、「く」の字形に屈曲するものと丸味をもつものがあり、口縁部部は、上方へわずかにつまみ上げるもの多く、外面の調整は、縦方向の刷毛目が多い。生駒西麓産の土器には、口頸部は丸味をもって外反し、口縁部部は丸味をもつものと面をもつものがあり、調整は内外面ともヘラミガキするものが多い。

なお、中期下部包含層からは、用途は確としないが土器製作時の「回転台」とも称される台形土器が出土している。これは、台上部・端部外面に横方向のヘラミガキを施し、脚台部外面は、粗い縦方向の刷毛目、内面は、縦方向のナデ・刷毛目を施している。生駒西麓産の土器である(第16図29)。

以上、弥生時代中期遺構面Ⅰにともなう遺構および包含層出土の土器の概要を記述した。

2) 遺構面Ⅱ

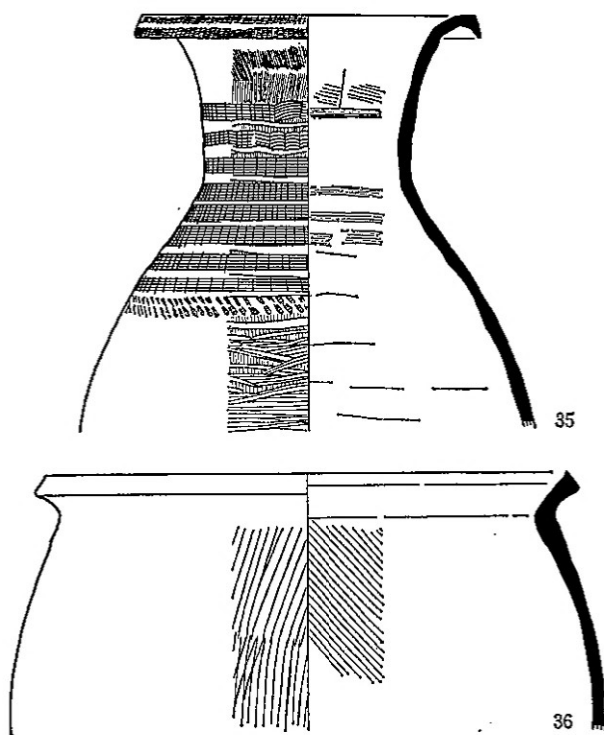
弥生時代中期遺構面Ⅱとは、遺構面Ⅰを覆う中期下部包含層上面をさし、遺構としては4基の方形周溝墓と、それに伴う2基の主体部、及び土壙17、落込11、ピット4が検出されている。しかし厳密な意味で中期下部包含層上面を切り込み面として持つ遺構は、方形周溝墓のみであり、他はすべて方形周溝墓の盛土上や周溝底より掘削されている。方形周溝墓の分布は、南半部に集中した遺構面Ⅰの遺構分布と重なっており、第1号方形周溝墓の北周溝の検出された3LS~T15以北には広がらない(付図2~3参照)。

中期上部包含層は、方形周溝墓が洪水による青灰色砂の搬入によって完全に埋没した後、形成を始める。この包含層は泥炭化しており、北に向って緩やかに下降していく。遺物の出土は、この地域が洪水後、低湿地化したという環境の変化のためか少なかった。

A 方形周溝墓 A地区においては、4基の方形周溝墓が検出されているが、第2号方形周溝墓以外はその一部を調査したのみであり、規模や埋葬主体等不明な点が多い。これらの方形周溝墓は、隣接するものは周溝を共有しあっており、周溝の規模も幅広く深いものであった。盛土はおおむね0.2~0.3mの高さで残っていた。これらの土は周溝を掘削することによって得たようで、地山面が粘土の所は粘土質であり、砂層のかむ所は砂質分が多くなる。埋葬主体は第2号方形周溝墓と第4号方形周溝墓で、各1基検出されている。なお周溝の記述は、それぞれの方形周溝墓間で共有しあっている関係上、方形周溝墓本体の記述の後で各溝ごとに行なう。

〈第1号方形周溝墓〉 3LR~T16~20にあり、今回は北、南、西の各周溝と、西側肩部のみが調査された。規模は裾部立ち上りより計測すると、南北長19.5m、東西長11m以上あり、方向は南北軸でN-1°-Eを示す。

盛土は西側肩部で0.2mほど残っていた。主に青灰色粘土が盛られており、南端部で砂質分が多くなる。この盛土中より主に第18図に示す土器が出土している。主体部は中心部分が未調査のためか、今回の調査では検出されなかった。

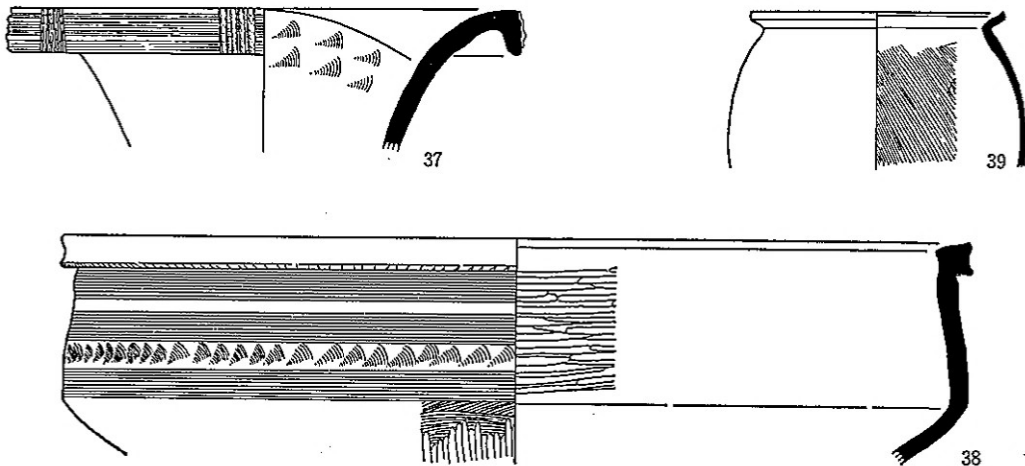


第18図 第1号方形周溝墓盛土内出土土器(1/4)

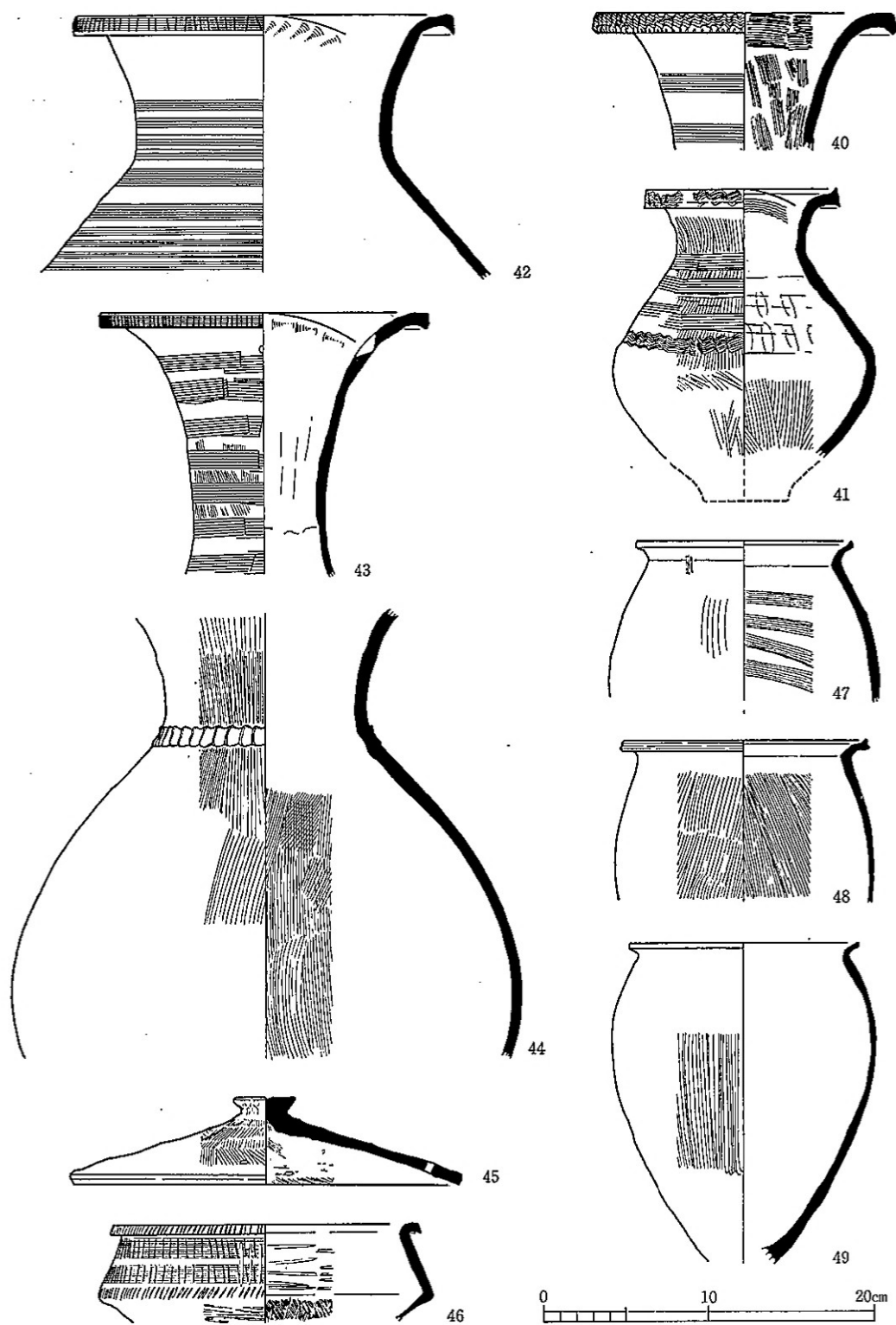
〈第2号方形周溝墓〉 3LP~R17~21にあり、南北長16m、東西長11mの北西隅が歪な方形周溝墓である。方向は南北軸でN-17°-Wを示す。北西隅の歪みは、遺構面Ⅰの溝3が既にこの部分に存在しており、それを再利用したために生じた可能性も考えられる。盛土は南半部で0.3mほど残っており、主に灰黒色砂質土が盛られていた。北半部は、弥生時代後期遺構面Ⅱの河川6等によって削剝されており、盛土は残っていなかった。この盛土中より主に第19図に示す土器が出土している。埋葬主体は、東南隅の3LR20で土壙墓が1基検出された。規模は全長2.6m、幅0.6m、深さ0.4mで、主軸はN-8°-Eを指しており、方形周溝墓の主軸からは25°ほど東に振っている。切り込みは盛土上面よりなされており、この土壙掘削のために、東側部分に土が盛りなおされている状態が観察された。埋没土は、黄青色微砂や青灰色粘土等のブロックが混在した灰黒色砂質土であり、途中での層の分離は困難であった。木棺等の使用された痕跡は認められなかった。

〈第3号方形周溝墓〉 3LO~P21~22においてその北東隅が検出されたもので、南北長5.5m、東西長4.5mが調査された。主軸はこの地区の他の方形周溝墓と同様、ほぼ南北を示しているものと思われる。盛土は0.3mほど残っており、灰黒色砂質土と青灰色粘質土が主に盛られていた。埋葬主体は検出されなかった。

〈第4号方形周溝墓〉 3LR~T20~22において、その北半部が検出されたもので、南北長7.5m以上、東西長13mの方形周溝墓である。方向は他の方形周溝墓と同様、ほぼ南北を示している。盛土は0.3mの厚さで残っており、灰黒色砂質土が主に盛られていた。盛土中より主に第20図に示す土器が出土している。埋葬主体は、北西隅の3LR21~22において、第21図に示す木棺墓と思われるものが1基検出された。全長2.55m、幅0.75m、深さ0.5mの掘方を持ったもので、主軸の方向はN-29°-Wを示しており、方形周溝墓の主軸からは約30°ほど西に振っている。掘方は2段になっており、実際の墓壙長は1.75mである。この掘方ぎりぎりに木棺が埋納さ



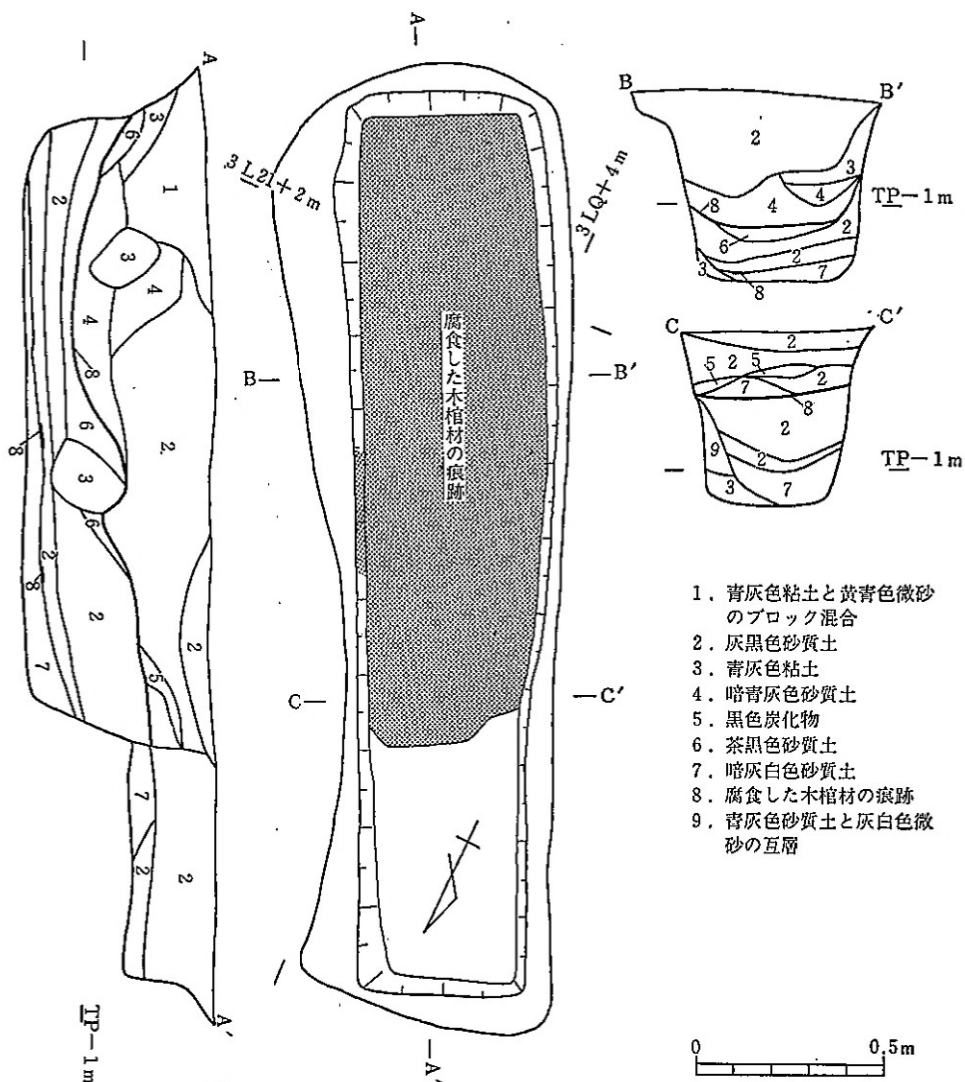
第19図 第2号方形周溝墓盛土内出土土器(4)



第20図 第4号方形周溝墓主体部(40、41)及び盛土内(42~49)出土土器

れていたようで、底板、側板の一部と蓋板と思われる腐植した木質の痕跡が認められた。中でも蓋板の痕跡は 0.5cmほどの厚さで、墓壙のほぼ全面にわたって検出された。ただ木質直下には径20cmほどの粘土ブロックがあり、蓋板を破らず落ち込むことは不可能なので、この土壌が遺構面Ⅰに属する可能性も否定できない。人骨等の遺存はなかった。この中より第20図(40、41)に示す土器が出土している。

B 周溝 A地区における方形周溝墓の周溝は、幅が広くて深いものが多く、隣接するものは共有しあっている。溝底は前期包含層である黒褐色粘土層にまで達しており、周溝底に堆積する暗青黒色粘土との境界が明瞭ではない。そのため溝内埋土の観察では、方形周溝墓の築造の先後を決定することはできなかつた。溝内埋没土は各周溝によって若干異なっているが、おおよそ次の

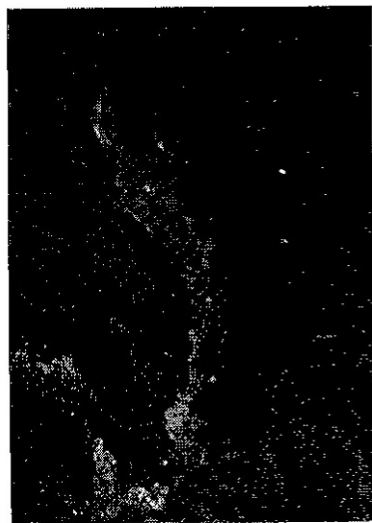


第21図 第4号方形周溝墓主体部平面、断面図

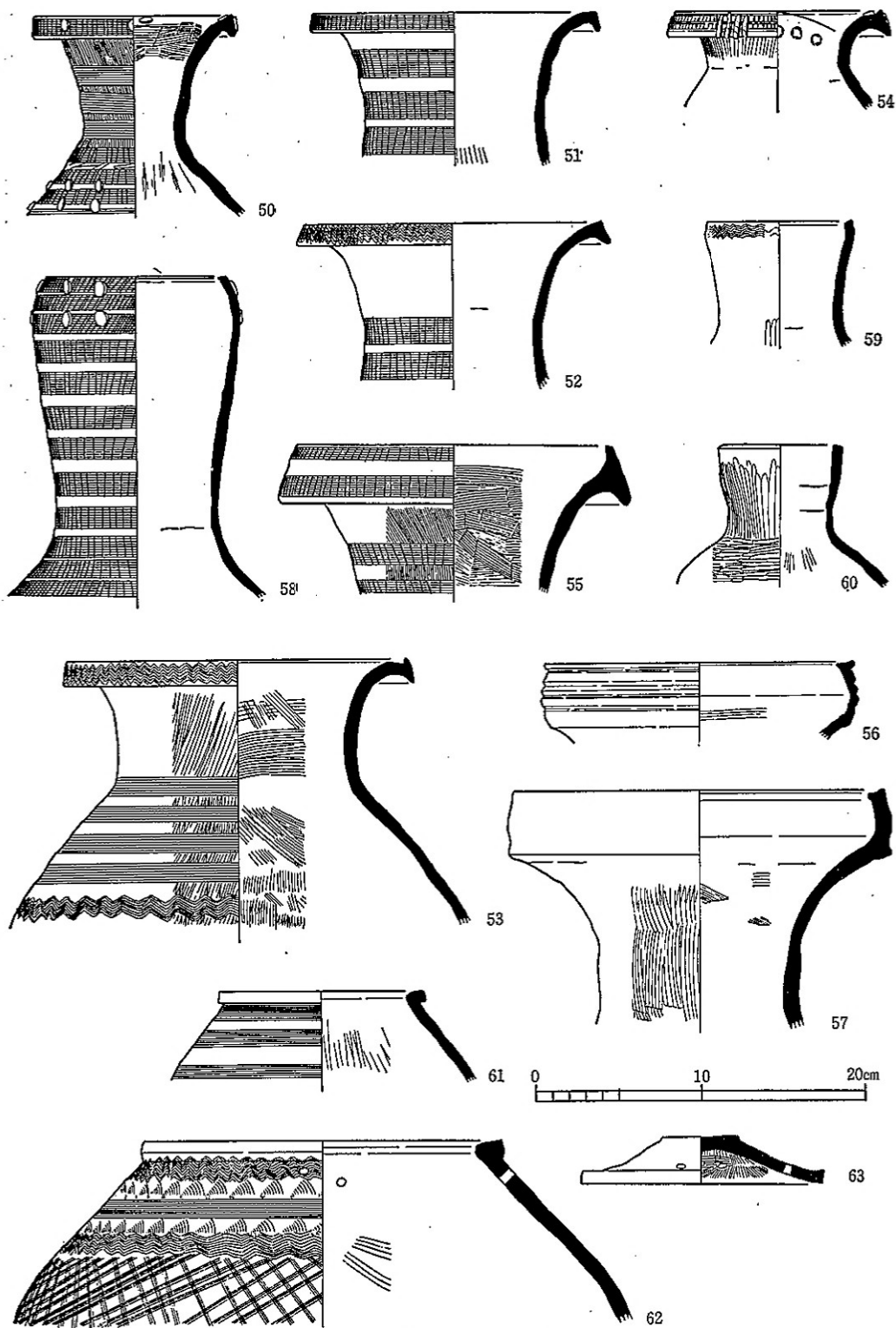
順序で埋没していく。まず溝底に砂混りの暗青黒色粘土が堆積する。これは地山面や盛土部の土が浸食を受けて溝底に流れこんだもので、この層中より土器、木器、獣骨、及び貝類等が多数出土している。このうち貝類に関しては、梶山彦太郎氏の御教示によると、シジミ、タニシ等の淡水産のものと、ハマグリ、アカガイ等の海水産のものが混在しており、獣骨を含めて、これらが供献用に盛られていたものか、それとも単に食べ滓を投棄しただけのものなのかの問題を残している。この出土した貝類の中にヒメタニシが検出されており、梶山氏によると、この貝は汚水に強く、おそらくこの周溝底で生息していたのではないかとこのこと、このことから周溝底がつねに泥濁化していたことを窺わせる。そのためこの粘土面には足跡が付きやすかったのか、ほぼ全面にわたって足跡が残されていた。この暗青黒色粘土の堆積した後、洪水により青灰色細砂を主にした砂が搬入されてくるが、それが止むと次に暗灰色粘土の堆積が始まる。この層にはほとんど遺物は含まれないが、この上面では足跡の残されている所があった。その後再び洪水に見まわれ、この周辺一帯の方形周溝墓は一気に埋没してしまう。これらの青灰色、ないしは黄青色を呈する砂層中では土器の出土は少なかったが、木器の出土は多く、特に鋤が6本検出されている。これらの木器は第49～51図に示すものである。

〈第1号方形周溝墓北溝〉 この周溝は第1号方形周溝墓の北肩部が完全には検出されていないため、正確な規模は不明であるが、地山面からは幅約6m、深さ1mを測る。溝内埋没土の状態は第34図に示すものである。第1—2号方形周溝墓間周溝とは明瞭な境界はなく、そのまま平坦に続いている。溝底の暗青黒色粘土中では遺物の出土が多かったが、北側斜面でも一括土器を含む多量の土器が出土している。この北側斜面の土器は斜面をずり落ちるような状態で検出されており、このことから周溝底で検出される土器が、すべて盛土上において供献用に使用された土器とは言えないようである。この溝底より3～5cm上面で4A-1足跡面が検出され、計6個の足跡が見つかった。そのうち第22図に示す足跡1は5指が完全に残っていた。遺物は主に第23～25図に示す土器が出土している。

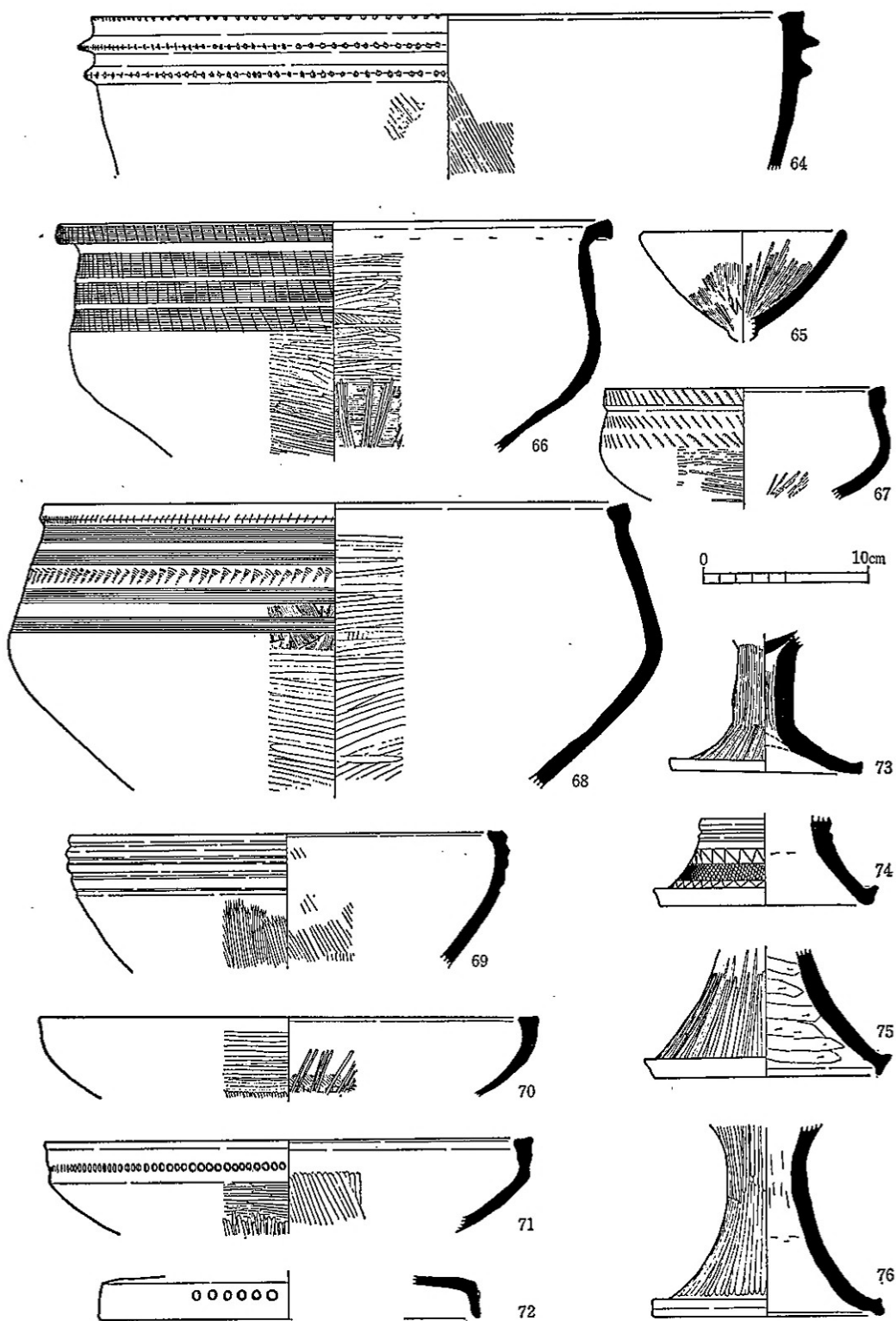
〈第1—2号方形周溝墓間周溝〉 3L18ライン付近で幅3.5m、深さ0.7mの規模があり、北端部は幅を広げながら第1、2号方形周溝墓の各北周溝に続く広い平坦面を形成している。南端部は2.5mほどに狭くなり、溝底も0.3m高くなる。溝内埋没土断面は第34図に示すものである。主な遺物は溝内下部の暗青黒色粘土中では第26、27図、溝内上部砂層中では第28図に示すものが出土しているが、後者中で建物の線刻面のある壺の体部破片が検出されている（第28図125）。



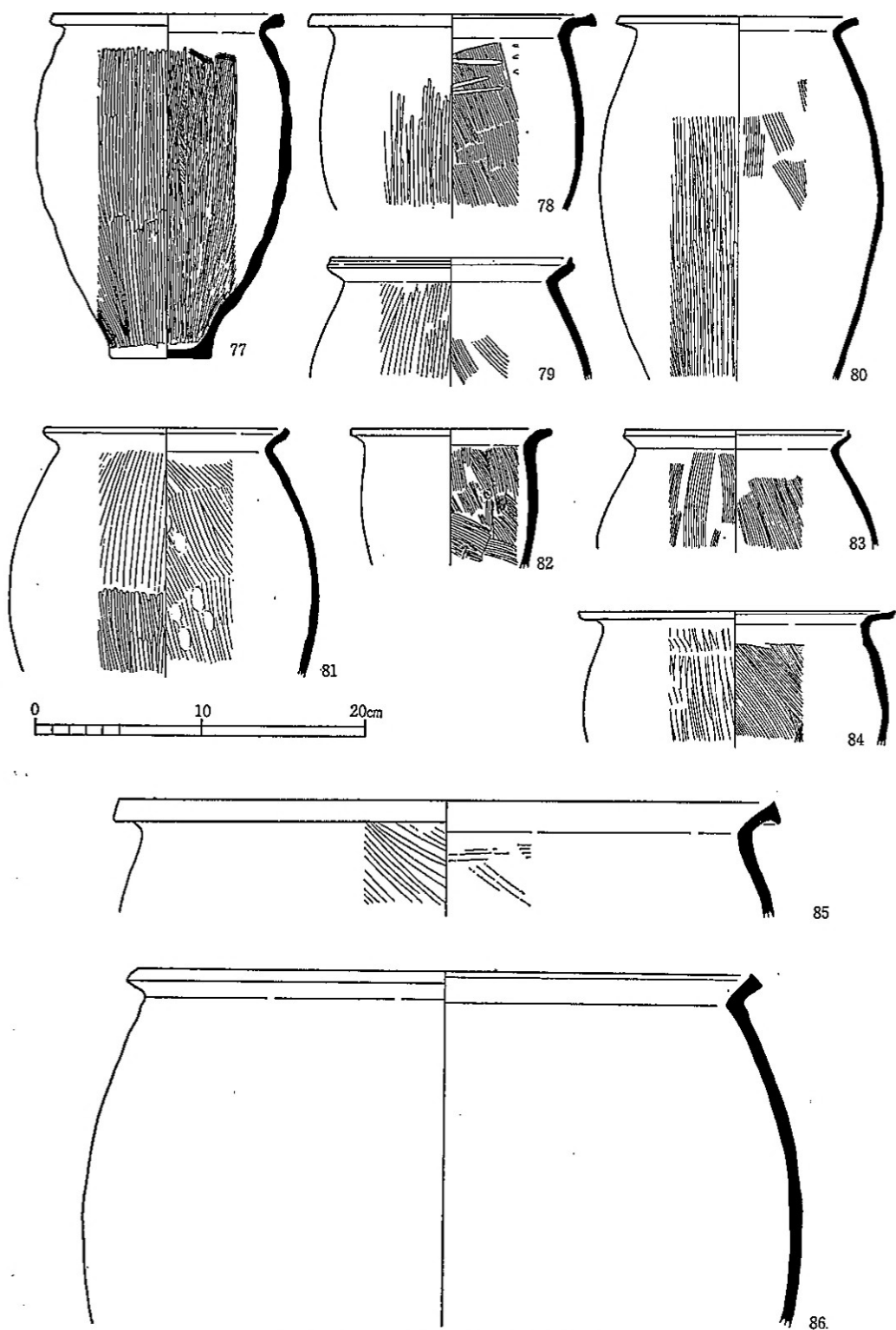
第22図 4A-1足跡面足跡1



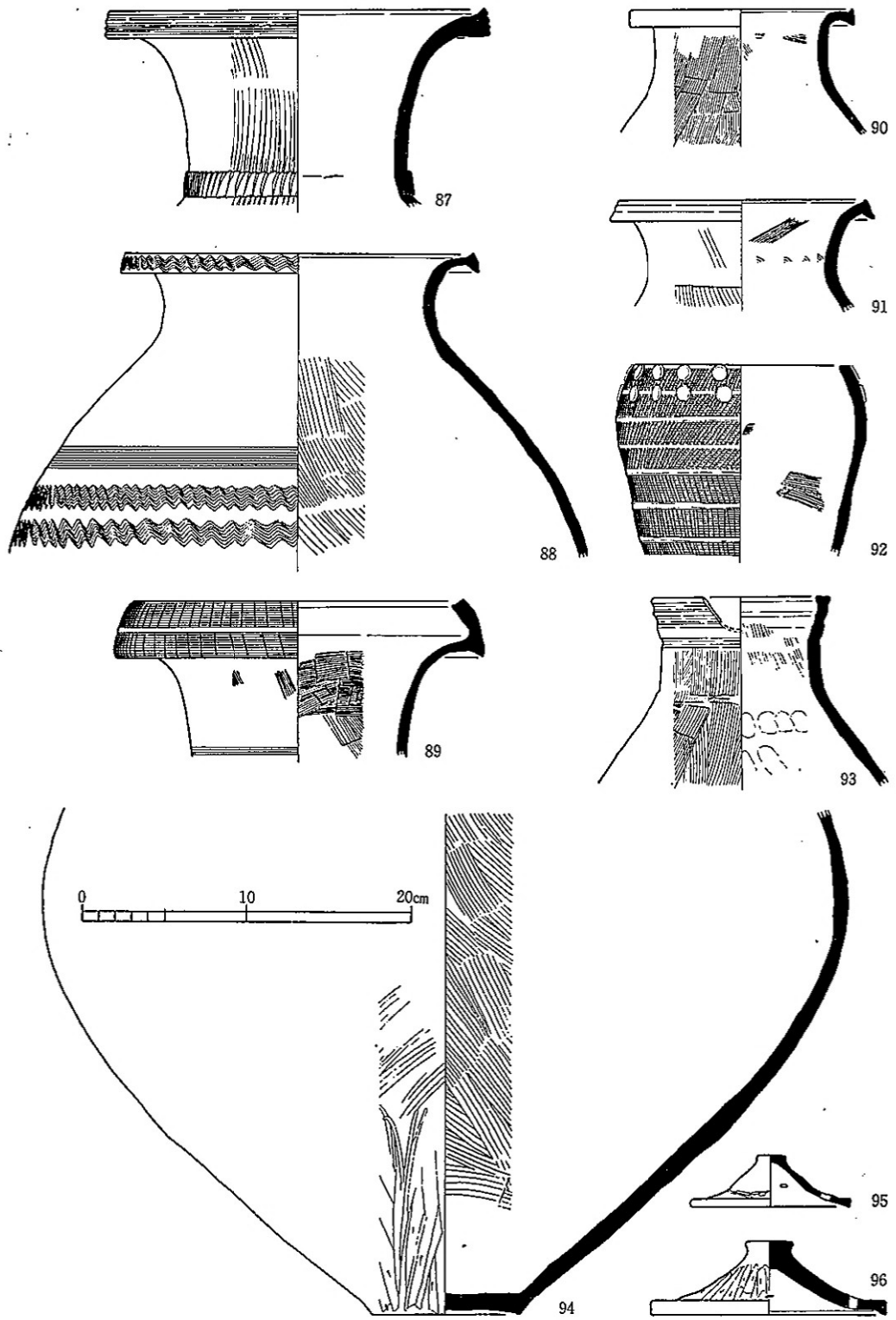
第29图 第1号方形周溝墓北周溝出土土器



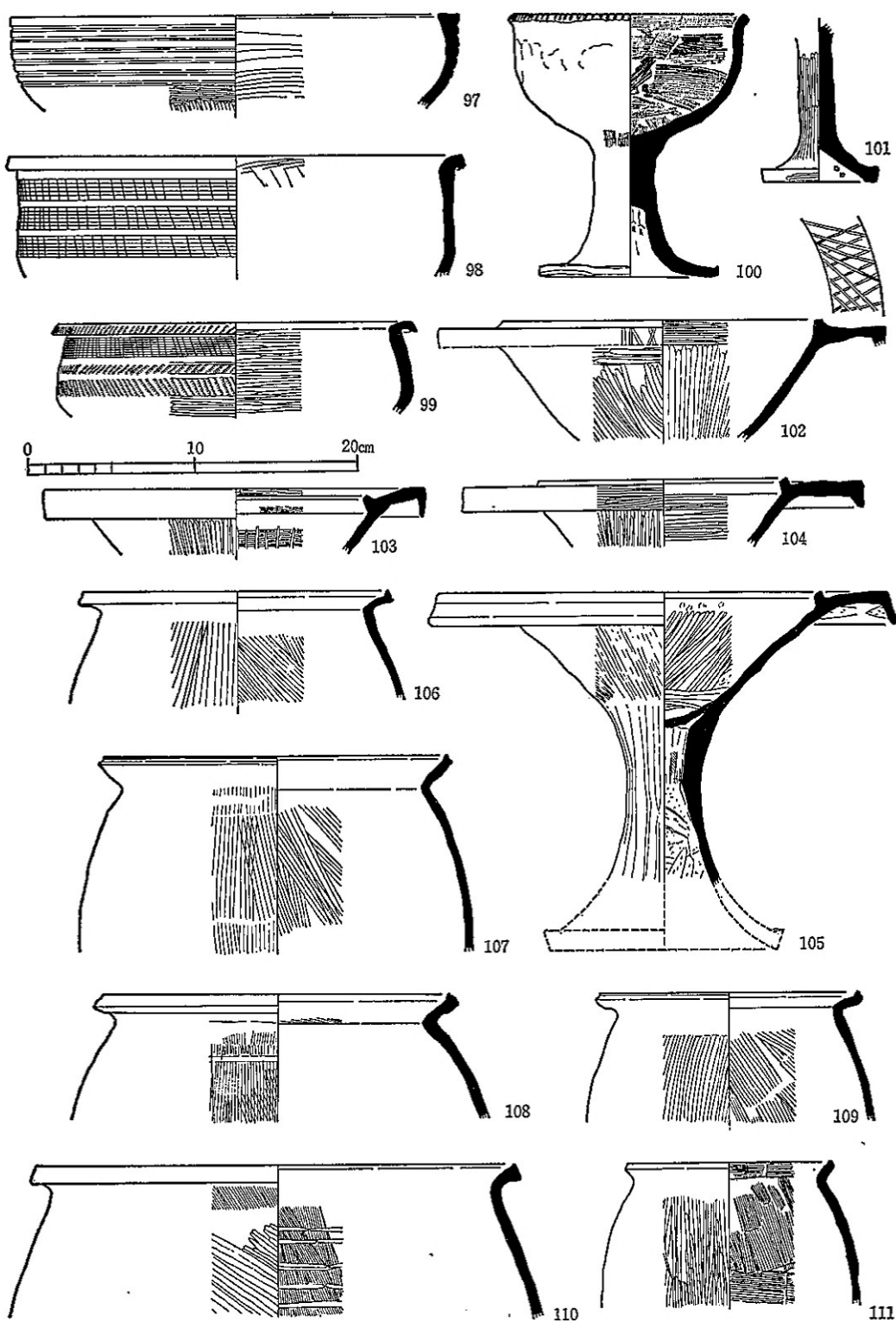
第24图 第1号方形周溝墓北周溝出土土器



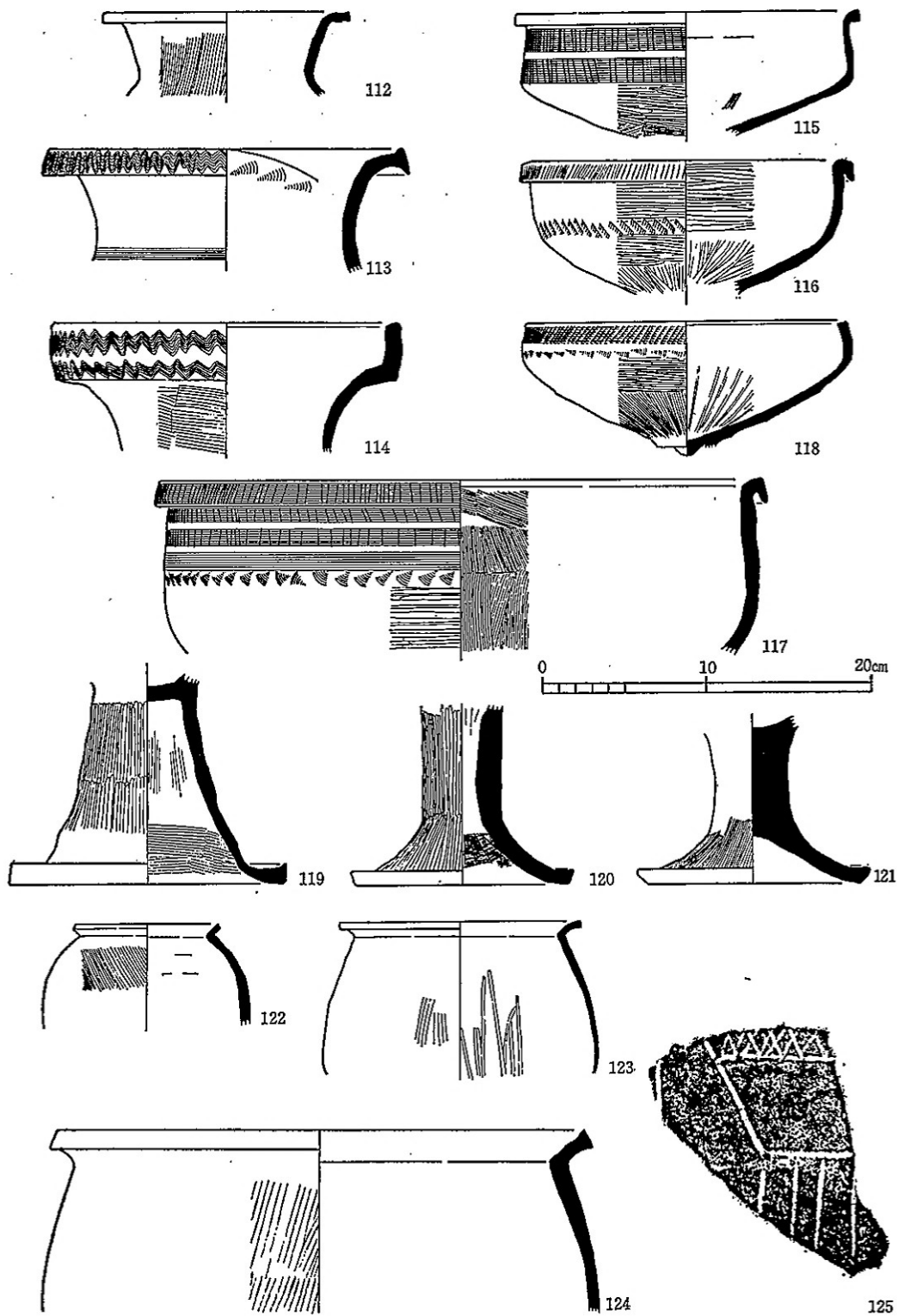
第25图 第1号方形周沟墓北周沟出土土器



第26图 第1—2号方形周溝墓間周溝下部出土土器

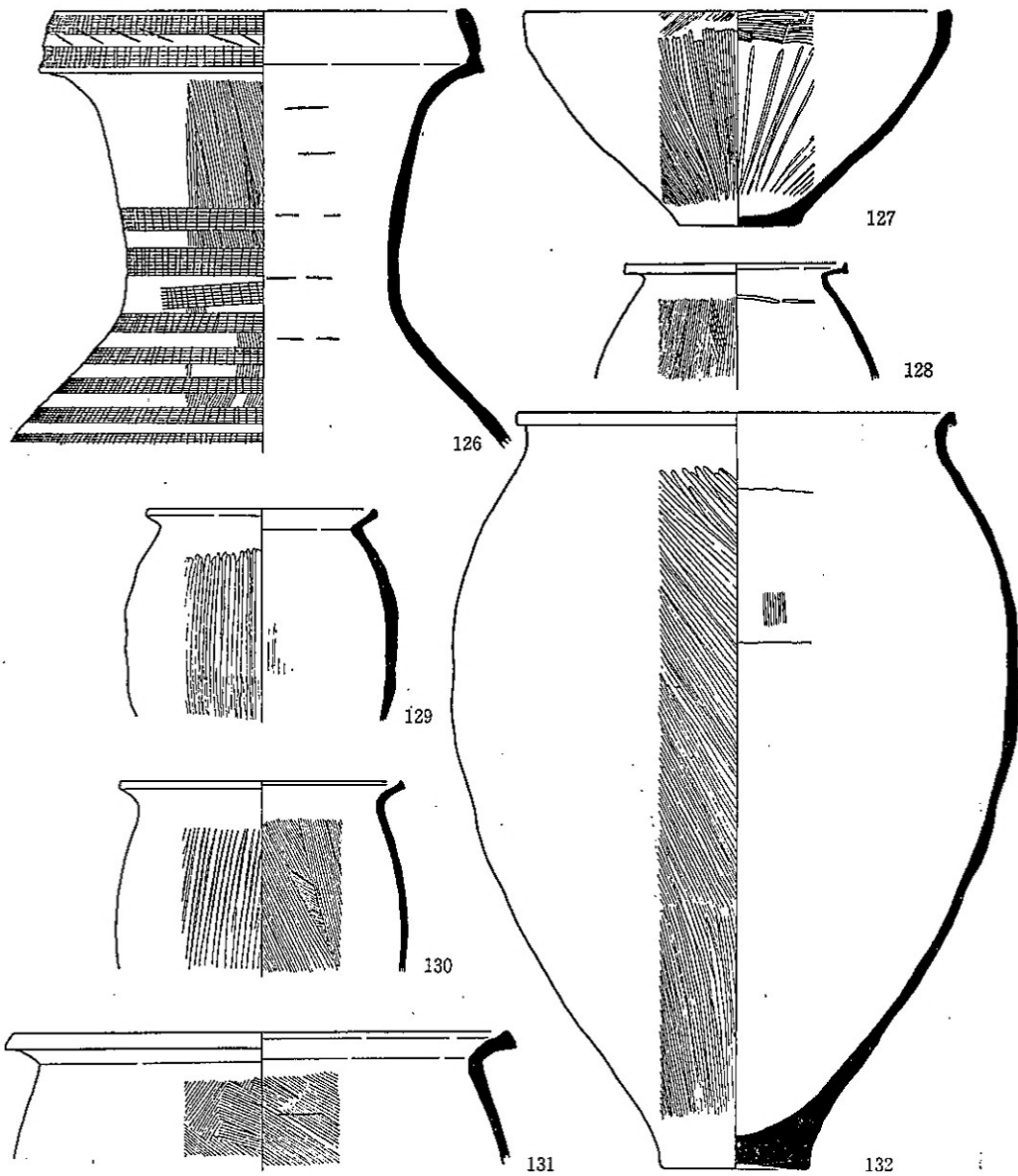


第27图 第1—2号方形周溝墓間周溝下部出土土器



第28图 第1—2号方形周溝墓間周溝上部出土土器 (125—縮尺 $\frac{1}{2}$ 拓本)

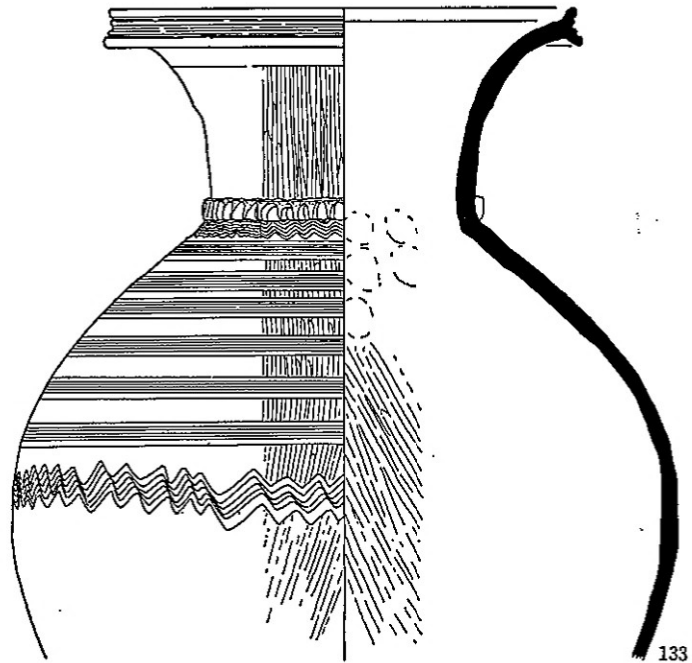
〈第2号方形周溝墓北、西周溝〉 これらの周溝は直交せず、45°ほどの角度で接しており、その境界も明瞭ではない。そのため北周溝は北東—南西を向いている。この歪みは、遺構面Ⅰの溝3を再利用したために生じたとも考えられる。北周溝部は幅3.0m、深さ0.6mの規模で、他の周溝に比してやや小さい。第34図にその断面を示す。西周溝部は上部堆積層を弥生時代後期遺構面Ⅱ河川7によって削剝されているが、およそ幅3.5m、深さ0.7mである。溝内埋土は他の周溝と大差ないが、最下層の暗青黑色粘土にやや砂粒の混入が多くなる傾向がみられる。北周溝部には遺物が少なく、西周溝部では南半の溝底で多く出土している。これらの周溝でも、2面にわたっ



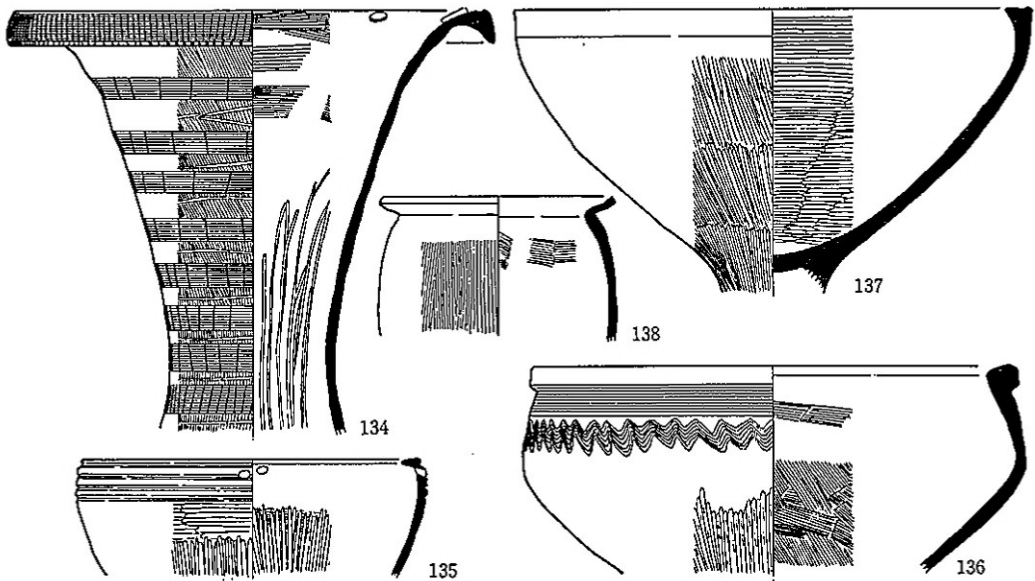
第29図 第2号方形周溝墓北、西周溝出土土器 (1/4)

て足跡が検出されている（第43図）。5 A-2足跡面は暗灰色シルト上面に残されており、足跡中には青灰色細砂と微砂が詰っていた。西周溝部は比較的踏み込みが深く、左右の判別のつくものが多かったが、北周溝部は足跡の重複が激しく、左右の判別のつくものは少なかった。左足が59個、右足が71個確認されている。5 A-3足跡面は暗青黒色粘土上面に残されており、灰白色細砂と微砂が詰っていた。分布は5 A-2足跡面よりは散在的であり、左右の判別できたのは左足で19個、右足で16個である。遺物は主に土器では第29、30図、木器では第52図（W-9）に示すものが出土している。

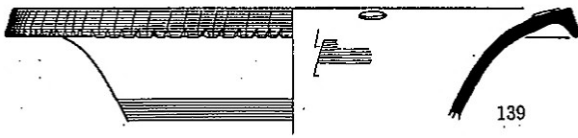
〈第2-3-4号方形周溝墓
間周溝〉 第2-3-4号方形周溝墓に囲まれた部分は、広い平坦面を形成しており、各方形周溝墓を圍繞するような周溝の存在は認められなかった。西半部は弥生時代後期



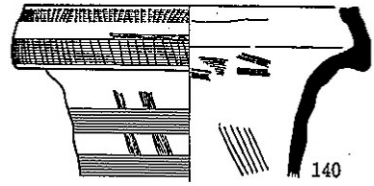
第30図 第2号方形周溝墓北、西周溝出土土器（ $\frac{1}{4}$ ）



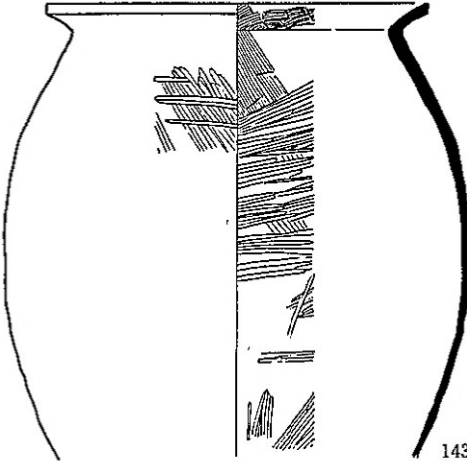
第31図 第2-3号方形周溝墓間周溝出土土器（ $\frac{1}{4}$ ）



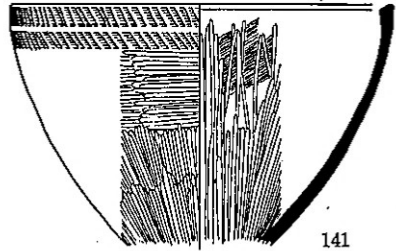
139



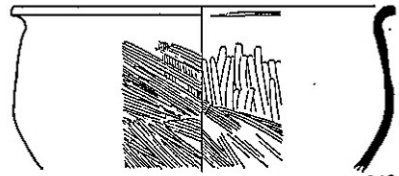
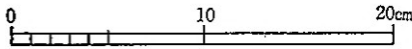
140



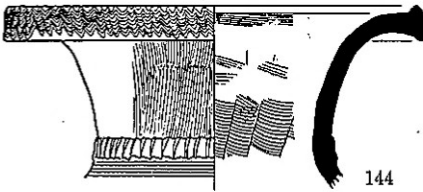
143



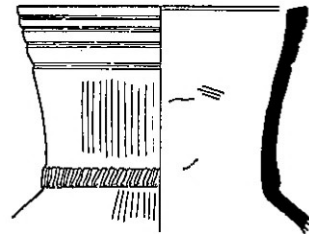
141



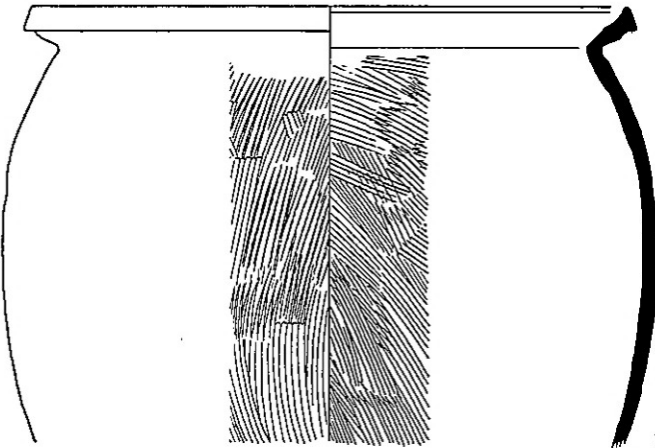
142



144



145



146

第32图 第2—4号方形周溝墓間周溝 (139~143)、第4号方形周溝墓西裾部 (144~146) 出土土器

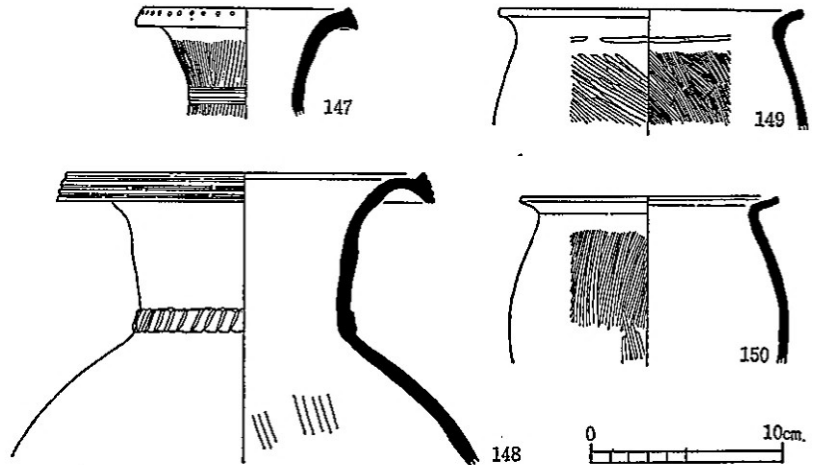
遺構面Ⅱ河川7によって、大きく削割されており、特に5Aトレンチ南端部では0.3mほどしか残っていない。この平坦面の広さは南北長6m以上、東西長13m、深さは0.5mほどである。最下部に堆積するのは灰黒色砂質土で、暗青黒色粘土よりは砂粒の混入度が高い。足跡も5A-2、3足跡面の続きが5Aトレンチ内で検出されている。遺物は灰黒色砂質土中より多く出土しているが、それを5Aトレンチ側とAトレンチ側で分離し、それぞれ第2-3号方形周溝墓間周溝内出土遺物、第2-4号方形周溝墓間周溝内出土遺物とする。土器は主に前者では第31図、後者では第32図に示すものが出土しているが、後者の内、特に第4号方形周溝墓西裾部で出土したものを第32図144~146として別に示してある。なおこの平坦面では、遺構面Ⅱに属する土壙、落込等が多く検出されている。

〈第3号方形周溝墓北周溝〉 第3号方形周溝墓はその北東隅が検出されただけであり、北周溝も2.5mの長さしか調査できなかった。5Aトレンチの西端部では幅2.5m、深さ0.4mである。東端部はそれより0.1mほど高くなって陸橋部を形成しており、この部分と東側平坦面とのレベル差は0.5mほどある。他の周溝に比して溝底のレベルが高いためか、溝内埋土も若干異なっており、下部は茶黒色粘土、上部は灰黒色砂質土が堆積していた。遺物はほとんど出土しなかった。

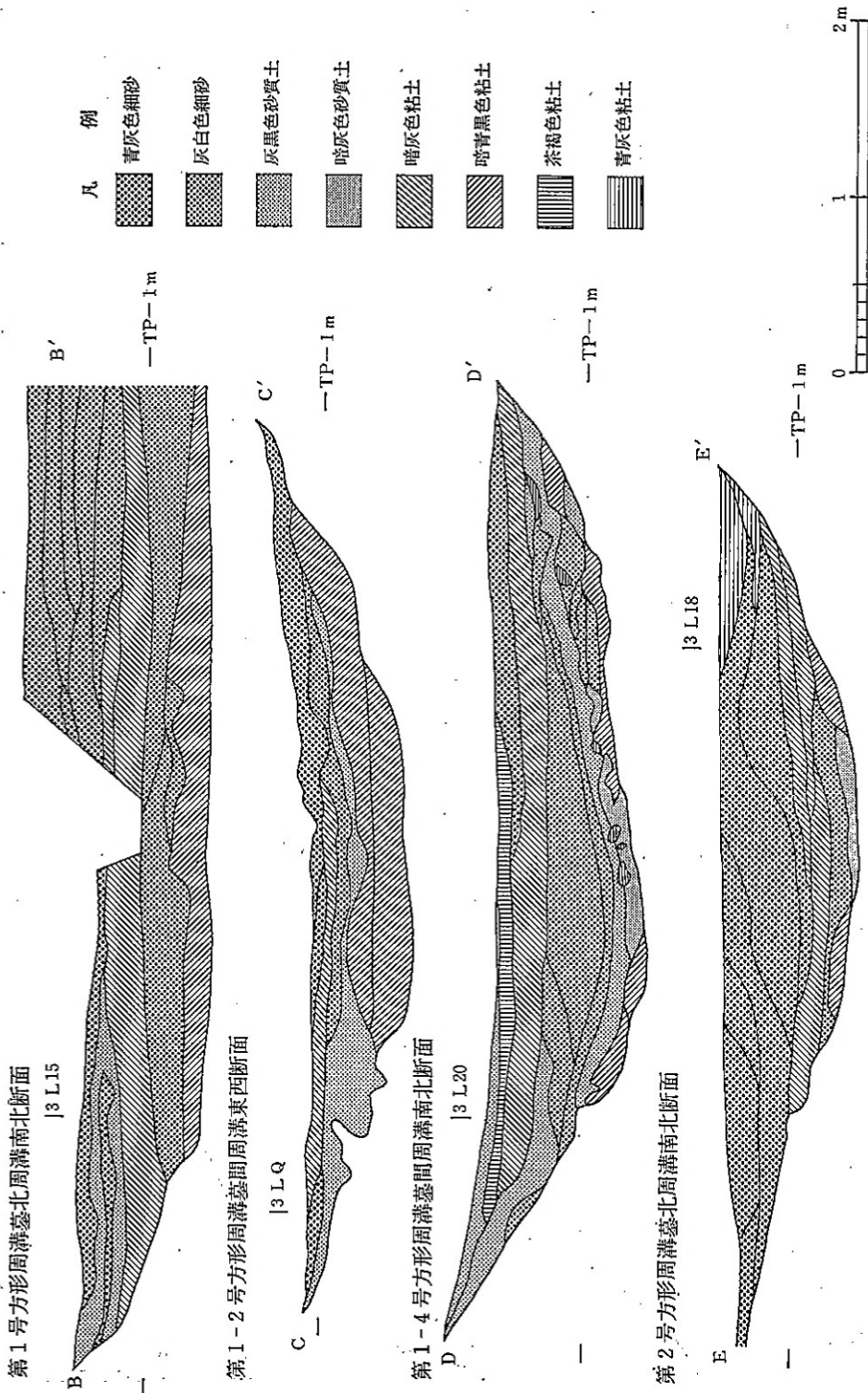
〈第1-4号方形周溝墓間周溝〉 幅は3LSライン付近で4.5m、深さは一番深い3LS20のAトレンチと6Aトレンチの境界部で0.8mである。溝底はこの部分より東に向かって浅くなり、第4号方形周溝墓の東周溝と接する部分では0.3mほどになる。溝内断面は第34図、主な出土土器は第35、36図に示すものである。この周溝中では4面にわたって足跡が検出されている。いずれも粘土やシルトの上面に残されていたもので、左右の判別できたものは6A-3足跡面で7個、6A-4足跡面で7個、6A-5足跡面で13個、溝底の6A-6足跡面では17個であった。

〈第4号方形周溝墓東周溝〉 この周溝は北西の4半部が調査されただけで、全容は不明である。幅は2.5m以

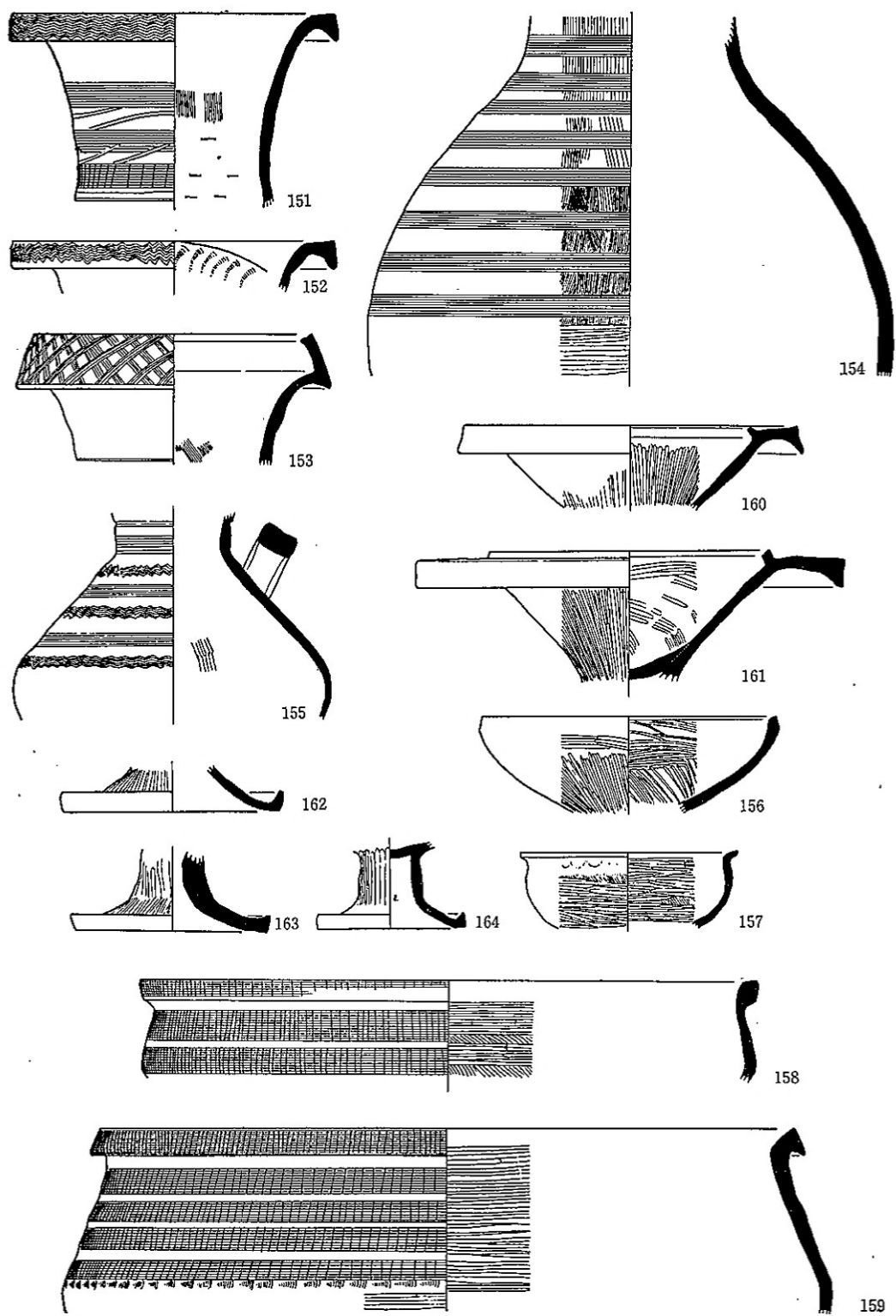
上あるが、深さは0.1~0.15mほどで地山をほとんど削っていない。溝内埋土は灰黒色砂質土が堆積していた。遺物は主に第33図に示すものが出土している。



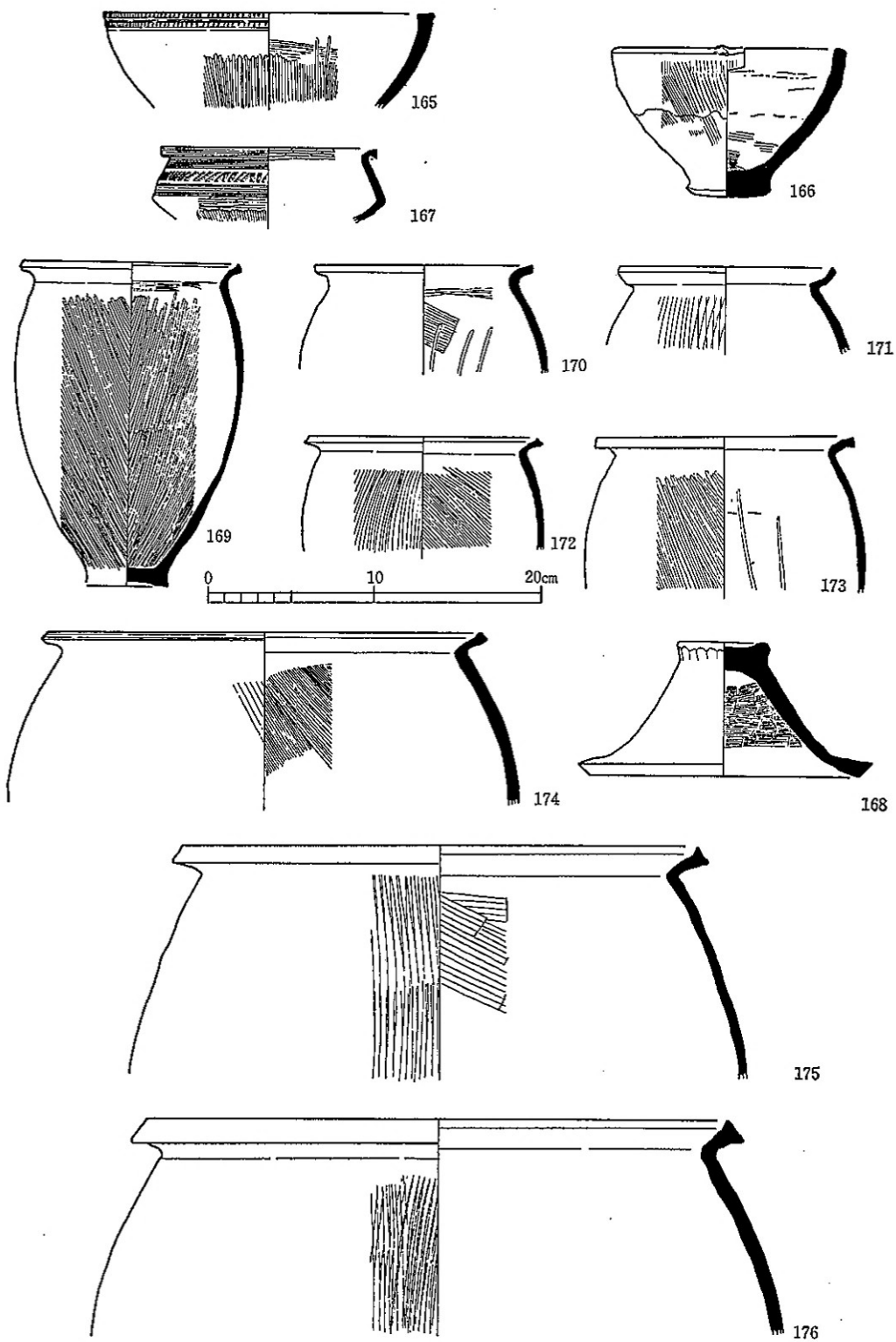
第33図 第4号方形周溝墓東周溝出土土器



第34图 方形周溝墓周溝断面图



第35图 第1—4号方形周溝墓間周溝出土土器 (4)



第36图 第1—4号方形周溝墓間周溝出土土器

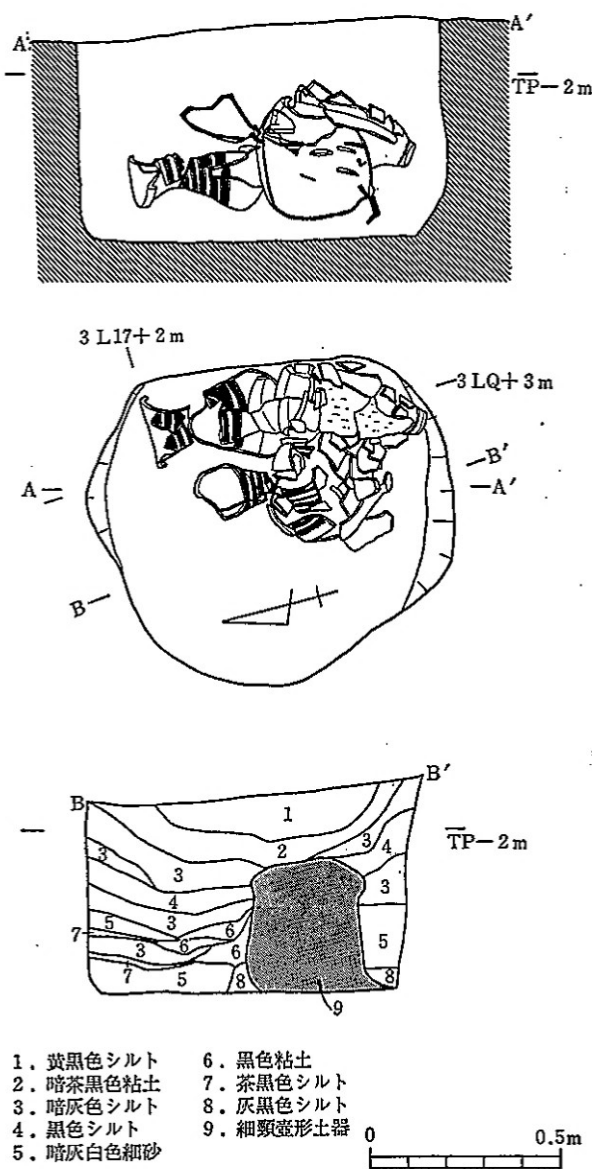
C 土壌 この時期における土壌は、方形周溝墓の盛土上にあるものと、周溝底で検出されるものがある。盛土上にある土壌は、その上面から切り込まれている不整形なもので、埋葬主体とするにはやや疑問の残る所もあり、今回は土壌の範疇に加えておく。周溝底で検出される土壌には、明らかに周溝が掘削された後、切りこまれたと判る土壌250、252のようなものもあるが、他はそれ以前に既に存在し、深く穿たれていたために、周溝掘削後もなおその底部痕跡を留めた可能性を持っている。そのため厳密な意味では遺構面Ⅰ、Ⅱの区別は曖昧な部分もある。今回記述しなかった土壌はすべて第2—3—4号方形周溝墓間周溝底で検出された円形ないしは不整形なもので、主に灰黒色砂質土が埋没している。遺物はほとんど出土していない。

<土壌 250> 第37図に示す第1号方形周溝墓の西裾部、3LR18で検出された土壌で、長軸0.95m、短軸0.85mの南北にやや長い隅丸方形のものであり、壁面はほぼ垂直で、東側肩部よりの深さは0.5mほどである。この土壌内では、東半部において完形の甕形土器1個体と壺形土器2個体が、いずれも口縁を北に向け、横たわった状態で検出されている。これらの土器は土圧で押しつぶされてはいるものの比較的原形を保っており、壺形土器内部には土もあまり入りこんではいなかった。埋没土は主に灰黒色、及び暗灰色シルトと灰白色細砂が互層状に堆積しており、一部黒色粘土等を挟んでいた。

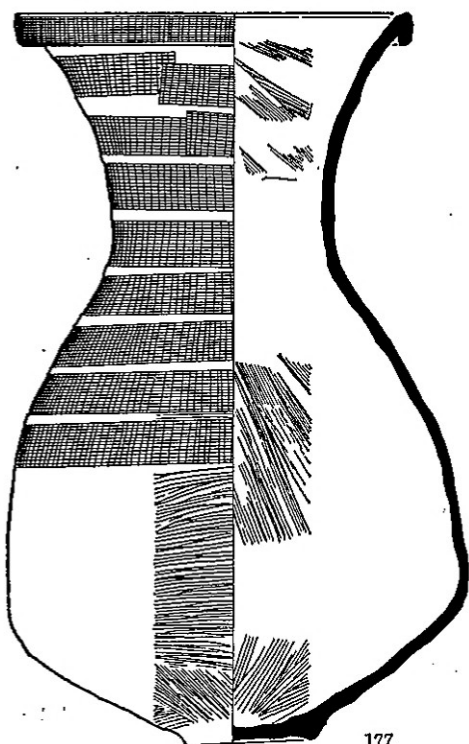
遺物は、いずれも土圧により破壊された状態で広口壺形土器、細頸壺形土器、甕形土器が3点のみほぼ完形で出土している。

広口壺形土器A（第38図177）。

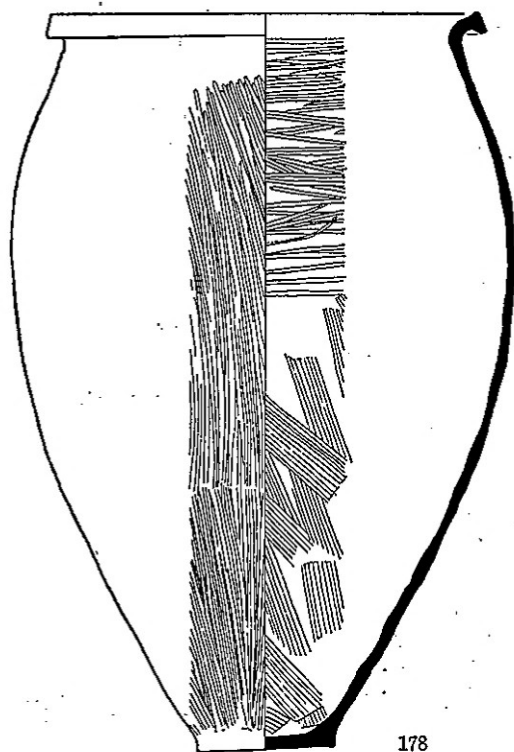
口径20.5cm、腹径20cm、底径6.5cm、



第37図 土壌 250 実測図



器高38.4cm。口縁部は斜外方へ開き、口縁端部は屈曲してやや垂下し、面をもつ。頸部はやや太めの筒状を呈し、体部へなだらかに続く。最大腹径は体部の約 $\frac{1}{2}$ の下位にあり、やや腰の張る体部である。底部はやや突出し、中央部がわずかに凹む。調整は、外面、口縁部から体部上半にかけてヨコナデ、体部中央は弧状に横方向のヘラミガキ、体部下半は斜方向のヘラミガキ、底部はナデにより仕上げている。内面は、口縁部上端はヨコナデ、口縁部から頸部上半にかけて斜方向の細かい刷毛目、頸部下半から体部上端にかけてナデ、体部上半は斜方向の細かい刷毛目、体部中央は横方向のナデ、体部下半および底部は縦方向のヘラミガキを施す。内面の口頸部および頸体部の境目に粘土紐の継目を残す。紋様は口縁部端面および口頸部から体部上半にかけて板状の幅広の簾状紋を施している。なお紋様間に磨研線を施す。内外面共に煤が付着し、特に外面体部中央以下が顕著である。生駒西麓産の土器である。



第38図 土壙 250 出土土器 (坪)

細頸壺形土器 (第39図)。口径11.8cm、腹径37.9cm、底径7.5cm、器高61.8cm。口頸部は上方へやや開く筒状を呈し、口縁端部は内彎ぎみにおわる。口縁部上端は面をもつ。体部は腰が張り、最大腹径が体部の $\frac{1}{2}$ の下位にある。底部はわずかに突出し、平底である。調整は、外面、口縁部から頸部上半にかけてナデ、頸部下半から体部上半にかけて縦方向の刷毛目後ナデ、体部中央縦方向のヘラミガキ、体部下半斜方向のヘラミガキ、底部ナデを施している。内面は、口頸部は斜・縦方向の細かい刷毛目後ナデ、体部上半は指圧痕を残す。体部中央から底部にかけて斜・縦方向の細かい刷毛目を施して

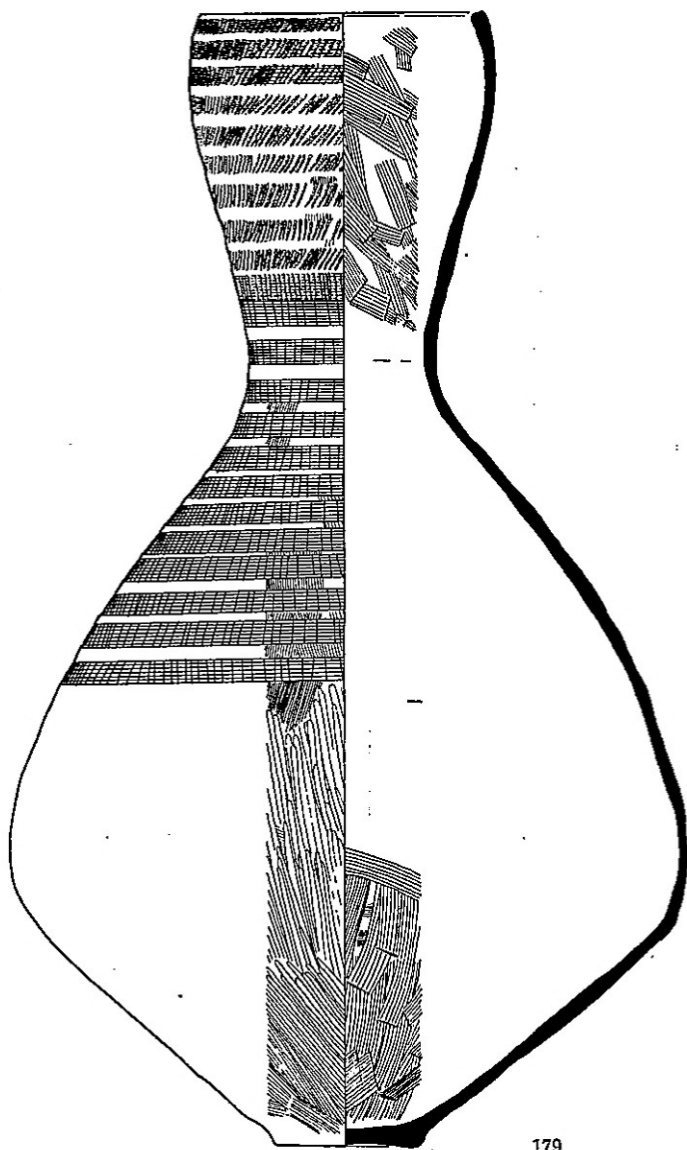
いる。口頸部から体部上半の内面に粘土紐を5本残している。紋様は、口縁部から体部上半にかけて列点紋9帯・簾状紋13帯をやや粗く施している。外面体部中央の相対位置に黒斑がある。生駒西麓産の土器である。

甕形土器（第38図 178）。口径22.4cm、腹径26.4cm、底径7.3cm、器高38.7cm。口頸部は屈曲し短く外反する。口縁端部はわずかに垂下し、面をもつ。体部は長胴形でわずかに張り、最大腹径は体部 $\frac{2}{3}$ の上位にある。底部はわずかに突出し、平底である。調整は、外面、口頸部および体部上端はヨコナデ、体部は縦方向の細かいヘラミガキ、底側面はヨコナデ、底部はナデ。内面、口頸部はヨコナデ、体部上半

は横方向の粗いヘラミガキ、体部下半は斜・縦方向の粗い刷毛目、底部はナデを施している。内外面共、煤が付着しており、特に体部中央が顕著である。これも生駒西麓産の土器である。以上、出土土器の概要を記した。

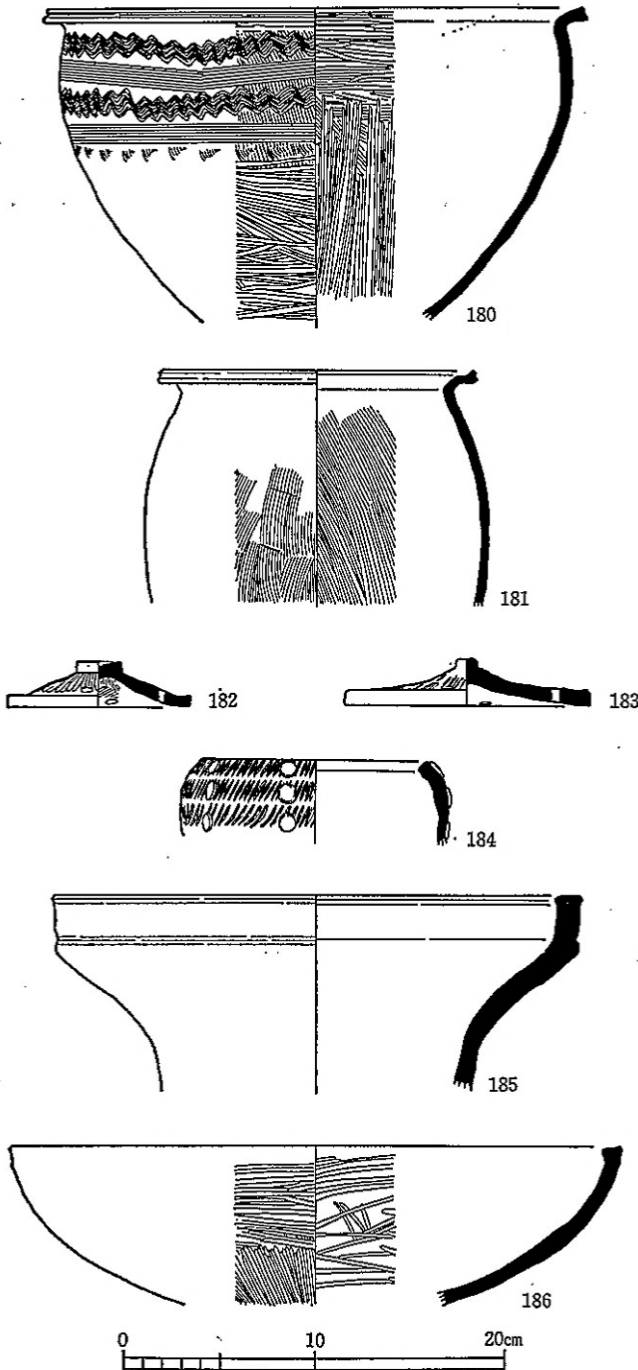
〈土壙 251〉 第2号方形周溝墓西裾部の3LP20~21で検出された長軸1.8m、短軸1.0m、東肩部よりの深さ0.3mの南北に長い長方形の土壙である。埋没土は暗青黒色粘土と灰黒色粘土が堆積していたが、この粘土中には砂の混入がなく、非常に緻密なのが他の土壙と異なる点である。遺物は壺形土器片が出土している。

〈土壙 252〉 第3号方形周溝墓北周溝底の3LO21でその東半部が検出されたもので、5Aトレンチ西端部で南北長1.2m、東西長1.1m以



第39図 土壙 250 出土土器 (14)

上、深さ 0.7mを測る。埋没土は炭化物の多い暗青黒色粘土であるが、その中に小型の巻貝を主にした焼けた貝殻が多数含まれていた。



第40図 土壌262 (180, 181)、土壌263 (184~186)、
土壌265 (182, 183) 出土土器

〈土壌 253〉 第3号方形周溝墓東裾部の3LP21で検出された長軸1.5m、短軸1.0m、西肩部よりの深さ0.4mの南北に長い長方形の土壌である。切り込み面は暗青黒色粘土上面からで、埋没土は青灰色砂と暗灰色粘土の互層であった。遺物は出土しなかった。

〈土壌 262〉 第4号方形周溝墓西裾部の3LR21で検出された長軸2.4m、短軸1.2m、東肩部よりの深さ0.2mの南北に長い不整形な土壌である。埋没土は炭化物の極めて多い灰黒色砂質土で、溝底には河原石が3個転がっていた。遺物は第40図 (180, 181) に示すものが出土している。

〈土壌 263〉 第41図に示す第4号方形周溝墓北裾部の3LR~S21で検出された長軸1.6m、短軸0.75m、南肩部よりの深さ0.5mの東西に長い隅丸長方形の土壌である。埋没土は灰黒色砂質土が主であるが、間層に灰白色細砂を挟む。遺物は上層に多く、土器は第40図 (184~186)、木器は第52図 (W-8) に示すものが出土している。

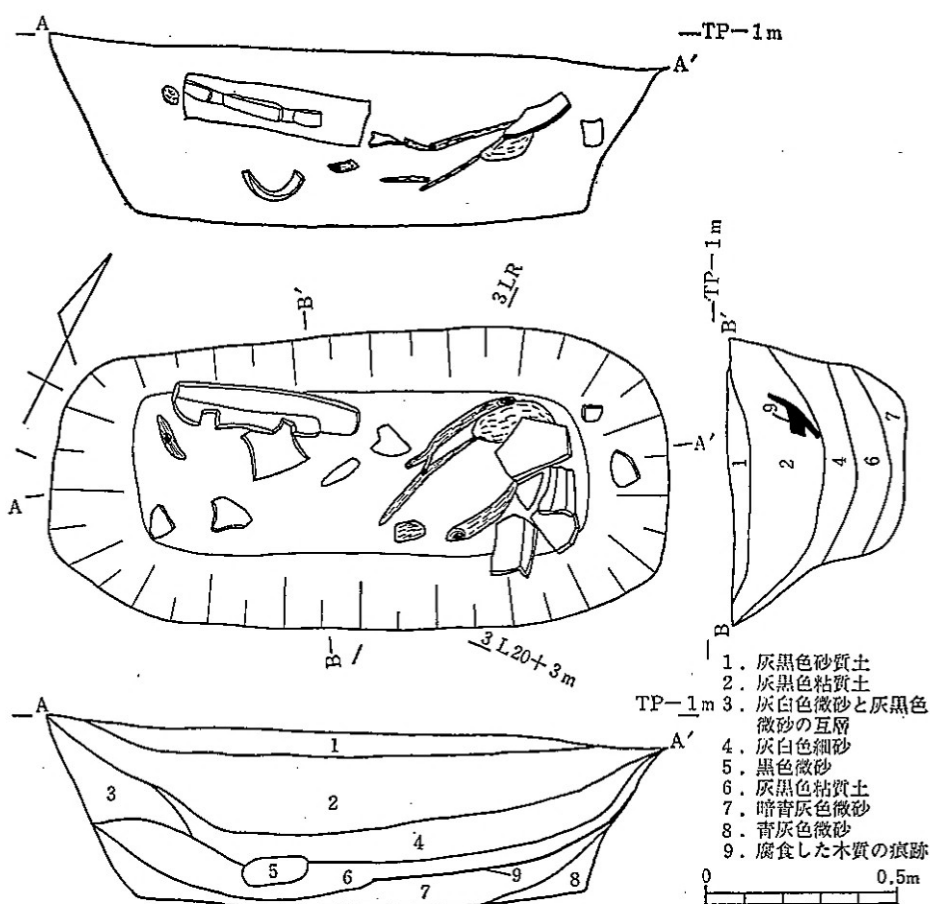
〈土壌 264〉 第4号方形周溝墓上の3LT21で検出された長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.7mの

南北にやや長い方形の土壙で盛土上面より切り込まれている。埋没土は炭化物の厚い層が上層と最下層にあり、その間は灰黒色砂質土と暗青灰色粘土の互層になっている。遺物は土器の細片が少量出土している。

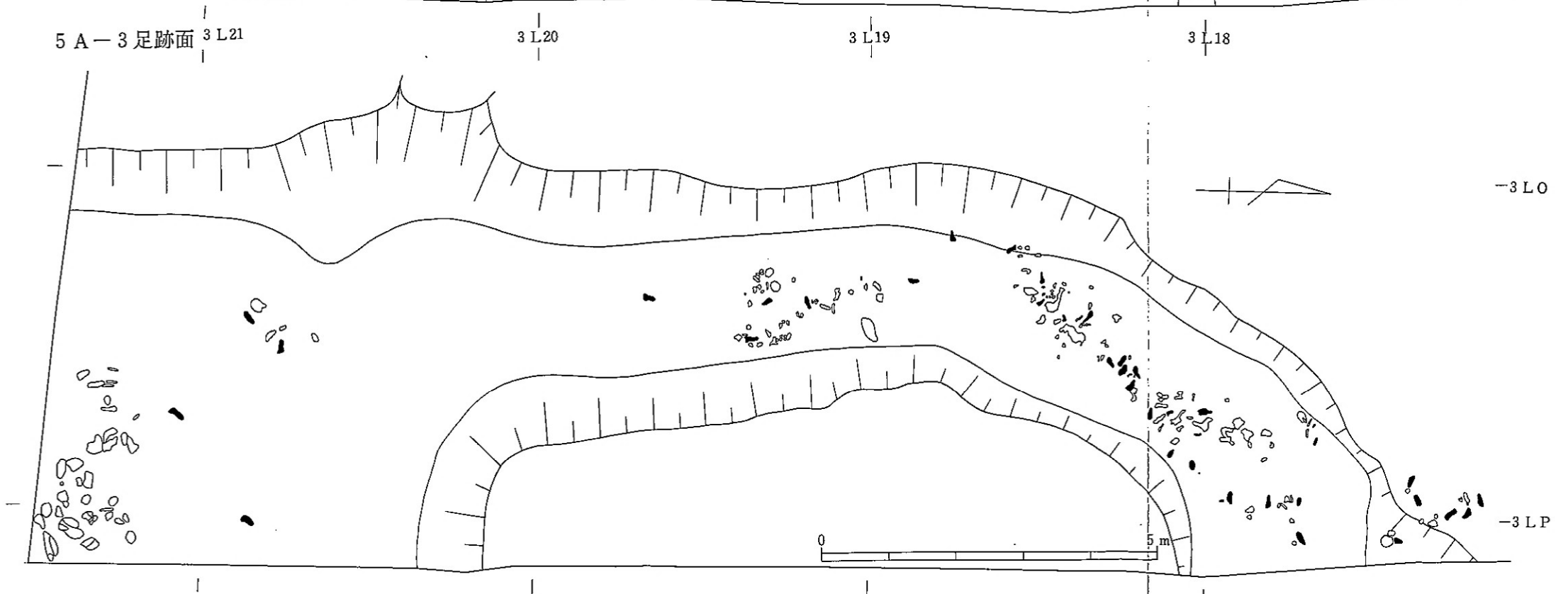
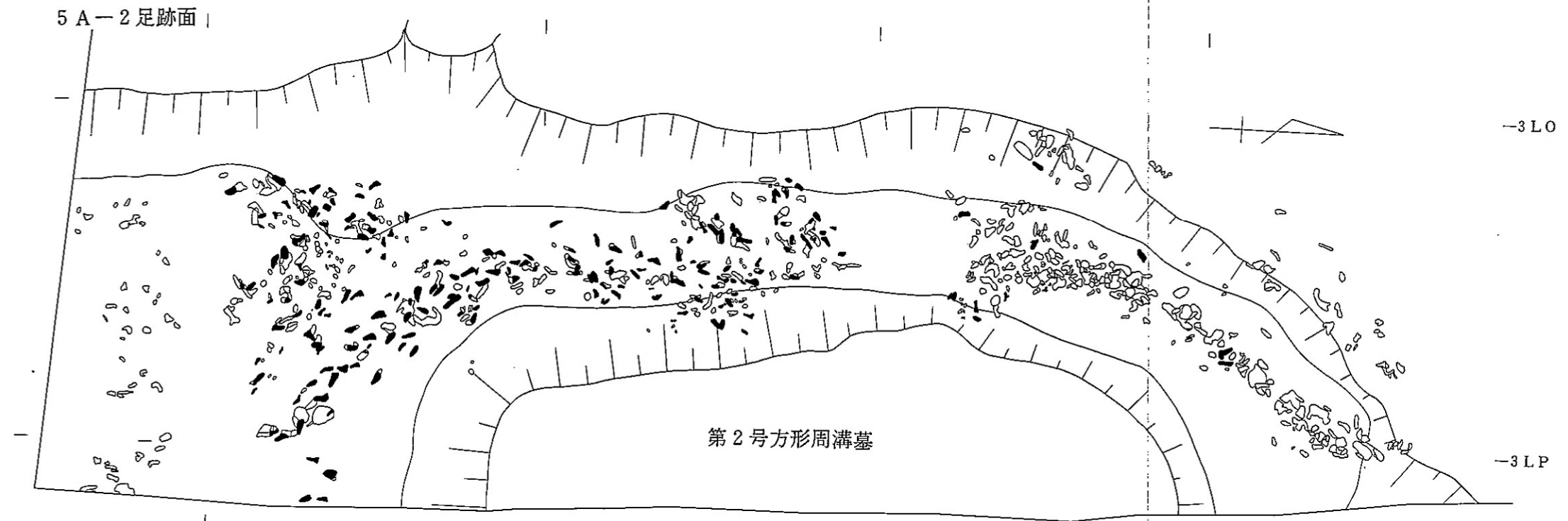
<土壙 265> 第4号方形周溝墓上の3L S21で検出された長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.6mの東西にやや長い方形の土壙で、盛土上面より切り込まれている。埋没土は土壙 264と同じく上層と最下層に炭化物層があり、その間は灰黒色砂質土と暗青灰色砂質土の互層になっている。遺物は第40図(182、183)に示すものが出土している。

<土壙 266> 第4号方形周溝墓上の3L S22で検出された長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.5mの東西にやや長い方形の土壙で、盛土上面より切り込まれている。埋没土は炭化物の多い灰黒色砂質土であるが、中間に薄い炭化物層が入る。遺物は土器の細片が少量出土している。

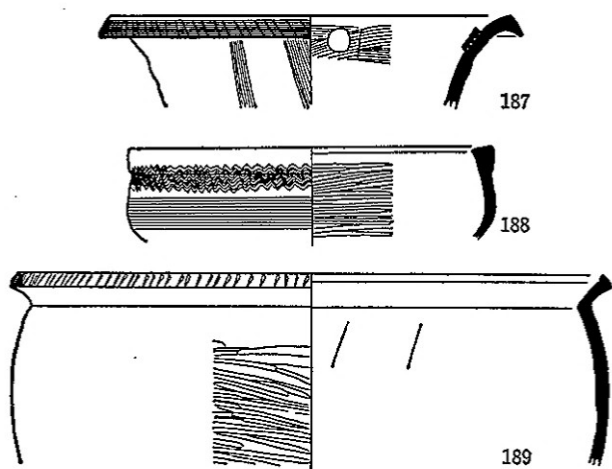
D 落込 第2、3、4号方形周溝墓間の平坦面で、落込が2ヶ所検出されたが、どちらも不整形なものである。



第41図 土壙 263 実測図



第43図 5 A-2、3 足跡面実測図 (黒は左右の判別された足跡)



第42図 落込11出土土器 (4)

〈落込10〉 3 L O～Q21にあり、長軸 3.0m、短軸1.6m、深さ0.1mの東西に長い落込で、極めて緩やかな傾斜面を持っている。埋没土は灰黒色砂質土で、遺物は土器の細片が少量出土している。

〈落込11〉 3 L P21～22にあり、長軸 1.7m、短軸1.2m、深さ0.2mの南北にやや長い落込である。肩部、及び底部は凹凸が激しく、不整形である。埋没土は灰黒色砂質土で、遺物は第42図に示す土器が出土

している。

E ピット 第2—3—4号方形周溝墓間の平坦面では計4個のピットが検出された。これらは分布も疎であり、不整形な形をしている所から、建物が建っていたとは思われない。

〈ピット1303〉 3 L R21～22にあり、長径0.45m、短径0.35m、深さ 0.1mの不整形なピットである。埋没土は灰黒色砂質土であるが、その中よりウリの種子が 100個以上固まった状態で検出されている(付章—Ⅲ参照)。

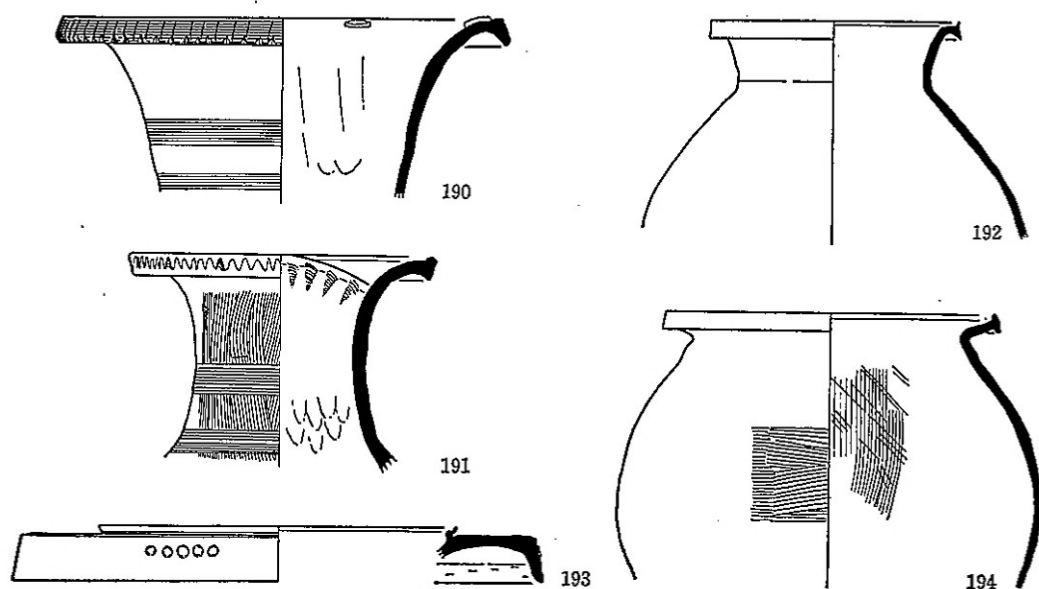
F 足跡 A地区において中期遺構面Ⅱで検出された足跡は、それぞれの項で前述した方形周溝墓の周溝中のものを除けば、第62図に示す1 Aトレンチの中期下部包含層上面のものがある(1 A—1足跡面)。1 Aトレンチ全域にわたって総数 2,256個もの足跡が検出されたが、これらの足跡は中に詰っている砂に違いのある所から、一時に埋没したものではなく、足跡が付いては埋没するという過程を幾度か繰り返したようである。埋没順序は灰黒色微砂、及び暗青灰色微砂の詰っているものが一番古く、それから暗灰褐色微砂、灰褐色微砂の順に新しくなるが、最終的には洪水のもたらした青灰色細砂によって完全に埋没してしまう。傾向としては黒色味の強いものから褐色、及び白色に近いものへ、砂粒の細かいものから粗いものへと新しくなるようである。古く埋没したものは明瞭に足跡と分かるものは少なく、最後に埋没した灰褐色、及び灰白色細砂の詰ったものの中に、踏み込みが深く、指の痕跡が残った足跡が多かった。足の向きとしては北東↔南西を指しているものが比較的多かった。左右の判別できたものは 580個であるが、内訳は左足289個、右足291個である。この足跡が残された中期下部包含層上面が水田かどうかを確認するために、包含層の花粉分析を安田喜憲氏に依頼したが、その結果によると当該粘土中には稲の花粉の出現率は低く、水田として利用されてはいなかったようである(付章—Ⅰ参照)。

G 中期上部包含層 A地区においては、方形周溝墓が洪水のもたらした砂によって完全に埋没

した後、中期上部包含層である黒色粘土の堆積が始まる。5～10cmほどの層厚を有するこの粘土は、泥炭質であり、アシの地下茎を含む植物遺体に富んでいる。包含層下面でのレベルは、Aトレンチ南端部の3LR22付近ではT.P. - 0.3mであるが、ここから北に向けて徐々に下降していき、3LR19ではT.P. - 0.8mにまで達する。ここから3LR17においてT.P. - 0.2mまで上昇した後、再び下降していき、Aトレンチ北端部の3LR8付近ではT.P. - 0.9mにまで下降する。このことから、当時この地域がゆるやかな起伏をもった湿地帯になっていたことがわかる。遺物は南端部を中心に、主に第44図に示す土器が出土しているが、遺物の絶対量は少なかった。

H 小結 今回の調査では、弥生時代中期において2枚の遺構面が分離できた。ⅠとⅡの時間的な差異については、方形周溝墓に盛土されることによって、その盛土下に封ぜられてしまったものが遺構面Ⅰに属する遺構であり、方形周溝墓とその盛土上、及び周溝中に掘削されたものがⅡに属する遺構と言える。そういった意味では、Ⅰの中にも方形周溝墓が築造される寸前まで実際に機能していた遺構の存在する可能性もあり、とりたてて過大な時間差を想定できないものと思われる。しかしそうは言っても、直前まで建物が立ち並んでいたものを取り壊してまで、墓を作る必然性があったかということになると、いささか疑義なしとはいえない。やはり居住域であったこの一帯が、なんらかの理由で廃絶し、その後に墓域に転換したと考えるのが妥当のようである。この廃絶の理由が火災であったならば、この地域に炭化した木材等が散乱しているはずであり、そういったものが見られない所から、別の理由があったものと思われる。

A地区で検出された方形周溝墓は、第2号方形周溝墓以外はその一部を調査しただけのため、



第44図 弥生時代中期上部包含層出土土器（坪）

ここから早急な結論を導き出すのは危険であるが、B地区以南の方形周溝墓とは若干周溝の形態を異にしているようである。幅3～6m、深さは地山面からでも0.5～1mあり、他と比べて規模の大きさが際立っている。ただこの地区においても、第4号方形周溝墓東溝のように、ほとんど地山面を掘削していない浅いものもあり、方形周溝墓の各辺すべてを幅広く深い周溝が廻っているわけではない。埋葬主体は第2、4号方形周溝墓で各一基検出されているが、方形周溝墓の規模のわりには埋葬主体の数が少ない。これは、方形周溝墓が周溝を掘削することによって得られた土を、すべて盛土として積み上げたとすれば、現存高20～30cmの盛土部は本来もっと高かったはずであり、埋葬主体がすでに流失してしまったか、あるいはこの掘方が地山面に達していないために、検出が困難であったことも考えられ、実際の埋葬数はもう少し多かったものと思われる。その場合、埋葬施設として木棺等を使用していれば、第4号方形周溝墓の主体部のようにその痕跡を留めていることが多く、ここではそのような痕跡も認められなかったことから、主体部の多くは土壙墓であった可能性が高い。これまで瓜生堂遺跡では集落内に3群の墓域を持つことが報告されているが、A地区で検出された方形周溝墓は、その内の遺跡中央東よりに広がる墓域の最北端にあたることが今回の調査で確認された。これらの方形周溝墓は、遺跡中央西よりの小阪ポンプ場内で検出された方形周溝墓と比較すると、埋葬主体等において貧弱さは否めない。これは後者が楠根川の形成した自然堤防上のより高位部分に位置し、集落でも居住環境の恵まれた中に営まれていることから、この地に被葬される集団と、集落の縁辺部に被葬される集団との階層差の反映とも考えられる。しかしこのことは、墓域を異にする集団間の居住域との有機的な関連をも含めて、瓜生堂遺跡全体にわたる今少しの検討が必要と思われる。

とにかく今回の調査では、弥生時代中期において、A地区が、包含層はなお北に続くものの、遺構分布の上では瓜生堂遺跡の北限にあたることが確認された。しかしこれ以北の地域も1Aトレンチで検出された足跡が物語るように、未知の水田へか、あるいは河内湖の汀への径路として、決して日常生活とは無縁でなかったことも明らかになっている。

弥生時代中期遺構面Ⅱにともなう遺物は、土器がコンテナ30杯分、石器が42点、木器が11点出土している。

土器は、主に方形周溝墓の周溝から出土しており、遺構面Ⅱの上部包含層からの出土は少なかった。遺構面Ⅰと同様に遊離破片が大多数を占め、完形品になるものはごくわずかである。

方形周溝墓にともなう周溝は、幾つかの方形周溝墓に共有されているため、どちらの方形周溝墓に属するかは不明である。供献用と思われるものは出土していない。また、A地区で検出された方形周溝墓の多くは調査区域外へ延びるため、盛土内から出土した土器は少量にとどまる。

以下、方形周溝墓の周溝出土土器を中心に、遺構面Ⅱから出土した土器の概要を記述してゆく。

遺構面Ⅱにともなう土器の器種構成は、広口壺形土器（A・B・C）、細頸壺形土器、短頸壺

形土器、水差形土器、無頸壺形土器（B・C）、鉢形土器（A・B・C）、高杯形土器（A・B）、蓋形土器（壺用・甕用）、甕形土器がある。甕形土器が多く、次いで広口壺形土器、鉢形土器がある。細頸壺形土器、短頸壺形土器、水差形土器、高杯形土器、蓋形土器の占める割合は少ない。生駒西麓産の占める割合は、半数近くある。

広口壺形土器Aには、口縁部が外反し、口縁端部が上方にわずかに立ち上がり、下方へやや垂下して面をなし、頸部の短いものが主にある。口縁部端面の紋様は波状紋を施すものが多く、凹線紋を施すものもある。頸部には、櫛描直線紋と波状紋を組合わせて用いる場合が多く、頸体部の境目に指頭圧痕紋凸帯を1条めぐらすものもある。生駒西麓産の土器は、口縁端部を下方へのみ拡張させる。口縁部端面に簾状紋、波状紋を施す場合が多く、頸部以下には簾状紋を施す場合が多い。

広口壺形土器Bには、口縁部が外反し、さらに上方へのみ拡張するものがある。口縁屈曲部が丸味をもつものもある。口縁部端面に凹線紋を施すものがあり、無紋のものもある。生駒西麓産の土器には、前述の形態のものと、口縁端部を上・下に拡張するものがある。A同様に簾状紋を多用する。口縁部端面に斜格子紋を施す場合がある。

広口壺形土器Cには、Aと同様な形態を持った、無紋の土器が多い。生駒西麓産の土器も形態・技法ともに変わらない。

細頸壺形土器は、生駒西麓産の土器のみが出土している。やや裾すばまりに伸びる頸部に、内彎気味におわる口縁部をもつ。広口壺形土器と同様に簾状紋を多用し、列点紋、円形浮紋を併用する場合が多い。

短頸壺形土器は、2点出土している。一点はやや外方に短く伸びる口頸部をもつ。口縁部外面に凹線紋を施したのち、抉りを入れている。もう一点は生駒西麓産のものであり、やや大型で、口縁部外面に凹線紋を施し、頸体部の境目に指頭圧痕紋凸帯を1条めぐらしている。

無頸壺形土器には、B・Cがあり、直口のAは出土していない。小型のものとやや大型のものがあり、いずれも体部上半を、櫛描直線紋、簾状紋、扇形紋等で飾っている。

水差形土器には、口縁部が水平で把手側に抉りをもつと思われるもので、口縁部外面に凹線紋を施すものがある。生駒西麓産のものは、形態・技法ともに差異がなく、口縁部外面に波状紋を施すものと無紋のものがある。

鉢形土器にはA、B、Cの3種があり、直口のAの出土量は少なく、B、Cが多い。B、Cには、小型のものと大型のものがあり、いずれも簾状紋を施すものが多い。生駒西麓産のものは、Aには深鉢形のものがあり、無紋のものと、波状紋、凹線紋、簾状紋等を施すものがある。Bには、体部が丸味をもち、口縁端部が肥厚せずにおわり、無紋のものがある。脚台部がつくものもある。B、Cともに、形態・技法にあまり差異がなく、簾状紋を多用している。その他の鉢形土器には、椀形の体部に、内彎気味の口縁部が屈曲し、内方へ突出するものがある。口縁部の相對

位置に2個1組の紐孔をもち、口縁部外面に凹線紋を施している。他地域からもたらされた土器であろう。

高杯形土器には、A・Bがあり、Aは少ない。Aには凹線紋を施すものと、段状口縁の退化したような粘土紐を1本めぐらす無紋のものもある。Bには口縁垂下部がやや拡張するものと、さほど拡張しないものがあり、いずれも無紋である。生駒西麓産のものは、Aには口縁部外面に列点紋を施したものと無紋のものがあり、Bには口縁水平部にヘラミガキによる斜格子紋を施すものもある。

蓋形土器には、壺用と甕用があり、壺用蓋形土器の方が多く出土している。壺用蓋形土器には、口径10~24cmのものがあり、いずれも周縁の相対位置に2個1組の紐孔を穿っている。甕用蓋形土器は口径14~16cmのものがあり、やや丈高のものである。生駒西麓産の土器はいずれも形態・技法ともに差異がない。

甕形土器には、小型のものと大型のものがあり、口頸部をくの字形に屈曲させ、口縁端部を上方に立ち上がらせるものが多い。口縁部端面に強いヨコナデもしくは凹線紋を施すものもある。体部内外面の調整は、刷毛目を施すものが主にある。生駒西麓産の土器には、口頸部の屈曲がややゆるやかで、口縁端部があまり肥厚しないものが主にある。体部内外面をヘラミガキ調整するものが多い。小型・大型いずれも煤の付着するものが多い。

以上のように、弥生時代中期遺構面Ⅱから出土した土器は、遺構面Ⅰから出土した土器と比較すると、遺構面Ⅰでは出土していない短頸壺形土器が出現し、装飾性をもつ土器に凹線紋を施すものがやや多くなる。また生駒西麓産の土器にも凹線紋を施すものが若干出てくる。なお甕形土器の口縁端部の立ち上がりやや拡張され、口縁部端面に凹線紋ないしは強いヨコナデを施すものがやや多くなる傾向を示している。

なお、第1・2号方形周溝墓間周溝の最上層の青灰色砂層より、建物の線刻画のある土器片が出土している(第28図125)。これは、生駒西麓産の土器で大型の壺形土器の体部破片と思われる。内外面ともに、表面が磨滅しており調整は不明である。この線刻画は、篋状のもので、柱が4本描かれており、1間×1間の高床式の倉庫と考えられる。左上方に、柱になると思われる線が残存しており、棟持柱か、あるいはもう一軒描かれていたものであろう。

建物の線刻画の類例は、佐原 真編集「No.125弥生土器」『日本の美術10』P.69に「建物を現わしたのも三例知られている。高床倉庫を現わすものは(奈良県唐古に)二つあり、その一つは、梯子をかけて二人が昇っている。もう一つの新例は、棟持柱をもち、棟端に房のような飾りをつけるなど、建築の細部まで表現している。岡山県(雄町)の実例は、倉庫ではなく、家を何軒か描いたものらしい。」と紹介されている。

()内は引用者

3) 石器類及び土製品

A地区の実質遺構残存部約 400㎡の弥生中期後半包含層等から62個の石器類が出土した。1㎡あたりの石器出土個数は、0.155個と非常に少ない。

石器類の内訳は、農具として石庖丁が9個、紡織具として石製紡錘車が2個、土製紡錘車が3個、土製円板が2個、漁撈具として土錘が1個、工具として扁平片刃石斧が1個、石錘が6個、叩き石が1個、砥石が1個、利器として不定形刃器が28個、武器として石鏃が2個、石槍が6個である。その他、サヌカイト剝片、細片類が115個出土した。以下、主要な石器について略述する。

石庖丁は、1個の完形品、6個の破損品、2個の未製品片に分かれる。材質は、すべて灰緑色～暗灰緑色の結晶片岩である。形態としては、背部が丸いものと直線状のものがある。刃部は、すべて片刃である。未製品の1は、全面を綺麗に磨き、紐穴穿孔途中に破損したため放棄したもの、他の1は、磨きをかける途中で破損したため放棄したと考えられるものである。瓜生堂における今回の未製品の出土によって、瓜生堂では、紀の川流域の結晶片岩が、おおよその石庖丁の形に打ち割られ、一部表裏面に磨きをかけられた状態で搬入されている事実が判明した。原産地で、完成品に仕上げられないのは、磨製という手間暇のかかる仕事を疎んだためと、石庖丁を使用する人の各人好みの形態、大きさ等を考慮したためであろう。

石製紡錘車は、安山岩製のものと結晶片岩製の2個で、前者は未穿孔、後者は半欠品である。

土製紡錘車は、瓜生堂の土で作った完形品と瓜生堂で作った土器片を利用した完形品、穿孔途中の未製品がある。紡錘車の未製品と思われる土器片を再加工した円板は2個あり、やや大型の1は他地域からの搬入土器片再加工のもので、他の1は、瓜生堂の土器片を再加工しようとするもので、共に打ち欠いただけの形態のものである。

扁平片刃石斧は、北摂産の粘板岩製石庖丁片を再加工したもので、節理に直角に刃をつけている。瓜生堂においては、この大きさの扁平片刃石斧は、石庖丁や石剣等の転用によるものがほとんどで、転用という事実に注目するならば転用品で充分間に合ったのであろうし、石材に注目するならば、それは瓜生堂の石庖丁の70～80%を占める結晶片岩が使用されるのではなく、粘板岩が使用されるのである。材質や硬度の点で、それだけ粘板岩の方が結晶片岩よりは、石斧としての機能に適していたのであろうし、確かに、肉眼で見ても、粘板岩は艶々と硬く弾性があり節理に添って長い結晶構造を持っている。反して、結晶片岩の方は、粗悪質なものが多く、軟かく、もろく、長い結晶構造を持たない。この点では、石庖丁としても、粘板岩の方がより有用かつ長持ちしたのであろう。にもかかわらず、粘板岩製の石庖丁が瓜生堂において主流を占めないことは、石庖丁原石材の採掘から加工に至るまでの生産部門、交換等の交易部門、生産地から使用地までの距離的關係等、様々の要因が働いた結果に相違ない。

石錘は、剝片の一部を錐状に作り出したものと、製品としての錐とに分かれる。両者とも、先

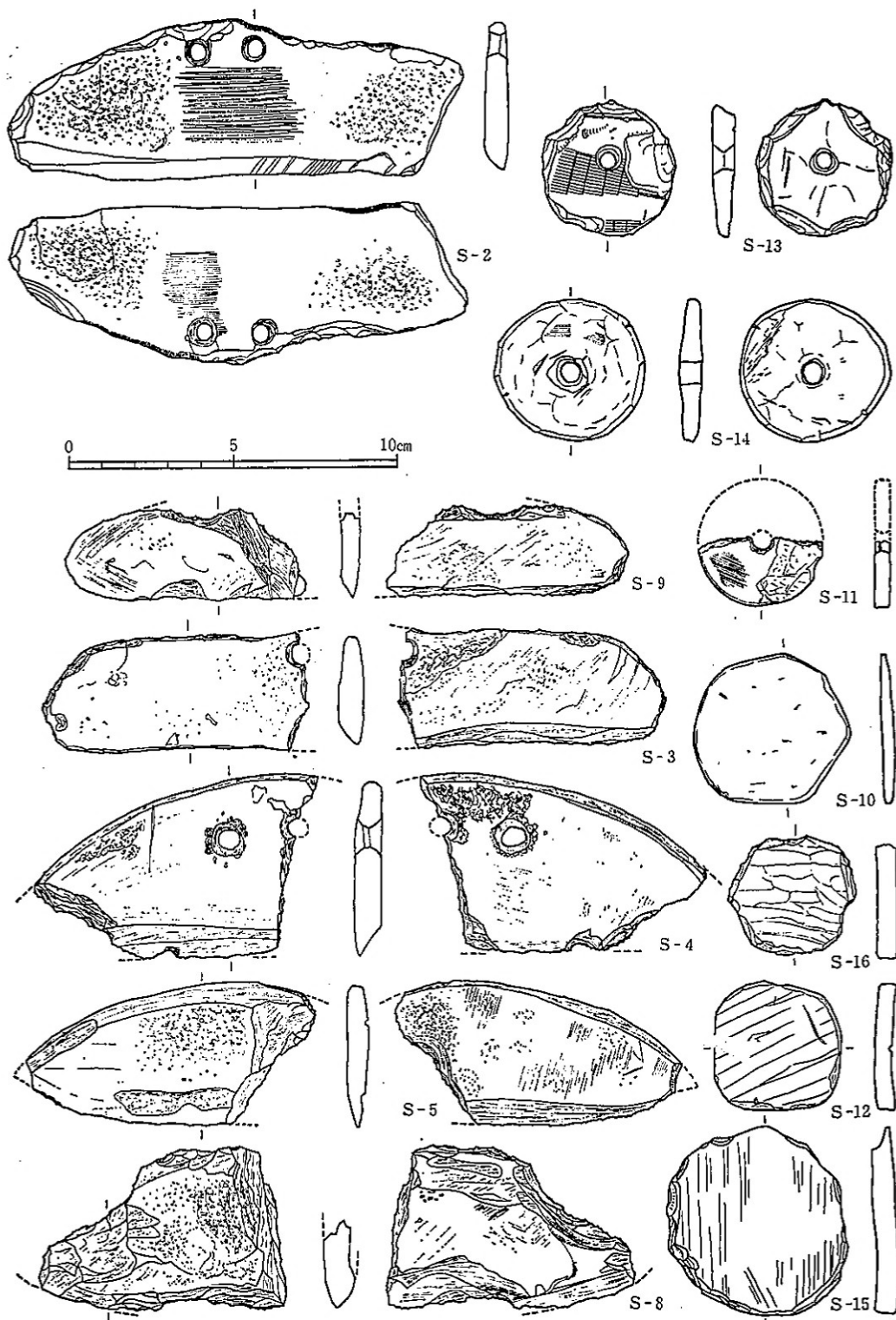
端部に回転線条痕のついたものがある。石庖丁の紐穴穿孔等に供されたのだろう。

叩き石は、硬質砂岩製で先端のみの破片と、サヌカイト片を加工した完形品2個の計3個ある。これらは、サヌカイト等の打製石器製作時に供されたものだろう。事実、サヌカイト製石器製作の際生じるサヌカイト剥片、細片類が調査区域から満遍なく出土するのは、近辺でそのような作業が行なわれた結果と推定できよう。その量は、115個、2,034gに達する。1個あたりの平均は17.7gである。ちなみに、A地区出土サヌカイト製石器は、42個、1,685.5gで、1個あたりの平均重量は、40.1gとチップ類に比べると、さすがに重い。また、A地区出土サヌカイト総重量を計算してみると、石器類とチップ類は、45%対55%となり、石器の量に比べ、チップ類の少ない事実が注目される。

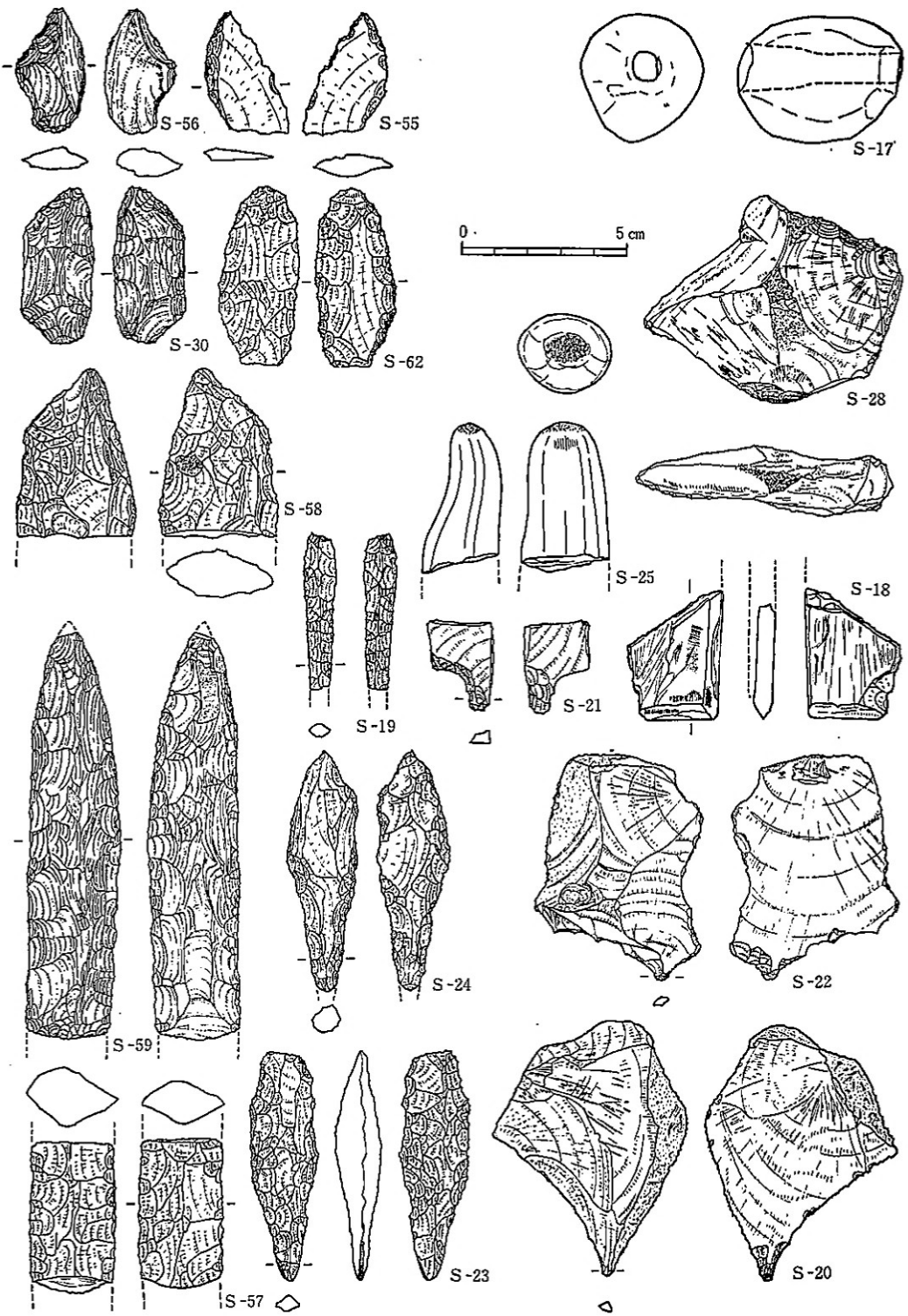
不定形刃器は、すべてサヌカイト製で、石器として作られたもの、剥片の一部を加工したものに分かれる。刃部は、直線、曲線、波状をなすもの等に分かれ、それぞれに使用痕を留める。出土個数は28個と石器中最も多く、このようなスクレイパー類が当時の人々にとって、かなり重要な道具であったことを推定させる。

石鏃は、共に未製品かと思われる不定形の2個のみである。

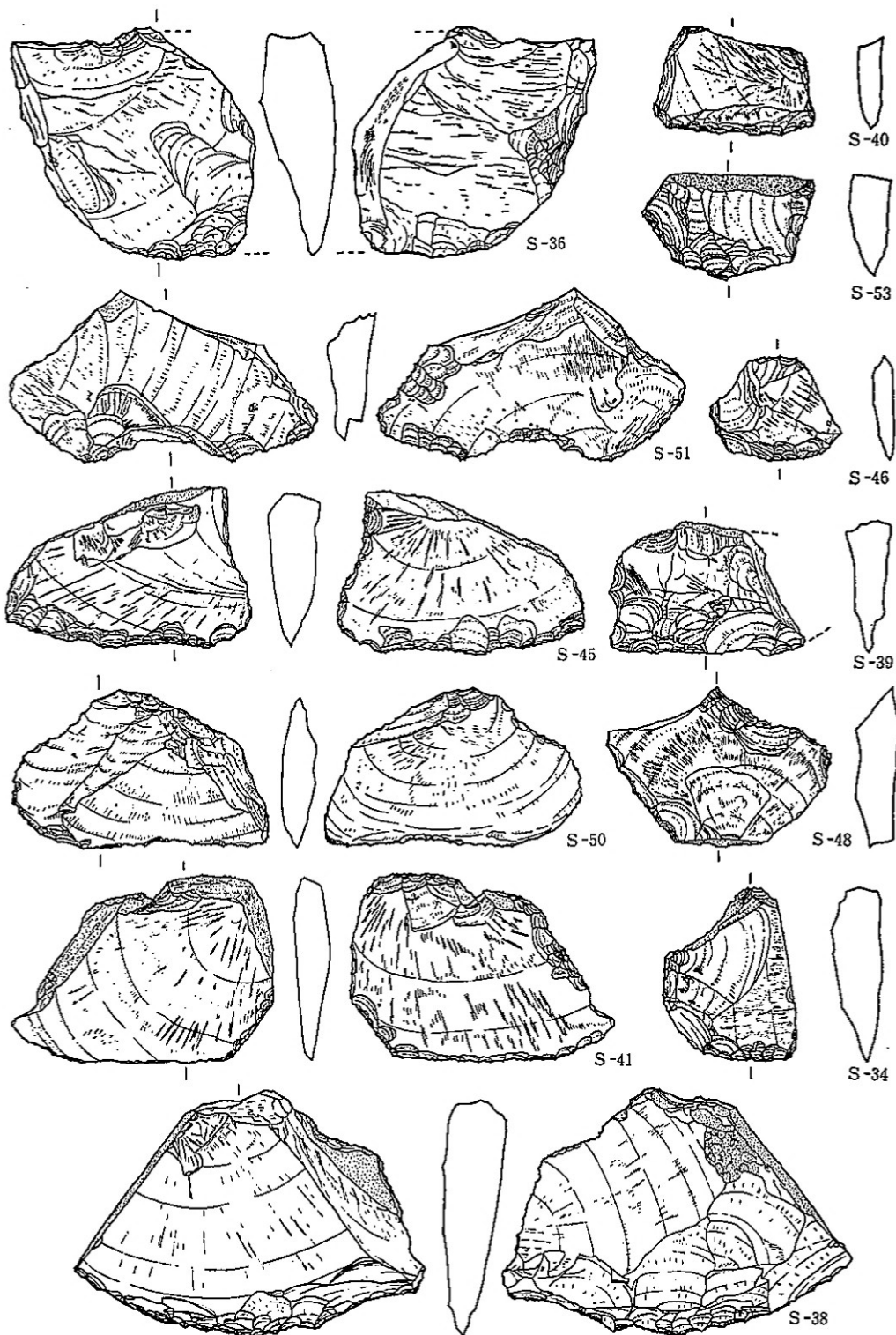
石槍は、小型の完形品2個と未製品2個、中型のほとんど完形品1個と破片2個である。瓜生堂においては、総じて、中、小型の細長いタイプのものが多く、藤井寺市国府、八尾市恩智等の同時期の遺跡から出土するような幅5~6cm、長さ25~30cmに達するような大型品はない。これは、やはりサヌカイト原産地及び加工遺跡との関係によるものであろう。確かに、二上山の北麓に分布するサヌカイト原産地上の遺跡では、大型から小型まで、石槍を一貫して作り続けた加工場も発見されているが、国府や恩智、または富田林市の喜志等のサヌカイト製石器製作遺跡群と、瓜生堂のような、製品としての石器を交換等の手段で入手するような遺跡群とは区別して考えねばならない。前者は、地の利を得、大型品を自在に作り続け、後者は前者の介在を得て、石器及び石材を入手せねばならなかった訳だ。実際、サヌカイト原石が加工によっては、武器にもなり、利器、工具にもなる訳であるから、需要供給の関係は、常に一方向の流れのみであった。しかも、その関係は、サヌカイト製石器が、石器の内に重要な役割を占めるだけに、断じて断ち切ることは不可能な関係にあった。武器としての石槍や石鏃が河内南部において発達し、大きく鋭いものが使われ、他の地域に、中・小型品が多いのは、両者が如上のように、メーカーと消費者の関係にあったからと解釈できよう。



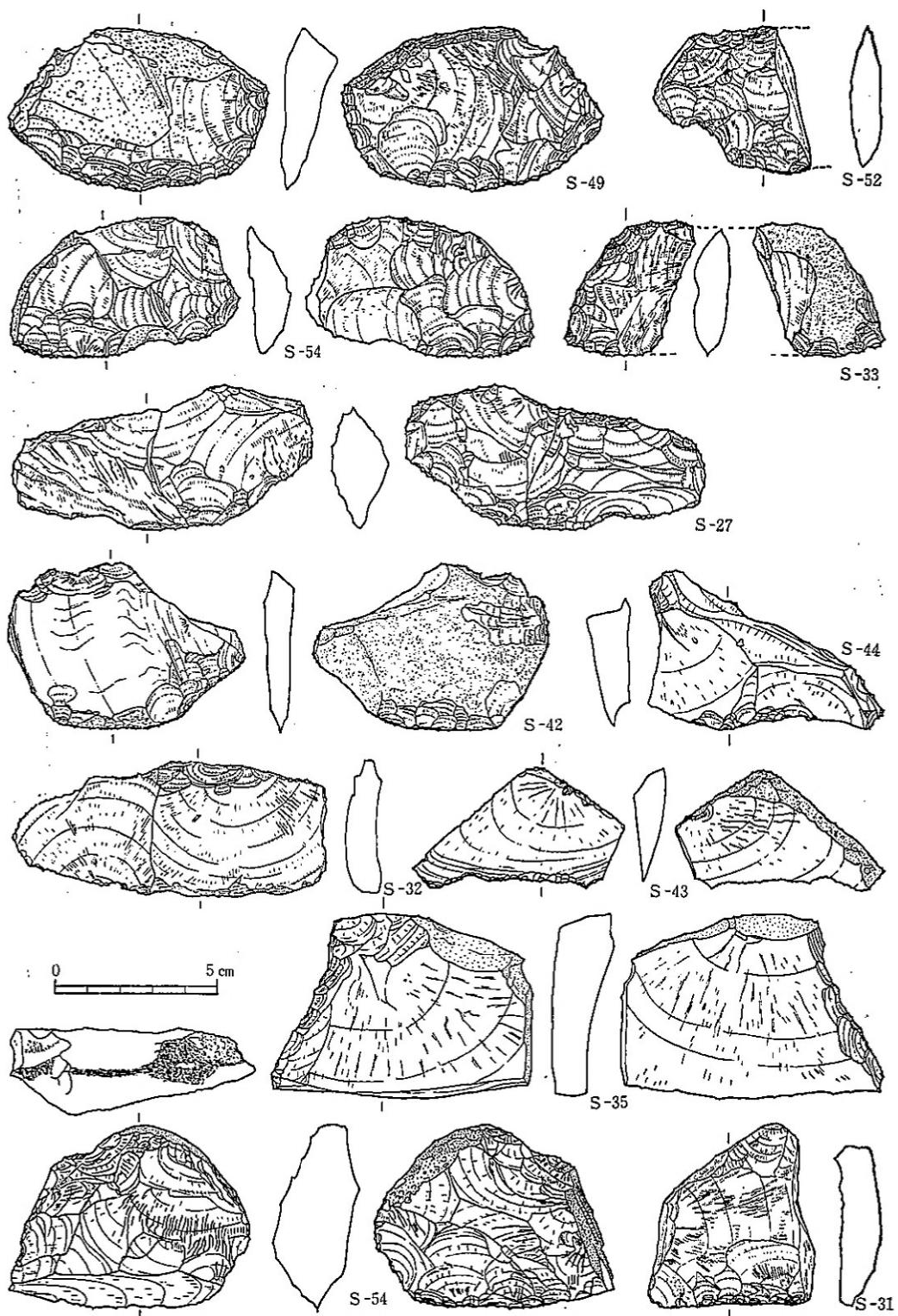
第45图 A地区出土石器(1)、土製品



第46图 A地区出土石器(2)、土製品



第47图 A地区出土石器(3)



第48图 A地区出土石器(4)

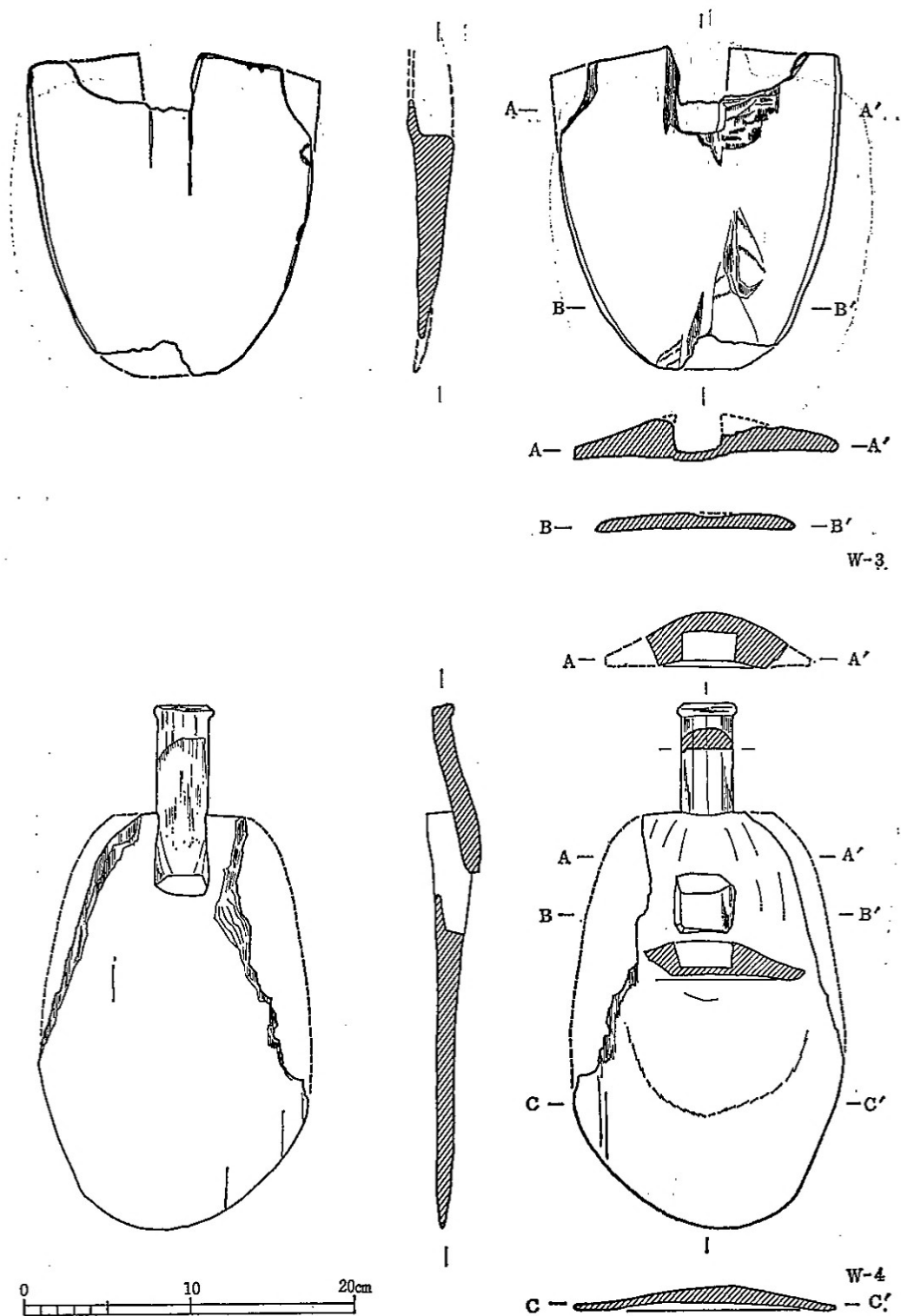
第1表 A地区出土石器類及び土製品一覧表(1)

番号	種類	材質	大 き さ (cm)			重さ(g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
1	石 庖 丁	結 晶 片 岩	4.9	3.7	0.8	21.0	2号墓盛土
2	"	"	13.8	4.7	0.7	74.0	弥生中期攪乱坑
3	"	"	3.7	8.2	0.8	38.0	弥生後期Ⅱ河川7
4	"	"	5.5	8.7	0.8	51.5	1号墓北周溝
5	"	"	4.4	8.8	0.7	29.4	弥生中期上部包含層、未製品片
6	"	"	3.3	3.7	0.8	10.7	4号墓盛土
7	"	"	2.4	4.0	0.4	3.4	弥生後期Ⅱ河川7
8	"	"	5.0	7.6	0.9	55.2	1号墓盛土、未製品
9	"	"	2.7	7.1	0.6	18.2	2-3号墓間周溝
10	石製紡錘車	安 山 岩	4.8	4.5	0.5	12.4	4号墓北西裾、周縁磨き
11	"	結 晶 片 岩	3.8	2.1	0.4	5.3	4号墓西裾、半欠
12	土製紡錘車	土 器 片	4.0	3.9	0.7	14.2	弥生中期下部包含層、穿孔途中
13	"	"	4.1	4.1	0.7	11.9	弥生後期Ⅱ河川7、完形
14	"	"	4.3	4.5	0.7	15.3	4号墓盛土 "
15	土製円板	土 器 片	5.8	5.5	0.7	24.8	弥生中期下部包含層、周縁打ち欠き
16	"	"	3.6	3.8	0.6	11.9	1-4号墓間周溝、周縁打ち欠き
17	土 錘	"	3.8	5.0	3.8	60.8	弥生後期Ⅱ河川7
18	扁平片刃石斧	粘 板 岩	3.9	2.9	0.7	10.3	"
19	石 錐	サヌカイト	4.6	0.9	0.5	2.5	4号墓盛土
20	"	"	7.7	5.8	2.2	65.9	弥生中期上部包含層
21	"	"	2.7	2.0	0.6	3.3	弥生中期下部包含層
22	"	"	6.8	5.0	0.9	32.4	1号墓盛土、回転線条痕
23	"	"	6.9	2.1	1.4	15.5	4号墓盛土
24	"	"	7.3	2.2	0.8	16.7	弥生中期Ⅰ土壌3
25	叩 き 石	硬 質 砂 岩	4.5	2.7	2.3	33.0	弥生中期下部包含層
26	砥 石	花崗岩質砂岩	9.3	9.6	4.3	480.5	弥生中期Ⅰ土壌3
27	不定形刃器	サヌカイト	4.4	9.1	1.7	51.9	4号墓盛土
28	"	"	6.2	7.8	1.9	77.9	"
29	"	"	6.2	8.1	1.4	90.8	"
30	"	"	4.7	2.2	0.8	10.9	弥生中期Ⅰ溝7
31	"	"	5.6	5.2	1.2	47.2	4号墓主体部
32	"	"	9.6	4.2	1.5	60.2	"

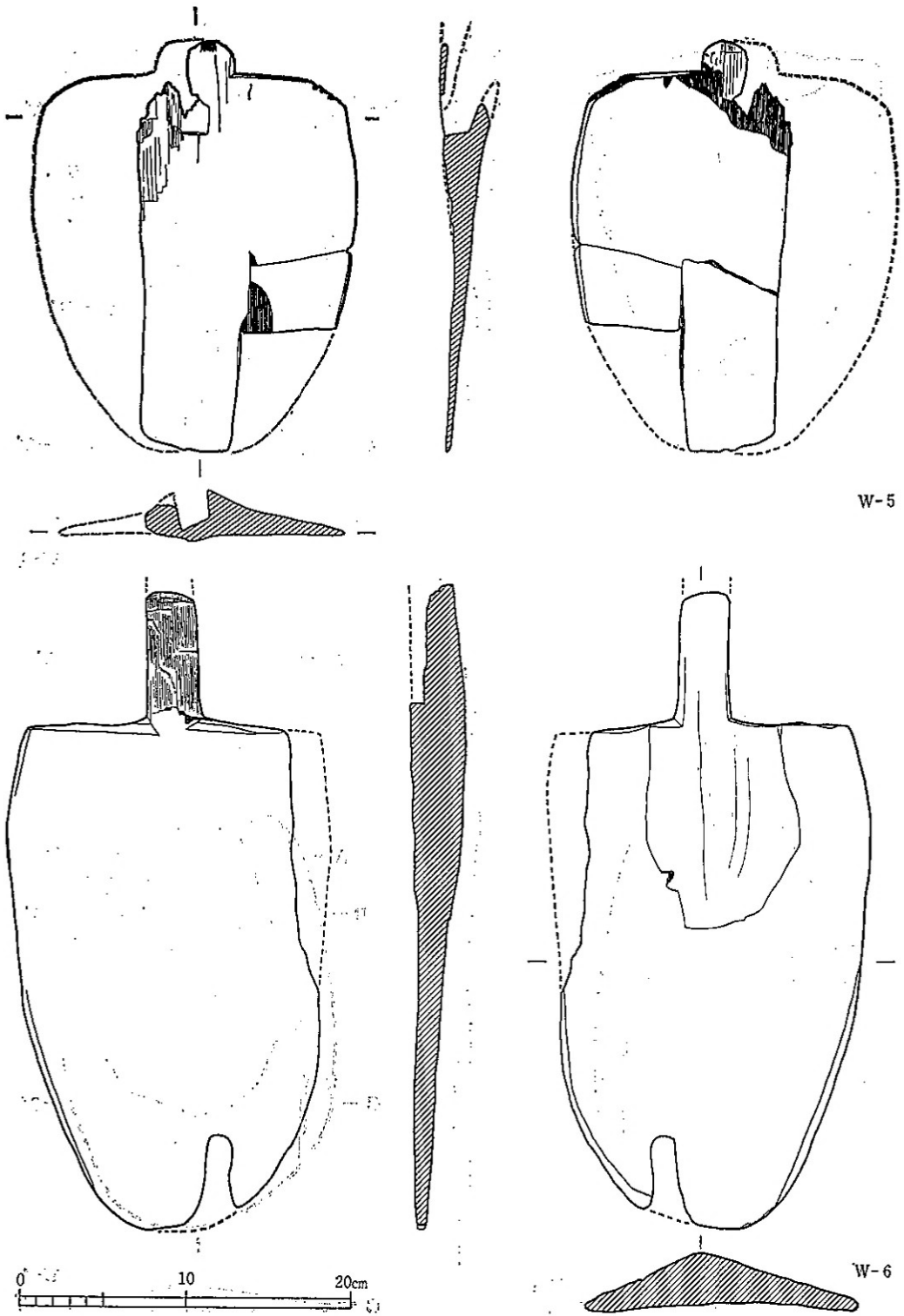
第1表 A地区出土石器類及び土製品一覧表(2)

番号	種 類	材 質	大 き さ (cm)			重さ(g)	出 土 場 所 ・ 備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
33	不定形刃器	サヌカイト	4.1	4.0	1.1	16.1	4号墓盛土
34	"	"	5.2	4.0	1.6	28.4	"
35	"	"	5.6	7.9	1.4	93.7	1-4号墓間周溝
36	"	"	6.9	7.3	2.3	110.0	"
37	"	"	5.6	7.4	2.6	110.0	弥生中期上部包含層
38	"	"	7.3	10.5	1.8	135.0	弥生中期I溝3
39	"	"	3.9	5.9	1.3	33.2	1号墓北周溝
40	"	"	3.2	4.8	0.8	16.2	2-4号墓間周溝
41	"	"	5.6	7.8	1.2	61.5	弥生後期II河川7
42	"	"	5.1	7.2	0.9	44.7	1-4号墓間周溝
43	"	"	3.7	6.4	0.9	12.9	弥生中期I土城4
44	"	"	4.8	7.2	1.4	31.7	弥生後期II河川7
45	"	"	4.8	7.4	1.5	44.5	4号墓盛土
46	"	"	4.0	3.2	0.7	7.5	3号墓東裾
47	"	"	4.4	7.0	1.0	17.2	弥生中期下部包含層
48	"	"	4.9	6.7	1.4	37.5	2-4号墓間周溝
49	"	"	4.9	7.7	2.0	60.0	1-2号墓間周溝
50	"	"	4.8	7.6	1.2	39.2	"
51	"	"	5.7	3.9	1.5	54.2	弥生中期上部包含層
52	"	"	4.6	4.6	1.4	22.8	表採
53	"	"	3.3	5.2	1.5	25.4	2-4号墓間周溝
54	"	"	4.2	7.0	1.5	42.2	4号墓西裾
55	石 鏃	"	3.6	2.5	0.3	2.2	2-3号墓間周溝、未製品か?
56	"	"	3.8	2.1	0.6	3.6	2-4号墓間周溝、 "
57	石 槍	"	4.5	2.6	1.3	17.7	4号墓盛土
58	"	"	5.1	3.6	1.4	23.9	"
59	"	"	12.3	2.8	1.8	71.0	1-4号墓間周溝
60	"	"	4.9	3.8	0.8	14.7	弥生中期下部包含層、未製品か?
61	"	"	5.8	3.5	1.2	24.7	1-4号墓間周溝、 "
62	"	"	5.4	2.4	0.7	8.6	"

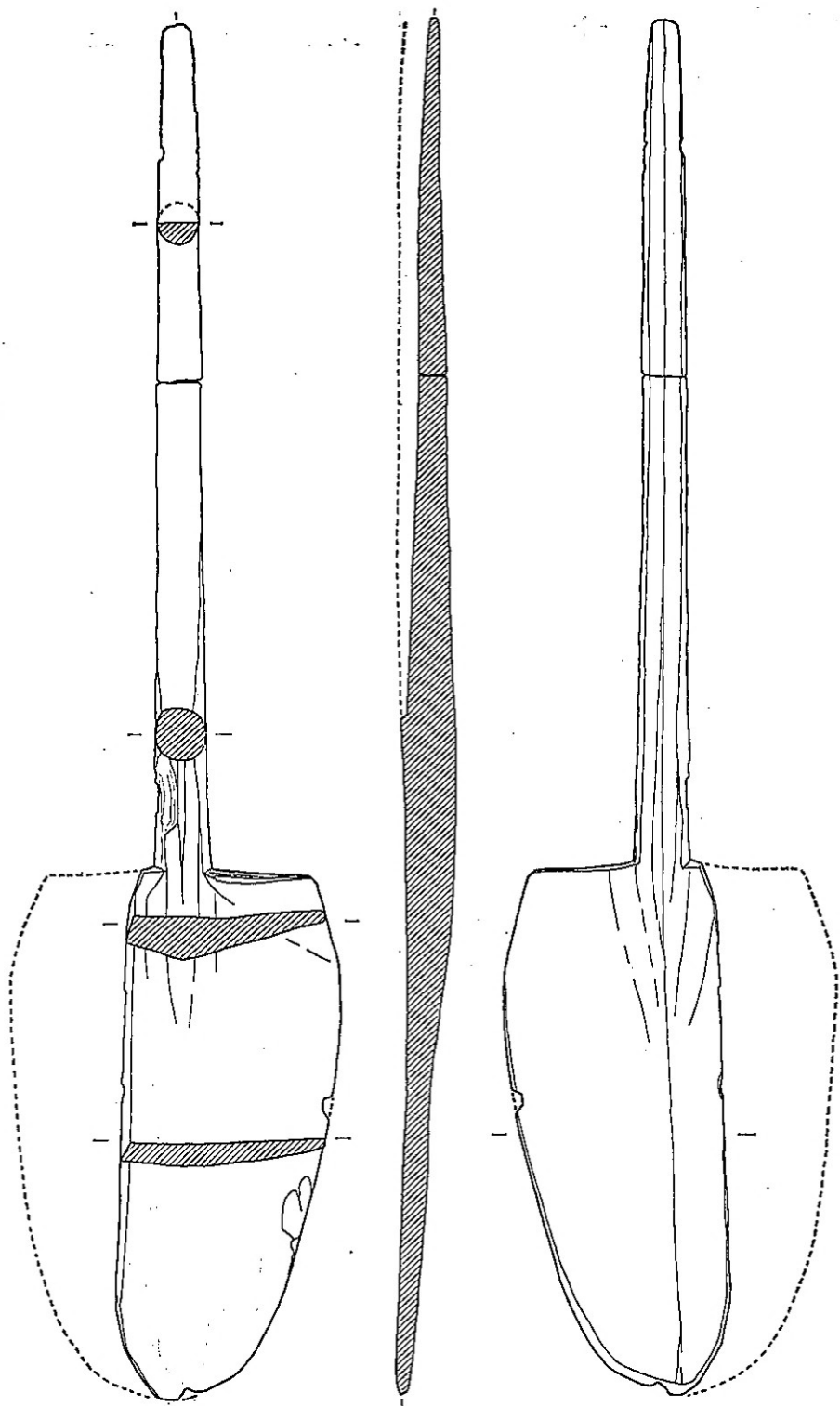
他に、サヌカイト剥片・細片が 115個 2,034g出土した。



第49图 第1号方形周溝墓北周溝 (W-3) 及び第1-2号方形周溝墓間周溝最上層 (W-4) 出土木器 (坑)

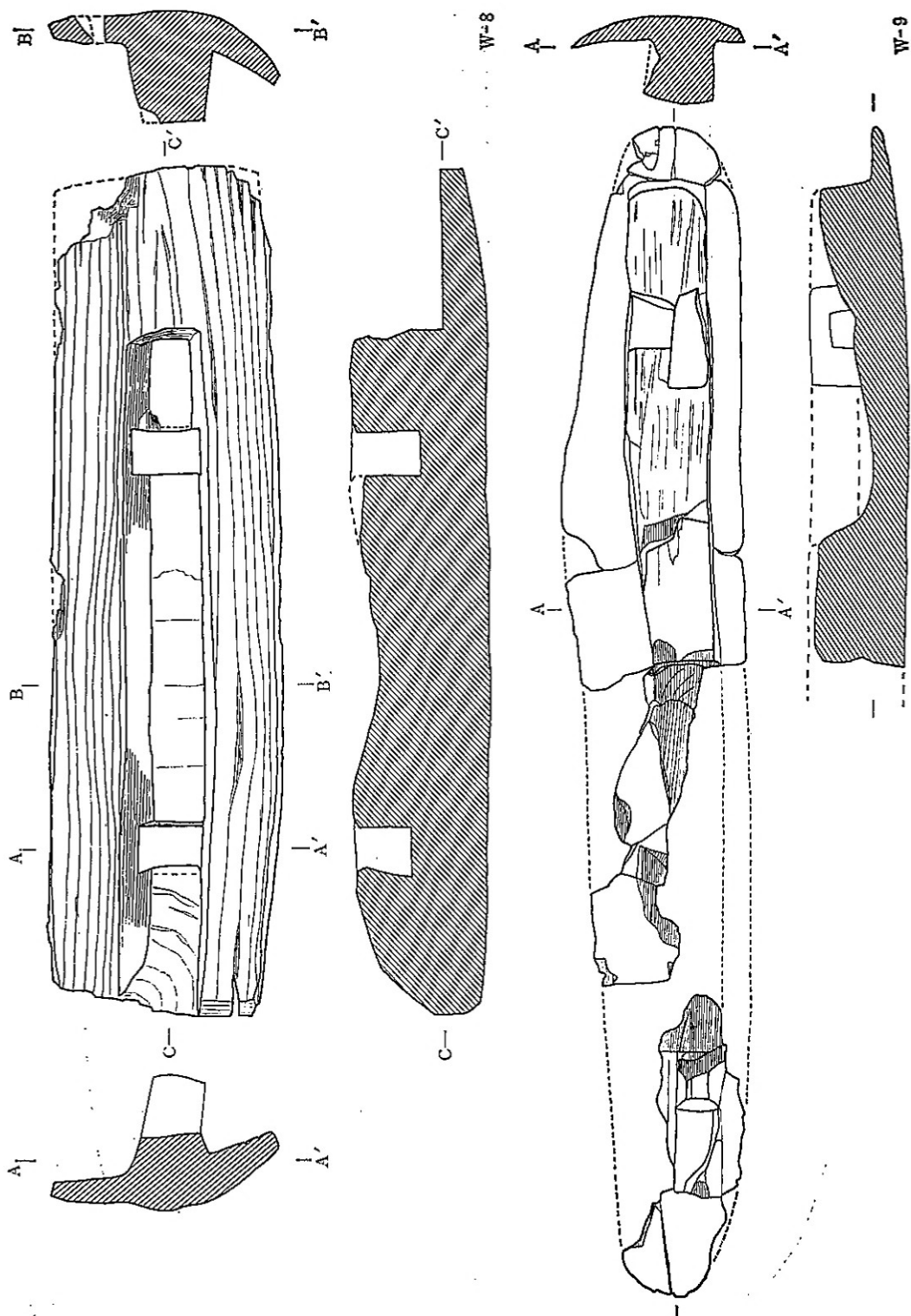


第50图 第1—2号方形周溝墓間周溝最上層出土木器 (1/4)

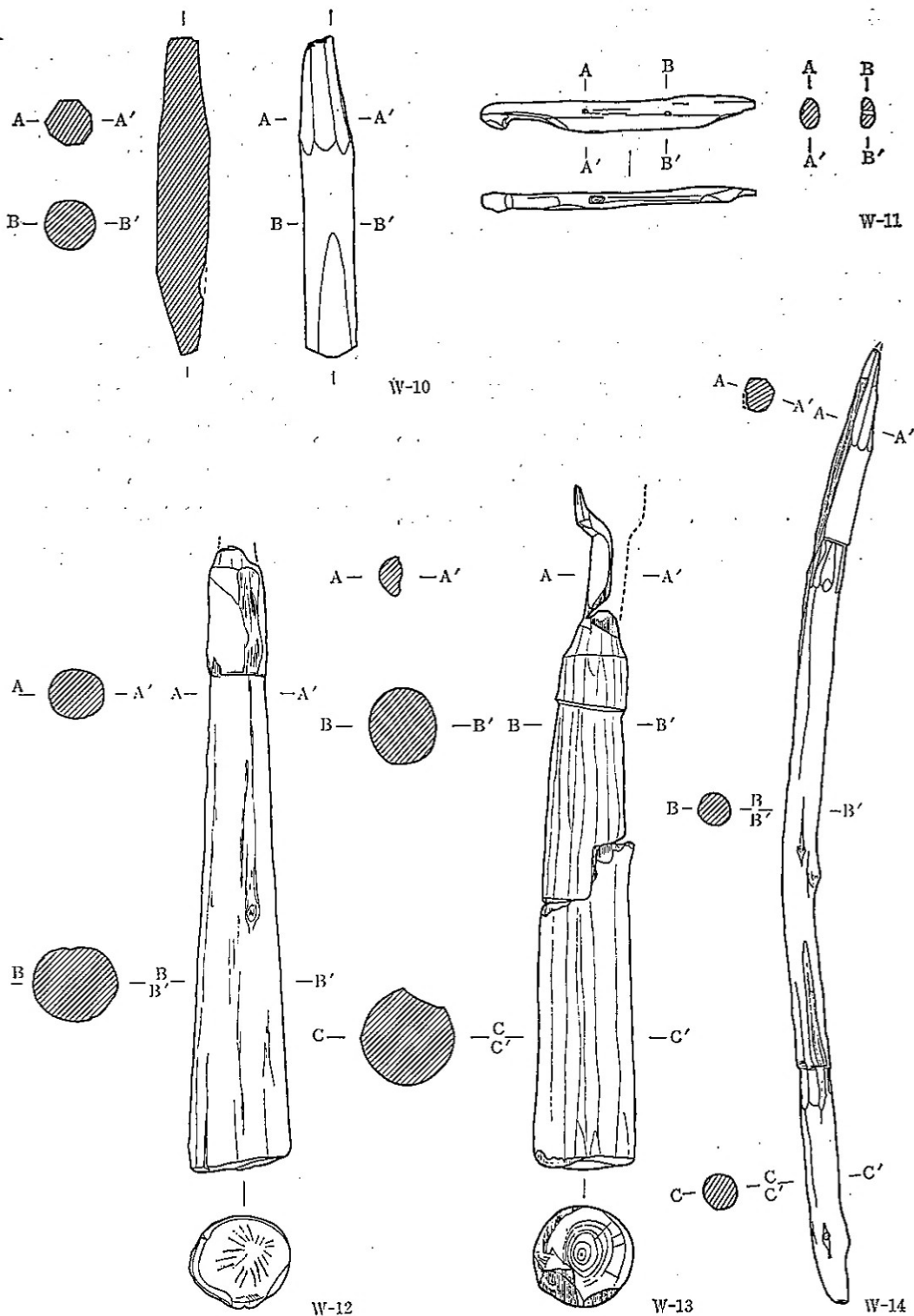


W-7

第51图 第1—2号方形周溝墓間周溝最上層出土木器(幺)



第52图 土壤263 (W-8)、第3号方形周溝墓西周溝 (W-9) 出土木器 (1/6)



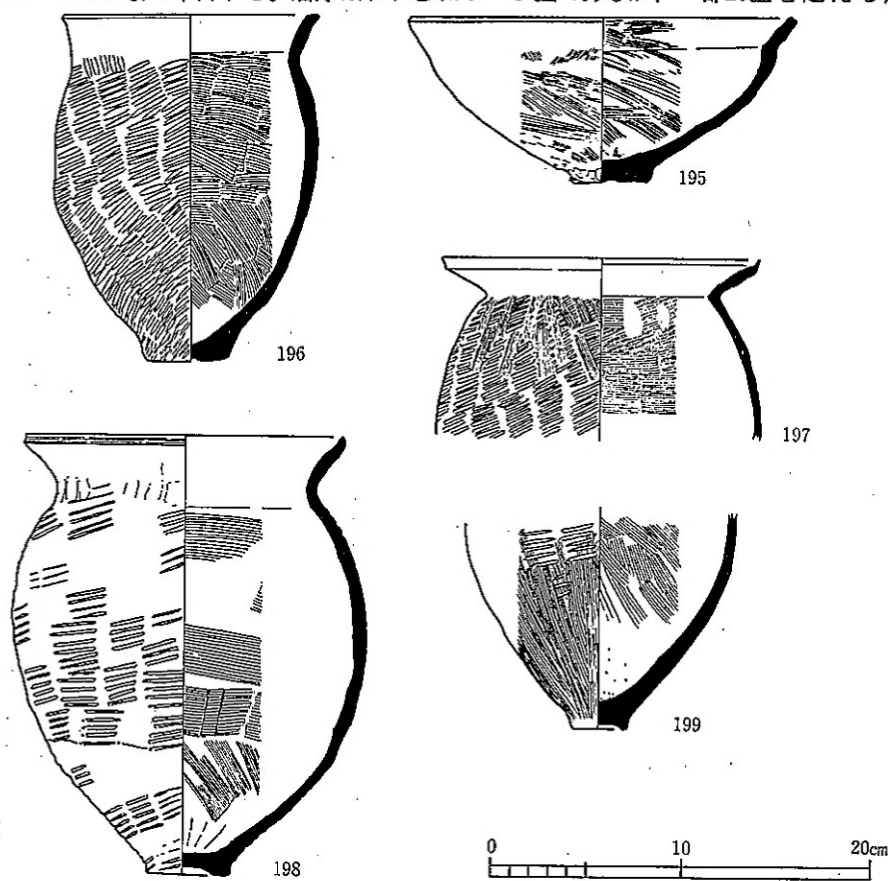
第53図 第1-2号方形周溝基間周溝 (W-10)・下部包含層 (W-11) (以上 $\frac{1}{4}$)、下部包含層 (W-12)・土壇3 (W-13)・河川7 (W-14) (以上 $\frac{1}{2}$) 出土木器

4 弥生時代後期の遺構と遺物

これまで瓜生堂遺跡周辺では弥生時代後期に急激な砂の堆積があり、生活面を一気に1~2mほど上昇させると言われてきたが、今回のA地区の調査でも同様の知見が得られた。しかしその始まりは従来考えられていたような中期末から後期への移行期に起こるのではなく、後期後半にずれこむようである。このことは中期遺構面Ⅱの上面を覆う中期上部包含層の10cmほど上に後期遺構面Ⅰが存在することから明らかになった。その後の砂の堆積する時期はまとめて遺構面Ⅱとし、以下個別に記述する。

1) 遺構面Ⅰ

A地区においてはこの時期に属する遺構は存在しないが、包含層は薄く広がっている。この包含層は中期上部包含層との間に5~10cmほどの暗灰色粘土を挟むが、それと性質のよく似たやや泥炭質の黒色粘土である。このことからこの地域では、この間、砂の堆積がなく、中期末から引き続き湿地帯の状態に留まっていたものと思われる。この包含層下面でのレベルは、3LR22付近ではT.P. - 0.2m、そこから徐々に下降していき、若干の凹凸を見ながらも3LS10付近ではT.P. - 0.7mまで下降する。層厚はおおむね3~5cmであるが、一部10cmを越える所もあ



第54図 弥生時代後期遺構面Ⅰ包含層出土土器

る。また3LR~T16~17付近は、下の中期上部包含層のレベルが上昇しており、この高くなった部分では後期包含層は検出されなかった。この包含層中ではA地区南端部で第54図に示す甕4個体と、鉢1個体が散在的に検出されたが、それらは潰れてはいても、ほとんど原形に復せる様な一括状態で出土している。

鉢形土器（第54図195）。口頸部は短く外反し、体部がやや浅い椀形の鉢形土器である。底部はやや突出し、中央部をわずかに凹ます。内外面ともに縦方向の刷毛目調整を施している。

甕形土器（第54図196~199）。完形品が2個体、口縁部から体部上半にかけてのものが1個体、体部下半から底部を残存しているものが1個体の計4個体出土している。第54図196は口頸部が斜外方へわずかに開き、体部の張りが少ない。第54図198は口頸部を短く外反させ、口縁端部が立ち上がり、面をもつ、体部はやや張る。いずれも体部外面は叩目、内面は刷毛目調整を施している。第54図197は、頸部内面に明瞭な稜がある。体部外面は叩目後刷毛目、内面は刷毛目調整を施している。第54図199は、生駒西麓産の土器である。裾すばまりの体部に、底部がやや突出し、中央部をわずかに凹ませている。体部の調整は、外面叩目後細かい刷毛目、内面は刷毛目を施している。底部内面に爪痕がある。4点とも外面に煤が付着している。この包含層ではこの一括土器以外には、ほとんど遺物は検出されなかった。

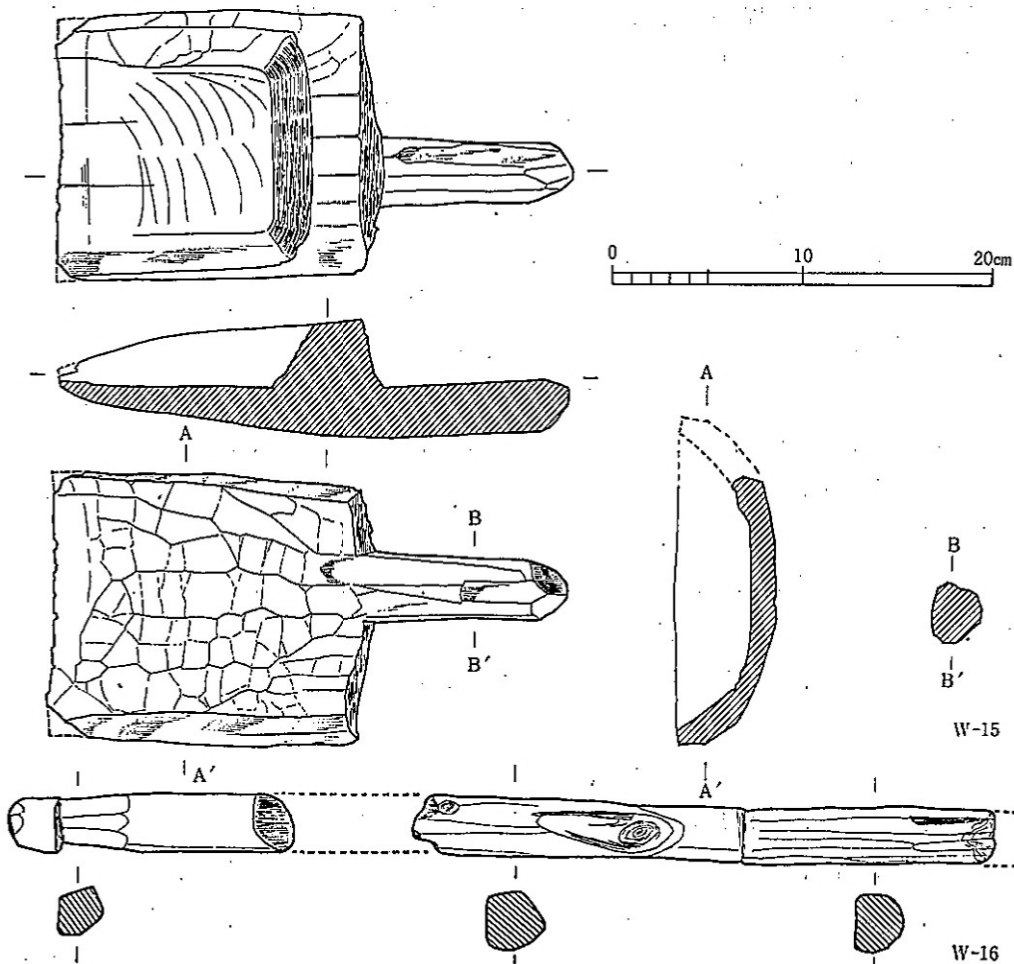
2) 遺構面Ⅱ

遺構面Ⅰを覆う包含層が形成された後、この地域には幾条かの河川によって膨大な量の砂が運びこまれ、地盤をT.P.+1.0m前後にまでかさ上げしてしまう。A地区においてもこの時期に属する2本の河川と、2本の自然流路が検出されている。これらの砂は青灰色、及び灰白色を呈しており、間に暗灰色粘土を挟んで5~30cmほどの互層を発達させており、しかもその間に足跡の検出される面のあることから、一気に堆積したのではなさそうである。遺物は互層中には少なく、土器では細片が少量出土したのみであるが、3LR18の砂層最下部において第55図に示す木器が出土している。この時期の遺物としては河川中より出土したものが多い。

A 河川

<河川6> 3LP19から3LS18にかけて検出された西南西—東北東に流れる河川である。上部を機械掘削時に削平してしまったため、本来の規模は不明であるが、それを検出した後期包含層上面での規模は幅約2.1m、深さ0.8mであり、底のレベルはT.P.-1.0mほどである。遺物は最下層で中期の土器片が出土しているが、これは底部、肩部でそれぞれ中期の2枚の包含層を切っているための混入と思われる。

<河川7> 3LQ22から3LO19にかけて検出された南東—北西に流れる河川である。北岸肩部を中世の削平によって失っているため、正確な規模は不明であるが、右岸肩部のレベルはT.P.+0.5m、幅はおよそ10m、底は3LP22付近でT.P.-1.3m、3LO18付近でT.P.-1.0mほどである。この河川は肩部に灰褐色の細砂やシルトを堆積させていくが、最終的には灰褐色



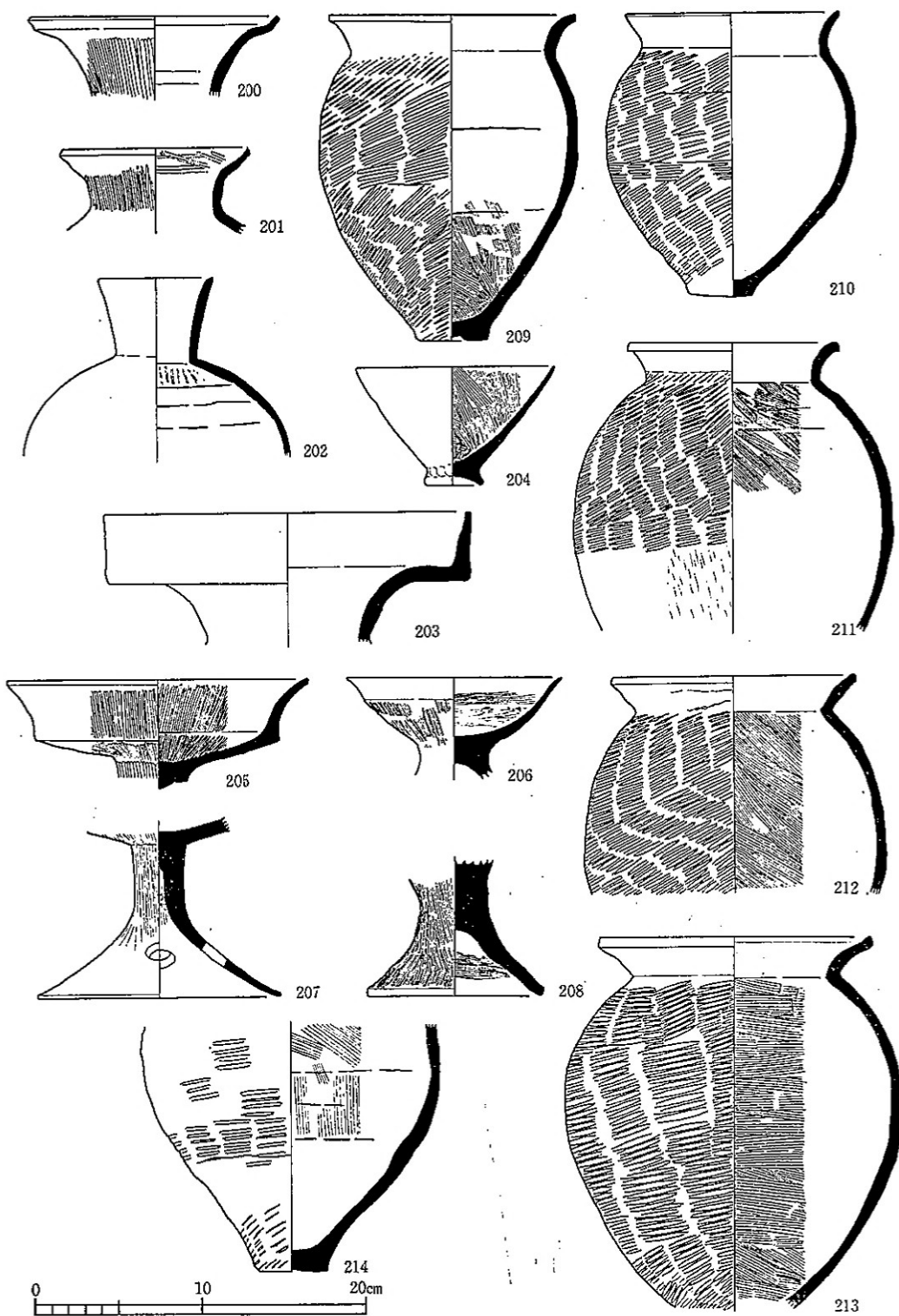
第55図 弥生時代後期遺構面Ⅱ出土木器

砂礫によって完全に埋没してしまう。この河川は河川6を切っているため、こちらの方が新しい。遺物はこの砂礫中より多く出土している。土器は第56図、木器は第53図（W-14）に示すものが出土している。

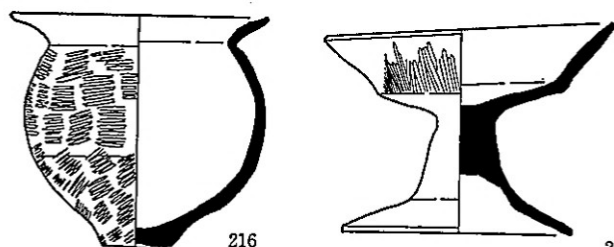
B 自然流路

<自然流路1> 3LP15から3LO15にかけて検出された東一西に延びる自然流路である。青灰色微砂層の上面を切り込んで流れていたもので、肩部のレベルはT.P.+0.6m、幅0.5m、深さ0.15mほどである。黄灰色細砂が埋没しており、遺物は出土しなかった。

<自然流路2> 3LT22より3LT20にかけて検出された南一北に延びる自然流路である。青灰色微砂層の上面に流れていたもので、肩部のレベルはT.P.+0.9m、幅1.0m、深さ0.4mほどである。青灰色細砂、及び灰白色粗砂が埋没しており、遺物は出土しなかった。この流路より1m西の、青灰色微砂層上部で、第57図に示す完形の甕と高杯が出土している。これらの土器は



第56图 河川7出土土器



第57図 青灰色微砂層出土土器

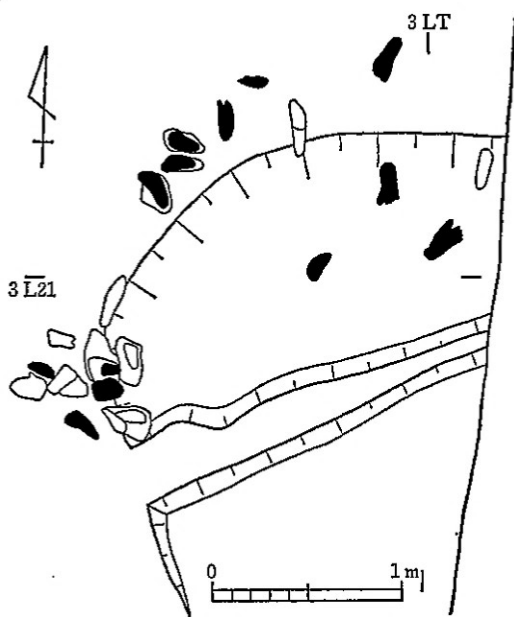
A地区で検出された後期の土器中、最も高いレベルで出土したもので、器形も新しい様相を持っている。

C 足跡、及び畦畔状遺構

後期の足跡は3面で検出されている。3LO15の後期包含層上面で検出された3A-1足跡面では左右の判別できるものが8個、3LT21のT.P.+0.2m前後の暗灰色粘土上面で検出された6A-2足跡面では同じく6個、3LT21のT.P.+0.75m前後の暗灰色シルト上面で検出された6A-1足跡面では11個が左右の判別されるものであった。特に6A-1足跡面は畦畔状の遺構を伴っており、指の痕跡の残ったものが多かった。この第58図に示す畦畔状遺構1は6Aトレンチ東南隅において、灰白色細砂の入った砂溜りを除去すると、東西に約1.5mの長さで検出されたもので、東側はトレンチ外に延びている。規模は西側取付部で下端幅0.5m、上端幅0.3m、高さ0.05m、トレンチ東端部では下端幅0.3m、上端幅0.1m、高さ0.05mである。灰褐色微砂のブロックを含む暗灰色シルトが盛られていたが、これが水田遺構かどうかについては検出面積が狭いため断定することはできなかった。

D 小結

弥生時代後期遺構面Ⅱは、厚い砂と粘土の互層中にあるため、他地区との層の対比は困難である。



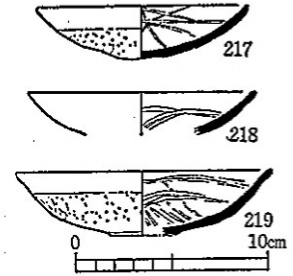
第58図 6A-1足跡及び畦畔状遺構1実測図
(黒は左右の判別された足跡)

A地区内においても、検出された各遺構間の先後関係を層位的につかむことは、正確にはできなかった。当初、この堆積層は無遺構、無遺物と考えられていた。A地区においても3、5、6Aトレンチ以外は機械で掘削したため、遺構の有無の確認はできなかった。瓜生堂遺跡周辺における中期末以来の自然環境の悪化は、この砂の堆積によって極相を迎えたことになるが、このような中でも人為の痕跡を留めているということは、この劣悪な環境の中で生活していた人々がいたことを証明している。中期の一時期、殷賑をきわめたであろう瓜生堂の集落が、このような環境の激変にどう対処し、どう変容していったかについては、これからの検討課題であろう。

5 鎌倉、室町時代の遺構と遺物

A地区においてはT.P. +0.9~1.0m以上に存在したと思われる古墳時代以降の堆積層は、近年の削平を受けて残っていない。今回検出されたこの時期の遺構は、井戸、杭列を伴う溝及び沼沢が各1ヶ所であるが、いずれも肩部を削平されているものの、弥生時代後期の砂層中にその下部を残していたものである。また遺構としてはとらえられなかったが、5 Aトレンチ南半部で井戸の底部と思われる不整形な落込中より第59図(218、219)に示す瓦器が出土している。

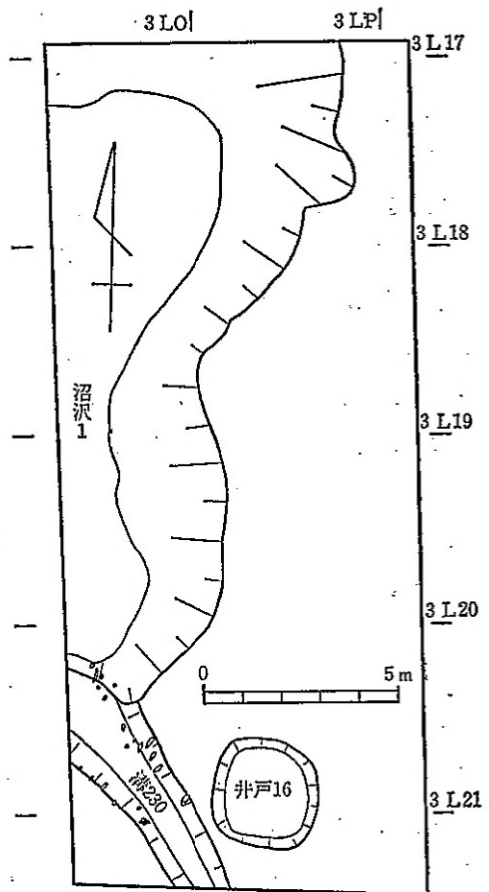
<井戸15> 3 L S21~22で検出された素掘の井戸で、ほぼ中央を6 Aトレンチ南端壁によって切られており、今回は北半部のみが調査された。径はおよそ2mで、底は弥生時代中期上部包含層にまで達しており、そのレベルはT.P. ± 0 mである。暗灰色粘土が埋没しており、その中から第59図217に示す瓦器が出土している。



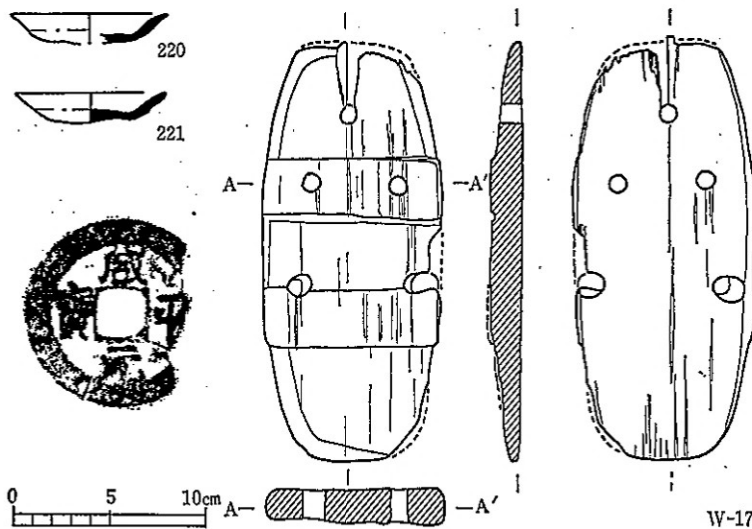
第59図 井戸15(217)及び落込(218、219)出土土器

<溝230> 3 L O21~22にかけて検出された南東より北西に延びる溝で、溝そのものは痕跡を留めているだけであるが、溝の両肩に打設されたものと思われる2条の平行した杭列が残っていた。溝底のレベルはT.P. +0.8mであり、杭列の幅は約2mである。杭は木、及び竹を使って打ち込まれており、木の先端は鋭利に削り出されている。杭相互の間隔は0.3~0.6mほどのものが多いが、1m以上開いている所もある。杭の頭はT.P. + 1.4m前後で検出されるが、本来はもう少し高かったものと思われる。杭の先端はT.P. ± 0 mにまで達するものもあるが、多くはT.P. + 0.4m前後で止まっている。遺物は鎌倉時代のものと思われる瓦器片が出土している。

<沼沢1> 3 L O~P18~21にかけて、その東側肩部が検出された。主要部分はトレンチ外に拡がっているものと思われる、規模は不明であるが、南北長は少なくとも20mを越える。底部のレベルはT.P. - 0.4mで、弥生時代中期上部包含層にまで達している。この沼沢は杭列1を切っているため、より新しい時期に形成されたものである。埋没土は一部に



第60図 溝230及び沼沢1実測図



第61図 沼沢1出土遺物

砂礫層を挟む所があるものの大部分は暗灰色を呈するベトベトした粘土であり、ビビアナイトの発達が顕著である。遺物の出土は少なかったが、暗灰色粘土中より第61図(220、221)に示す灯明皿が2枚と、3LO20で第61図(W-17)に示す下駄が出土している。

また3LO18で沼沢底

に張りついた状態で第61図に示す咸平元宝が出土している。咸平とは北宋中の年号で、西暦998～1003年にあたる。

6 江戸時代以降の遺構と遺物

<井戸16> 3LP21～22で検出されたもので、弥生時代後期遺構面Ⅱの河川7の砂礫層中に掘削されている。砂礫層上面での径は2.7m、底はT.P.-1.1mにまで達している。底部に径0.6m、高さ0.55mの桶を利用した井戸枠を置いている。この桶は西側1/2ほどを失っていたが、たがが残っていることから、当初は完全に回っていたものと思われる。この桶内に瓦が3枚落ち込んでいたが、これも井戸枠の一部として利用されていたものであろう。

7 A地区検出の足跡について

A地区において、今回の調査で検出された足跡面は計16を数えるが、これはすべて切抜け部の調査時に検出されたものである。Aトレンチ部の調査時においても、当然足跡は存在したのであろうが、当時の状況ではそれを捉えることはできなかった。ただ粘土面に残され、今から考えれば足跡であろう小さな砂の落込に留意しなかつたが、この粘土面は非常に軟弱であり、その上を我々が歩いても足跡が付くために、調査時に付いた足跡として、それを掘削しようとはしなかつたのが実状である。1Aトレンチの弥生時代中期下部包含層上面で、明らかに当時のものと分かる足跡を検出した後は、この反省を踏まえて上に砂の覆った粘土面を検出する時には、細心の注意を払って砂だけを除去するように努めた結果、上記の足跡面が検出されたものである。瓜生堂遺跡のような沖積地に立地する遺跡は、粘土と砂だけで地盤が構成されており、足跡の保存には非常に良好な条件を備えている。粘土は水にあうとすぐ泥濁化する性質を持っているために、粘土面の露出している所では、足跡を始めとして当時の生活活動を偲ばせる諸々の痕跡が印

象づけられているはずである。ただそれが今日、我々の目に触れうるものとして残るためには、それが地表で風化してしまう前に、その上を新たな堆積層が覆う必要がある。ただこの場合、粘土面の上に粘土が堆積した状態では、綿密な観察を行なえばその検出も不可能ではなからうが、非常な困難を伴うことは避けられず、やはり砂が覆った時の方が、その検出ははるかに容易であり、また保存状態も良好である。足跡の埋没は必ずしも洪水等によって砂が大量に運びこまれてくる必要はなく、通常の風雨の浸食によっても、周囲より低くなった足跡部分に砂やシルトが集積しやすいために、促進される。1A-1足跡面では、足跡中に埋没した砂の種類は大別しても8種類あり、これは足跡が埋没していく状態に差異のあったことの反映と考えられ、足跡のつき方と埋没状態を検討す

第2表 A地区足跡検出数一覧表

ることによって、足跡周辺のマイクロな環境復元が出来る可能性がある。

足跡が残されているのは粘土面が大部分であるが、一部はシルト面で検出されている。残された足跡の深さは、これらの地表面の軟度と荷重量との相関関係で決定され、当然とはいえ軟度が高く、荷重の大きい方が深く印される。地山面の軟度はそれを構成する土の粒の大きさと含水量によって変化するが、特に含水量は日々変化するもので、足跡の残り方と一番密接に関連する。水田のように冠水した粘土面は飽和状態にあり、非常に軟弱

時期	遺構面	番号	検出面又は遺構	総数	左右判別数	左足	右足
弥生時代中期	遺構面 I	5A-4	溝3 溝中	40	13	8	5
		5A-5	青灰色粘土上面 (3LP~Q18)	23	3	3	0
		5A-6	溝3 溝中	14	7	3	4
		5A-7	溝3 溝底	40	4	0	4
	遺構面 II	1A-1	中期下部包含層上面	2,256	580	289	291
		4A-1	第1号方形周溝基北周溝中	6	5	4	1
		5A-2	第2号方形周溝基西周溝中	536	130	59	71
		5A-3	〃	180	35	19	16
		6A-3	第1-4号方形周溝基間周溝中	12	7	6	1
		6A-4	〃	15	7	4	3
		6A-5	〃	27	13	7	6
		6A-6	〃 周溝底	30	17	8	9
	小計			3,179	821	410	411
	弥生時代後期	遺構面 II	3A-1	後期包含層上面 (3LO15)	17	8	4
5A-1			河川7南西肩部	219	2	0	2
6A-1			暗灰色シルト上面 (T.P.+0.75m)	25	11	2	9
6A-2			暗灰色粘土上面 (T.P.+0.2m)	18	6	3	3
小計			279	27	9	18	
合計			3,458	848	419	429	

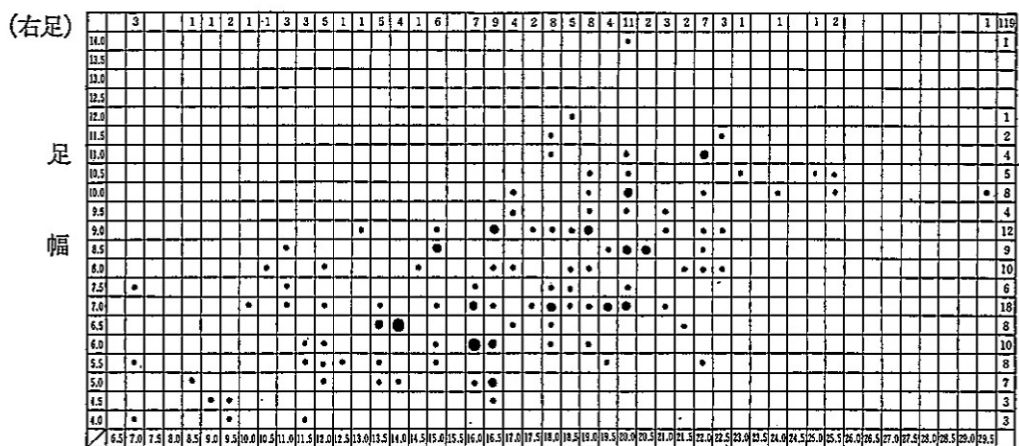
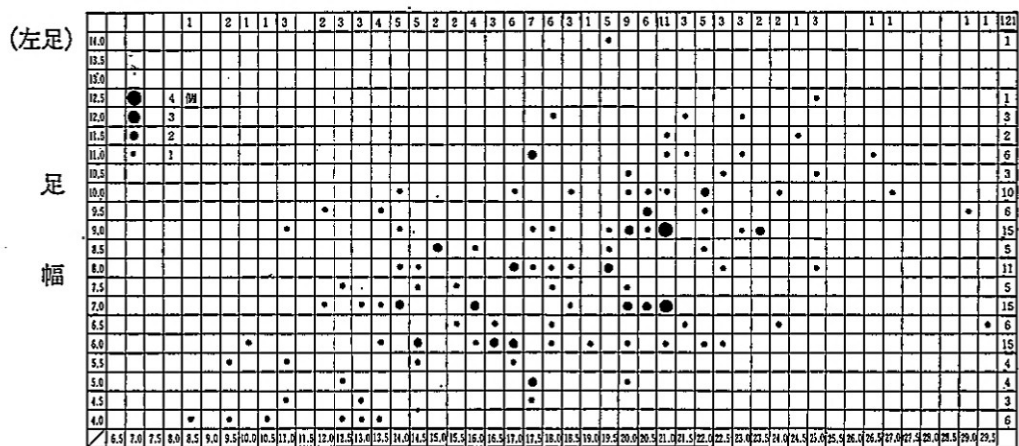


第62図 1A-1 足跡面実測図 (黒は左右の判別された足跡)

とどなかつた。1 A-1 足跡面の最終埋没段階は、前述したように洪水によって搬入された大量の砂によって埋没してしまうが、この時に埋没した灰褐色細砂や灰白色細砂の詰った足跡は深いものが多く、一連の歩行をたどれるものも多い。この粘土面は花粉分析の結果、水田の可能性は薄いとされているので、こういった足跡の残り方を考えた場合、やはり直後の洪水を引き起こすだけの大雨がこの地域に降ったために、粘土面全体が一様に軟化してしまったか、あるいは粘土面が冠水してしまったということも、一つの原因として考えられるであろう。

足跡の埋没過程は、調査において掘削した足跡が、再び埋没していく過程を観察することによって、ある程度は知ることができる。ただ現実問題として、足跡検出面を足跡が埋没するまで長時間放置することは、調査期間その他の点で困難であり、今回は5 A-2 足跡面の一部を使って観察を行なったにすぎない。その観察によると、まず雨が降ることによって足跡のくぼみに水が溜るが、この時雨に打たれて粘土中より浮き出た雲母片が雨水とともに流れ込み、足跡底に沈澱

第4表 弥生時代中期足跡計測一覧表(1 A-1を除く)



足 長

没最終段階では20cmの厚さに青灰色細砂が堆積しており、足跡を一気に埋没させてしまうが、この細砂の詰った足跡が一番深く、しかも指の痕跡をよく残した明瞭なものが多かったことから、この足跡が洪水直前に付けられ、ただちに埋没したことを推測させる。

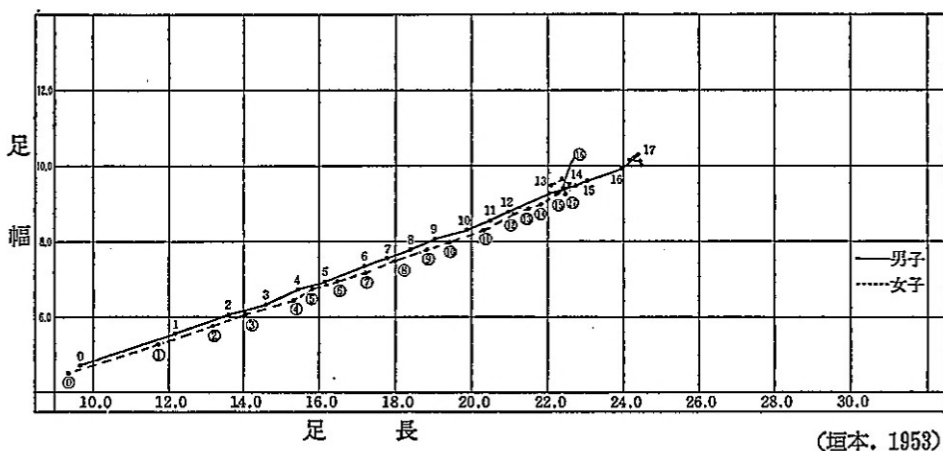
今回A地区で検出された足跡の計測資料は、弥生時代中期では1A-1足跡面のものを第3表、それ以外のものを第4表、後期のものを第5表に示してあるが、これらは左右の判別できたものだけをそれぞれ集計したものである。これらの表は見ての通り非常に数値のばらつきが激しい。明らかに人間の足跡とは思われない数値を示すものもあり、当初はこのような有意差をはるかに逸脱したものは除外しようとも考えたが、どこまでを除外するのかの基準線を設定できず、一応計測資料すべてを記載した。そのために平均値等を計算する時に誤差が大きくなる弊害を生じている。

これまで足跡の計測資料の公表はほとんどなく、ここに比較資料として引用したのは、広島医科大学解剖学教室の垣本克郎氏が人類学輯報特集第4輯（昭和28年3月）に発表したもので、昭和26～27年にかけて中国地方の住民を対象に、男女合せて3,000人以上を計測したものである。ここでは1A-1足跡面を主に対比してみた。第3表を見ると足長では左足が16.0cmと20.0cm、右足が16.0cmと18.0cmにピークのあることがわかる。東京工業大学の平沢彌一郎教授の御教示によると、足長は身長と高い相関関係を有し、足幅はどちらかというと環境の影響を受けやすいとのことで、このことから足長を計測することによって弥生時代人の身長を推定できる可能性がある。垣本克郎氏も前掲論文中で、手足とも年齢を通じて有意の相関関係が認められるが、手足とも長径における相関の度は横径に関するそれよりも高く、また手より足がより大であり、特に成長の急速な15、16才までの相関度はより高いと述べている。弥生時代人の身長を、実際の人骨にあたって計測できたものはほとんどなく、当時の平均身長を知る資料としては、財津博之氏、及び金関丈夫氏が大腿骨の長さから割り出した推定身長の平均値がある。それによると男性人骨の場合、山口県土井ヶ浜遺跡のものは18例の平均が162.8cm、佐賀県三津遺跡では7例162.0cm、鹿児島県成川遺跡では26例160.8cmと計算されている。この推定値を瓜生堂遺跡にあてはめるには、時期差、地域差を当然考慮に入れなければならないが、一応160cmを少し越えたぐらいを平均と仮定すると、第7表に示す昭和26～27年計測の中国地方人男子の平均が162.0cmであり、両者はあまり変りがないことがわかる。もちろん昭和26～27年頃といえば、この計測対象となった青少年は、戦中、戦後の食料難の時期に成長期を過ごした人達がほとんどであり、通常とは異なった身体形成過程をへていることも考えられ、2千年もの間、身長に変化がなかったとは言いきれないことも確かである。しかし身長と足長の高い相関度からすると、第6～7表を弥生時代にも適用できることが考えられる。例えば足長16.0cmの場合、年齢は5才前後であり、5才時の平均身長は103.5cmであることから、弥生時代の5才時の身長もその程度であることが推定される。1A-1足跡面では23cm以上の足跡は意外と少なく、このことからするとこの地域は成人男子のあ

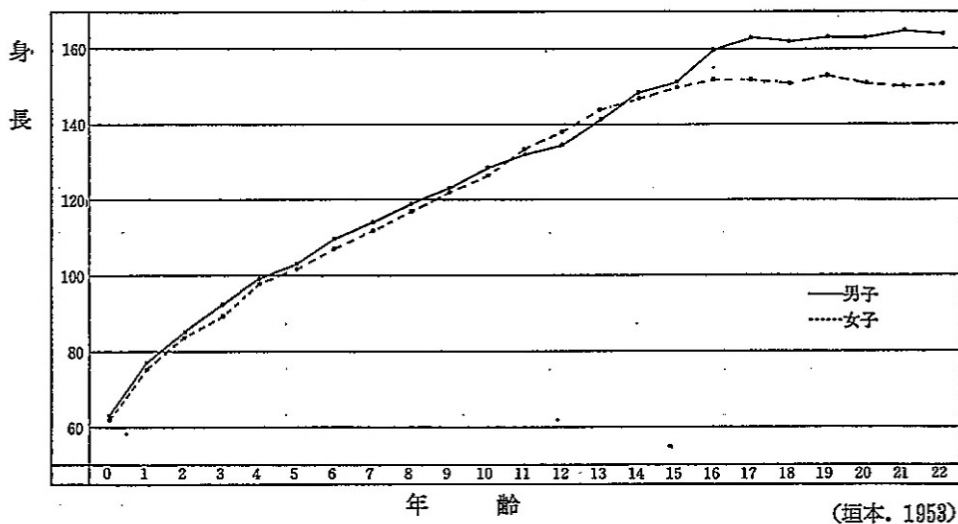
まり歩かなかった所であり、幼少年や成人女子がこの場所でなんらかの生活活動を行なったか、あるいはそこへの径路であったことが考えられる。

足幅は左足では7.0cmと9.0cmにピークがあり、右足では7.0cmが圧倒的に多く、6.0cmと9.0cmがこれに次いでいる。足幅の場合、足長ほどの相関関係を示さず、環境による影響を受けやすいために対比は難しい。第6表の現代人の足長、足幅の年齢別平均を第3表に重ねて見ると、弥生時代人の足跡が現代人の平均線から1~2cmの範囲内に納まるものが多いことが読み取れる。しかし、どちらかという平均線よりも上方に分布するものが多く、現代人よりも弥生人の方が足幅の広いことがわかる。このことは第9~10表の足示数（足幅÷足長×100）の比較でも同じ傾向を示している。ただこれらの数値から単純に弥生人の方が足幅が広いと断言できない要素もあ

第6表 現代人の左足、足長、足幅、年齢別平均表



第7表 現代人の身長



る。というのは同一人物の一連の歩行を7歩までたどれたものの計測資料を第8表に示してあるが、この数値を見ると同一人物の足跡であっても最高3.5cmの誤差が出ている。しかも足示数を見ても50~60%代の数値を示しており、現代人の足示数が0~1才時を除いておおむね40%代前半を示すのに比して幅が広すぎるきらいがある。これは足が粘土面に下ろされた時に、前、もしくは外に向けて滑りやすいために、実際の足よりは大きく印象づけられることが原因であり、一般的に横へのスライド量の方が大きいことが、足跡をより幅広いものに見せるものと思われる。そのためこれらの数値を短絡的に結論へ導くのは危険であるが、4A-1足跡面において検出された5指の完全に残った足跡1(第22図参照)はほぼ足の全体が印されていると考えられ、その計測値は、足長19cm、足幅9.5cmであり、これの足示数は50.0を示すことから、現代人と比して足幅が広がったことは、一般的傾向として言えるのではなかろうか。

足跡の残存状態から足の形態を復元することは、前述したように困難な面が多い。足跡の多くは変形を受けており、本来の形姿をなかなか窺わせてはくれない。しかし数は少ないが、足の形を明瞭に残しているものもあり、そういったものから特徴的な点を幾つか拾い出して見たい。足の形態でもっとも目立つのは足長、足幅を除けば、やはり土踏まずと指の部分である。土踏まずは浅い場合、跡として残らないことで表現されていることが多く、深い場合もどこまで土踏まずか判別することが難しい。そのため土踏まずを計測することは出来なかったが、傾向としては土踏まずの発達している足跡が多いようである。指は5本すべてが明瞭に残っていることはまれで、親指だけが残っている場合が多い。やはり親指が大きく、また一番力が加わるために残りやすかったのであろう。この親指と第2指との間に粘土を残しているものがあり、そのことが一層親指の存在を際立たせている。他の指は残っていても多くは4本が連続しており、その先端の痕跡をわずかに留めているだけである。親指は他の指よりも前へ出ており、しかもやや外反気味のものが多く、もちろん第2指が一番前へ出るものもあるが、数は少ないようである。この足指の先端を結ぶ線と、足の中心線が作る角度を計測すれば、あるいはおもしろい結果が判明したかも

第8表 1A-1足跡面第1足跡列計測表

足跡	番号	365	362	358	211	140	142	46	144	平均	+	-
左足	足長		24.5		22.0		24.0		21.0	23.0	+1.5	-2.0
	足幅		14.0		12.5		13.0		14.5	13.5	+1.0	-1.0
右足	足長	22.0		24.0		21.5		22.5		22.5	+1.5	-1.0
	足幅	12.5		14.5		12.0		13.0		13.0	+1.5	-1.0
深さ	前	11.0	8.0	5.5	7.5	3.5	5.0	5.0	3.5			
	後	10.5	8.5	5.0	5.0	6.0	2.0	3.5	2.0			
足示数	左足		57.1		56.8		54.1		69.0	59.3	+9.8	-5.2
	右足	56.8		60.4		55.8		57.5		57.7	+2.7	-1.9

知れないが、今回は計測していない。ただ左右の判別できたものに関しては石膏による型取りをしているので、後日それを使って計測値を出してみたい。

弥生時代のわが国の様子を記した文献史料として魏志倭人伝があるが、この中に当時の風俗が記述されている。「倭地は温暖で、冬夏生菜を食している」という文章の後に「皆徒跣」という裸足を意味する言葉があり、当時の人々が裸足で生活していたことが記録されている。このことは今回の足跡の調査においても、指や土踏まずの残った足跡が多く、履物をはいていたような痕跡がないことから裏付けられている。

第9表 1A-1足跡足示数一覧表

左 足			右 足		
足長	個体数	足示数	個体数	足示数	
8.0			1	62.5	
8.5					
9.0	2	49.9+ 5.6- 5.5			
9.5					
10.0	3	58.3+ 1.7-13.3			
10.5			2	49.9+ 2.4- 2.3	
11.0	6	50.7+ 8.3- 9.8	6	46.1+17.5- 9.8	
11.5	2	52.1± 8.7	3	44.8+16.0-10.1	
12.0	3	47.2+ 6.9- 9.8	8	44.2+ 5.8-10.9	
12.5	5	47.2+12.8-15.2	3	44.0± 4.0	
13.0	9	51.6+13.7-13.2	10	52.2+24.7-21.5	
13.5	9	51.8+14.8-22.2	5	45.1+ 6.7- 8.1	
14.0	10	43.5+ 8.2- 5.6	13	43.9+13.2-15.4	
14.5	12	43.9+ 7.9- 6.0	11	45.0+10.1-17.5	
15.0	17	49.4+27.2-12.8	18	44.9+21.7-11.6	
15.5	6	41.3+ 3.8- 9.1	5	43.8+17.4- 8.4	
16.0	22	43.2+25.5-19.0	21	44.9+26.9-13.4	
16.5	10	38.7+18.8-11.5	4	42.4±12.1	
17.0	12	43.0+12.8-13.6	20	41.7+14.1-15.3	
17.5	12	47.8+32.2-13.6	9	45.8+11.3- 8.7	
18.0	14	44.2+ 5.8-10.9	21	45.1+21.5-22.9	
18.5	8	44.2+ 9.8-11.8	17	46.0+10.7-19.0	
19.0	13	46.3+11.5-17.4	12	42.7+20.4-16.4	
19.5	6	41.8+14.6-13.6	6	45.2+11.2-11.9	
20.0	20	45.4+ 4.6-12.9	12	45.6+21.9-13.1	
20.5	9	43.0+ 8.2-11.3	9	47.3+ 8.7-13.2	
21.0	14	52.3+21.5-21.4	14	46.8+19.8-13.5	
21.5	13	48.3+16.8-15.8	7	43.1+12.7-10.5	
22.0	16	48.4+10.6-14.4	6	48.4+10.6-14.4	
22.5	1	53.3	4	56.6+ 3.4- 3.3	
23.0	6	50.3+14.9-14.0	13	45.3+11.2-23.6	
23.5	1	63.8	1	63.8	
24.0	9	44.6+13.7-15.5	8	47.6+12.8-16.4	
24.5	4	56.5+ 2.6- 3.5	3	46.8+10.3-12.2	
25.0	4	45.0+15.0- 9.0	3	43.3+ 8.7- 9.3	
25.5	4	40.6+ 6.4- 3.4	2	27.2±0	
26.0	3	44.2± 5.8	6	41.3+13.3-14.4	
26.5	1	45.2	2	54.7± 1.9	
27.0	2	48.1±11.1			
27.5					
28.0					
28.5					
29.0	1	34.4			
29.5					
30.0					
30.5					
31.0			1	38.7	

これまで弥生時代人の系譜をどこに求めるかで種々論争のあった所であるが、いまだその決着は見えない。この最大の理由は、弥生時代人骨の発見例が少なく、その基本的資料の蓄積が進展しないためである。弥生時代には縄文時代貝塚のように人骨の遺存に適した遺跡が少なく、わずかに山口県土井ヶ浜遺跡や佐賀県三津遺跡等においてまとまった出土が伝えられているだけである。瓜生堂遺跡においても方形周溝墓等の埋葬主体より幾つかの人骨が検出

第10表 現代人年齢別平均足示数一覧表

年齢	男		女	
	足示数(左)	足示数(右)	足示数(左)	足示数(右)
0	49.09±0.55	48.96±0.59	48.19±0.48	47.75±0.46
1	45.62±0.84	45.89±0.99	45.43±0.90	45.71±0.91
2	44.31±0.84	44.20±0.82	44.43±0.86	44.15±0.73
3	43.90±0.87	43.74±0.91	43.06±0.56	43.19±0.65
4	43.58±0.47	43.22±0.54	42.57±0.58	42.28±0.66
5	43.09±0.41	42.94±0.38	42.99±0.45	42.50±0.39
6	42.91±0.60	42.74±0.58	42.29±0.63	42.39±0.67
7	42.23±0.47	42.38±0.44	41.54±0.51	41.64±0.46
8	42.37±0.40	42.22±0.33	41.61±0.41	41.51±0.38
9	42.28±0.31	42.17±0.37	41.50±0.38	41.54±0.39
10	41.92±0.32	42.04±0.30	41.11±0.38	41.12±0.34
11	41.75±0.42	41.93±0.47	41.01±0.39	41.16±0.40
12	42.03±0.46	42.14±0.45	41.92±0.41	41.75±0.38
13	41.89±0.41	42.11±0.42	41.49±0.48	41.49±0.36
14	41.82±0.35	42.06±0.34	41.45±0.33	41.94±0.36
15	41.92±0.34	42.16±0.35	41.85±0.55	42.04±0.56
16	41.84±0.40	41.83±0.38	42.89±0.56	42.14±0.51
17	42.45±0.56	42.15±0.54	42.13±0.55	41.82±0.50
18	42.47±0.50	43.35±0.51	42.06±0.51	42.55±0.53
19	42.33±0.45	42.90±0.48	42.64±0.42	43.16±0.44
20	42.35±0.46	42.56±0.39	43.01±0.62	43.27±0.62
21	41.75±0.43	42.47±0.51	42.99±0.55	43.36±0.47
22	41.94±0.50	42.32±0.55	42.77±0.88	42.73±0.74
23	42.52±0.59	42.60±0.78	43.27±0.91	43.66±0.89
24	42.54±0.64	42.68±0.62	42.88±0.50	42.74±0.61
25-59	42.57±0.50	42.70±0.51	43.32±0.39	43.33±0.41
60以上	42.43±0.85	41.95±0.85	42.16±0.45	42.14±0.39

(垣本, 1953)

されているが、いずれも正確な身長を計測できるものではなく、ましてや足跡の検討に最も必要とする足指等はまったく残存していない。こういった遺存人骨の少なさが、この分野での研究の進展を妨げているとすれば、逆方向からの研究方法として、足跡の比較検討を通じてその問題にアプローチできる可能性がある。これは人種によって足の形態に差異のあることが考えられるし、また足長が身長との高い相関関係にあるということが、それを解く鍵として利用できることも考えられるからである。ただ難しいのは、前述したように実際の足長がそのままの形で残されていることが少ないこと、また成長過程の足跡か、成熟した人間の足跡かの区別がどこでつくのかという問題などもあり、これから解明しなければならない点があまにも多い。

とにかく今回の調査で、足跡というものが決して珍しいものではなく、特に低湿地に立地する遺跡では至る所に残されていることが明らかになった。ただこれをどう資料化するかという時に、今回は何から何まで計測資料として残さなければならないということで、明らかに有意差を越えたものや、不整形なものまで一様に同じ資料の中に取り込んでしまったために、本来の足形のわかるものまでが、膨大な計測表の中に埋没してしまい、資料としての有効性にいささか欠ける結果になってしまった。また実際の調査においても、足跡の検出→平面実測→番号付け→埋没土の記録→掘削→平面実測→レベル測量→計測→形取りといった作業工程を取ったために、調査期間が長期にわたり、その間、足跡の崩壊が進んで、いざ計測という時には資料的価値を劣化させてしまったことも、反省すべき点としてあげられる。掘削後の足跡の崩壊は予想以上に早く、やはり大切なのは実際の足の大きさがわかるもの、あるいは容易に推定できるものを速やかに、しかも正確に資料化する方法的確立であろう。さらに計測方法の統一等も、これからの課題として取りくまなければならない問題である。

もう一つこれからの課題として考古学的な足跡研究だけでなく、現代人の足跡の比較検討も足跡計測資料を生かす意味で、重要な問題として取りあげなければならない。残念ながら足跡の研究というものはあまり省みられてはおらず、研究資料の公表も少ない。今回報告書を執筆するにあたって我々の手元に集まったのは、東京工業大学平沢彌一郎教授の身体静止学の立場からの足跡についての研究報告と、全面的に引用させていただいた垣本免郎氏の計測資料だけであるが、こういった各人種間の計測資料の蓄積が進み、それら相互間の比較検討が行なえるようになれば、弥生文化をもたらした人達がどのように日本列島に住みつき、生活圏を拡大させていったのか、あるいは在来の縄文文化を継承してきた人達が、この新事態にどう対処し、どう変化していったのかという問題に対するささやかなアプローチになることと思う。

第2節 B地区の調査

1. 層序

当地区では、瓜生堂遺跡の過去の調査で確認されていた遺構面と併せて、9枚の遺構面を確認、検出した。今回の各調査地区の中でも最も多い。時期の古いものから、弥生時代中期遺構面Ⅰ・Ⅱ、弥生時代後期遺構面Ⅰ・Ⅱ、古墳時代前期遺構面Ⅰ・Ⅱ、古墳時代中期遺構面、奈良時代遺構面、鎌倉～室町時代遺構面、の計9面である。他には明治時代頃の井戸を検出したが、今回の報告では省略する。

瓜生堂遺跡において過去の調査で確認されていた最も古い遺構面は、第Ⅳ地点の弥生時代前期である。今回A地区において中期遺構面の下層を確認するためのトレンチを掘削したところ、弥生時代前期の土器を僅かに包含する黒褐色粘土層をT.P.-1.3~1.6mで確認した。当地区においても、弥生時代中期の溝や土塋のような深い遺構の壁面に同一層を認めため、数ヶ所で確認トレンチを掘削した。遺物はほとんど含まず、3PT18地区において中期初頭の壺頸部破片と3PP8地区で木弓（第63図）を検出したにすぎない。この結果、黒褐色粘土層は、前期のみの遺物包含層ではなく、前期及び中期初頭の遺物包含層であることを確認した。黒褐色粘土層は、当地区においてもA地区とほぼ同レベルで水平に堆積していた。この上には茶黒色粘土層が青灰色粘土層と互層をなして20~50cm堆積していた。この上に3P11地区以北には青灰色細砂層、以南には黄色粗砂層が20~40cm堆積していた。この上面が弥生時代中期遺構面Ⅰである。

弥生時代中期遺構面Ⅰは、3P2地区でT.P.-0.8m、3P14地区でT.P.-0.4m、3P21地区でT.P.-1.1mであり、調査区中央部が最も高くなっていた。遺構は溝、土塋を主に検出した。3P4~6地区は、遺構面Ⅱに伴う河川1により削られ、T.P.-1.8mと深くなっていた。中期遺構面Ⅰの上には部分的に灰緑色粘土層等が遺物包含層として10~20cmの厚さで堆積していた。この上に黄白色砂層等が部分的に20~30cm堆積していた。この上面が弥生時代中期遺構面Ⅱである。

弥生時代中期遺構面Ⅱは、3P2地区でT.P.-0.3m、3P14地区でT.P.+0.3m、3P21地区でT.P.-0.3mであり、調査区中央部が最も高くなっていた。中期遺構面Ⅱにおいて検出した遺構はほとんどが方形周溝墓であり、30~60cmの盛土がのこっていた。そのため、中期遺構面Ⅱの上面は非常に高くなっている地区もある。中期遺構面Ⅱの上には黒色砂質



W-18
第63図 黒褐色粘土層
出土木弓(1/6)

土層（本来は、黒色粘土であるが後期の遺物包含層が黒色粘土層であり、過去の調査で中期の遺物包含層を黒色砂質土層としていたことから、後期包含層と混同しないように黒色砂質土層とした。）が遺物包含層として10cm堆積していた。3P4～6地区の河川1内には灰黒色砂礫層、黄白色砂層、白色砂礫層等が堆積していた。この河川1の上面には部分的に黒色砂質土層が堆積していた。この上に、3P7～15地区では黄色砂層が5～50cm、3P16～22地区では青灰色粘土が5～50cm堆積していた。この上面が弥生時代後期遺構面Ⅰである。

弥生時代後期遺構面Ⅰは、3P7地区でT.P.±0.0m、3P9～15地区でT.P.+0.2～0.3m、3P17～20地区でT.P.+0.1m、3P21地区でT.P.-0.2mであり、調査区中央部が最も高くなっていた。遺構は、北半部の黄色砂層上面にのみ認められ、南半部の青灰色粘土層上面には全く認められなかった。3P2～7地区には河川が方向を変えて2度流れていた。古い河川3は中期遺構面Ⅱで検出した河川1に重なって流れていた。新しい河川4はそれに直交するように流れており、古い河川3内に堆積した白色砂礫層を部分的に肩としていた。新しい河川4内には灰白色砂礫層が堆積していた。遺構面上には黒色粘土層が遺物包含層として5～10cm堆積していた。この黒色粘土層は、北半部には遺物を包含していたが、南半部では全くといってよい程遺物を包含していなかった。この上には暗灰色粘土層が10～30cm、灰色粘土層が5～30m、灰色粘土・白色砂の互層が20～60cm、部分的に白色砂層が5～20cm堆積していた。この上に青灰色細砂層が10～30cm堆積していた。この層は北へいくにつれて次第に粘土層へと変化する。この層の上面が弥生時代後期遺構面Ⅱである。

弥生時代後期遺構面Ⅱは、3P7地区でT.P.+1.3m、3P13地区でT.P.+1.4m、3P21地区でT.P.+1.0mであり、北部が高く、南へ向って低くなっていく。遺構は少なく、溝と土壌を検出したのみである。この面の上には明確な包含層はあまりなく、3P20～21地区において部分的に灰黒色粘土層が深いところで30cm堆積していた。この層からは庄内式土器を含まない土器群を検出した。3P19地区以北では遺構面と考えられる青灰色粘土層や青灰色細砂層上面から僅かにくい込んだ土器を多量に検出した。調査区北端には、河川が流れており、後期遺構面Ⅰで確認した新しい河川4と同方向に流れていた。この河川8が最も大規模で、深いところでは後期遺構面Ⅰの河川内堆積層を突き抜け、中期包含層上面まで達するところもある。この河川内には灰色砂礫層、褐色砂礫層、灰褐色砂礫層が堆積していた。この砂礫層上面が古墳時代前期遺構面Ⅰである。

古墳時代前期遺構面Ⅰは、3P2～6地区ではT.P.+1.8m、3P7～14地区ではT.P.+1.45～1.6m、3P21地区ではT.P.+1.7mであり、調査区中央部が低くなっていた。この面では井戸、土壌等を検出した。また、3P2～6地区は遺構面が高く、灰褐色砂礫層がまだ河川としての名残を止めていたと考えられる。3P7地区以南にのみ灰黄色粘土層が10～15cm堆積していた。この上面が古墳時代前期遺構面Ⅱである。

古墳時代前期遺構面Ⅱは、3P2～6地区、3P18～21地区では遺構面Ⅰと同一面であり、3P7～17地区ではT.P.+1.6～1.8mである。灰黄色粘土層上面では井戸、土器溜を検出した。3P21・22地区には古墳時代前期～中期の河川10が流れていた。遺構面Ⅱの上には3P2～15地区において赤褐色粘土層が10cm堆積していた。この上面が古墳時代中期遺構面である。

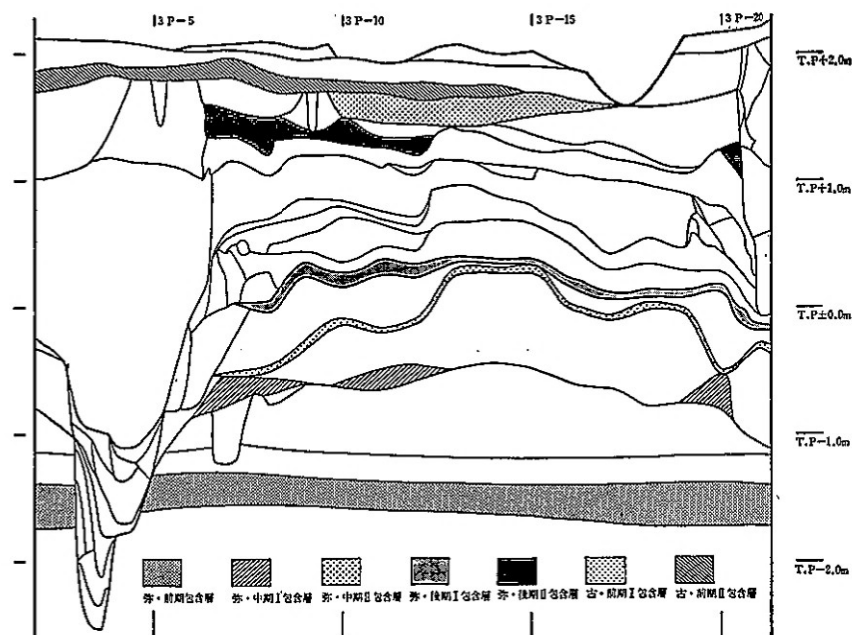
古墳時代中期遺構面は、3P2～7地区でT.P.+1.8m、3P8～15地区で+1.7mであり、調査区内ではほとんど平坦になっていた。遺構は少なく、井戸、土塋等を検出した。この上には、北半部で黄褐色粘土層が10～20cm堆積していた。これは南へいくにつれて次第に褐色土層となり、厚さも20～40cmとなった。この上面が奈良時代遺構面である。

奈良時代遺構面は、3P2地区でT.P.+2.1m、3P15地区でT.P.+1.9m、3P21地区でT.P.+2.1mである。遺構は掘立柱建物を検出した。この上には、灰色粘土層、淡褐色土層が部分的に5～20cm堆積していた。この上面が鎌倉～室町時代遺構面である。

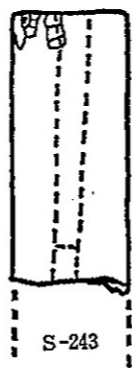
鎌倉～室町時代遺構面は、T.P.+2.1～2.2mであり、部分的に認められた。遺構はほとんどなく、溝、土塋を検出した。

これより上層には各時期の遺物を包含する層があり、弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、近世陶磁器等の土器が多量に出土した。土器以外では古墳時代の管玉（第65図）、貨銭（寛永通寶）等が出土した。更に上層には旧耕土や盛土がありGL=3.2m程度である。

以上、B地区における層序の概括を記した。以下、各遺構面毎に、各遺構の詳細を記述していく。



第64図 B地区南北土層断面略図



第65図 灰色粘土層出土管玉(1/4)

2 弥生時代中期の遺構と遺物

1) 遺構面 I

弥生時代中期遺構面 I は、調査区全域を調査した訳ではなく、遺構面 II に伴った遺構の存在していない地区等において調査した。そのため、遺構面としては、3 P13地区以北と3 P16地区以南の2箇所に分けられた。この2箇所を比較すると遺構の性格が僅かに異なるようである。検出した遺構は、種類が非常に少なく、溝、土壙、ピットが主である。明確な住居址や建物跡等は検出しなかった。今回の調査区は集落の中心部ではなく、どちらかといえば縁辺部と考えられる。

A 溝 溝は50条以上確認、検出した。その規模は大きなものから小さなものまで様々あり、深さも色々である。それぞれの用途が本来は異なるのであろうが、明確にはし得ない。

<溝19>は、3 P S・T 2地区から西南に延び、3 P R 3地区において西に向きを変え、3 P O 4地区に延びる。両端が調査区外へ続くため全長は明らかにし得ないが、検出長は28mである。幅は、狭い部分で約4m、広い部分で約6mを測る。深さは、北肩からが1.4mで南肩からが0.65mを測る。北肩と南肩の比高差は0.75mである。これは中期遺構面 II に伴う河川1が溝19にほとんど重なって流れたために南肩が削られたものである。本来はほぼ同じ高さであったと考えられる。北肩からは割合垂直に掘られており、南肩も同様な高さであったとすれば相当深い溝であったと考えられる。

溝内の埋土は、細分すると約20層になるが、大まかには3層である。3 P R 3地区では、下層に白色砂・灰色砂が南肩から流れ込んだように40~50cm堆積し、中層に黒灰色砂が北側から流れ込んだように30cm堆積し、上層に灰黒色粘土が20cm堆積していた。下層と中層の境には木葉等の腐植物層が5cm堆積しており、各砂層間にこのような腐植物の薄層が多く認められた。3 P P 4地区でも同様の層序をなすが、下層と中層の堆積状況が異なっている。下層が北から流れ込んだように堆積し、中層が南から流れ込んだように堆積していた。このように約10m離れた所で堆積状況が異なるのは、砂層の堆積が溝の上部から流れ込んで堆積するのではなく、溝内を流れる水に運ばれて堆積したため、溝の僅かな屈曲により流路が変わるためであろう。上層の粘土層の堆積は水が流れていないため割合均一に堆積したのであろう。

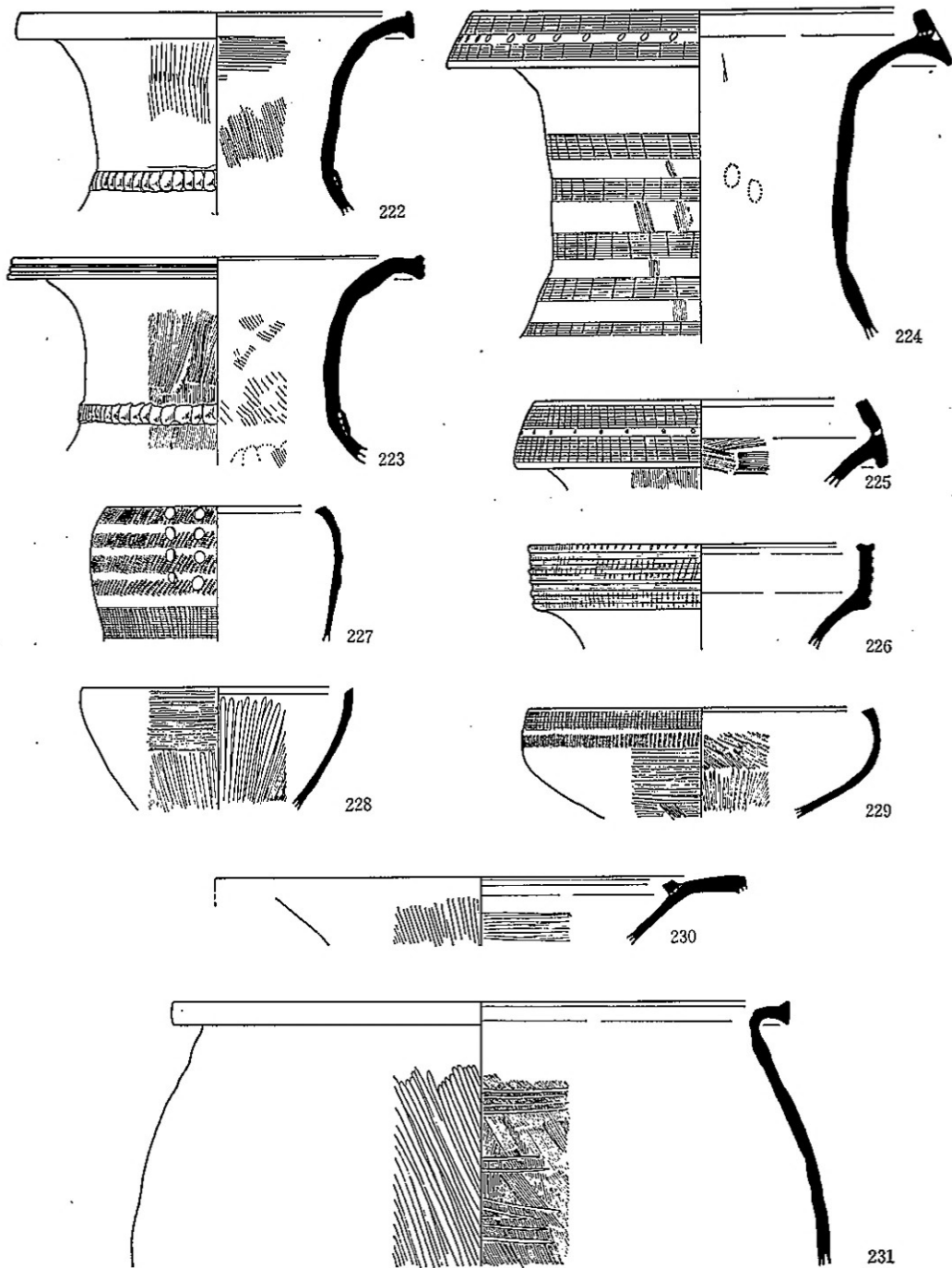
遺物は、上層の灰黒色粘土層より土器（第66図）、木器（第115図W-27）、杭等を検出した。中・下層の砂層からは全く検出しなかった。

<溝20>は、3 P U 3地区から3 P S 3地区で検出し、東から西に延びる。東端は調査区外へ続き、3 P S 3地区では中期遺構面 II の河川1により削られ消失していた。検出長は9.8m、幅は3~4m、深さは1.2mを測る。南肩からはゆるやかな傾斜をもって掘られるが、北肩の側壁は部分的に流れのために激しい侵食を受け深くえぐられていた。その侵食された地山の黒茶色粘土が塊状に埋土中に混入していた。しかし、底部は激しい流れの割には平滑である。

埋土は、白色細砂が一層であり、一気に堆積していた。遺物は、少量の土器片を検出しただけ

である。

〈溝21〉は、3PT4地区にあり、検出長2.0m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。溝20が埋没した後に開削される。北端は、中期遺構面Ⅱに伴う河川Ⅰにより削平される。南は調査区外へ続き、



第66図 溝 19 出土土器 (1/4)

さらに3PT6地区で確認、検出した溝へ続くと考えられ、検出長は5mを測る。肩口からは、ほぼ垂直に掘られ、底部には、部分的に凹凸が認められる。

埋土は、下層に暗灰色の細砂と粘土の互層、上層に暗灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器（第67図）を僅かに検出した程度である。

<溝24>は、3PP7地区の中央で検出した。地山である青灰色細砂層がこの周辺では盛り上がっており、その斜面を南西から北東に延びる溝である。南西端を土壙35に切られ、更に溝25に続くと考えられる。北東端は中期遺構面Ⅱの土壙267に切られていた。検出長5m、幅0.3~0.4m、深さ0.1mを測る。小規模な浅い溝である。

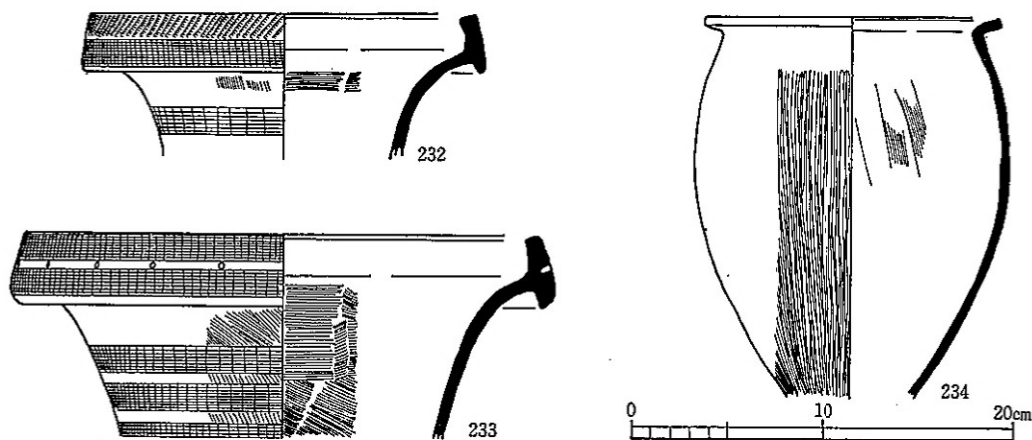
埋土は、炭化物混りの黒灰色粘質土が1層堆積してただけである。遺物は、ほとんど検出なかった。

<溝26>は、3PP8地区から3PQ8地区にかけて西南西から東北東に延びる。この溝は、溝24の南側を流れていた。南西端を溝27に切られ、北東端を土壙267に切られ、更に、途中でピット380に切られていた。検出長3.6m、幅0.3~0.5m、深さ0.05mを測るごく浅い溝である。

埋土は、炭化物を僅かに含む暗灰色粘質土が1層堆積していた。遺物は、僅かに土器片を検出ただけである。

<溝29>は、3PR9地区から西北に延び、3PQ8地区東南隅で西北西に向きを変え、3PQ7地区へ続く。両端が調査区外へ続くため全長は不明であるが、検出長は15mを測る。幅は1.5~3.0m、深さは0.25~0.4mを測る。北北西に向きを変えた付近が幅1.5mと狭くなっており、北北西に向って次第に広がっていく。深さも同様に東半部が浅く、北北西に向って次第に深くなっていく。北端では一部2段掘りになっていた。

方向変換点において杭を2本検出した。1本は溝内にあり、もう1本は南肩部にあった。杭は2本共打込杭であり、他には検出できなかったが、堰のような施設があった可能性が十分に考え



第67図 溝 21 出土土器

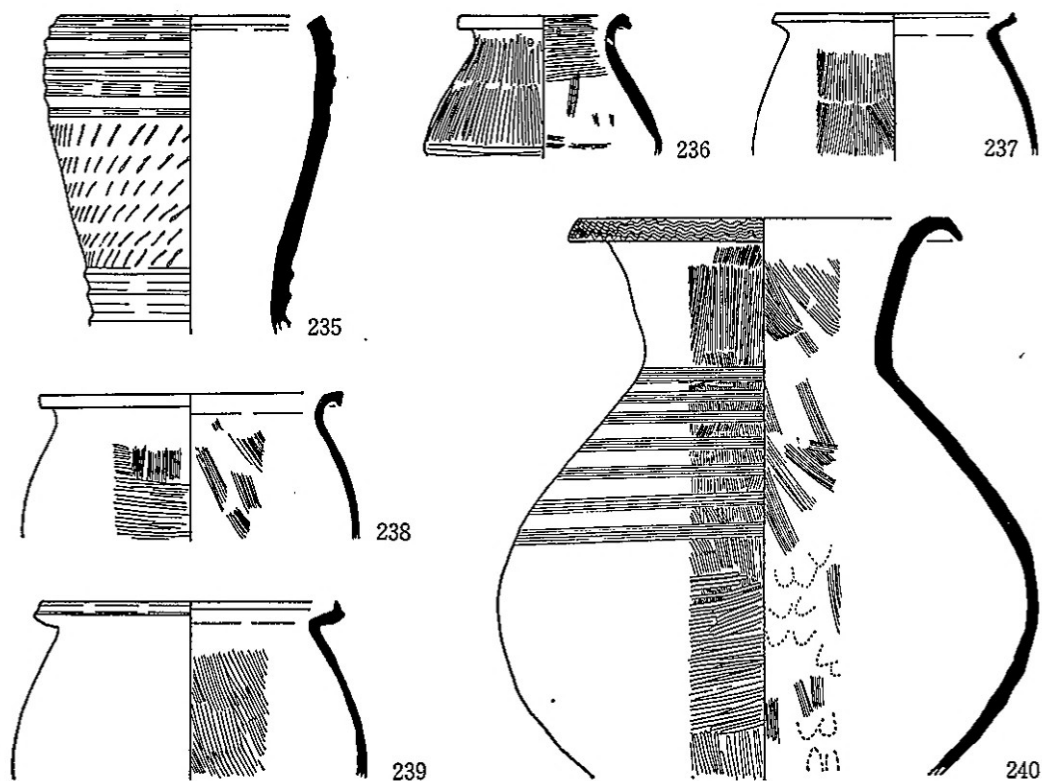
られる。

埋土は、東では下層に黒灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積しており、西では下層に部分的な炭化物層、中層に黒灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積していた。黒灰色粘土層が厚く、他の層は非常に薄い。遺物はほとんどが土器（第136、138～142図）であるが、木器（第115図W-25・26）や、石器（第102図S-65、第103図S-107、第112図S-144）をも検出した。遺物の詳細については後述する。

<溝30>は、3PR8地区から始まり、北北西に延び、3PQ6地区で終る。全長9.0m、幅2.5～3.5m、深さ0.6mを測る。埋土は、灰緑色粘土と灰色粘土が混在していた。遺物は、ほとんど含まず、土器（第68図235）を検出した程度である。溝29とは性格の異なる溝であろう。

<溝31>は、第5号方形周溝墓の下層にあり、盛土を除去した段階で確認、検出した。3PS6地区から3PR7地区へ延び溝32と合流する。検出長は9.0m、幅は1.5～3.0m、深さは0.2mを測る。埋土は、黒灰色粘土が1層堆積していただけである。遺物は、土器（第68図236～239）の他に木製の鍬（第113図W-19）等を検出した。

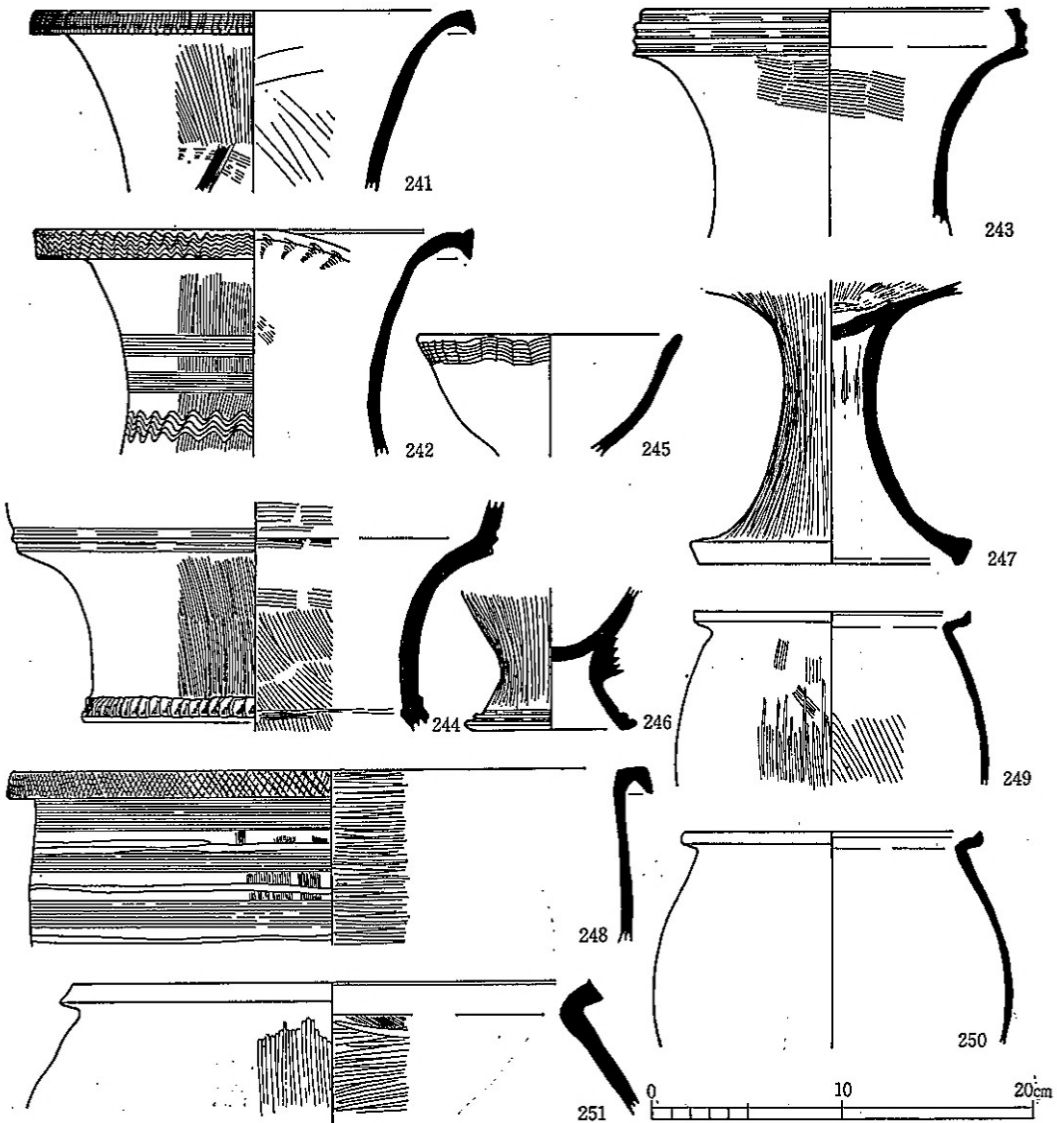
<溝32>は、溝31と同様に第5号方形周溝墓下層において検出した。3PS8地区から3PR7地区へ延び溝31と合流する。東端は溝33によって切られていた。検出長3.5m、幅1.0～1.5m、



第68図 溝30 (235)、溝31 (236～239)、溝32 (240) 出土土器 (1/4)

深さ0.1~0.2mを測る。埴土は、黒灰色粘土が1層堆積していただけである。溝31との合流点において明確な切合関係が認められなかったため、先後関係等は不明である。遺物は、土器（第68図240）等を検出した。

<溝33>は、3PR11地区から始まり、北北東に延び、次第に北に向きを変えて、3PS5地区で一部不明瞭となるが、3PS4地区まで続くようである。北端は、後期遺構面Iの河川4によって切られていた。検出長37m、幅0.7~3.0m、深さ0.1~0.2mを測る。この溝は非常に不定形で、南端では幅が3.0mとなるが、3PS8地区では幅が2.0mとなり、3PS7地区では幅が0.7mと狭くなる。底にも段等があり、3PS8~9地区では細い溝が2条平行しているように



第69図 溝33出土土器

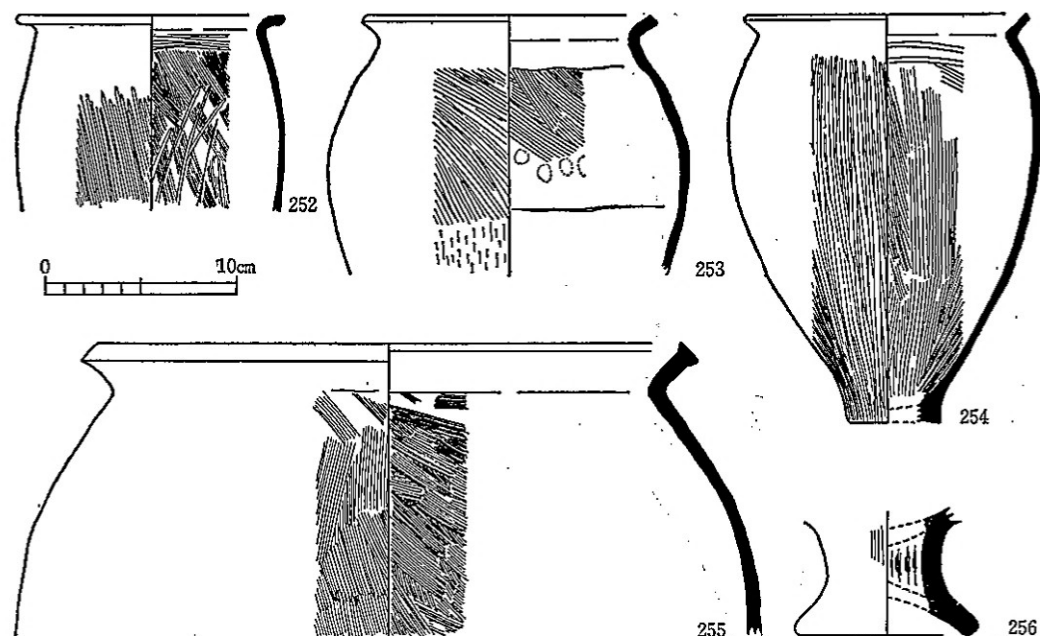
なっていた。埋土は、ほとんどが黒色粘土1層が堆積しているだけであるが、3P S 8 地区では、一部灰色砂層が堆積していた。遺物は、土器（第69図）の他に、石器（第103図 S-110、S-117、第106図 S-210、第109図 S-162・163）等を検出した。

<溝36>は、3P S 9 地区にあり、検出長2.0m、幅0.2m、深さ0.05~0.1mを測る。埋土は、灰黒色粘土が1層であり、遺物はほとんど含まない。非常に小規模な溝で、どのような性格を持つものかは全く不明である。

<溝37>は、3P S 9 地区にあり、検出長3.0m、幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.15mを測る。埋土は、灰黒色粘土が1層堆積していた。溝の規模は溝36とほぼ同じであるが、土器（第70図）を僅かに検出した。

<溝41~44>は、溝36、37とほとんど同じような規模の溝であり、検出長はそれぞれ1.0~1.3m、幅は0.2m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は、いずれも灰黒色粘土が1層である。これらの溝は弧を描いており、2条ずつ並行している。検出した時点では、4条の溝に分かれていたが、本来は2条の並行する溝であろう。このような細い溝は、3P S 9~11地区にのみ認められるもので、当調査区内の他の地区ではあまり認められない。遺物は、土器の小破片を僅かに検出した程度である。

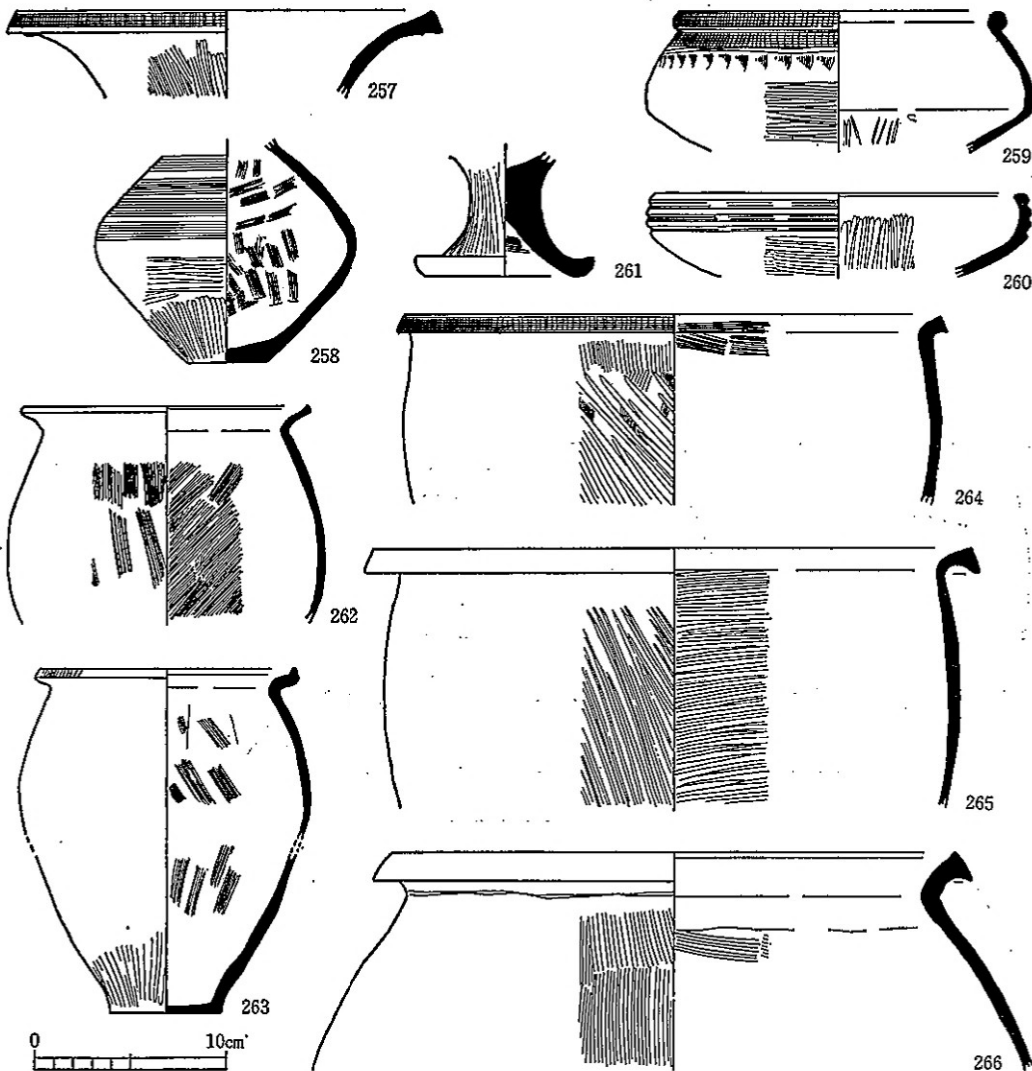
<溝45>は、3P R 11地区から3P S 10地区へ溝33の南を僅かに蛇行しながら延びる。検出長5m、幅0.1~0.2m、深さ0.05~0.1mを測る。溝36~44と同様な規模である。埋土は、灰黒色粘土が1層であり、遺物は、ほとんど含まない。このような溝の性格は明らかにし得ない。



第70図 溝 37 出 土 土 器

〈溝46〉は、3 P S11地区から始まり、西南に延びて3 P R12地区で終る。長さ6.5m、幅1.0～1.2m、深さ0.1～0.2mを測る。中央からやや東北寄りの約2 m部分は、更に0.2m深くなっている。この溝は、溝47により南肩を切られているが、溝47よりも深いために、下部はのこっていた。埋土は、下層に炭化物層が薄く堆積しており、その上に灰黒色粘土が堆積していた。灰黒色粘土には炭化物が多量に混入しており、深い部分には黒褐色粘土が堆積していた。遺物は、溝の規模の割には多く、土器（第71図）が主に出土し、紡錘車（第104図S-87）も検出した。

〈溝47〉は、3 P S11地区から始まり、西南に延びて3 P R12地区で終る。長さ 5.1m、幅 1.0 m、深さ 0.1mを測る。東端は部分的に深くなっており、径0.7～0.9m、深さ0.15mを測る。溝46の南肩を切って、並行しており、溝46よりは新しい遺構である。埋土は、暗灰色粘土が1層で



第71図 溝 46 出 土 土 器

ある。遺物は、非常に少なく、土器（第72図267）等を検出した。

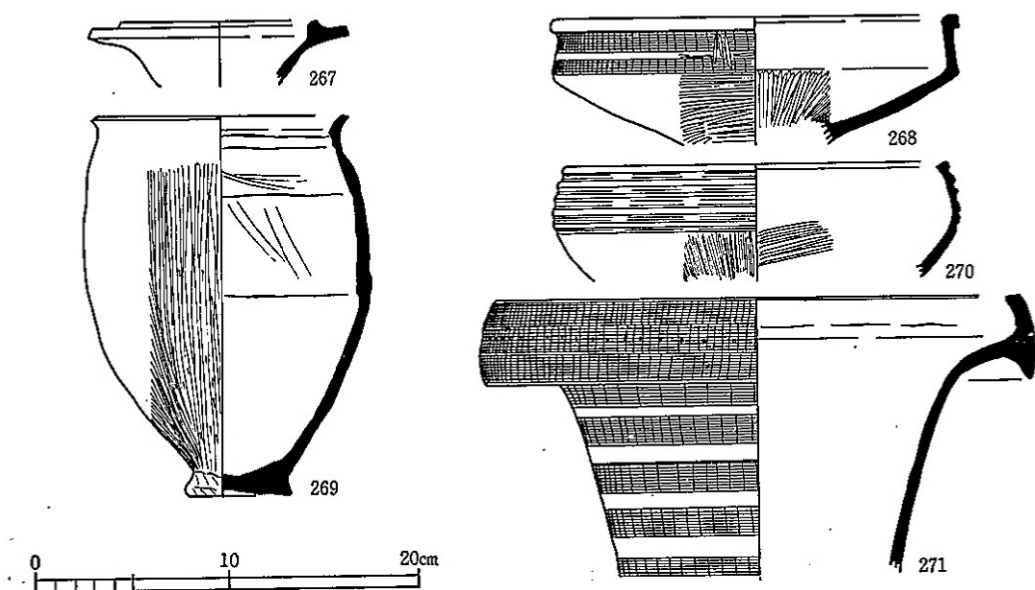
〈溝48〉は、3 P Q13地区から始まり、東北に延び、途中で土壙43・48に切れ、3 P S12地区で終る。検出長8.3m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は、暗灰色粘土が1層である。遺物は、非常に少なかった。

〈溝54〉は、3 P P17地区から始まり、南に延び、3 P P18地区に続く。南端は土壙74に切られる。検出長1.7m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は、炭化物を多く含む黒灰色砂質土が1層である。遺物は、土器（第72図268）等を検出した。

〈溝56〉は、3 P P18地区にあり、南北に延び、調査地区外へ続く。検出長3.7m、幅0.6m、深さ0.2~0.35mを測る。この溝の中央部が深く、両端にいくにつれ、浅くなる。埋土は、下層に炭化物を多量に含む黒色粘土、上層に暗灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器（第72図269）等を検出した。

〈溝61〉は、3 P Q18地区から東に延び、3 P R19地区で北に曲がり、土壙125に当たる。検出長5m、幅0.7m、深さ0.2~0.3mを測る。埋土は、黒色粘土が1層堆積していた。この溝は土壙125から3 P Q19地区に向って流れるようである。遺物は少なく、土器（第72図270）等を検出した。

〈溝62〉は、3 P S19地区から始まり、溝61と土壙125の接点に向って真直ぐ西へ延びている。3 P S19地区は削られてしまっている。検出長4m、幅0.7~1.2m、深さ0.1~0.2mを測る。中央部南側に、長さ1.0m、幅0.5m、深さ0.2~0.35mの深い部分がある。埋土は、黒色粘土が1層である。遺物は少なく、土器（第72図271）等を検出した。溝61と同一の溝であろう。

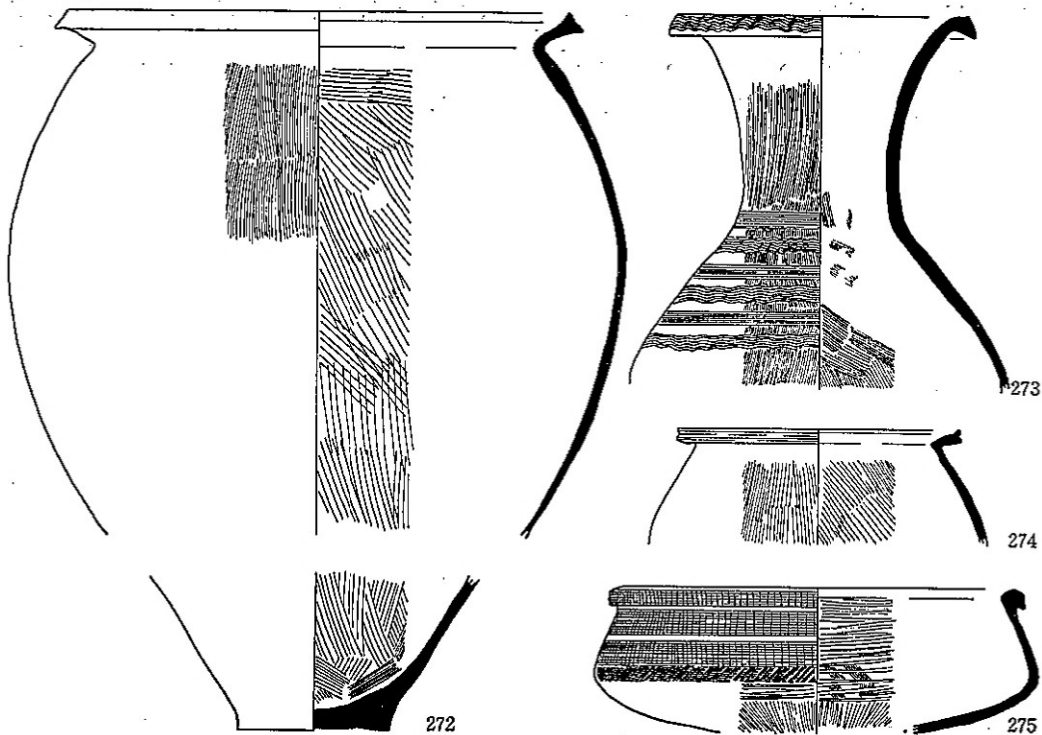


第72図 溝47 (267)、溝54 (268)、溝56 (269)、溝61 (270)、溝62 (271) 出土土器

<溝67>は、3 P U17地区から始まり、溝69に添って北東に蛇行し、3 P T16地区で中期遺構面Ⅱの第9号方形周溝墓の北周溝に切られる。検出長は2.7m、幅は0.4~0.1m、深さは0.05~0.1mを測る。埋土は、暗灰色砂質土が1層堆積していただけである。遺物は、ほとんど含まれていなかった。

<溝69>は、3 P U19地区から始まり、北に延びて、3 P T17地区へ続く。3 P T17地区で、幅が先ほそりとなり、深さも浅くなっている。検出長は6.2m、幅は0.15~0.7m、深さは0.1~0.25mを測る。埋土は、下層に暗灰色微砂、上層に暗灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器（第73図272）を検出した程度である。この土器は、溝のほぼ中央部に押しつぶされた状態で検出した。この下層に、径1.0m、深さ0.1mの不定形な土窟があり、溝69に切られるため肩口は、明確にし得なかった。溝69と溝67は、同一の溝とも考えられる。

<溝72>は、3 P S18地区から南に延び、3 P T19地区で向きを変え東に延びて、3 P U19地区で再び向きを北東に変え、調査区外へ続く。U字形を呈する溝である。3 P S18地区では土窟121に切られる。3 P T19地区では、一部分南側へ広がるため南へ延びる別の溝の可能性もある。検出長7.8m、幅0.4~0.1m、深さ0.1~0.25mを測る。この溝は、3 P T19地区の変換点で段を持ち、1箇所深い部分がある。埋土は、灰色粘土と黒色炭化物のブロックを含む暗灰色砂質土である。遺物は、土器（第73図273~275）等を検出した。



第73図 溝69 (272)、溝72 (273~275) 出土土器 (34)

〈溝74〉は、3 P R20地区から始まり、北東に延び、3 P S19地区へ続く。北東端は、中期遺構面Ⅱに伴う第8号方形周溝墓のために削られてしまっている。検出長は6.1m、幅は0.4~0.6m、深さは0.15mを測る浅い溝である。埋土は、黒色粘土が1層堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。この溝の付近は、ビットが集中しており、この溝も数個のビットにより切られている。

〈溝75〉は、3 P Q20地区において検出した。南北に長く、南端はやや東を向く。長さは3.0m、幅は0.7~1.2m、深さは0.1~0.2mを測る。埋土は、暗灰色粘土が1層堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。この溝は、遺構面Ⅱに伴う第8号方形周溝墓の西南隅部にあたるが、周溝ではなく、遺構面Ⅰに伴う溝である。

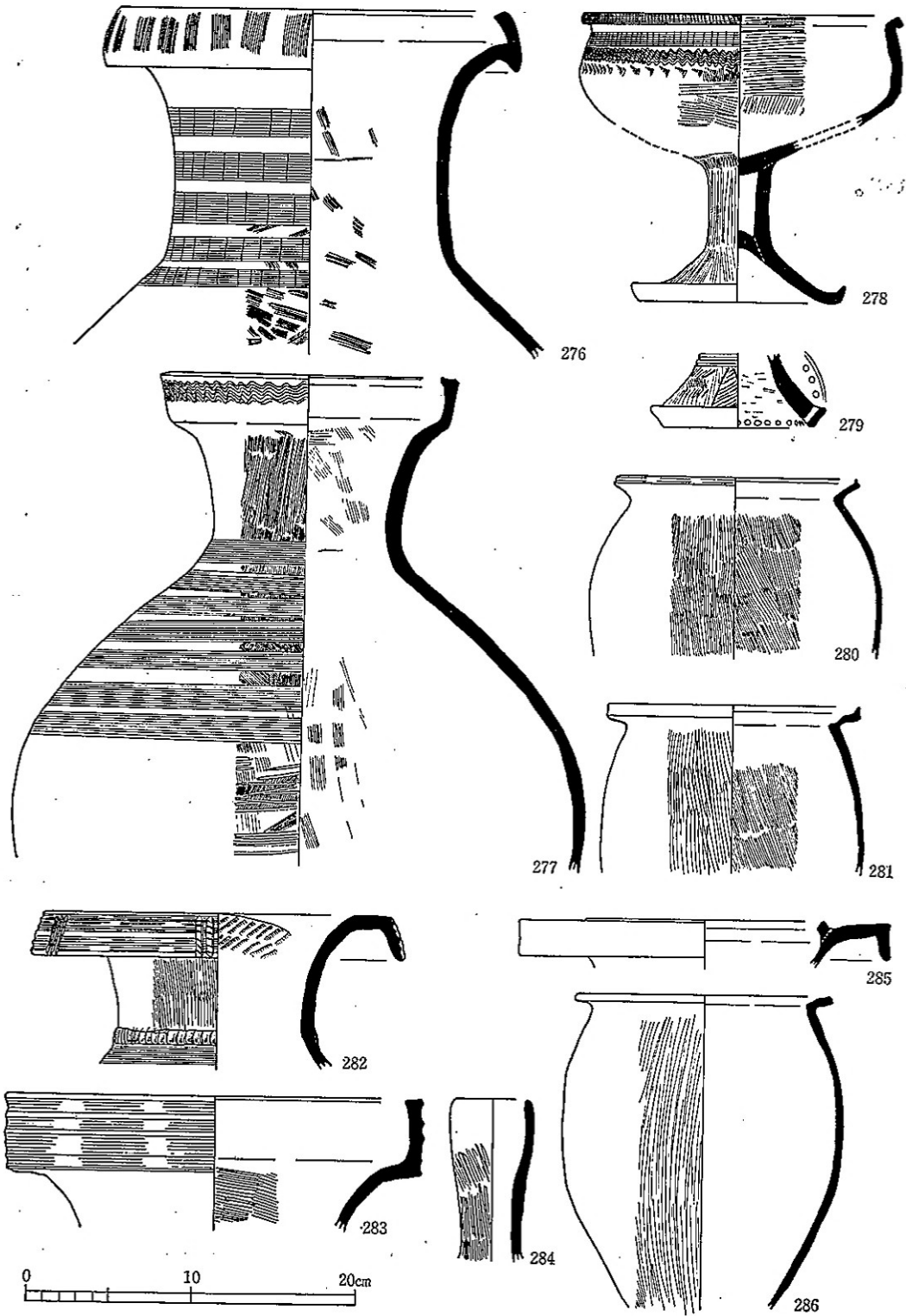
〈溝76〉は、3 P R19地区から始まり、南へ延び、3 P R20地区で西へ曲がる。長さは8.5m、幅は1.0m、深さは0.1~0.2mを測る。埋土は、黒色粘土が1層堆積していた。この溝には3基の土壙が接している。そのうちの土壙128は、埋土が黒色粘土で、溝と同じである。しかし、同一の遺構か、別の遺構かは明らかにし得ない。遺物は、土器（第74図276~281）を検出したが、台付鉢形土器（278）と高杯形土器の脚台（279）の2点は、土壙128から検出したものである。

〈溝77〉は、3 P R21地区において検出した。東に口を開いた径2.5mの半円形に廻る溝である。長さは5.8m、幅は0.3m、深さは0.15mを測る。埋土は、灰黒色粘土が1層堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。この溝に囲まれた部分に、径1.2m、深さ0.15mの円形の土壙140を検出した。この土壙が溝と関連するものか、別の遺構になるのかは明らかにし得ない。

〈隅丸方形周溝〉は、3 P S5・6地区において検出した。長軸5.3m、短軸4.6mを測る。南北にやや長い隅丸方形を呈している。幅は、南北方向がやや広く0.4~0.5m、東西方向が0.15~0.25m。深さは0.1~0.3mを測る。肩口からほぼ垂直に掘られている。この溝の北東部は、後期遺構面Ⅰに伴う河川4が流れており、かなり削られ深さ10cm前後と浅くなっている。埋土は、南半部に黒色炭化物層と黒色砂質土が互層をなして堆積しており、北半部に灰青色砂混りの粘土が堆積していた。

この溝は、溝33が埋没した後に掘られている。溝33よりは新しい遺構である。遺物は、土器（第74図282~286）や、木製の鋤（第117図W-37）等を検出した。木製の鋤は一本作りで、本来は長い柄を持っていたものと思われる。

この溝が埋没した後に、3 P S6付近以南に、灰色粘土および黄色粗砂のブロックを含む暗灰色砂質土が堆積していた。この暗灰色砂質土は方形周溝墓の盛土と類似している。しかし、暗灰色砂質土の分布範囲や溝の規模等を考えると、方形周溝墓の可能性は少ないようである。なお、主体部も全く検出しておらず、周溝内側のビット等は、周溝が掘られる以前、溝33の埋没後に掘られたようであり、周溝との関連性はないようである。この隅丸方形周溝の性格は明らかにし得なかった。



第74図 溝76・土塚128 (276~281)、隅丸方形周溝 (282~286) 出土土器

B 土壌 土壌は、当調査地区においては溝と同様に多数検出した。約130の土壌を検出したが、地区によって多少土壌の形態が異なっている。土壌の持つ性格が地区により異なっていると考えられる。

<土壌14>は、3 P O 3 地区において約 $\frac{1}{4}$ を検出した。残りは調査区外へ続く。中期遺構面Ⅱに伴う溝200の第3層下で検出した。検出長1.8m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。浅い土壌である。東端部には針葉樹の樹皮を下に敷いたものか、自然に堆積したのかは明らかにし得ないが、厚さ5cm堆積していた。埋土は、下層に暗茶色の腐植土、上層に黒灰色粘土が堆積していた。遺物は、土器を東端部の樹皮上で検出し、他の部分ではほとんど検出しなかった。

<土壌15>は、3 P O 3 地区において検出した。中期遺構面Ⅱに伴う溝200の第3層に上部を削られているため、実際の大きさは明らかにし得ない。なお、溝200内にある大きな落込の可能性も考えられるが、ここでは中期遺構面Ⅰに伴うものとして記述する。

東西にやや長い楕円形で、検出長1.6m、検出幅1.2m、深さ0.3mを測る。浅い摺鉢状を呈している。埋土は、植物の炭化した黒色炭化物と灰白色細砂とが互層をなしている。遺物は、土器を相当検出した。この土壌は、埋土に炭化物を多量に含んでおり、土壌14・16とは異なった性格を持っているようである。

<土壌16>は、3 P P 3 ~ 3 P Q 3 地区において検出した。土壌14と同様に、中期遺構面Ⅱに伴う溝200の第3層下から検出した。東西に長いやや不定形な土壌である。掘り込み面は、灰緑色粘質土である。長さは5.2m、幅は0.8~1.1mを測る。西側部分では深さは0.25mを測る。また、東端部は、長径1.6m、短径1.1mのやや不整な楕円形を呈しており、深さも西側部分に比べて、0.35mとやや深くなり摺鉢状を呈している。埋土は、東端部で下層に灰緑色粘土、中層に土壌14と同様な針葉樹と思われる樹皮が薄く敷かれ、上層に黒灰色砂質土が堆積していた。西側部分は、暗茶色の腐植土混りの灰緑色粘土が堆積していた。遺物は、東端部には多量の土器片が含まれるが、西側部分では全くといってよい程含まれておらず、僅かに木片等を含む程度である。以上のことから、東端部と西側部分では様相が少し異なっており、別の遺構の可能性も充分に考えられる。

<土壌17>は、3 P T 4 ・ 3 P U 4 地区で検出した。長径は1.2m、短径は1.0m、深さは0.85mを測る。円に近い楕円形を呈している。ほとんど垂直に掘られる深い土壌である。この土壌は、溝21の下層で確認、検出したもので、上部は溝21に削られてしまっているようである。とすれば、かなり深い土壌になる。埋土は、下層に腐植物混りの茶褐色粘土、中層に灰褐色粘土、上層に暗灰色粘土が堆積していた。遺物は、中層から土器（第75図287）等を検出し、また、こぶし大の自然石を2個検出した。形態からは井戸かとも考えられる。

<土壌26>は、3 P O 7 ・ 8、3 P P 7 ・ 8 地区において検出した。長さ2.8m、幅2.0m、深さ0.15mを測る隅丸方形の土壌である。浅い摺鉢状を呈している。このあたりは灰緑色細砂層の上

層に黄灰色粗砂が堆積しており、この砂層を遺構の切り込み面としている。埋土は、炭化物を多量に含む黒灰色砂質土が1層堆積していた。遺物は、土器片を僅かに検出したにすぎない。

<土壌28>は、3P07地区において検出した。長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.2mを測る長方形の浅い土壌である。埋土は、炭化物を含む黒灰色粘質土である。遺物は、土器片を僅かに含む。中期遺構面Ⅱに伴う河川1により上部を削平されている。

<土壌30>は、3P08・3PP8地区において検出した。長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.1mを測る浅い不定形の土壌である。埋土は、暗灰色粘質土が1層である。遺物は、土器片を僅かに含む程度である。

<土壌33>は、3P08・3PP8地区において検出した。長さ2.8m、幅1.8m、深さ0.15～0.25mを測る不定形の土壌である。埋土は、炭化物を含む黒灰色粘質土が1層である。遺物は、土器片を僅かに含んでいる。

<土壌34>は、3P08地区において検出した。長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.1mを測る不定形の土壌である。埋土は、灰黒色砂質土が1層だけである。遺物は、ほとんど検出しなかった。

<土壌35>は、3PP8地区において検出した。この付近の遺構は切り合いが激しく、溝24を切っており、溝28や、中期遺構面Ⅱに伴う土壌268に切られている。検出長は1.2m、幅は1.0m、深さは0.1mを測る。浅い不定形な土壌である。埋土は、炭化物を僅かに含む暗灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器片を少量検出した。

<土壌36>は、3PP9地区において検出した。直径1.3m、深さ0.15mを測る。円形に近い浅い土壌である。埋土は、黒色砂質土が1層である。遺物は、ほとんど含まない。

この土壌の外側を溝28が廻っている。溝28は、長径2.6m、短径2.2m、幅0.2～0.9m、深さ0.15mを測る。北東が狭く、南東が幅広くなっている。埋土は、黒灰色砂質土が1層堆積していた。この溝からも遺物はほとんど検出していない。

これらの関連性や遺構の性格については全く不明である。なお、これと類似する例として、溝77と土壌140がある。同様の遺構と考えられる。

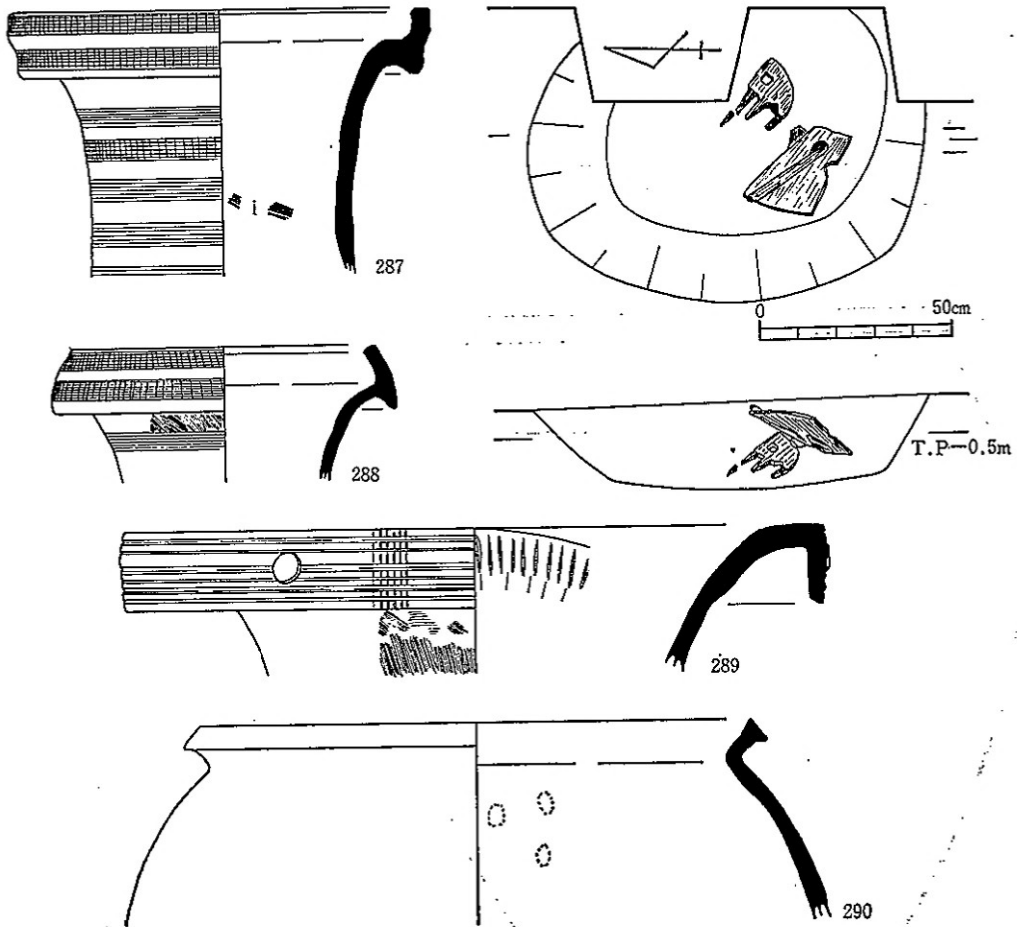
<土壌37>は、3PP9～3PQ9地区において検出した不定形の土壌である。南端は調査区外へ続いたため、全形を明らかにし得なかった。検出長は4.8m、幅は1.5m、深さは0.25mを測る。3PP9地区でわずかな段を有している。底部は、凹凸が激しい。

埋土は、青灰色微砂混りの暗灰色粘質土が堆積していた。この層は下へいくにつれ、粘土質が強くなる。遺物は、僅かに土器片を検出した程度である。形態からは、溝かとも考えられる。

<土壌38>は、3P09地区において検出した。長径0.5m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。ほぼ円形の浅い土壌である。溝25により北端部分を切られている。埋土は、暗灰色粘質土が1層である。遺物は、ほとんど検出しなかった。

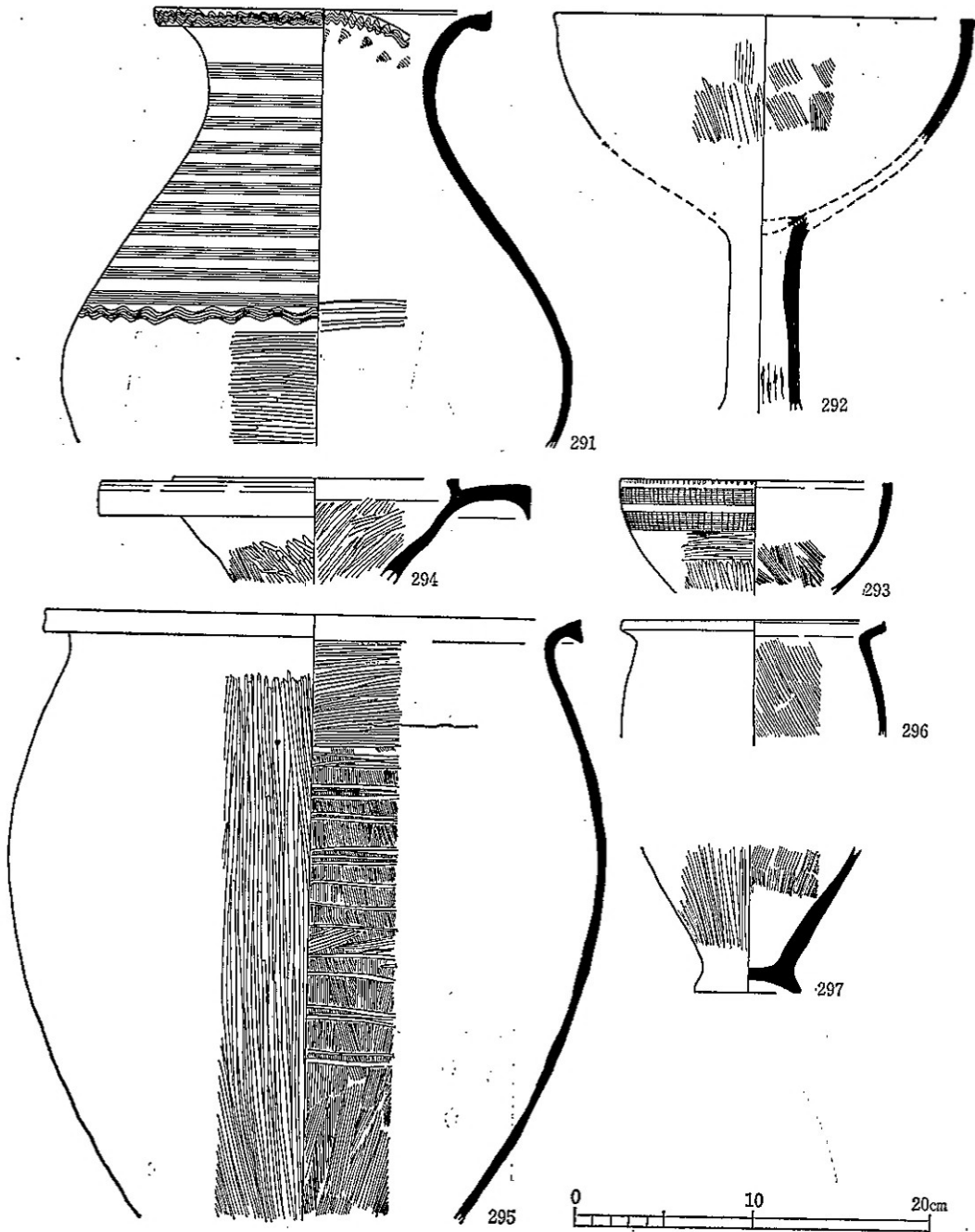
〈土坑41〉は、3 P S11地区において約 $\frac{1}{4}$ を検出した。残りは調査区外へ続く。径 1.0mの不整形円形で、深さ 0.3mを測る浅い土坑である。埋土は、下層に黒色粘土が25cm、上層に灰黒色砂が5cm堆積していた。遺物は少なく、土器（第75図288）と、木製の広鋏（第114図W-23）、又鋏（第114図W-21）等を検出した。鋏は製品であり、広鋏には一部欠失した短い柄が伴出したが、広鋏の柄になるものかどうかは明らかにし得ない。又鋏は約 $\frac{1}{4}$ を検出した。本来は、完形であったものが、調査区に鋼矢板を打込むため、その時点で欠失した可能性が十分に考えられる。

〈土坑42〉は、3 P Q12地区において検出した。径 3.5mの不定形であり、深さ 0.2mと浅い摺鉢状を呈している。埋土は、下層に炭化物層が10cm、上層に炭化物混りの黄灰色粗砂が10cm堆積していた。遺物は、土器（第75図289・290）等を検出した程度である。この土坑付近は遺構面が高くなっており、中期遺構面Ⅱで認めたが、方形周溝墓との関係により遺構面Ⅰとして取扱った。



第75図 土坑17(287)、土坑41(288)、土坑42(289・290)出土土器(1/4)及び土坑41木製品出土状況図

〈土壙43〉は、3 P S12地区において部分的に検出した。東端は調査区外へ続くため、全体のどの程度検出したかは不明である。検出長 3.0m、幅1.5~2.2m、深さ0.35mを測る不定形の土壙である。埋土は、下層に黒褐色粘土が20cm、上層に灰黒色粘土が15cm堆積していた。遺物は、土器（第76図）と用途不明の木製品（第117図W-34）等を、主として下層から検出した。



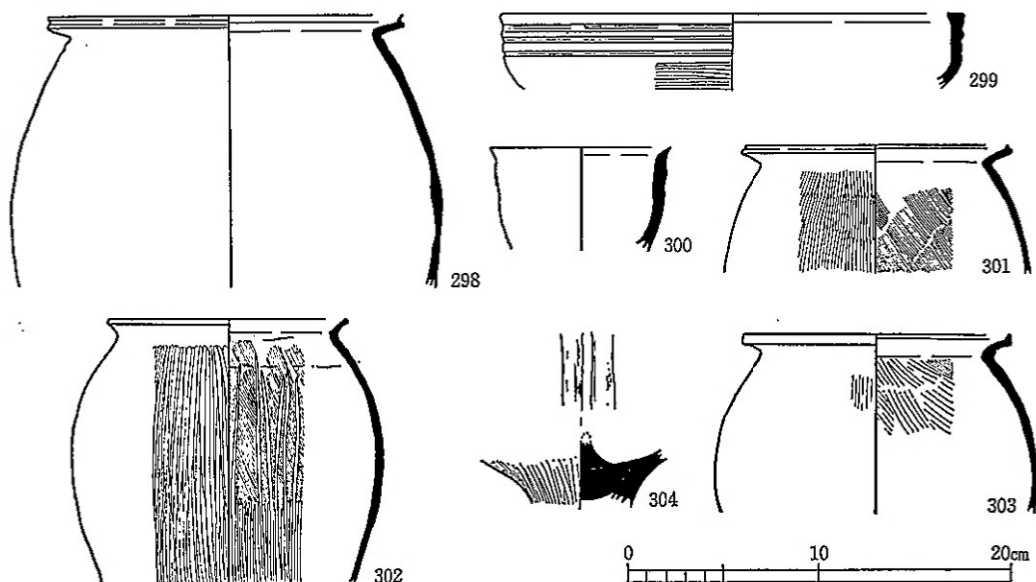
第76図 土壙 43 出土土器

〈土壙48〉は、3 P R12・13地区において検出した。長さ5.0m、幅1.5～2.8m、深さ0.3mを測る不定形な土壙である。埋土は、下層に炭化物層が15cm、上層に黒色粘土が15cm堆積していた。遺物は、土器（第77図 298）等を主に下層から検出した。この土壙は溝48を切っており、溝48よりは新しい遺構である。

〈土壙50〉は、3 P O17地区において、約 $\frac{1}{4}$ を検出した。北端は調査区外へ続く。検出長径 1.4m、短径0.6m、深さ0.2mを測る楕円形の土壙である。底部には2箇所凹みを持つ。埋土は、下層に暗灰色砂質土、中層に薄く炭化物層を挟み、上層に黒色砂性粘質土が堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。

〈土壙51〉は、3 P O17地区において、ほぼ全体を検出した。西端は僅かに調査区外へ続くようである。検出長径 1.2m、短径 1.0m、深さ0.35mを測る楕円形の土壙である。肩口からはほぼ垂直に掘られている。埋土は、暗灰色砂質土が1層だけ堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。

〈土壙53〉は、3 P P17・3 P Q17地区において検出した。北端が調査区外へ続くため、どの程度検出できたかは不明である。検出長2.8m、幅1.4m、深さ0.25mを測る不定形の土壙である。埋土は、下層に暗灰色粘質土、上層に黒色粘質土が堆積していた。遺物は、土器（第77図 299～304）等を検出した。器種は、甕形土器が多く、高杯形土器も出土している。第77図（304）は、高杯形土器の杯底部破片である。杯底部内面に、高さ2cm弱の凸帯を貼り付けることにより、仕切っている。凸帯を貼り付ける時に、横方向のヘラケズリを施しているため、内面の仕上がりは、雑である。外面は、ヘラミガキ調整を施しており、生駒西麓産の土器である。



第77図 土壙48（298）、土壙53（299～304）出土土器

<土壙55>は、3 P O17地区において検出した。長さ1.7m、幅1.55m、深さ0.2mを測る浅い不定形な土壙である。埋土は、下層に灰色炭化物層、中層に黒色炭化物層、上層に黒灰色砂質土が堆積していた。遺物はほとんど含まれていない。

<土壙56>は、3 P O17地区において検出した。長径は1.0m、短径は0.75m、深さは0.1mを測る浅い楕円形を呈する土壙である。埋土は、暗灰色砂質土が1層だけ堆積していた。遺物は、土壙55と同様に、ほとんど検出しなかった。この土壙は、土壙55を切っており、土壙55よりは新しい遺構である。

<土壙63>は、3 P P18地区において検出した。長径は2.1m、短径は1.3m、深さは0.25mを測る浅い楕円形の土壙である。埋土は、下層に黒色砂質土、上層に灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器（第78図305～310）等を検出した。その他には、板材を検出した程度である。この土壙は、何本かの溝を切っている。

<土壙65>は、3 P P18・3 P Q18地区において検出した。長さは2.75m、幅は0.9～1.5m、深さは0.15mを測り、南北にやや長くL字型をした浅い土壙である。埋土は、下層に部分的に黒色炭化物層が薄く堆積し、上層に黒灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器（第78図311～313）等を僅かに検出したにすぎない。この溝も土壙63と同様に何本かの溝を切っており、土壙65よりは後出する数個のピットが穿たれている。

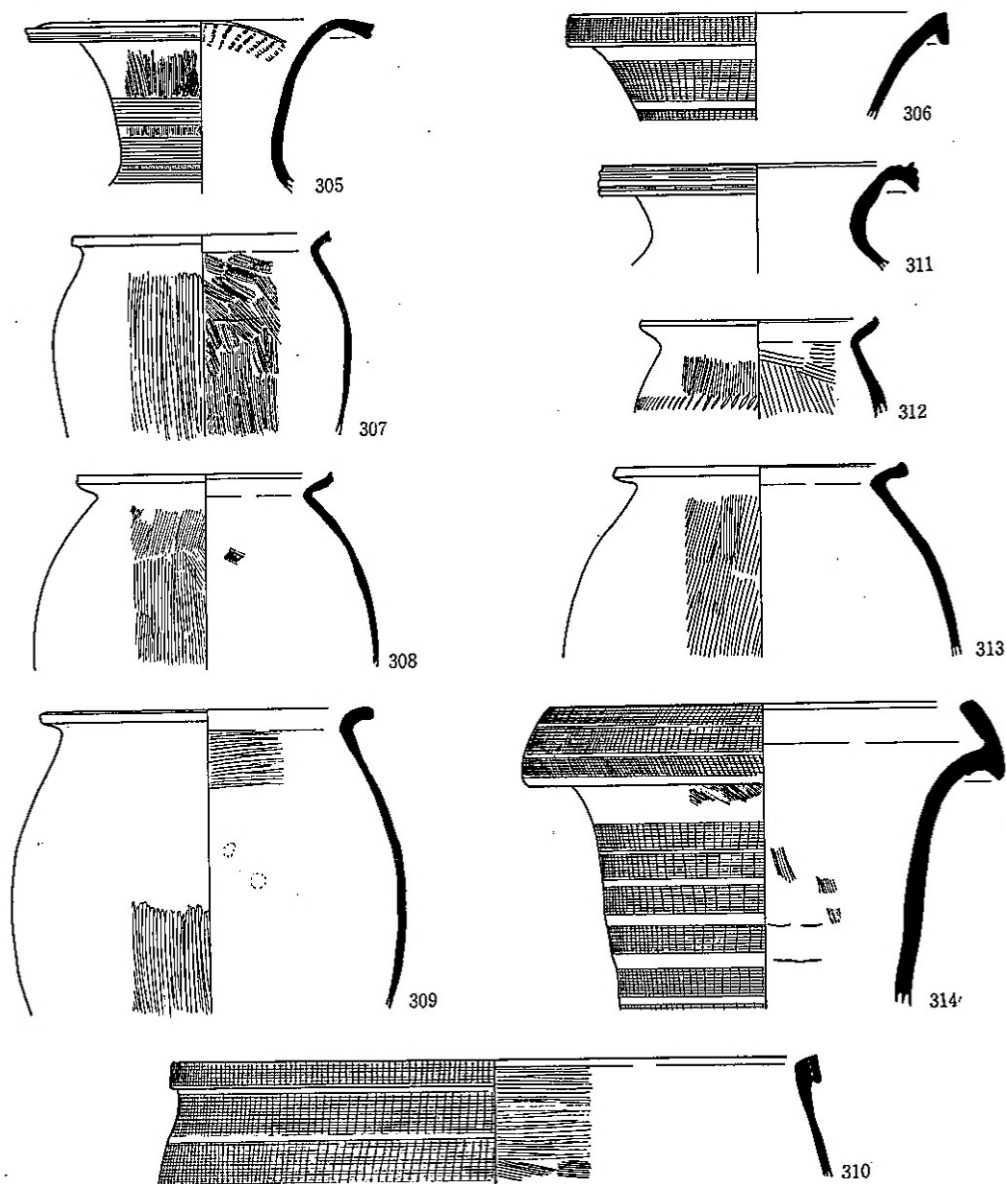
<土壙79>は、3 P Q17地区において検出した。長径は1.7m、短径は1.4m、深さは0.7mを測る楕円形の2段掘り土壙である。1段目は深さ20cmでほぼ垂直に掘られ、そこで平坦面をつくっている。2段目は径0.5mの円形でほぼ垂直に50cm掘られている。埋土は、4層に分けられる。下層から灰黒色粘土が20cm、黒褐色粘土が20cm、黒色粘土が10cm、最上層に灰黒色砂（黒色粘土混り）が20cm堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。形態からは井戸かとも考えられる。

<土壙81>は、3 P S17地区において検出した。長径は0.55m、短径は0.3m、深さは0.55mを測る楕円形の2段掘り土壙である。ほぼ垂直に35cm掘り込まれ、そこで平坦面をなし、更に直径0.4m、深さ20cm垂直に掘り込まれている。

埋土は、下層に灰色粘土ブロックを含む茶褐色粘土、上層に茶褐色粘土ブロックを含む黒色砂土が堆積していた。下段からは、長さ48cmの板材を検出した。この板材は土壙の大きさよりも長い。底部に水平に置かれていた。また、斜めにさし込まれた板材もあり、土壙の壁をつき破っている。これらから考え合わせると、掘立柱の掘方かとも思われる。しかし柱痕は検出できなかった。

遺物は、土器（第78図314）を検出した程度である。この土器は、広口壺形土器Bの口頸部破片で、筒状の頸部から大きく外反する口縁部をさらに上・下に拡張させる。口縁部の拡張部は、広い面をなす。口縁部端面と頸部に簾状紋を施している。生駒西麓産の土器である。

〈土壙88〉は、3 P T17地区において検出した。南北に長い土壙で北端は調査区外へ続くため、どの程度検出したかは不明である。検出長は2.4m、幅は0.8m、深さは0.35mを測るやや浅い土壙である。肩口は、ほぼ垂直に掘り込まれている。底部は、中央付近が部分的に凹みを有している。埋土は、下層に炭化物と灰緑色粘土ブロック混りの黒色粘質土、中層に黒灰色砂質土、上層に炭化物を多量に含む黒灰色粘質土が堆積していた。この土壙は、一旦埋め戻された後、再び使用された可能性が考えられる。遺物は、土器片を僅かに検出した程度であり、大きさの割には遺物が少ない土壙である。



第78図 土壙63 (305~310)、土壙65 (311~313)、土壙81 (314) 出土土器 (1/4)

〈土壙 104〉は、3 P S17地区において検出した。中期遺構面Ⅱに伴う第9号方形周溝墓の北西隅にあたり、周溝によって切られているが、周溝よりも深いために残っていた。長径 1.0m、短径0.8m、深さ0.7mを測る円形に近い土壙である。肩口からは、ほぼ垂直に掘られている。本来はかなり深い土壙であろう。埋土は、黒褐色腐植土混りの黒灰色粘質砂土が1層堆積してただけである。遺物は、土器（第79図 315）をほぼ完形に近い状態で検出した。形態からは井戸かとも考えられる。

〈土壙 105〉は、3 P S17地区において検出した。この土壙も中期遺構面Ⅱに伴う第9号方形周溝墓の北西隅にあたり、周溝によって上部を削られている。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.9mを測る楕円形の土壙である。この土壙は大ききの割に深さがあり、本来は1m以上あるようである。肩口からはほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は、腐植土を僅かに含む暗灰色砂質土が1層堆積してただけである。遺物は、僅かに土器片や木片を検出した。その他には、上部からほぼ完形に近い状態のヒョウタンの果実を検出した（付章—Ⅲ参照）。土壙 104と同様に、形態からは井戸かとも考えられる。

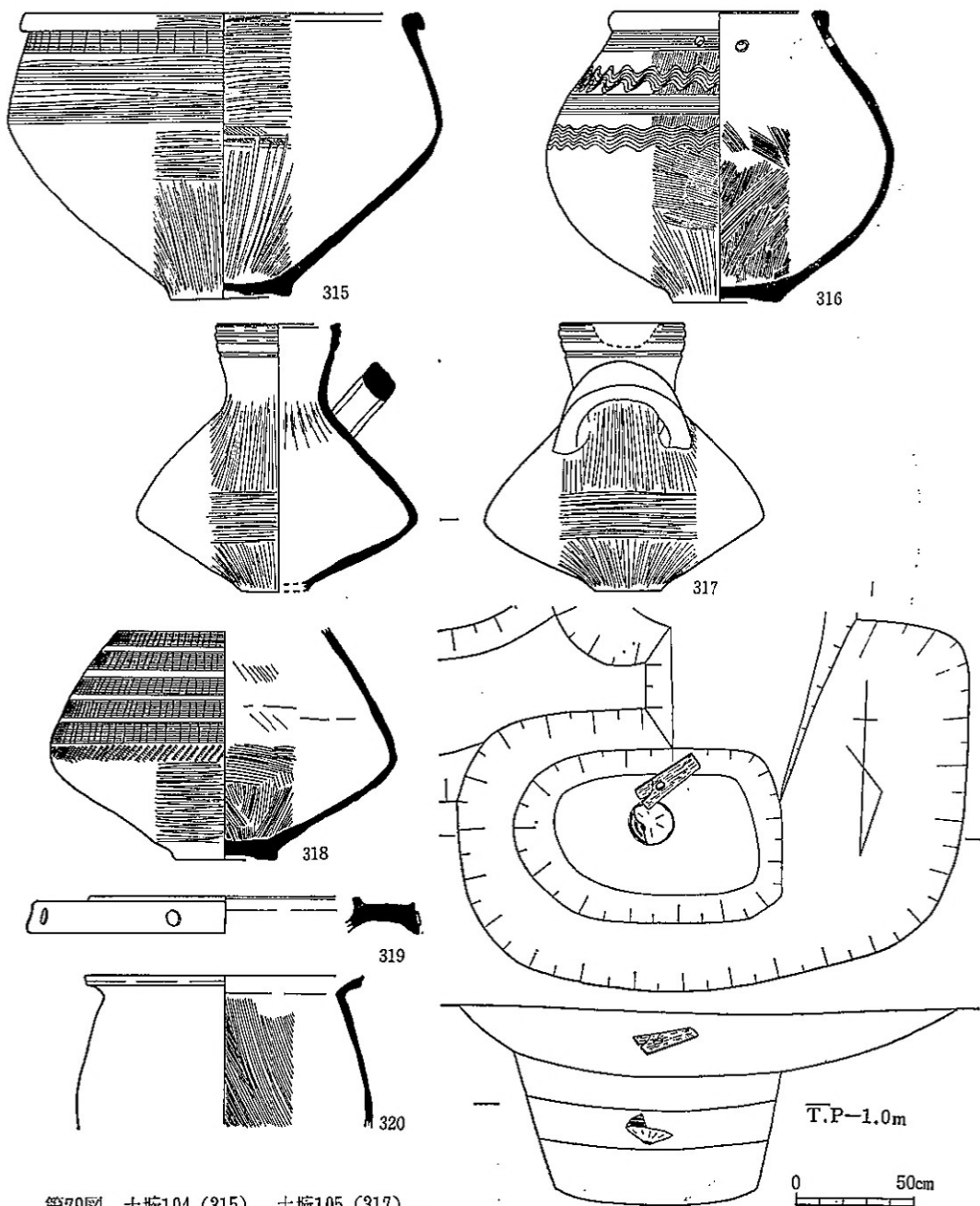
〈土壙 118〉は、3 P S18地区において検出した。この土壙も、土壙104、105と同様に、遺構面Ⅱに伴う第9号方形周溝墓の周溝により、上部を削られており、東肩と西肩で高低差がある。長径1.4m、短径1.0m、深さ0.4m（東肩部より）を測る楕円形で摺鉢形の土壙である。埋土は、下層に暗灰色砂質土、上層に黒灰色砂質土が堆積していた。遺物は、土器（第79図 317）を完形に近い状態で検出した。

〈土壙 119〉は、3 P S18地区において中期遺構面Ⅱに伴う第9号方形周溝墓下層で確認、検出した。長径1.8m、短径1.7m、深さ0.7mを測るほぼ円形に近い2段掘りの土壙である。1段目は深さ10cmで摺鉢状に掘られている。2段目は長径1.3m、短径1.0mの楕円形で、ほぼ垂直に60cm掘られている。埋土は、下層に暗灰色砂質土、中層に暗茶色の腐植物層が2・3cm堆積しており、上層に炭化物を含む黒灰色砂質土が堆積していた。

遺物は、土器（第79図316）等を検出した。この土器は、無頸壺形土器Cで、ほぼ完形に近い状態で下層から出土した。体部上半外面に櫛描直線紋と波状紋を組み合わせて施し、体部上端に、2個1組の紐孔を穿っている。その他には、ヒョウタンの種子を数点検出した。この土壙は、形態からは井戸かとも考えられる。

〈土壙 125〉は、3 P Q18地区において検出した。長さ2.1m、幅1.0~1.5m、深さ0.8mを測る長方形の2段掘り土壙である。1段目は深さ 0.3mで摺鉢状に掘られている。2段目は長さ 1.3m、幅0.8mの長方形で、ほぼ垂直に0.5m掘られている。埋土は4層に分けられ、下層から灰黒色粘土が20cm、黒褐色粘土が20cm、黒灰色粘土が10cm、黒色粘土が30cm堆積していた。遺物は少なく、黒色粘土層から木製の狭鋏（第116図W-30）、黒褐色粘土層から土器（第79図318）等を検出した。形態からは井戸かとも考えられる。

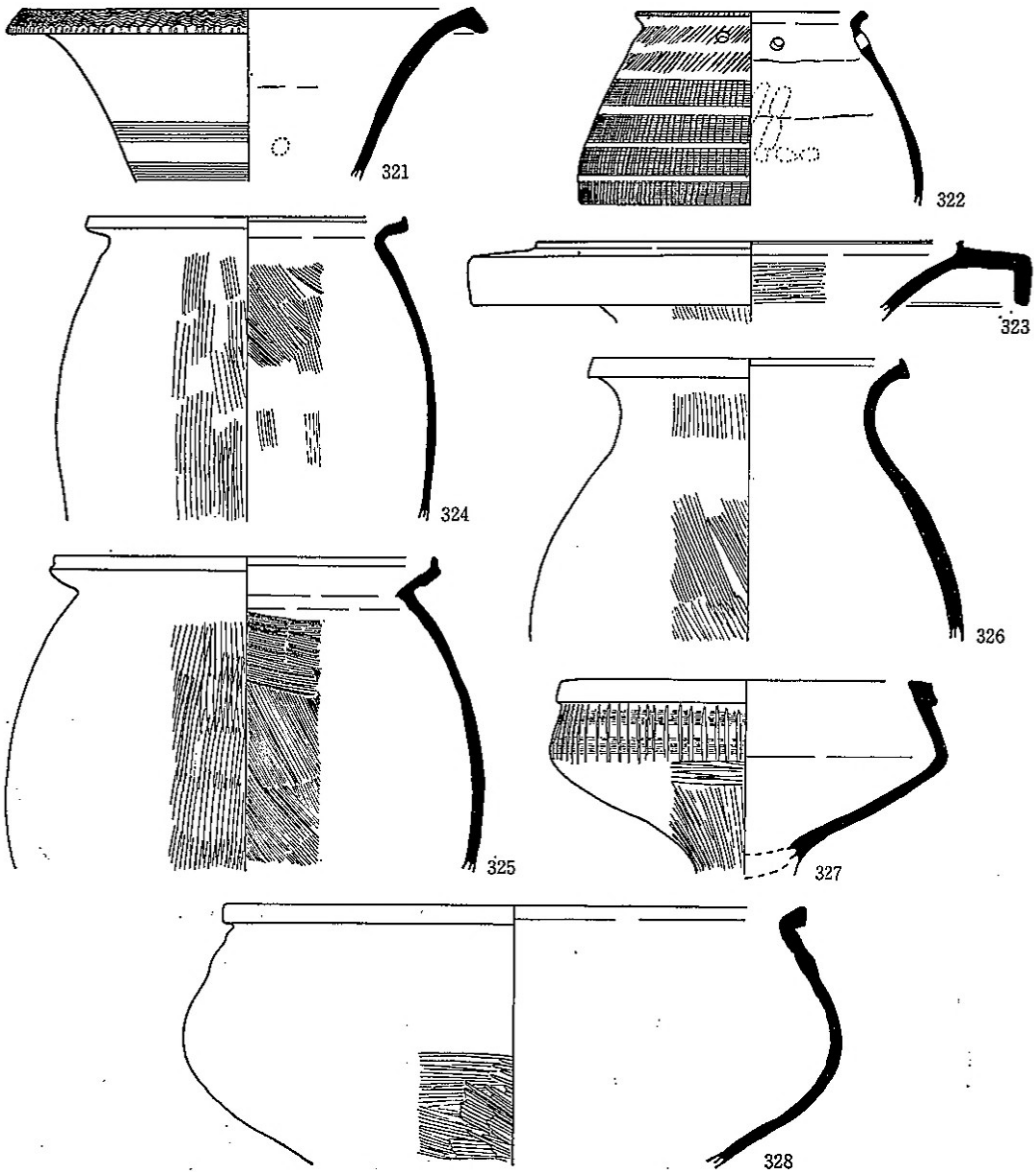
〈土坑130〉は、3PR20地区において検出した。長さ2.4m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。溝76に接しており、溝底からの深さは0.25mを測る。埋土は、下層に灰黒色粘土が25cm、上層に黒色粘土が15cm堆積しており、上層は溝76と明確に分離できない。遺物は、土器(第79図319・320)等を検出した。



第79図 土坑104 (315)、土坑105 (317)、
土坑79 (316)、土坑125 (318)、土坑130 (319・320) 出土土器 (4)、土坑125遺物出土状況

<土壙 140>は、3 P R 21地区において検出した。径 1.2m、深さ0.15mを測る円形の浅い土壙である。埋土は、炭化物混りの灰黒色土である。遺物は、土器（第80図321～325）等を多く検出した。この土壙を囲むように溝77があり、関連性や遺構の性格等については全く不明である。

<土壙 141>は、3 P Q ・ R 21地区において検出した。長径3.3m、短径2.0m、深さ1.1mを測る楕円形の土壙である。埋土は、5層に分けられ、下層から灰色砂が25～70cm、周囲に黒灰色砂が40～85cm、中央部に5cmの褐色腐植土を挟んで灰黒色粘土が5cm堆積していた。遺物は、土器（第80図326～328）を主として灰黒色粘土層から検出した。



第80図 土壙140 (321～325)、土壙141 (326～328) 出土土器 (片)

C ピット

ピットは、当調査地区において400個以上確認、検出した。3P17地区以南に多く、北半部では少ない。径0.1~0.8mのものまで、大小、深さ等さまざまである。径0.2~0.3mのピットが大半を占めている。柱根や礎板の残っているものも少しある。

〈ピット325〉は、3PU5地区において検出した。このピットは柱根が残っており直径12cmを測る。柱根の先端は水平に切られ、幅6cmの枿を穿っている。根絡みは検出されなかった。

3PR4地区の〈ピット371〉、3PT18地区の〈ピット596〉は、柱根の直径13、10.5cmを測り、先端を1方向から削っている。

3PT18地区の〈ピット581〉、3PT19地区の〈ピット660〉、3PT19地区の〈ピット676〉は、柱根の直径が、それぞれ8.5、9、10.5cmを測る。これらは先端を相対する2方向から削っている。

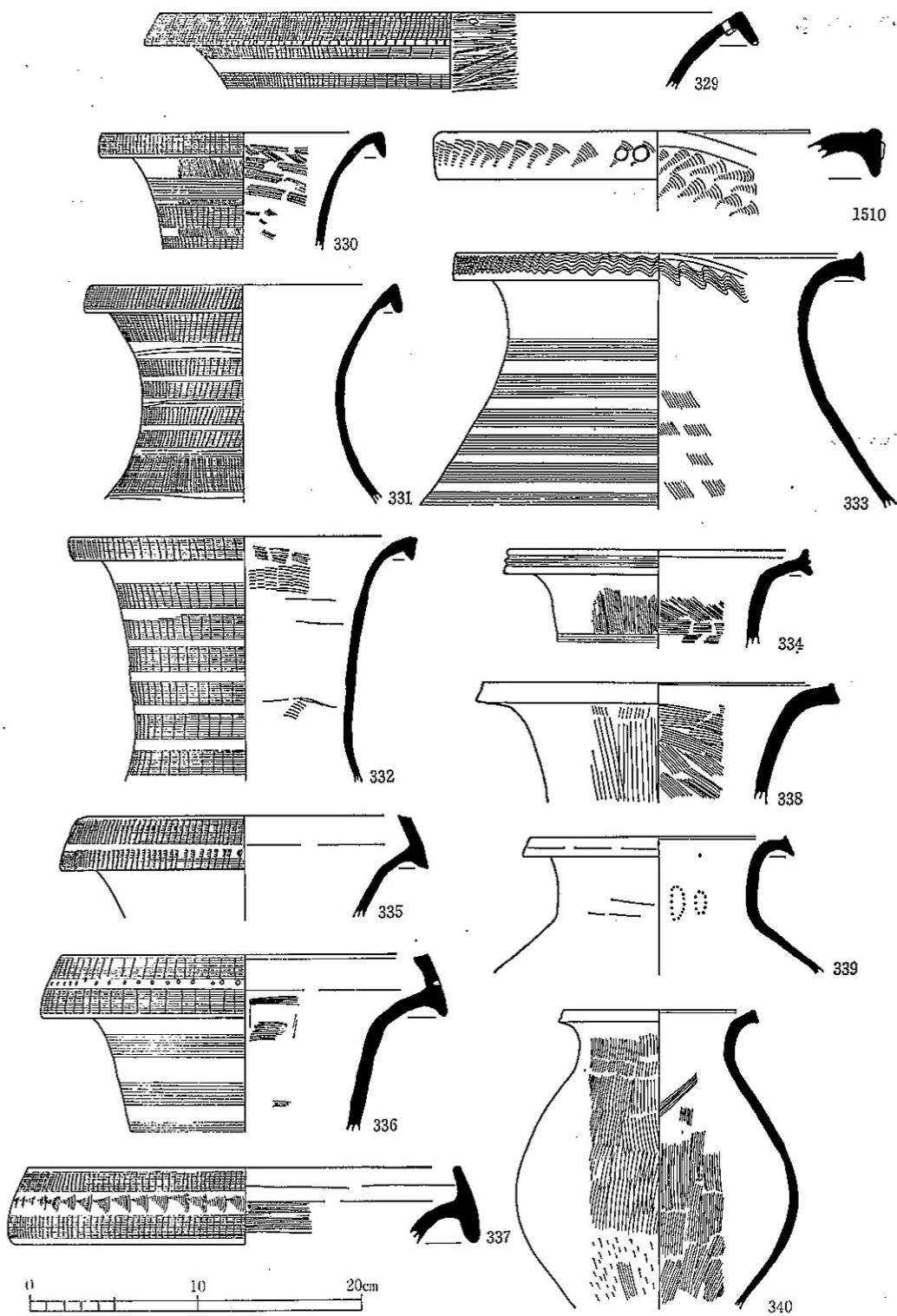
その他に柱根の残っている例としては、枿穴に入れるために、先端を四角形に削り出すものもある。柱根が残っていないものに礎板が認められるものもある。

このようにピットの中には、高床式住居の掘立柱と考えられるものが数例あるが、ほとんどのピットは、柱穴かどうか不明なものが多い。なお、高床式住居ないしは倉庫となりうるものは、当調査区において検出なかった。

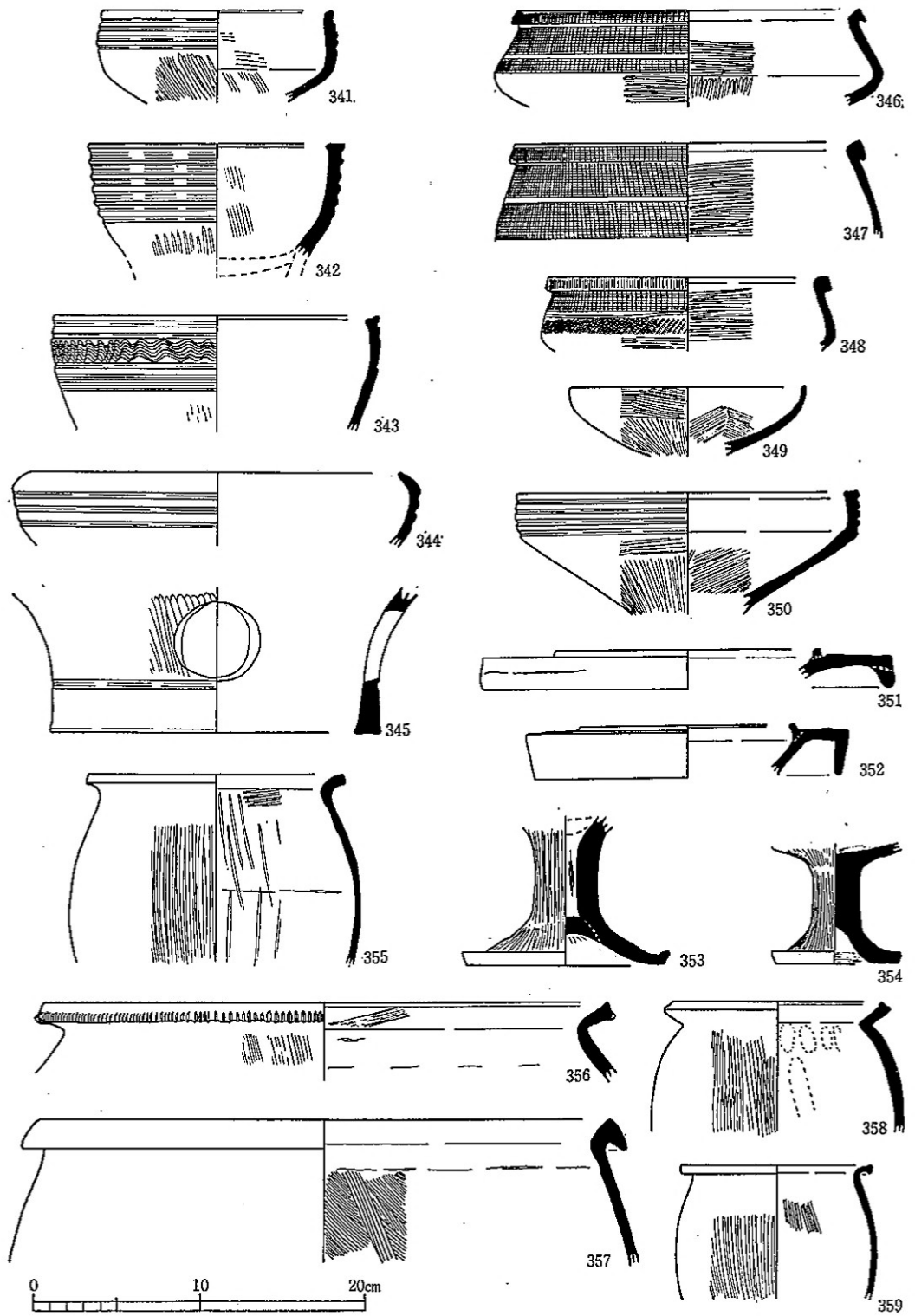
D 小結

弥生時代中期遺構面Ⅰの段階では、当地区は南・西部にピットが多く、居住区域を想定させる。北・東部は居住区域ではあるがピットが少なく、多少異なった様相を示している。それは、北端部に大規模な溝19があり、この溝に向って延びるような、小さな溝が多い。しかし、これらの溝が一体どのような性格を有するものなのかは明らかにし得ない。また、土壌も全域に数多くあるが、北部の土壌と南部の土壌では形状が異なっている。北部の土壌は不定形で大きなものも多く、大きさの割に浅いものが多い。南部の土壌は、円形や楕円形のものも多く、割合に深い。南半部の土壌の中には、井戸かと考えられるようなものも多く、遺物も少ない。それに比して北半部の土壌には炭化物を含むものも多く、遺物も土器が圧倒的に多いようである。これらから考えると、同一居住区域内でも、南部がより生活に密着しており、北部は生活から僅かに隔った感じである。それは北半部に溝が多いことから十分に分かる。

この居住空間が遺構面Ⅱの段階では墓域へと変化してゆく。居住空間が永久にそのみに利用されるのではなく、常にある一定範囲を移動していくようである。とすれば、その移動範囲及び墓域が、遺跡範囲と考えられよう。しかし、墓域を居住区域にすることはほとんどないことであろう。居住区域や生産区域が墓域に変化することは、今回の調査でも明らかである。そのため長期間営まれる集落は非常に大きな範囲を遺跡とするのであろう。



第81图 弥生時代中期遺構面Ⅰ包含層出土土器



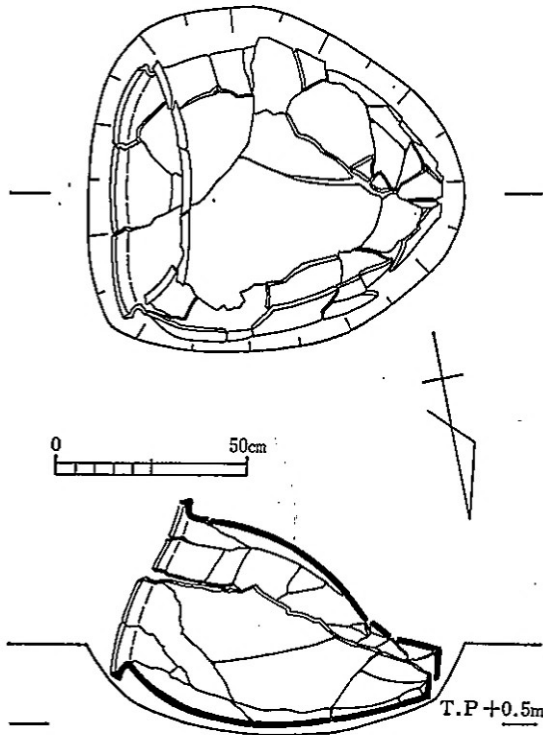
第82図 弥生時代中期波溝面Ⅰ包含層出土土器(Ⅱ)

2) 遺構面Ⅱ

弥生時代中期遺構面Ⅱでは6基の方形周溝墓、溝、土壙と河川を検出した。遺構面ⅠとⅡでどの程度の時間差が認められるかは、各遺構出土の土器ではあまり明確に分けられないようである。しかし、遺構面Ⅰでは居住空間であった地域が、部分的にはあるが遺物包含層を形成した後に墓域として使用されたことから時間差があると考えられる。なお、遺構面Ⅰ・Ⅱの遺物包含層を比較すると、ある程度の時間差として捉えることができるようである。

A 方形周溝墓 方形周溝墓は6基確認、調査した。すべてが盛土を有するが、過去に調査された《2号墓》(小阪ポンプ場構内の調査)とは、全く様相を異にしたものであった。

〈第5号方形周溝墓〉は、3PR・S6～7地区においてほぼ全域を検出した。各辺が東・西・南・北に向いている。後期遺構面Ⅰの河川3・4により相当削られているため、明確にはし得ないが、東西8m、南北10mを測る長方形と考えられる。周溝は南・西にはなく、北でのみ検出した。東へは続くようであるが、調査区からはずれるため明らかにはし得なかった。北周溝は、幅0.5～0.8m、深さ0.1mを測る小規模な溝である。盛土は、0.3～0.5m残存していたが、東半部のみである。盛土は、大きく2層に分けられ、下層が青灰色粘土や青灰色細砂の混った茶褐色粘土であり、上層が青灰色粘土や青灰色砂の混った灰色粘土層である。西半部は後期遺構面Ⅰの河川3によりほとんど削られ、北部は河川4により一部削られており、河川4の掘削中にすでに第1主体部を確認していた。

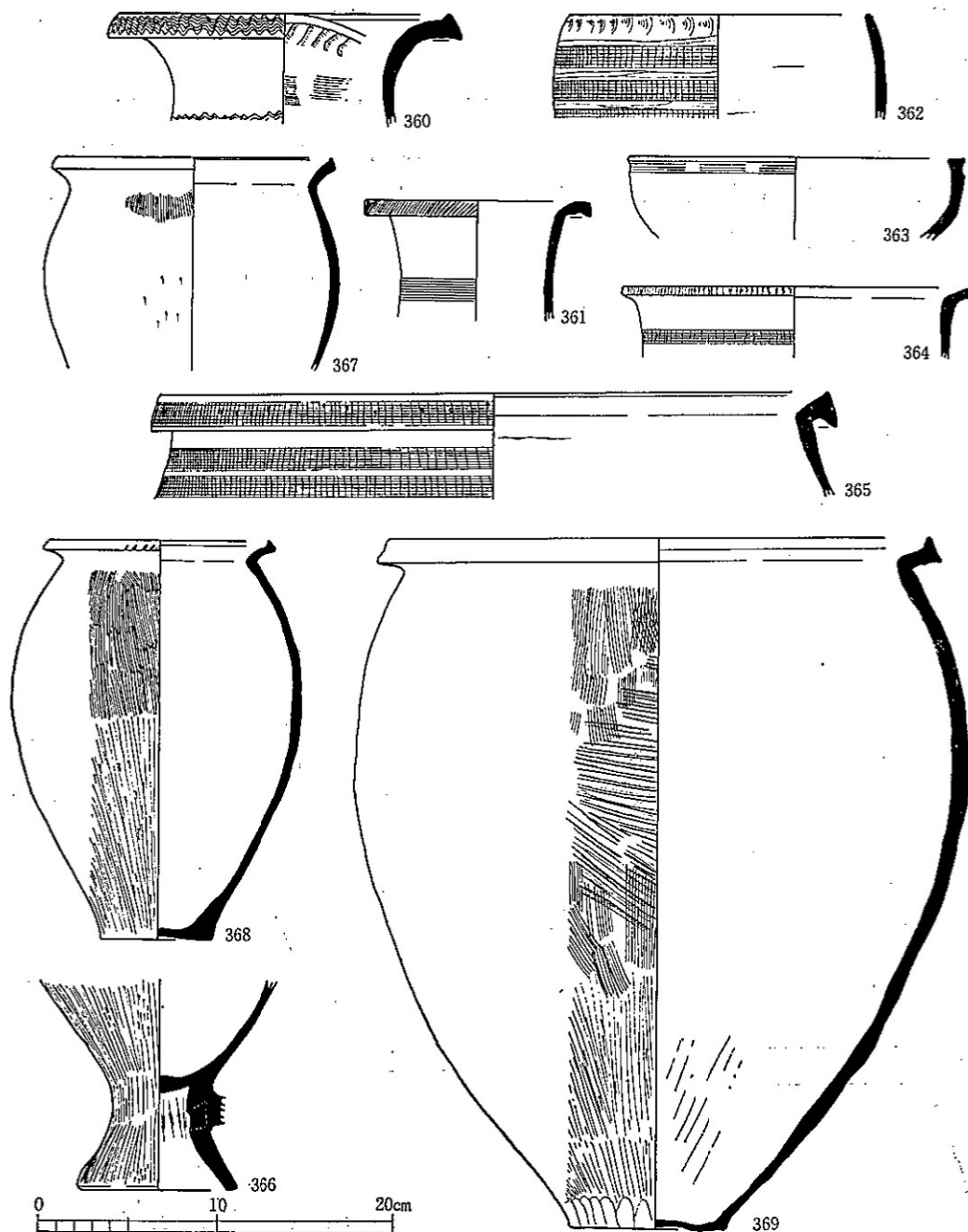


第83図 第1主体部平面、断面図

第1主体部は甕棺(第83図)であり、茶褐色粘土層上面から埋納されていたようである。掘方は甕棺よりも僅かに大きく掘っているようであり、口を東に向けほぼ水平に据えられていた。この甕棺は単棺であり、蓋は全く認められなかった。河川4が東から西に向かって流れていたため、口の部分はほとんど洗い流されており、中にも砂が詰っていた。

使用された甕形土器(第84図369)は、口径30.8cm、腹径35cm、底径8.9cm、器高39.4cmを測る大型のものである。口頸部は「く」の字形に屈曲し、短く外反する。口縁端部は高く立ち上がり、口縁部端面には、凹線紋状の強いヨコナデが施されている。体部は、腹径の割に器高が低く、ズン

グリした甕形土器である。口頸部の調整は、内外面ヨコナデである。体部は、外面が粗い平行叩目の後に縦方向の刷毛目、内面はナデを施している。外面体部下半はヘラケズリ後、ヘラミガキを施している。外面全体に煤が付着していた。明確な供献土器はなく、盛土内より土器（第84図360～368）等を検出した。

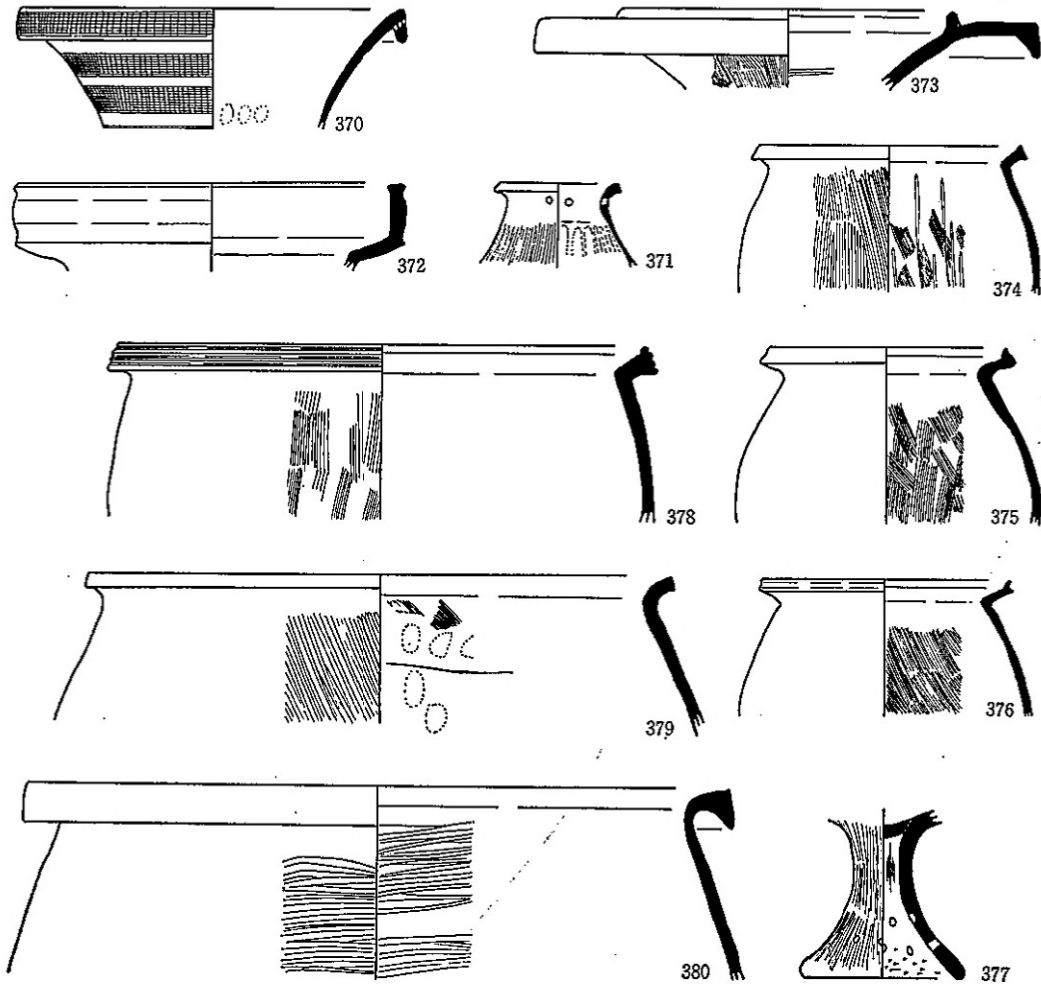


第84図 第5号方形周溝墓盛土内出土土器 及び第1主体部甕棺

〈第6号方形周溝墓〉は、3PQ9~11、3PR10・11地区において、約1/2を検出した。各隅部が東・西・南・北を指し、第5号方形周溝墓とは約45°のずれがある。規模については、調査区外へ延びるため、明確にはし得ないが、1辺約7mと考えられる。周溝は全く検出し得なかった。盛土は、高いところで40cm残存しているが、第5号方形周溝墓の盛土とは異なっている。盛土は、灰黒色砂、黄色砂、黒褐色砂、灰黒色粘土が複雑に盛り上げられており、第5号方形周溝墓のように水平に盛られたものではない。一気に積上げられたようである。

主体部は、3基確認した。第1主体部は、ほぼ中央に位置し、東西に長い楕円形土壇である。調査区外に延びるため全長は不明であるが、検出長径1.5m、短径1.3m、深さ0.3mを測る。底部は船底状で、木棺の痕跡も全く認められなかった。埋土は、黒色砂が主で、上部に薄い黒色粘土が認められた。人骨等は全く検出し得なかった。

第2主体部は、第1主体部の北にあり、東南から西北に長い楕円形の土壇である。ごく一部が



第85図 第6号方形周溝墓盛土内出土土器 (1/4)

調査区外へ延びるが、ほとんど検出しており、長径約2.5m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。この土壌は2段掘りになっており、1段目は深さ10cmである。そこで長径1.8m、短径0.7mとなって、30cm掘られている。底部は、船底状を呈する。木棺の痕跡は全く認められなかった。埋土は、下層に黒色粘土混り黒色砂が30cm、上層に黒色粘土混りの黒褐色砂が10cm認められた。上層からは人間の歯を検出した。

第3主体部は第2主体部の東にあり、南北に長い楕円形の土壌である。長径2.0m、短径1.2m、深さ0.25mを測る。浅い摺鉢状を呈する。埋土は、下層に薄い炭化物層があり、上層に灰色粘土混り黒灰色砂が0.25m認められた。下層からは魚骨を検出した。

供献土器は全くなく、他の方形周溝墓との先後関係にも決め手を欠く。盛土内からは土器(第85図)、環状石斧(第103図S-112)等を検出した。

〈第7号方形周溝墓〉は、3PQ~S13~16地区において、ほぼ全域を検出した。四隅が東・西・南・北を指し、第6号方形周溝墓と同じような向きである。東・西隅が調査区外へ続く。1辺15mの正方形である。周溝は全く検出しなかった。

盛土は、60~80cmあり、非常に高い。盛土は灰黒色砂と黄色砂が縞状を呈しており、第5号方形周溝墓のように、水平に盛り上げていったのではなく、一気に盛り上げたようである。それは、灰黒色砂と黄色砂の縞模様が方形周溝墓の中心から同心円を描くことから十分に考えられる。

主体部と考えられる土壌を数基検出したが、主体部とは考え難いような小規模なものもあり、とりあえずは、ある程度の大きさの土壌のみを主体部として取り上げることにした。

第1主体部は、3PR15地区において検出した。東西に長い楕円形の土壌である。長径1.1m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は、黒色砂1層で人骨等は一切検出しなかった。

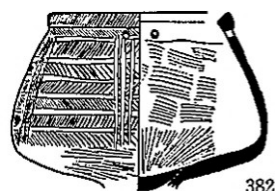
第2主体部は、3PR14地区において検出した。東西に長い楕円形の土壌である。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.35mを測る。埋土は黒色砂1層である。

第4主体部は、3PS14地区において検出した。南北に長い楕円形の土壌である。長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は黒色砂1層である。この主体部には、土壌やピットが数個重なっていた。

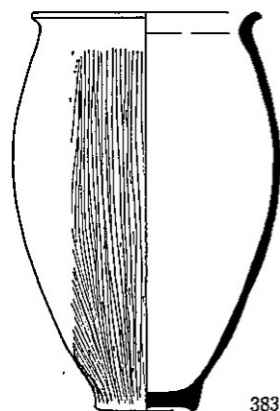
第5主体部は、3PR13~14地区において検出した。南北に僅かに長い方形の土壌である。長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。埋土は黒色砂1層である。これらの主体部からは人骨等は全く検出



381

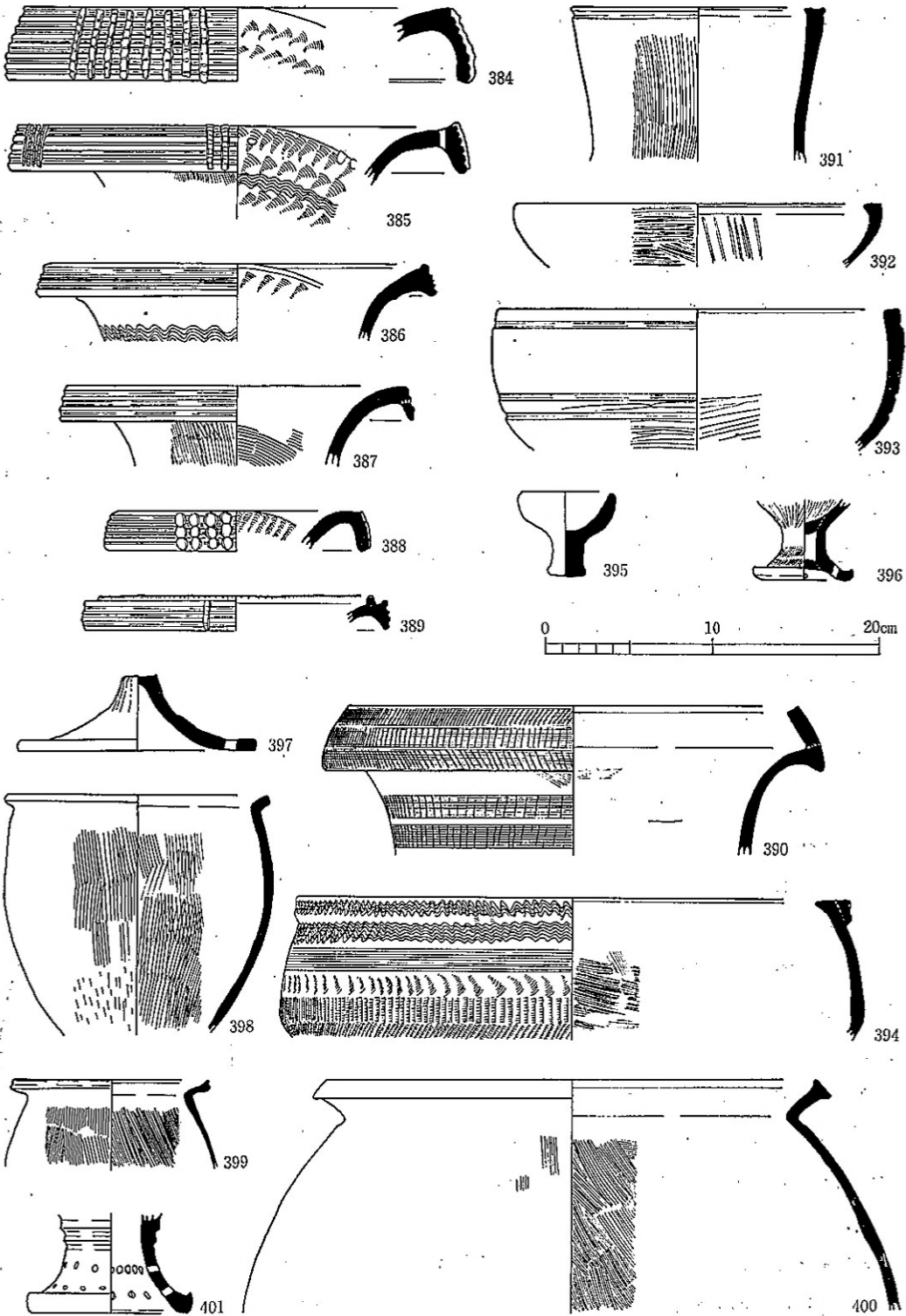


382



383

第86図 第7号方形周溝墓
供献土器(1/4)



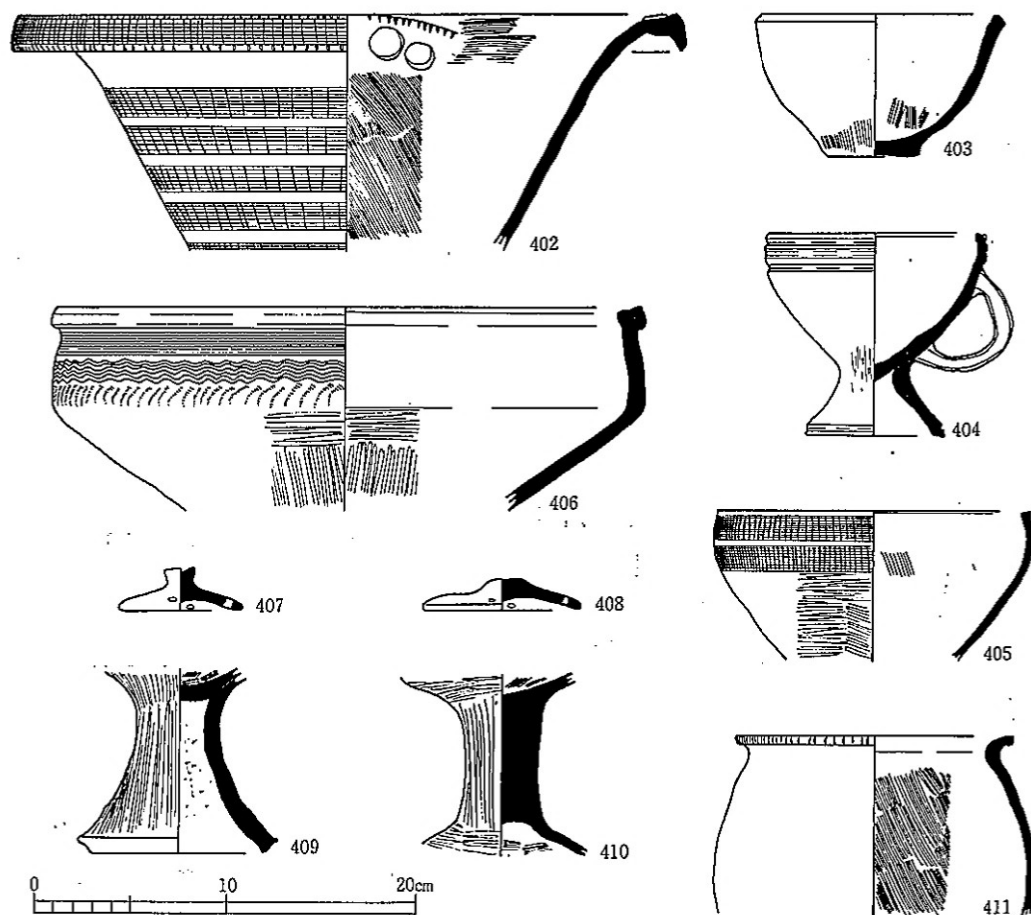
第37图 第7号方形周沟墓盛土内出土土器

しなかった。

供献土器は、3 P S16地区で立っていた蓋付台付無頸壺形土器（第86図381・382）、東裾部に甕形土器（第86図383）を検出した。盛土内からは、多量の土器（第87図）、管玉（第102図S-244）を含む多数の石器を検出した。

<第8号方形周溝墓>は、3 P Q~S17~20地区においてほぼ全域を検出した。東南隅のごく一部が調査区から外れただけである。各辺が東・西・南・北を指し、第5号方形周溝墓と同方向である。東西6.5~9.0m、南北16.5mを測る長方形である。

周溝は、南と西にあり、北にはない。東は不明である。周溝は、幅0.7~1.0m、深さ0.2~0.3mを測り、深い部分が3箇所ある。周溝は1本ではなく、2箇所陸橋部をのこし、3本に分けられている。陸橋は、隅部にあるのではなく、各辺の中央部にある。この周溝墓は、第7号方形周溝墓付近から地山面が下がってくる部分に盛土をして造っており、北では明瞭な高低差はほとんどない。西・南も高低差が少ない。そのため南・西には周溝が掘られたのであろう。周溝は一



第88図 第8号方形周溝墓周溝内出土土器

部北へも延びるが、北側全面にはない。周溝内からは、明確な供献土器といえるかどうか問題はあるが、各種の土器（第88図）を検出した。盛土は、南半部では黒色砂、北半部では灰黒色砂と黄色砂が縞状を呈していた。第7号方形周溝墓と同様、一気に盛り上げたようである。盛土内からは多量の土器（第90・91図）や石器を検出した。

主体部は、7基検出したが、楕円形や不整形の土壙が多く、長方形のものが1基あった。第1主体部は、3PR19・20地区において検出したもので、東西に長い楕円形の土壙である。長径2.1m、短径1.1m、深さ0.4mを測る。2段掘りになっており、1段目は深さ10cmである。そこで、長径1.4m、短径0.7mの楕円形となって30cm掘られている。埋土は、下層に炭化物層が5cm、上層に黒色砂が35cm認められる。

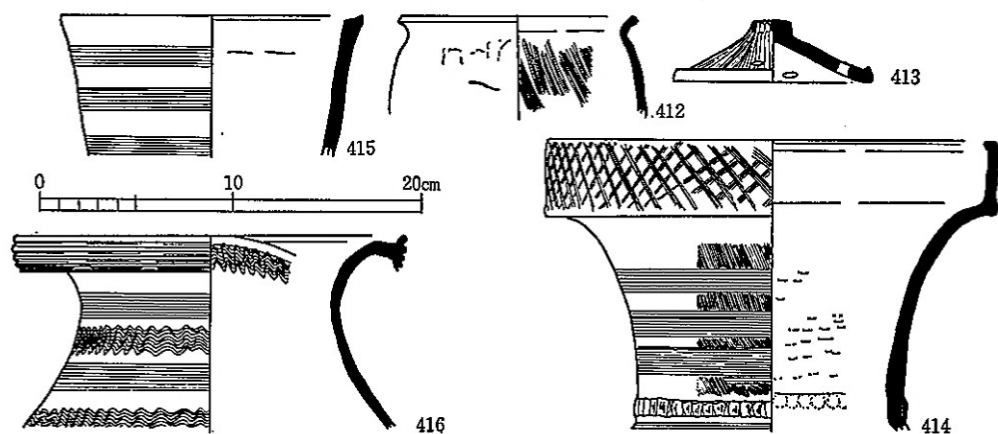
第2主体部は、3PR19地区において検出したもので、南北に長い方形の土壙である。長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。長方形であり、底も平坦であることから、木棺の可能性も考えられるが、埋土の断面からは木棺の存在を想わせるような痕跡すら認められなかった。埋土は、黒色砂1層である。

第3主体部は、3PS20地区において検出したもので、東北から西南に長い楕円形の土壙である。長径1.5m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は、黒色粘土1層である。

第4主体部は3PR20地区において検出したもので、不定形の土壙である。長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は、黒色砂1層であり、中から獣骨を検出した。

第5主体部は、3PR19地区において検出したもので、不定形の土壙である。第1主体部の東北に隣接する位置にある。長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は、黒色砂1層である。

第6主体部は、3PR18地区において検出したもので、正方形の土壙である。1辺1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は、灰黒色砂1層である。第7主体部は、3PR18地区において検出したもので、円形の土壙である。第6主体部の西に隣接する位置にある。直径1.3m、深さ0.3mを測

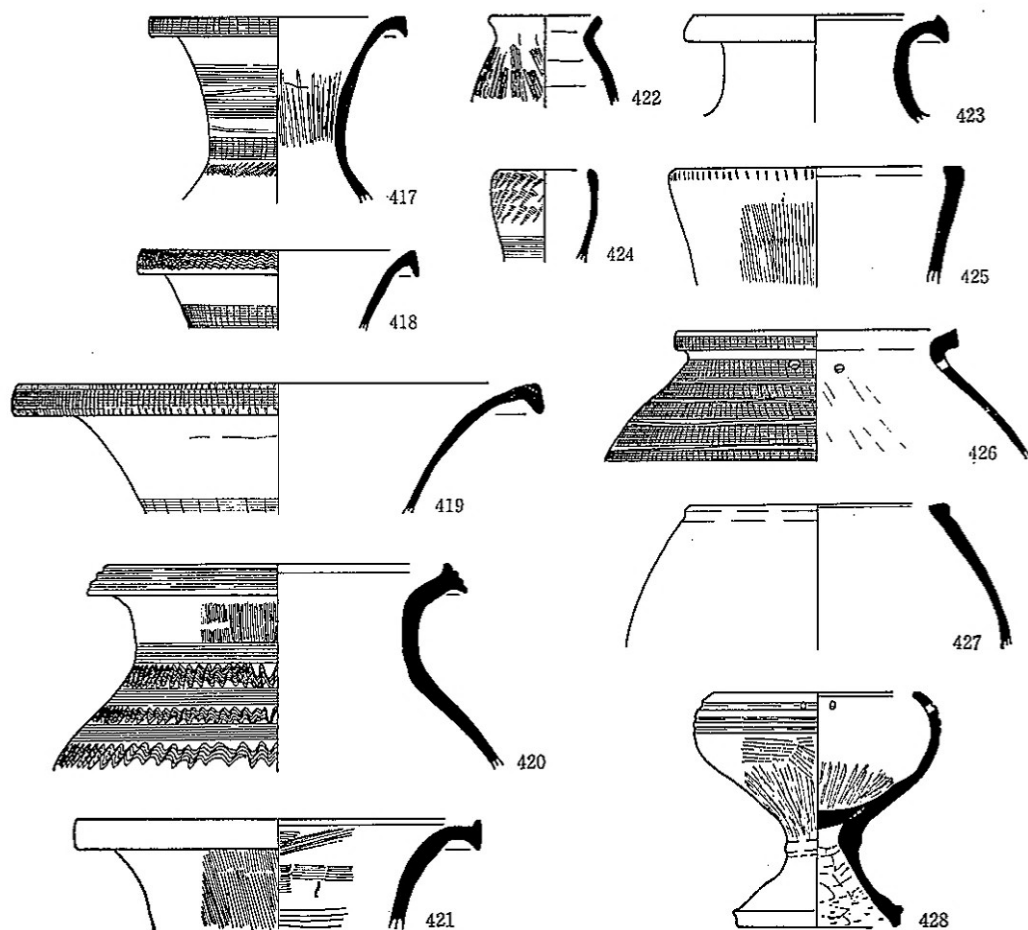


第89図 第8号方形周溝墓 第1主体部(412)、第4主体部(413・414)
第6主体部(415)、第7主体部(416) 出土土器

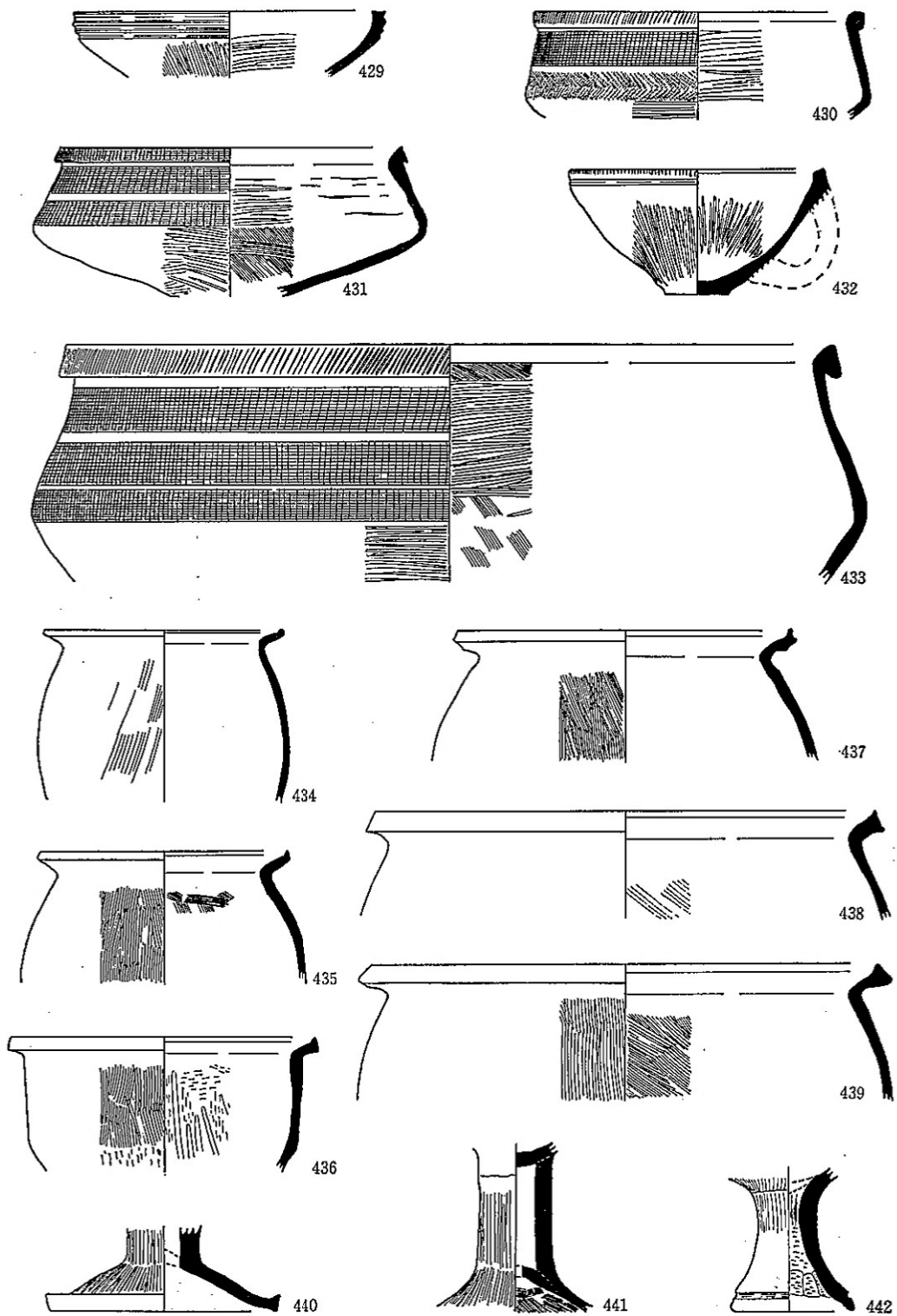
る。埋土は、灰黒色砂1層である。

各主体部からは、墓と考えさせるような人骨等は何も検出しなかったが、僅かに土器(第90図)等を検出した。

この周溝墓の主体部は、南半部に5基、北半部に2基あり、中央部には空間がある。盛土の状態も南半部と北半部で異なっており、方形周溝墓自体の形態も不自然である。南半部が東西9.0m、南北8.5mを測る方形で、北半部が東西6.5~7.5m、南北8.0mを測る南北に長い方形である。盛土の違いもほぼ同様の面積比を示す。北半部の盛土に認められる縞模様も南へいくと東または西へ曲がって消えてしまう。これらから考えてみると、この方形周溝墓は元々、南半部に1辺約9mの正方形を呈する方形周溝墓があり、埋葬を重ねていったようである。やがて、本来の方形周溝墓では埋葬しにくくなったか何らかの理由により、北に別の方形周溝墓を造るのではなく、張り足したと考えられる。本来の方形周溝墓には周溝がなく、北への張り足しが行なわれた時には方形周溝墓周辺、特に西・南に土砂が堆積していたために、周溝を掘削したと考えられ



第90図 第8号方形周溝墓盛土内出土土器 (1/4)



第91图 第8号方形周沟墓盛土内出土土器(1/4)

る。周溝内の埋土は、黒褐色粘土、灰黒色砂であり、周溝より南や西には、盛土とほとんど変わらない黒色砂、灰黒色砂が堆積していた。

方形周溝墓で拡張された例は各地に見られるが、1辺ないしは2辺の溝が埋ってしまったために、その外側に溝を掘り直すものが多い。第8号方形周溝墓のような盛土の張り足しの例はほとんど見ないようである（D地区第21号方形周溝墓参照）。

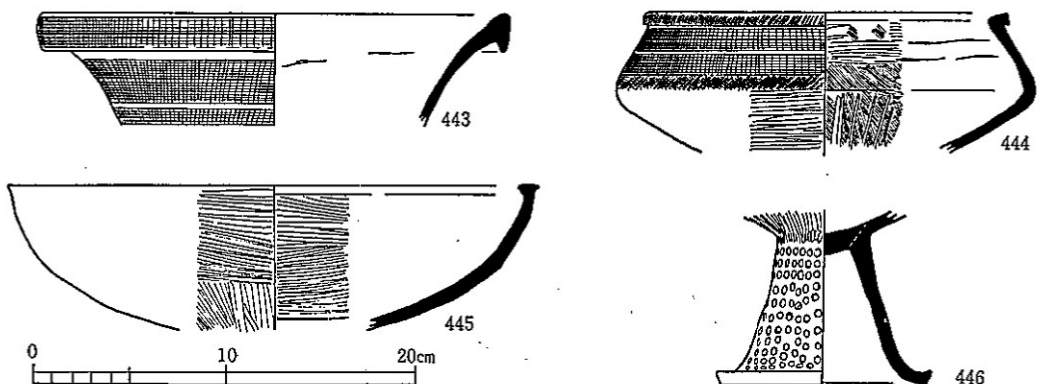
〈第9号方形周溝墓〉は、3PS～U17～19地区において検出した。南端の一部と東側のごく一部が調査区から外れる。各辺が東・西・南・北を指し、第8号方形周溝墓の東側に隣接し、ほぼ同じ向きである。東西7.0～8.5m、南北は約12.5mを測る南北に長い方形である。

周溝は、西・北・東と続いており、南は調査区外へ続くため、不明である。しかし、その形状は、東・西周溝と北周溝とは、僅かに異なるようである。西周溝は、幅0.7～1.5m、深さ0.3～0.85m（墳丘上周辺端より）を測る。西周溝は中央部が最も深く両端にいくにつれ浅くなっている。この西周溝は第8号方形周溝墓と共有されていたようであり、西南隅では陸橋部をもつようである。北周溝は、幅1.2～1.3m、深さ0.4mを測る。肩口から垂直に掘り込まれている。東周溝は、東端が調査区外へ続くため明らかにし得ないが、西周溝と同様に北周溝より深くなるようである。埋土は、北周溝では下層に灰黒色微砂質土、上層に灰黒色砂質土が堆積していた。

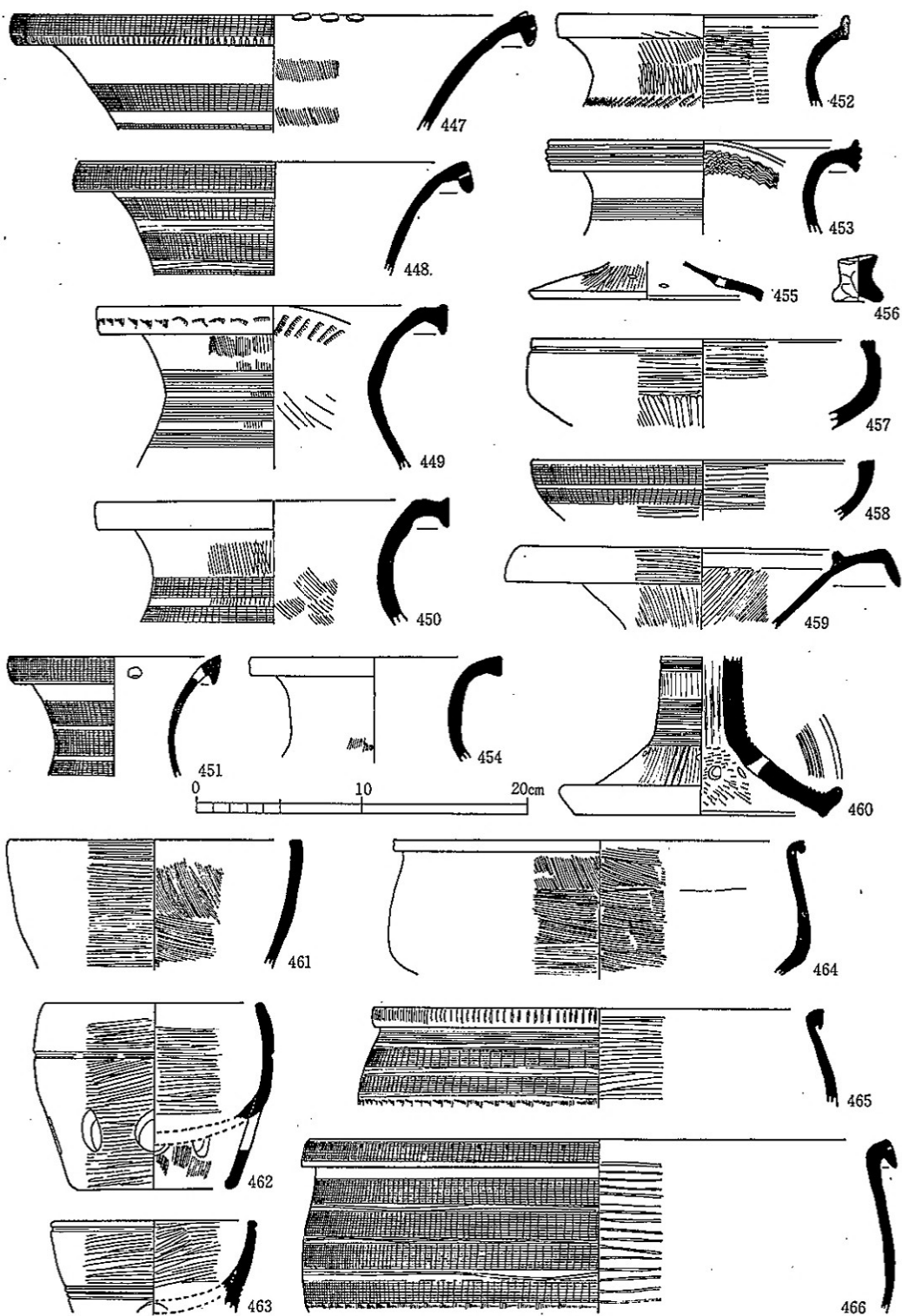
盛土は、30～50cm堆積していた。盛土は、大別すると2層に分けられる。下層に炭化物を部分的に含む黒灰色微砂質土、上層に暗灰色砂質土が水平に認められた。なお、下層は細分すれば6～7層に分けられる。下層で大体の形状を作り上げ、上層で周辺部分および上部に積上げていく。第6号方形周溝墓のように一気に盛り上げたのではなく、少し時間を置いて盛り上げたようである。

埋葬施設としての土壙、木棺、甕棺等の主体部は全く検出し得なかった。

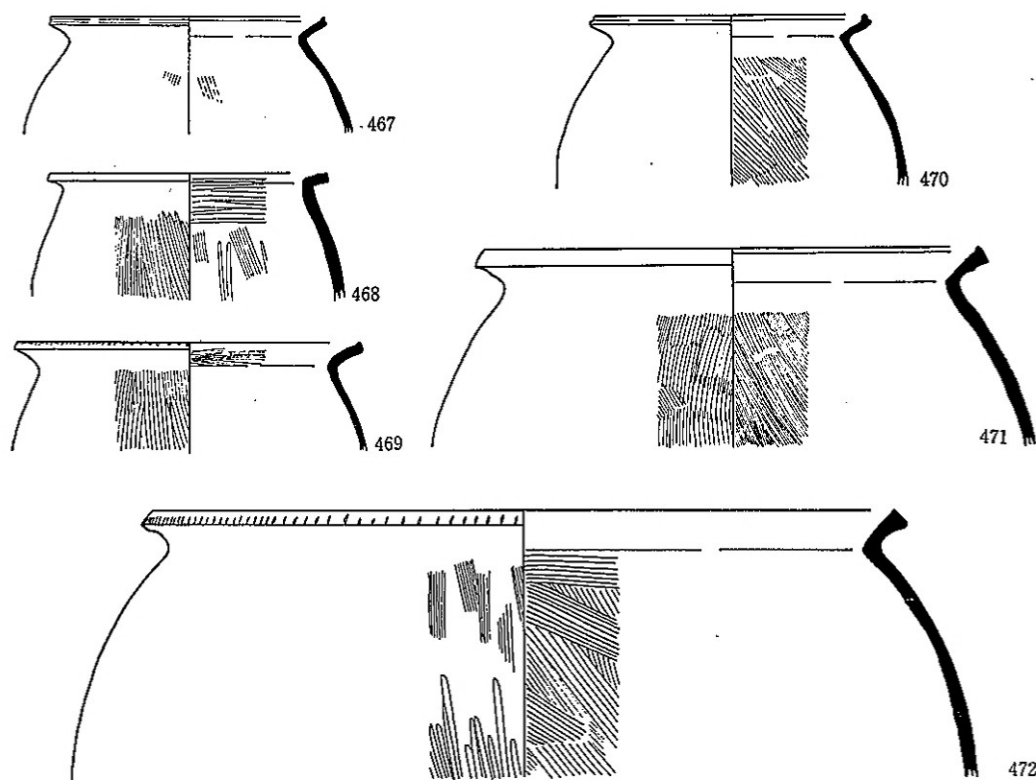
遺物は、北周溝内より、供献土器かどうかは疑問が残るが、僅かに土器（第92図）を検出した。なお、盛土内からは、多量の土器（第93・94図）や石器、獣骨等を検出した。その他には墓と考えさせるような人骨等は何も検出し得なかった。



第92図 第9号方形周溝墓周溝内出土土器



第93图 第9号方形周濬墓盛土内出土土器

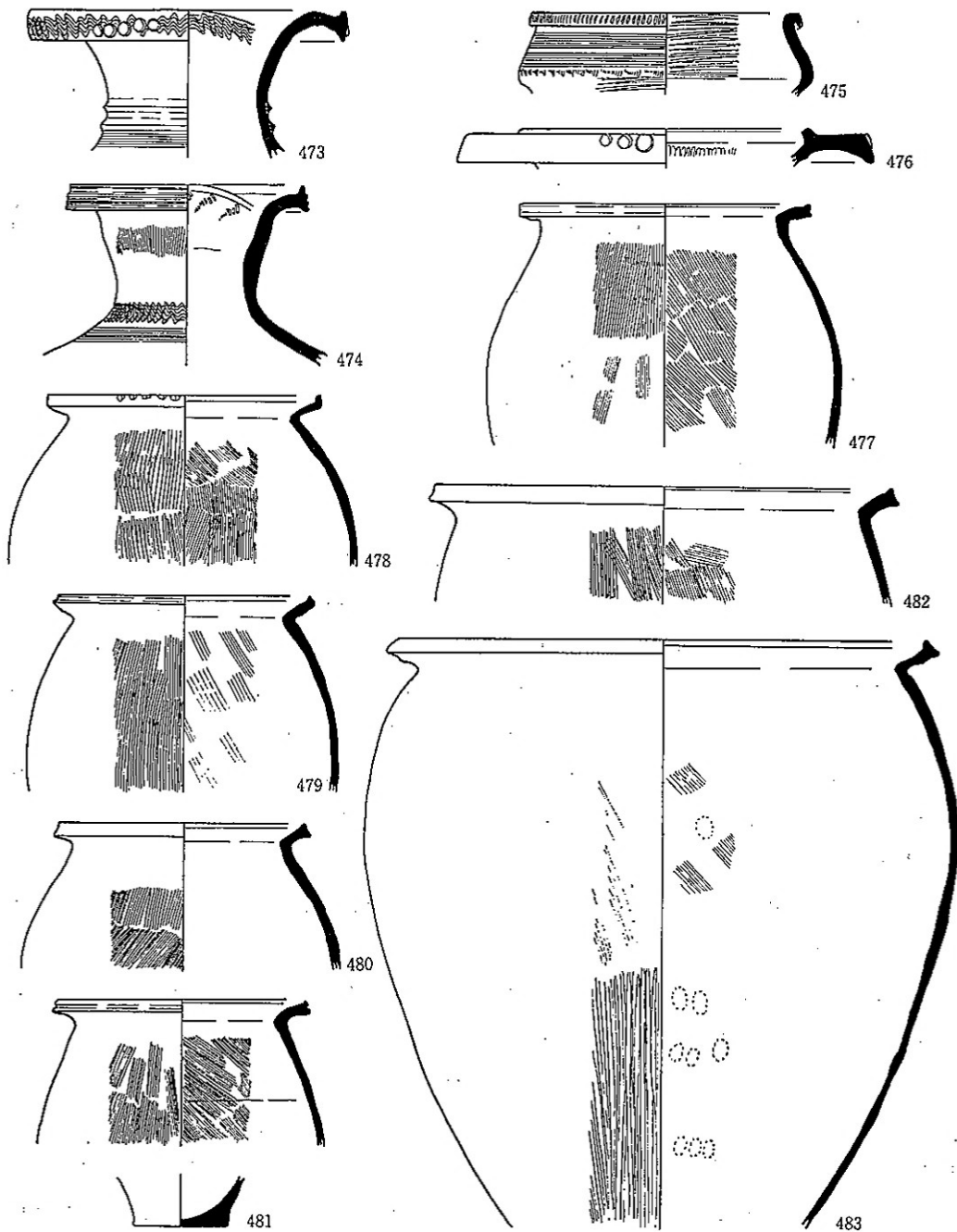


第94図 第9号方形周溝墓盛土内出土土器 (4)

<第10号方形周溝墓>は、3 P R21・3 P Q～S22地区において、約 $\frac{1}{2}$ を検出した。残りは調査区から外れてしまった。各隅が東・西・南・北を指し、第6・7号方形周溝墓と同じ向きである。規模は明確にし得ないが、検出長は1辺約6mを測る。周溝は、東北辺と西北辺にそれぞれ認められるが北隅は陸橋部として残るようである。周溝は、幅1.0m、深さ0.1～0.15mを測る。周溝内からは、遺物は僅かに土器片を検出しただけである。盛土は、30cm残っており、灰黒色粘土混り灰黒色砂である。水平に何回かに分けて盛り上げたものではなく、一気に盛り上げたと考えられる。

主体部は2基検出した。2基とも西北辺に近い位置にあり、東半部では検出しなかった。第1主体部は、3 P R21地区において検出したもので、西北から東南に長い楕円形の2段掘り土壙である。長径1.7m、短径1.1m、深さ0.25mを測る。1段目は深さ10cmである。そこで長径1.0m、短径0.6mと小さくなり、深さ15cmを測る。埋土は、灰黒色砂1層である。2段掘りであるが、木蓋等の痕跡は全く認められなかった。第2主体部は、3 P R22地区において検出したもので、東北から西南に長い不定形の土壙である。第1主体部の西に直交するような形で位置している。長さ1.6m、幅1.0m、深さ0.2mを測る浅い皿状を呈している。埋土は、灰黒色砂、灰黒色粘土である。これらから人骨等は全く検出しなかった。供献土器と思われるものは全くなく、盛土内から多量の土器(第95図)や石器を検出した。

この方形周溝墓の南は、昭和46年に調査されたが、その時には方形周溝墓は検出されなかった。それは、丁度この位置を中心に古墳時代前期～中期にかけての河川10が流れており、今回の調査区でも方形周溝墓の僅か上まで削られ砂層が堆積している。この河川はC地区北端に南肩があり、幅10mを測る大きなもので、この河川により、南半部は削られていたのであろう。



第95図 第10号方形周溝墓盛土内出土土器 (4)

B 溝 溝は、当調査区において1条のみ検出した。調査区の北端を流れている。

<溝 200>は、3 P O・P 3・4 地区において検出した。西端は調査区外へ続く。東端は、後期遺構面Ⅰに伴う河川3・4によって削平され、消滅している。検出長は7.0m、幅は4.5m、深さは0.5mを測る。東西方向のかなり大きな溝であろう。底部は一部中期遺構面Ⅰを削っている。肩口からは、ゆるやかな傾斜をもって底部へ続く。埋土は3層あり、下層に暗灰青色粘質土、中層に黒色粘質土、上層に黒灰黄色砂土が堆積していた。なおこれらの層には、多量の炭化物を含んでいた。遺物は、主に上層の黒灰黄色砂土から土器を多量に検出した。その他には石製の紡錘車等も検出している。この溝の第3層下層に、中期遺構面Ⅰの土壌14・15・16を検出したが、これらの関連性を明らかにし得なかった。

C 土壌 土壌は、当調査地区においては3 P 9～3 P 7 地区にかけて数基検出しただけである。これらは方形周溝墓を確認、検出しなかった地区において検出しており、方形周溝墓との関連性は明らかにし得なかった。

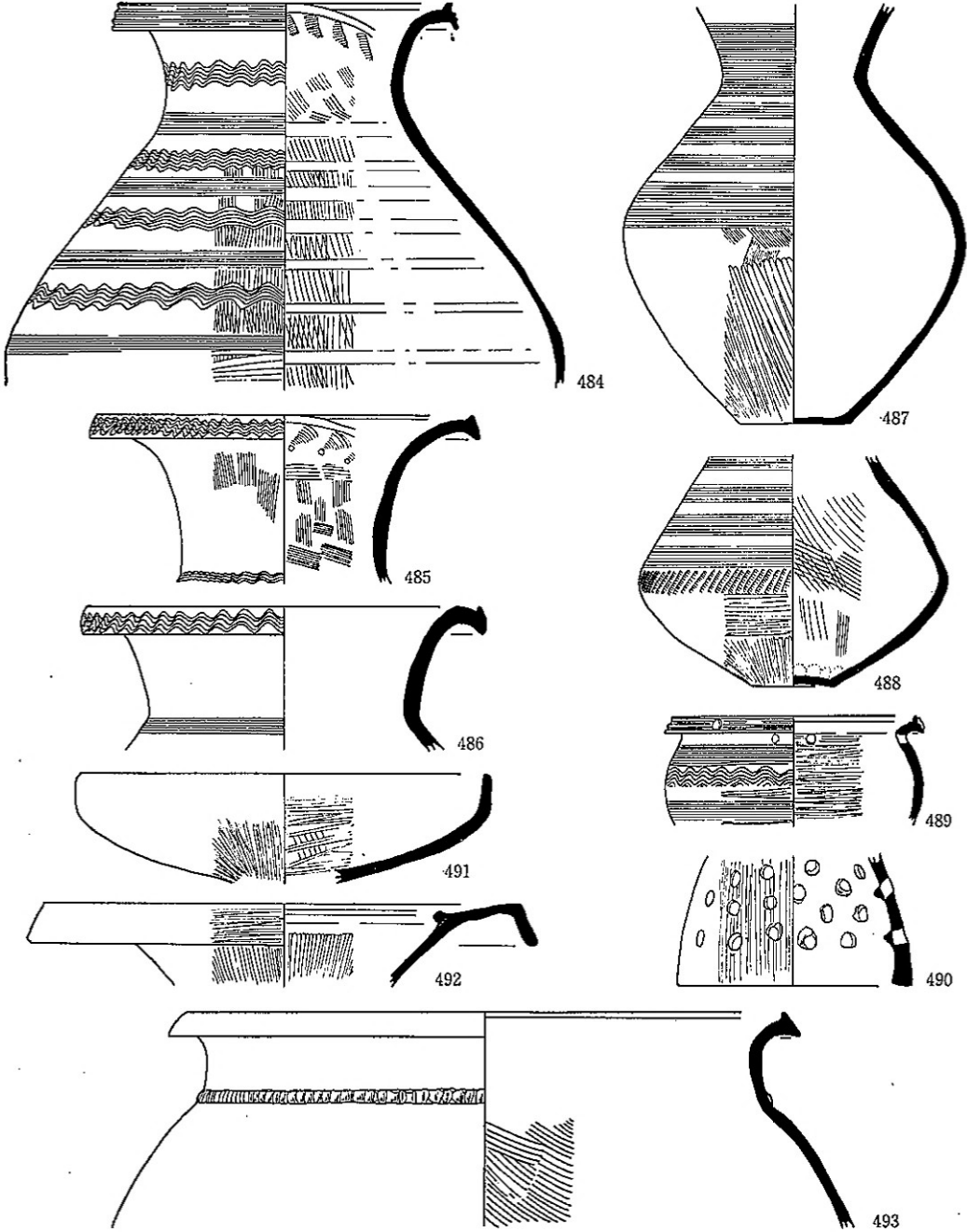
<土壌 267>は、3 P Q 8 地区において検出した。中期遺構面Ⅰの包含層である暗灰色砂質土層を切り込んでいるが、確認し得たのは、暗灰色砂質土を除去してからである。長さは3.8m、幅は1.8m、深さは0.6mを測る。2段掘りの不定形な土壌である。1段目は、摺鉢状に深さ20cm掘られており、そこで平坦面を造る。2段目は長径1.3m、短径0.9mの楕円形を呈し、ほぼ垂直に深さ40cm掘られている。埋土は、3層に分けられ、下層に灰黒色砂質土、中層に暗茶褐色腐植土層を薄く挟み、上層に暗灰色粘質土が堆積していた。遺物は、僅かに土器片を検出した程度である。この付近は、やや高くなっており、中期遺構面Ⅰに伴う遺構である可能性も考えられる。

<土壌 268>は、3 P O 8 地区において検出した。この土壌も土壌 267 と同様に暗灰色砂質土の下層で確認、検出した。長径は1.6m、短径は1.4m、深さは1.1mを測る。楕円形の深い土壌である。肩口では、ゆるやかな曲線を描くが、中位からほぼ垂直に掘られている。埋土は、3層に分けられ、下層に暗青灰色粘質土、中層に灰色砂質土、上層に黒灰色微砂質土が堆積していた。遺物は、土器片や木片等を僅かに検出した程度である。形態からは、井戸かとも考えられる。この付近は、傾斜地になっており、中期遺構面Ⅰに伴う遺構である可能性も考えられる。

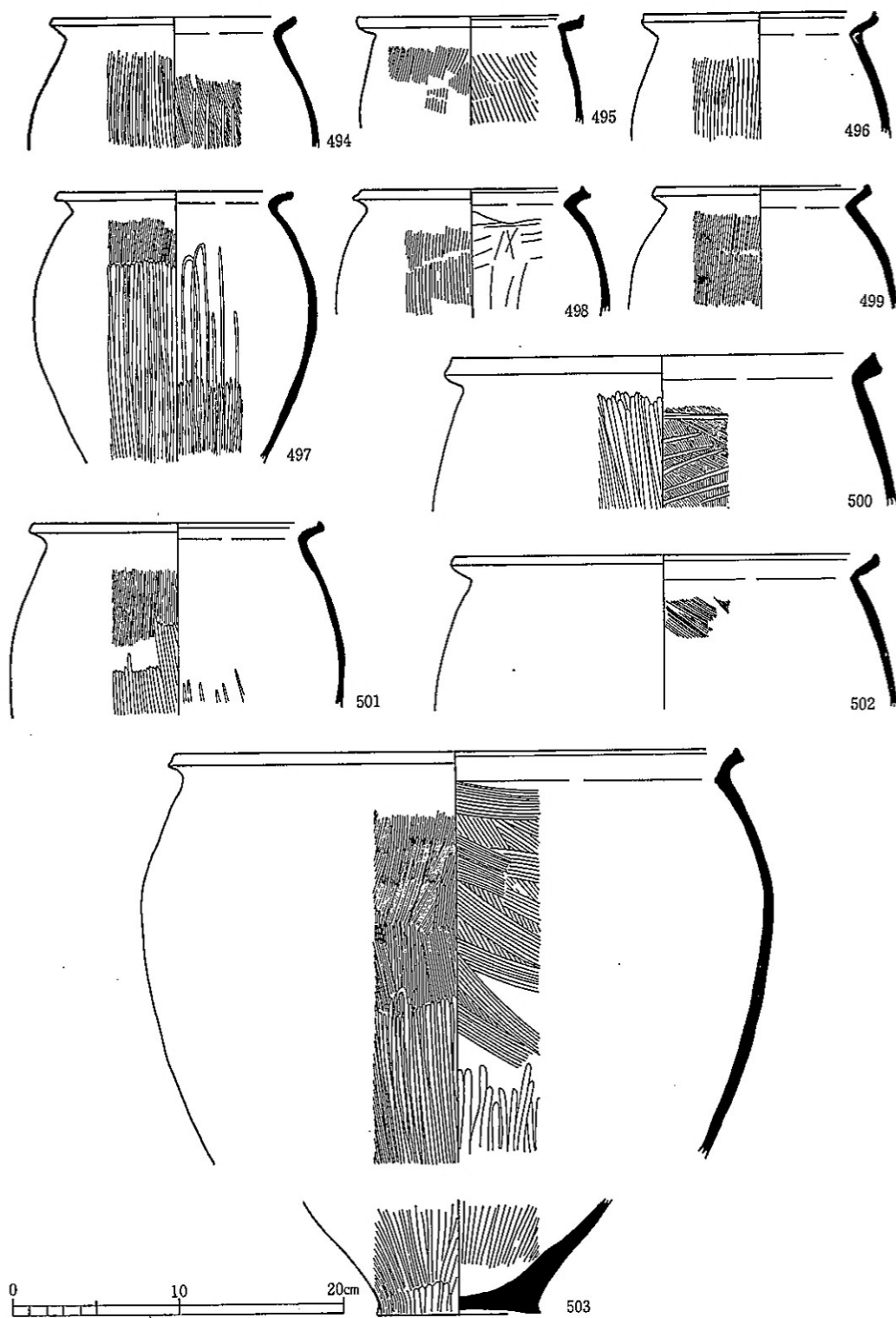
<土壌 270>は、3 P T・U 8 地区において検出した。南端は調査区外へ続く。中期遺構面Ⅰの包含層の暗灰色砂質土層を切り込んでいるが、下層で確認、検出した。検出長は4.5m、幅は4.0m、深さは0.8mを測る。かなり大きな不定形の土壌である。肩口からはゆるやかな傾斜をもち、そこで直径1.8mの不整形を呈し、ほぼ垂直に掘られている。埋土は、4層に分けられ、下層に灰色粘土混りの暗灰色粘質土、続いて黒色炭化物層、黒灰色粘質土、暗灰色粘土が堆積していた。下層は、人為的に埋められたものであろう。遺物は、多量の土器（第96・97図）や、木器（第115図W-29、第116図W-33）、獣骨等を検出した。

土器の器種構成は、広口壺型土器A・C、無頸壺型土器B、鉢型土器A・B、高杯型土器A・

B、甕型土器等が主にある。広口壺型土器Aは、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部をもつ。口縁部端面の紋様は波状紋を施すものが多く、口縁部内面に扇形紋を施すものもある。頸体部に櫛描直線紋、波状紋を組合わせて用いる場合が多い。口縁部の調整は、ヨコナデ、頸体部は刷毛目を施すものが多い。第96図 484は、頸体部外面



第96図 土壙 270 出土土器 (3)



第97图 土 塘 270 出 土 土 器

の紋様に併せて内面をヨコナデする例である。広口壺形土器Bは出土していない。広口壺型土器Cは、1点大型のものが出土しており、頸部部の境目に指頭圧痕紋凸帯を施している（第96図493）。無頸壺型土器は、短く外反する口頸部をもつもので、口縁端部は面をもち、上・下にやや拡張する。口縁部端面に、凹線紋・円形浮紋、体部上半に櫛描直線紋・波状紋を組合わせて施している。体部上端の相対位置に2個1組の紐孔を穿つ、生駒西麓産の土器である（第96図489）。鉢形土器はA・Bとも数点出土しているが、小破片が多い。第96図490はその脚台部である。高杯型土器は直口のA（第96図491）と、水平口縁をもつB（第96図492）がある。甕形土器には、小型のものと大型のものがあり、口縁端部の丸いものや、面をもち、上・下に拡張するものもある。口縁端部を上方へのみやや立ち上がらせるものが多い（第97図）。木器では完形の杵（第115図W-29）と鉄の未製品（第116図W-33）を検出している。

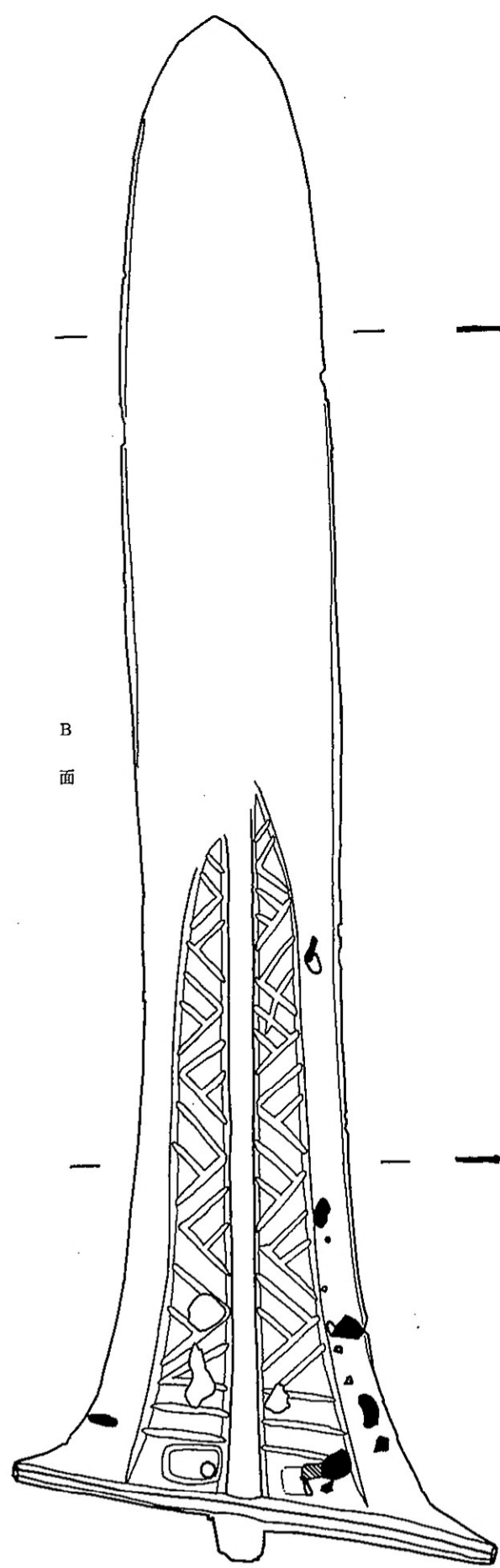
〈土壙 271〉は、3PT8地区において検出した。土壙270の第2層を切り込んでいる。直径0.8m、深さ0.7mを測る。2段掘りの円形土壙である。1段目は摺鉢状に30cm掘られ、そこで直径40cmになりほぼ垂直に40cm掘られている。埋土は、下層に黄色砂混りの黒色砂質土、上層に黒色砂質土が堆積していた。遺物は、ほとんど含まず、獣骨を僅かに検出しただけである。

D 河川 河川は調査区北端において検出したものである。

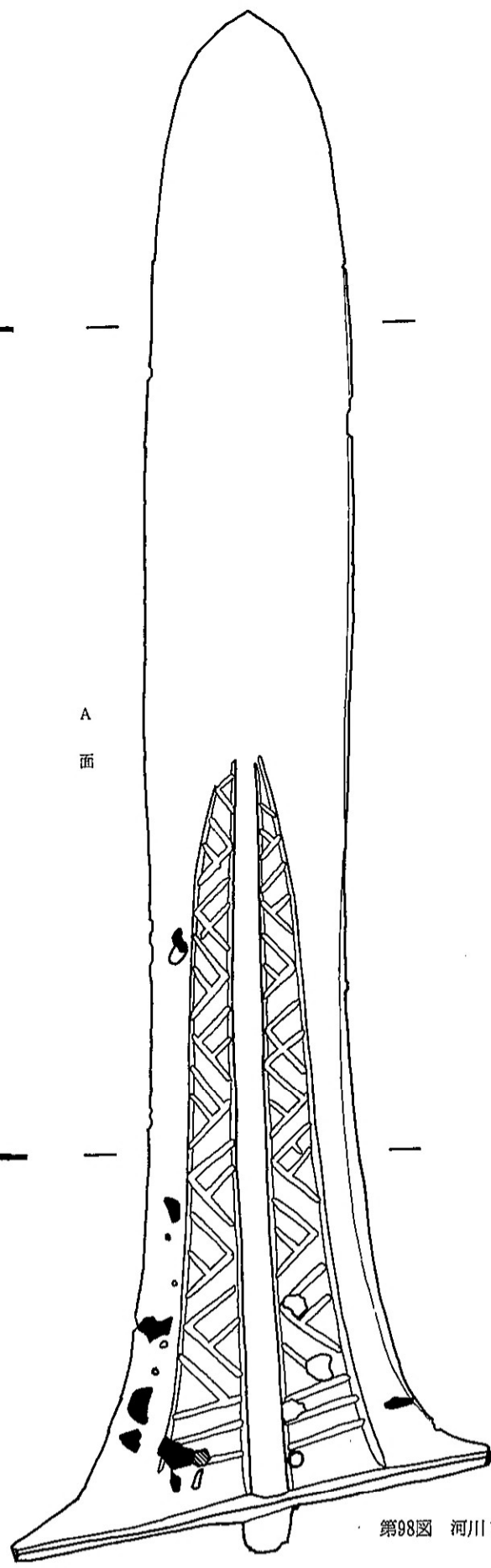
〈河川1〉は、3PS2、3PQ～S3～5、3PQ・R6地区において検出した。東北から西南に流れ、調査区中央で向きを僅かに西へ変える。幅10.0～11.5m、深さ0.6～0.8mを測る。北半部は、中期遺構面Ⅰに伴う溝19に重なっており、この河川によって溝19の南肩が削られたと考えられる。河川内埋土は灰白色砂、白色砂が主であり、最上部に中期遺構面Ⅱに伴う包含層が認められる。この包含層と白色砂の境から銅戈を検出した（第98図）。

〈河川1内出土銅戈〉は、いわゆる大阪湾型と称されるもので、樋の先端が分かれており、樋内に複合鋸歯紋が鋳出されたものである。全長24.2cm、刃部幅3.1cm、関部幅7.7cm、樋長12.0cm、樋幅0.4cm、莖長0.6cm、莖幅0.7cm、刃部厚0.12cm、関部厚0.12cm、鎬部厚0.07cm、莖部厚0.04cmを測る。全体は非常に薄く扁平である。刃部は薄く、鎬が突線でも鋳出されていない。関部断面は一応菱形を呈しているが、非常に簡略化されている。樋部は多少薄くなっているが、樋としての役はなさないであろう。樋の輪郭は、内側に鎬があるため明瞭であるが、外側は突線により鋳出されている程度である。複合鋸歯紋は、山形の中が2条の平行線で飾られているが、山形も正確ではなく、頂点に間をあくものが多い。鎬は樋部では明瞭であるが、先端部へいくと突線でも鋳出されていない。樋部では断面蒲鉾形を呈している。莖部は非常に小さく、退化してしまっている。

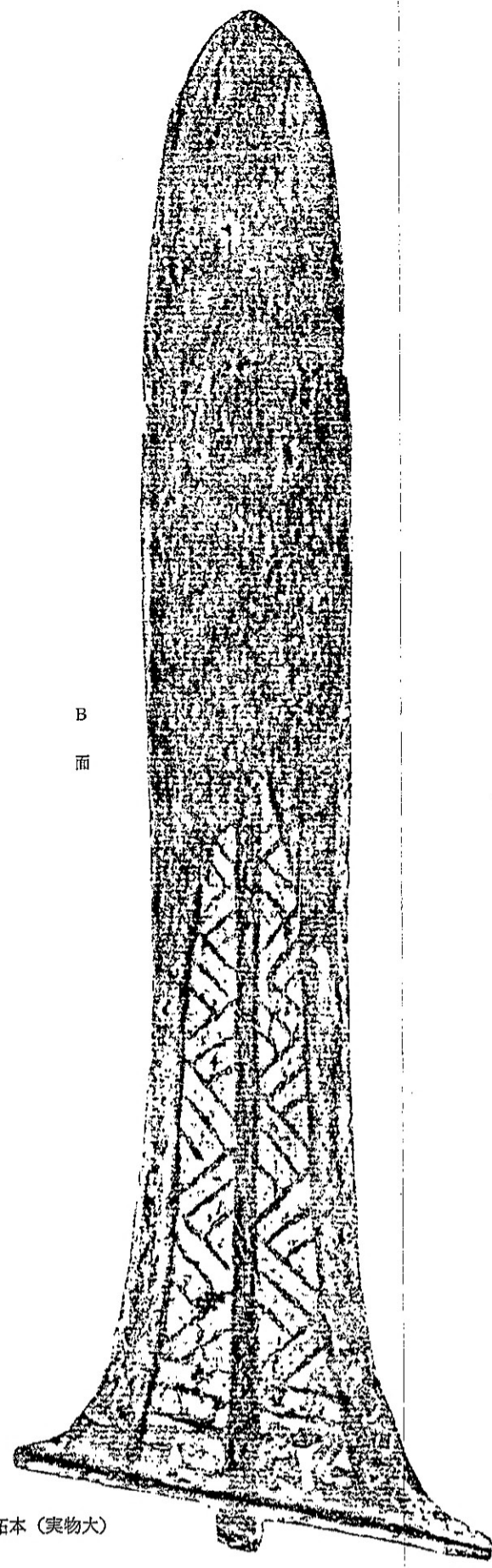
形は細身であるが、実際にはもっと細身である。それは、刃部に鋳型の痕跡があり、相当に甲張りがあったようで、周囲のほとんどの部分が鑿で切取してある。刃部でも全く刃が磨ぎ出されておらず、切取したままで、面を有している。



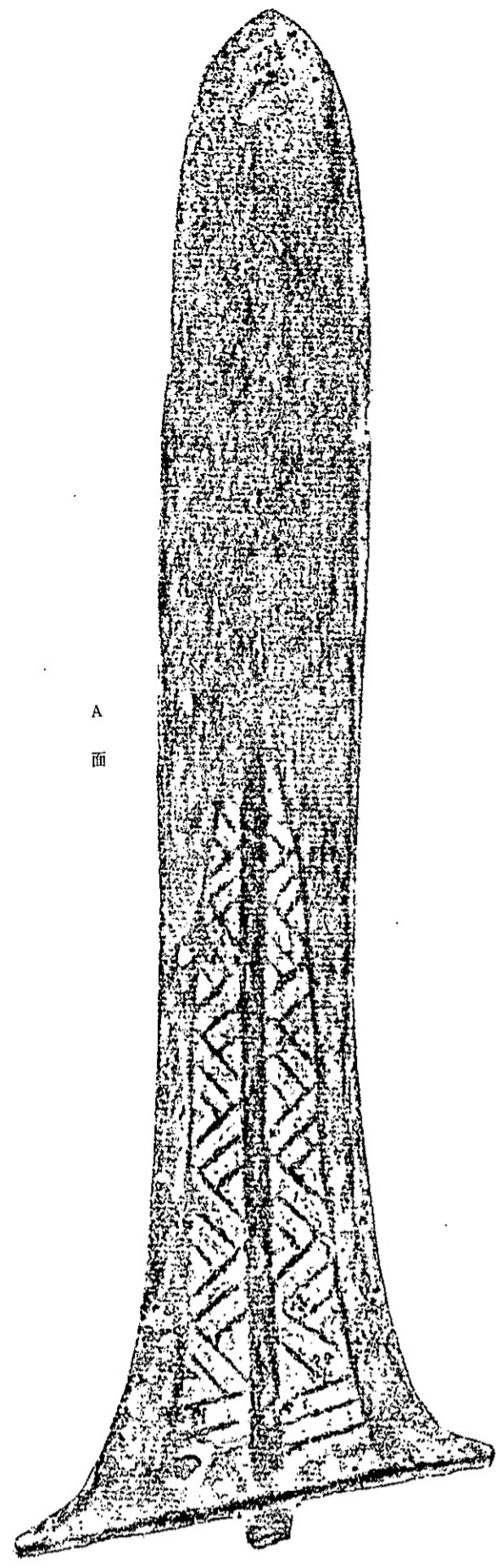
B
面



A
面



B
面



A
面

第98图 河川1内出土铜戈实测图·拓本(实物大)

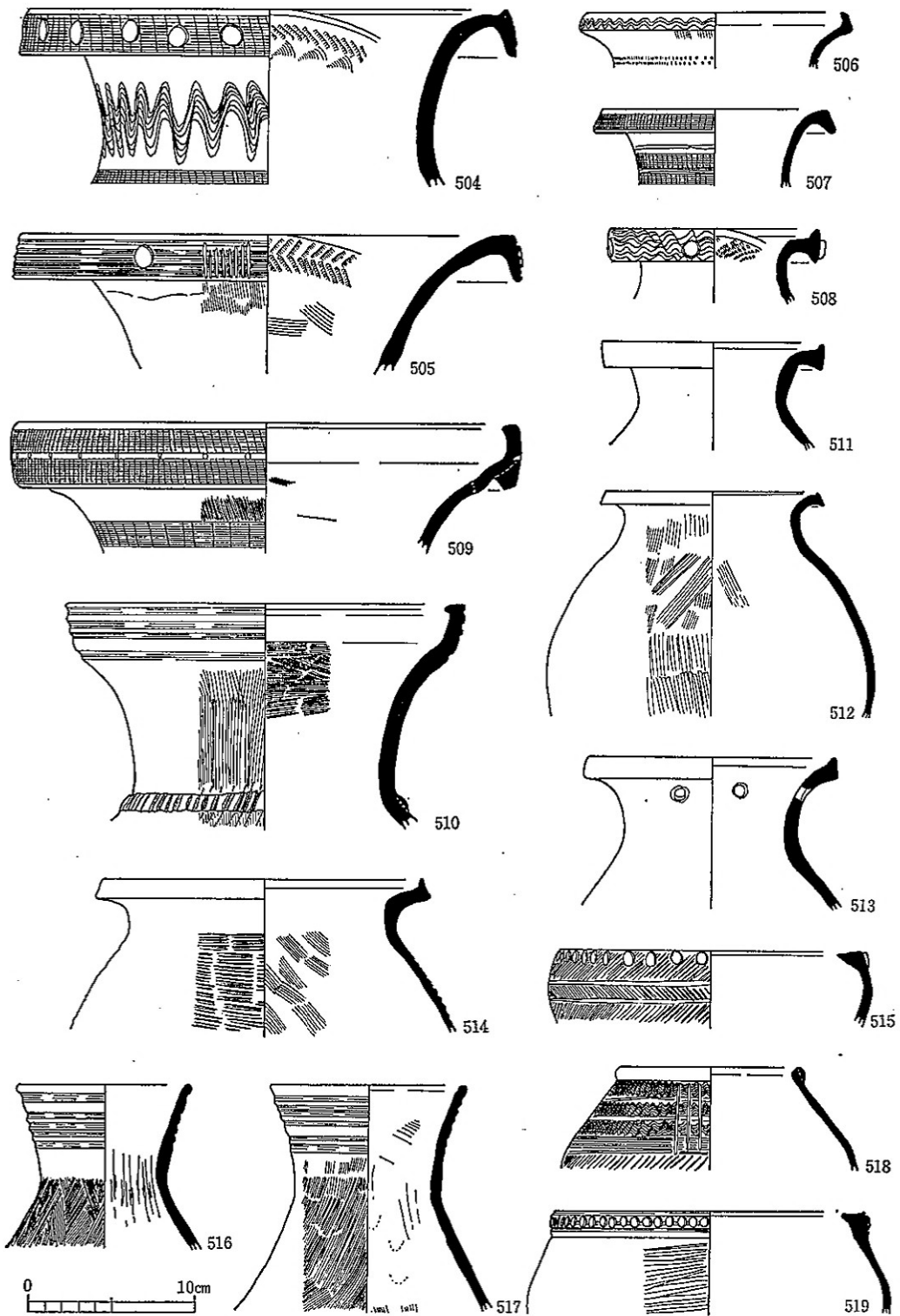
この銅戈の鑄型は、湯口が鋒部にあったと考えられる。また、^す鬆が多く認められ、多少異質な金属により、鑄かけされており、鑄かけ部分は鉄錆のようである。鑄かけは^す鬆の部分すべてに行なわれるのではなく、紐孔部などはわざわざ^す鬆のみ鑄かけをしており、鑄造時に塞がってしまった紐孔部には、わざわざ孔をあけている。

この銅戈は、大きさや形状から従来検出されている大阪湾型銅戈の中でも最も新しいと考えられるものである。他の出土例の中では、神戸市の保久良神社出土銅戈と最も類似している。細部を調べるとやはり新しい形態をしている。大阪湾型銅戈は現在までに15～16口出土しており、それらの中で最も古いものは和歌山県の箕島出土の銅戈であり、刃部の断面が菱形を呈している。続いて桜ヶ丘出土のものがあり、保久良神社となるが、近年高槻市の大塚から出土した銅戈は保久良神社の戈よりも古いものと考えられる。

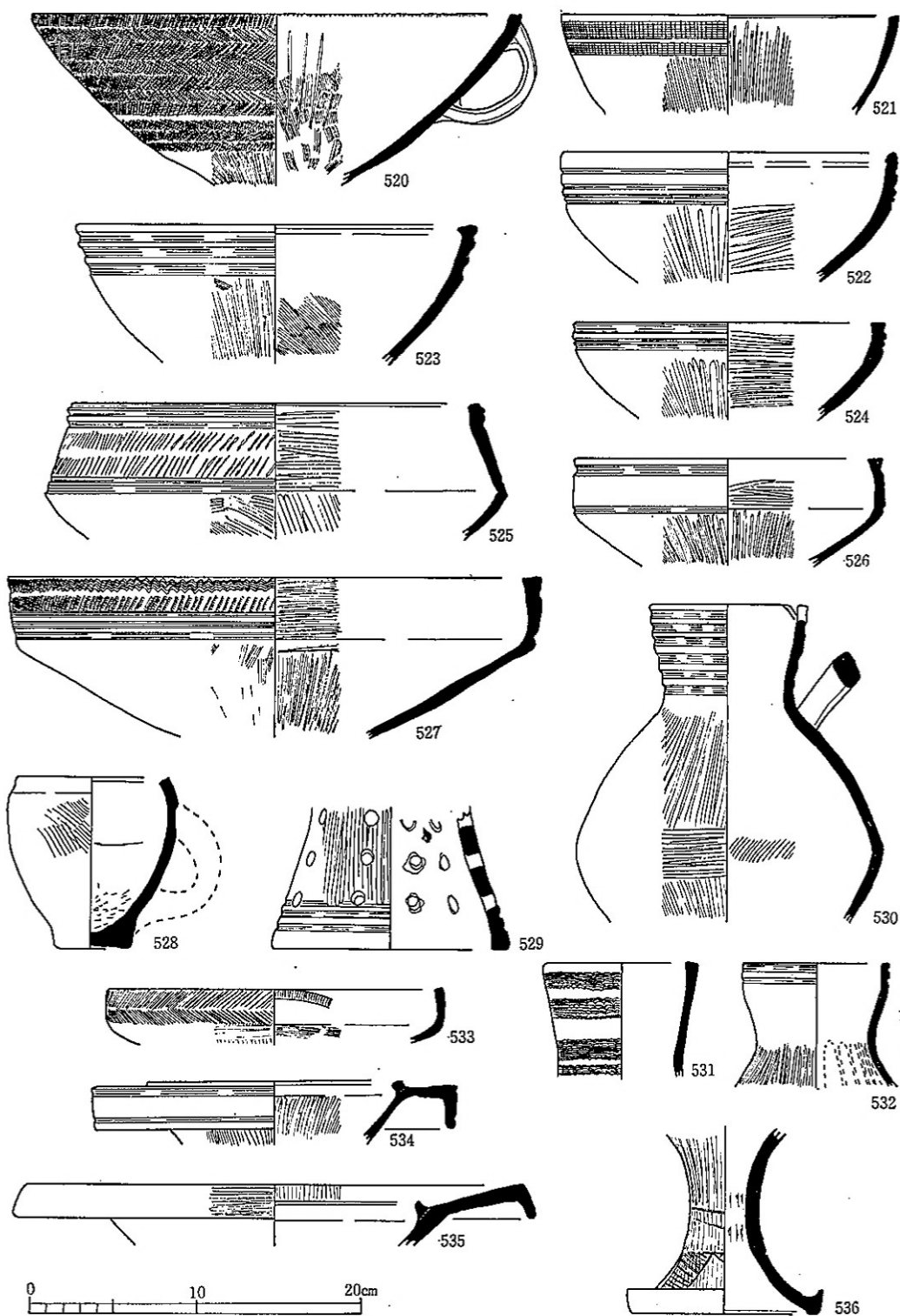
なお、第8号方形周溝墓東裾の中期遺構面Ⅱに伴う包含層からは、凝灰質砂岩製の鑄型片（第112図S-245）も出土しており、この瓜生堂遺跡においても鑄造が行なわれていた可能性を示す重要な資料となるものである。

E 小結

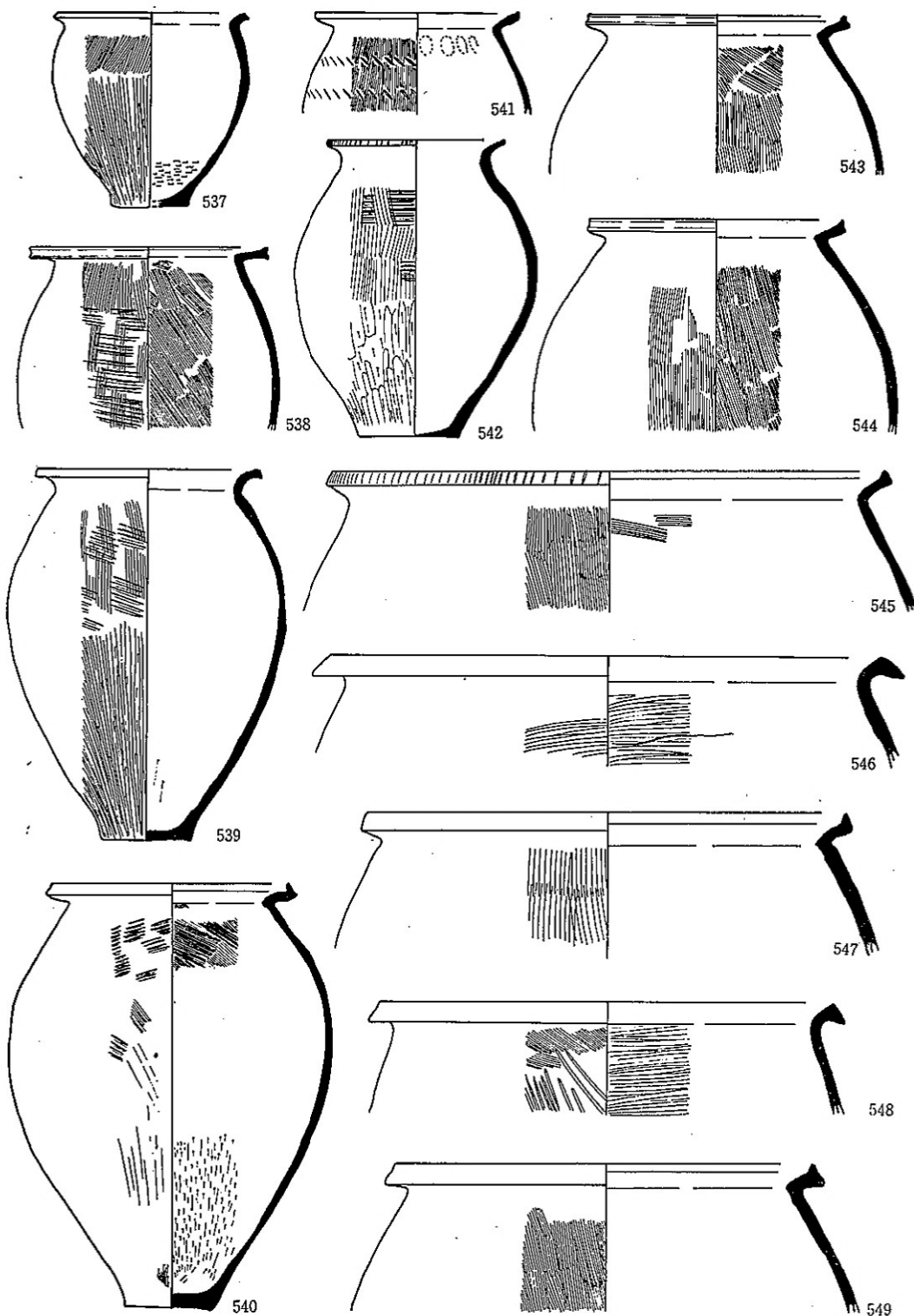
弥生時代中期遺構面Ⅱの遺構は、ほとんどが、盛土を有した方形周溝墓であり、遺構面Ⅰの居住区域から墓域へと変化する。その理由は、明確にはし得ないが、B地区では北端にこの時期に遺構面Ⅰに伴う溝19の上部を河川1が流れるのである。こういうことも居住区域が墓域へと変化する理由の1つにあげられるかもしれない。そしてなお、この北端部に以後ずっと古墳時代前期まで割合大規模な河川が流れるのである。この河川1が中期の段階でどういう流路をとって流れていたのかは明らかではない。そのため、瓜生堂遺跡の中期段階それも、調査区周辺に方形周溝墓が営まれるころに、どのあたりが居住区域になっているのかは明らかにし得ないが、遺構面Ⅱに伴う包含層内には、中期後半の遺物が多く、瓜生堂遺跡であまり明確にされていない中期後半の居住区域もいずれ調査が進めば明らかにされるであろう。なお、楠根川から東部に相当のトレンチを掘削したが、明確な住居址が検出されたのは、今回のH地区くらいであろう。建物跡は、過去の調査でも検出されているが、住居址かどうかは明らかにし得ていない。中期遺構面Ⅱに伴う居住区域の中心は、従来から考えられているように、E・F地区から西へ行ったところであろう。しかし、これはあくまで中心であるだけで、そこしか居住区域がないというものではない。



第99图 弥生時代中期速構面Ⅱ包含層出土土器



第100图 弥生時代中期遺構面II包含層出土土器



第101図 弥生時代中期遺構面Ⅱ包含層出土土器(幀)

3) 石器類及び土製品

B地区の約1,800m²の調査区域中から179個の石器類が出土した。ほとんどが弥生中期後半に属するものである。1m²あたりの石器出土個数は、0.099個と非常に少ない。

石器類及び土製品の内訳は、農具の石庖丁が24個、紡織具の石製紡錘車が3個、土製紡錘車が9個、土製円板が6個、漁労具の土錘が1個、石錘が1個、工具の柱状片刃石斧が2個、扁平片刃石斧が2個、石錐が19個、砥石が10個、叩き石が7個、凹み石が1個、磨石が1個、利器の不定形刃器が38個、武器の石鏃が32個、石槍が14個、磨製石剣が6個、環状石斧が1個、装身具として管玉が2個、特殊なものとして、鋳型が1個である。以下、主要な遺物について略述する。

石庖丁は、結晶片岩系統のものと、粘板岩系統のものに大別される。後者は6個と少ない。形態は背部が曲線をなすもの、直線状のもの等に分けられる。刃部は、外彎・直線・内彎等に分けられる。内彎するのは、刃部を研ぎ出す作業を続けた結果そうなったとする意見がある。また表裏面や背部側面等には、石庖丁を穂摘み具として使用する際や、石庖丁自身を製作する際には生じないすり傷やとがった器物による叩打痕状の傷が、多数ついている。その理由、若しくは原因は、明らかではない。

石錐は、本来、石錐として作られたものと、不定形の剝片の一部を利用したものとに大別される。石庖丁や土器片再利用の紡錘車の穿孔に使われたらしく、先端部側縁に回転線条痕を留めるものがある。また非常に細長く針状を呈するもので、先端部側縁の磨滅度の少ないものは、恐らく皮革等の縫合やボタン穴等の穿孔に供されたものだろう。

紡錘車は糸を紡ぐ時の弾み車であるが、土製・石製・土器片再利用の3種あるが、重量等に違いはない。また土製円板は、紡錘車の未製品と推定されるのであるが、周縁も丸く磨き終え、後穿孔のみ施していないというものが多々ある。紡錘車にしては、小さすぎるものもあるから、あるいはおはじき等の遊戯具と考えるのが妥当であろうか。

石鏃は、凹基式から有基式まで各種あり、数も多い。凹基式の例は、ガラス質の強いサヌカイトで、おそらく前期の遺物と思われる。平基式や円基式は、中期前半に属し、凸基有基式は中期後半に属するものである。石鏃の中には、石錐に転用されたものや、未製品や表裏面に磨きをかけヤス状に仕上げたものや粘板岩製の磨製石鏃等、多々あるが、総じて、完形品の多いのが特徴である。

石槍は、小型と中型が多く、大型は破片で一部存在するのみである。側縁や表裏面の突出部に磨きをかけ、刺突、着柄に便なる処置を施したものもある。

石剣は、断面が菱形になる通常の形式と銅剣型の有樋式石剣の2種ある。前者の1は、石庖丁を転用したものか、紐穴の一部が側面に残存している。またこの石剣の基部は、石本来の暗灰色を呈しているが、身部は黒褐色に変色している。先端部には、刃部と平行する線条痕が認められ、形態としては剣であるが、戈として使用された可能性もある。有樋式の剣は、細形銅剣を志

実に模倣して作られたもので、復元長は40cmを越える大型のものである。畿内の地域からは、未だにこのような銅剣は出土していないが、少なくとも、この石剣製作者の傍には本物の銅剣が存在したことは確実である。が、それにしても、銅剣を作るのと同じ程度、あるいはそれ以上に特殊な手間のかかる模造品がなぜ作られ使われたのかは、一切不明である。儀器化しているという説の存する所以である。

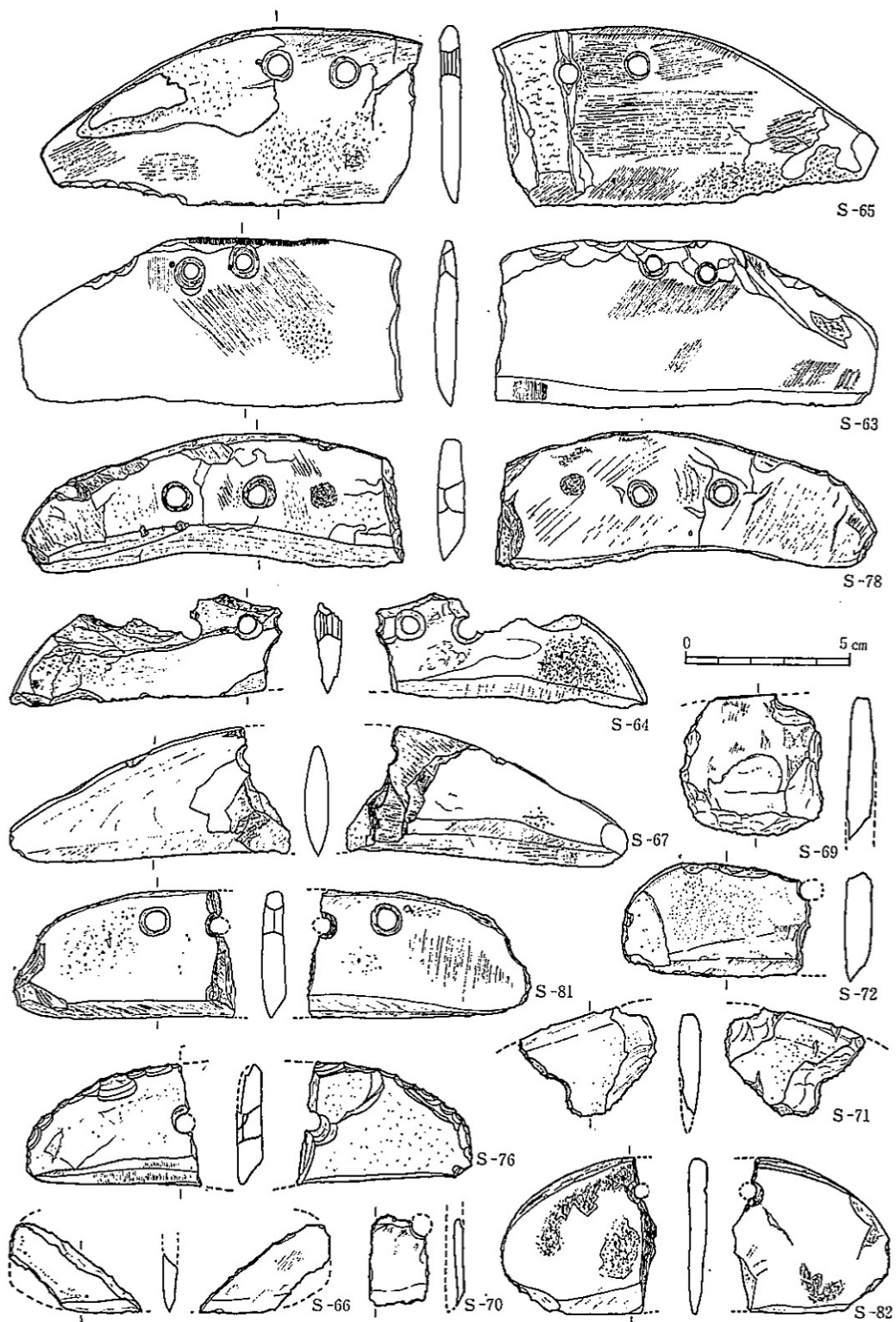
石斧類には、袂入柱状片刃石斧や柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、環状石斧等があるが、量も少なく、器種も乏しい。太型蛤刃石斧に至っては、遂に一片のかけらすら検出できなかったのは、おそらく、そのような伐採道具類や木工具が瓜生堂に於ては必要なかったかの如くである。また環状石斧は、石斧と命名されてはいるが、実際の用途は、東南アジア・ミクロネシア等の民族例からみて、石斧よりは、棍棒頭としての用途が強く推定されるものである。

不定形刃器は、不定形ながらも、一応、刃部と背部をもち、おそらく直接手に持たれスクレイパー類として使用されたものらしい。日常の庖丁類、動物の解体用ナイフ等、幅広い用途に供されたと推定される。

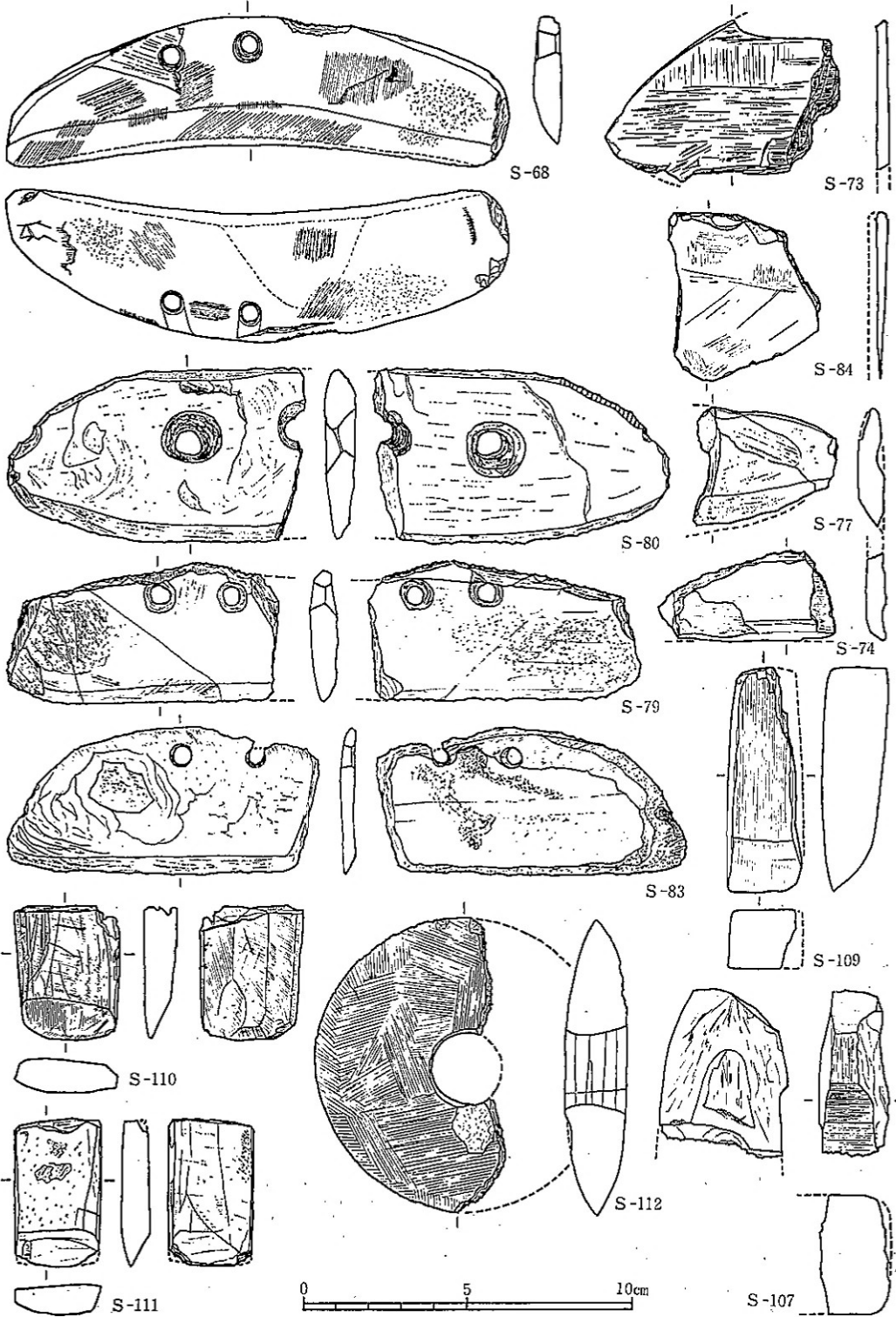
砥石は、手持ち用と据えつけ用に分かれ、前者には、使い尽くして、三角形になってしまった荒い砂岩質のが2個ある。きめ細かいのも2個ある。これらは、すべて石庖丁や石斧・石剣類の刃研ぎ等に使われたのであろう。後者は、破片ばかりではあるが、断片的に見てもあらゆる面を盛んに使用している。総じて、大型砥石の乏しいことが特徴である。

特殊な遺物としての鋳型は、凝灰質砂岩製で灰黄色を呈している。茨木市の東奈良遺跡の銅鐸鋳型と同じ神戸層群産出の石である。鋳型の面は、黒く焼けた部分と地肌の部分とからなり、焼けた部分は僅かに傾斜していて、中央に凹線状の艶々とした部分がある。傾斜部の幅は、約1.5cmで、凹線部は幅約2mm。深さは、凹線部で約2mm。凹線部を鑄と推定し、傾斜部を身の一部と推定すれば、銅戈の先端部分とも推定できる。しかし、大阪湾型銅戈だと、身の側縁部には、すべて幅1~2mmののり面が存在し、それに対応する凹みのない本例は、銅戈であるとしても、大阪湾型ではないということになる。また、大阪湾型のは、先端部の側縁が緩やかなカーブを描くのだが、本例は、長さ4.6cmの部分しか残っていないが、その側縁はほぼ直線形をなし、この点からも大阪湾型とするのには無理がある。鋳型の面には、ヒビ割れ状の傷もあり、寸法も一応判明するから、将来的には、この鋳型で作られた製品を捜し出すことが可能である。今後の研究を俟ちたい。

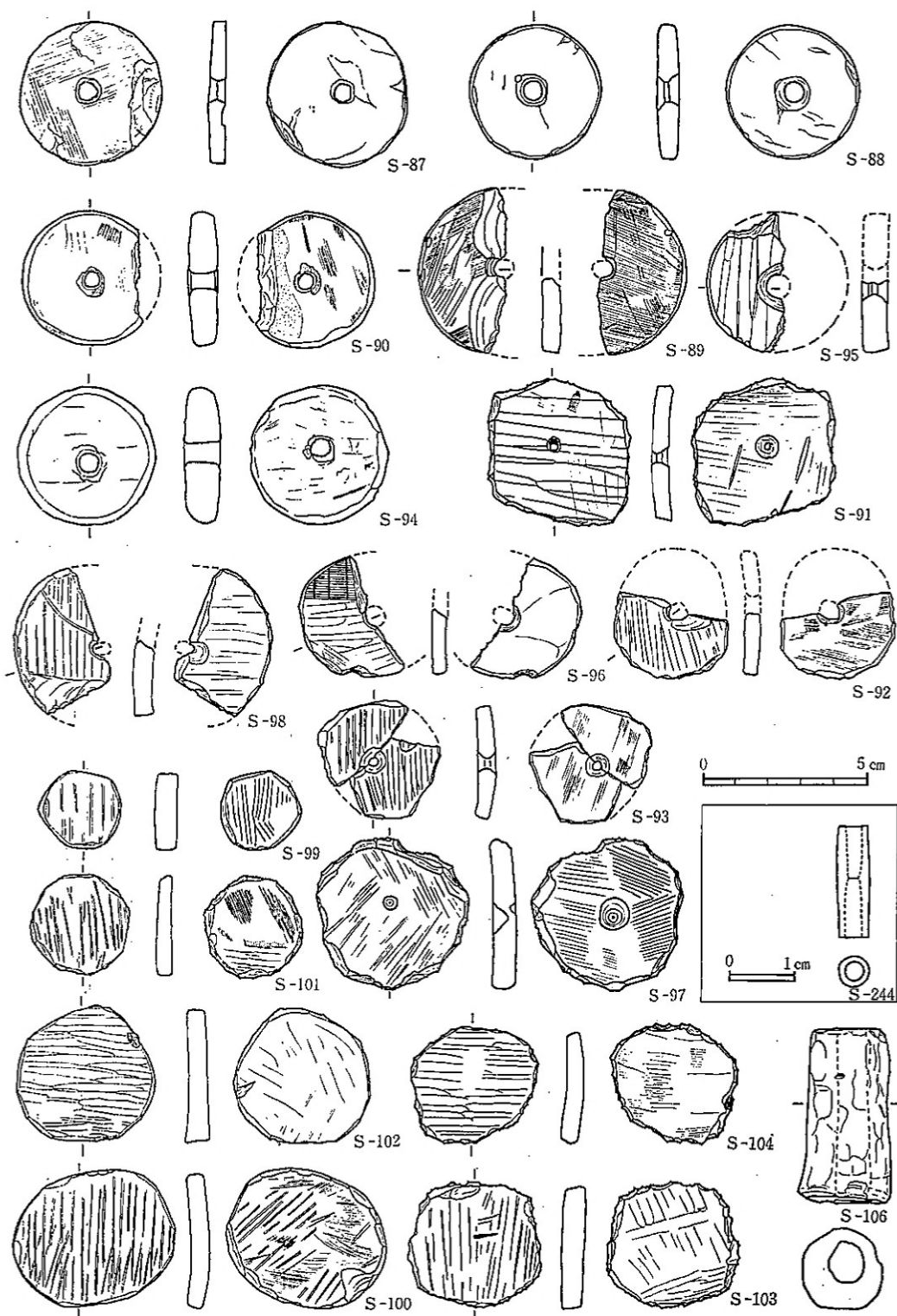
鋳型は、壊れた後には、砂岩であったため、側面が砥石に転用されている。したがって、鋳造工場の地からは動いている可能性が高い。



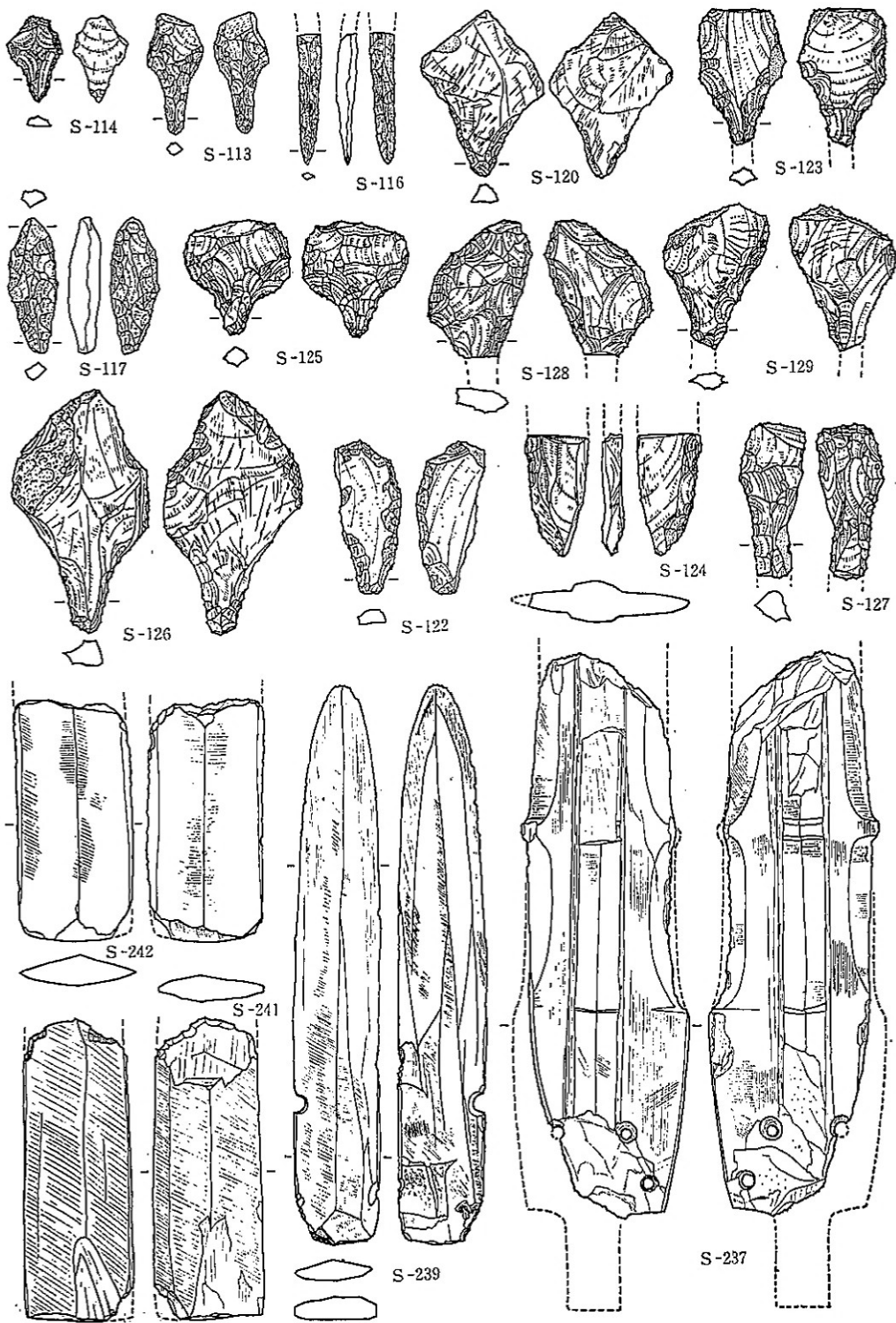
第102图 B地区出土石器(1)



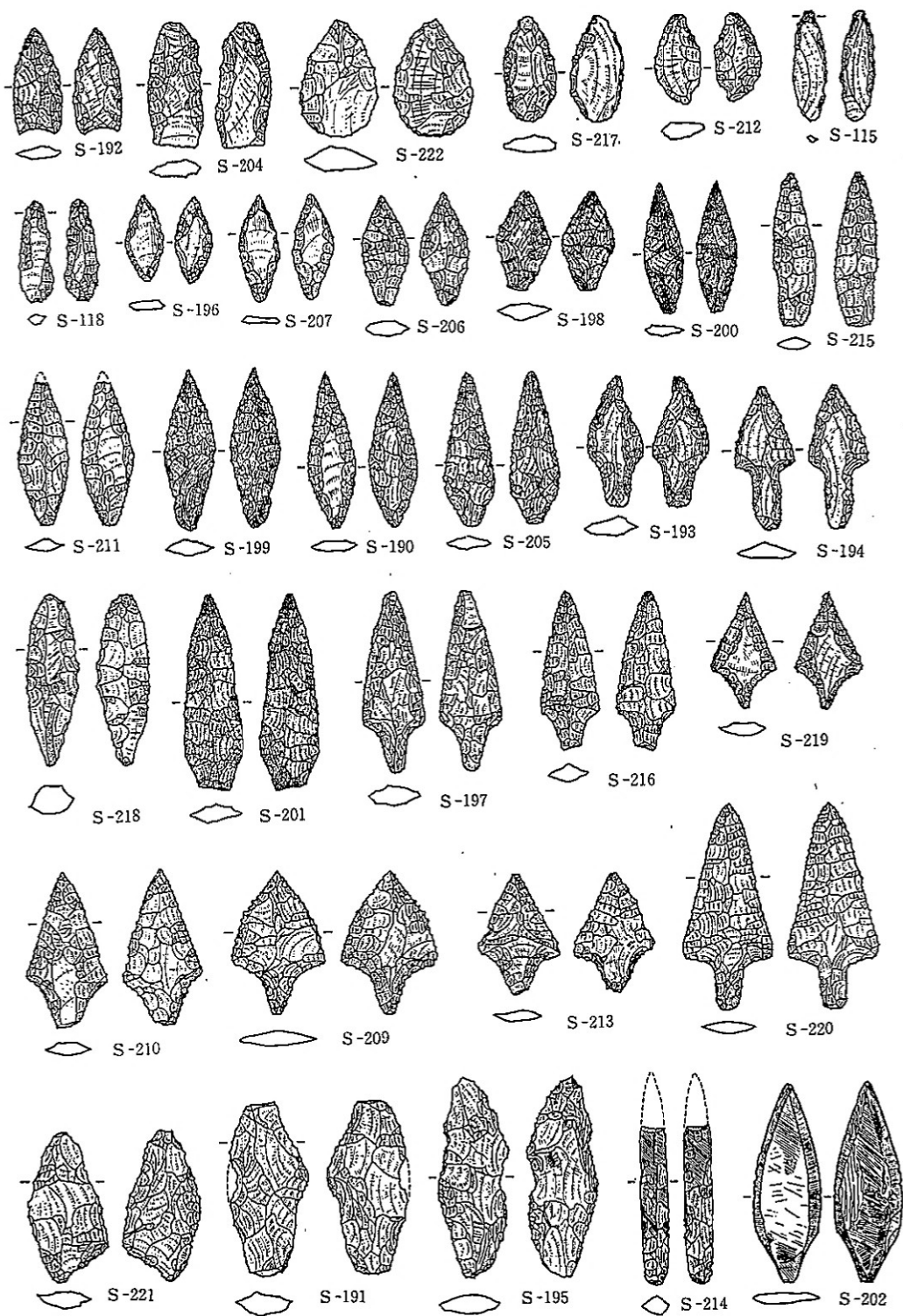
第103图 B地区出土石器(2)



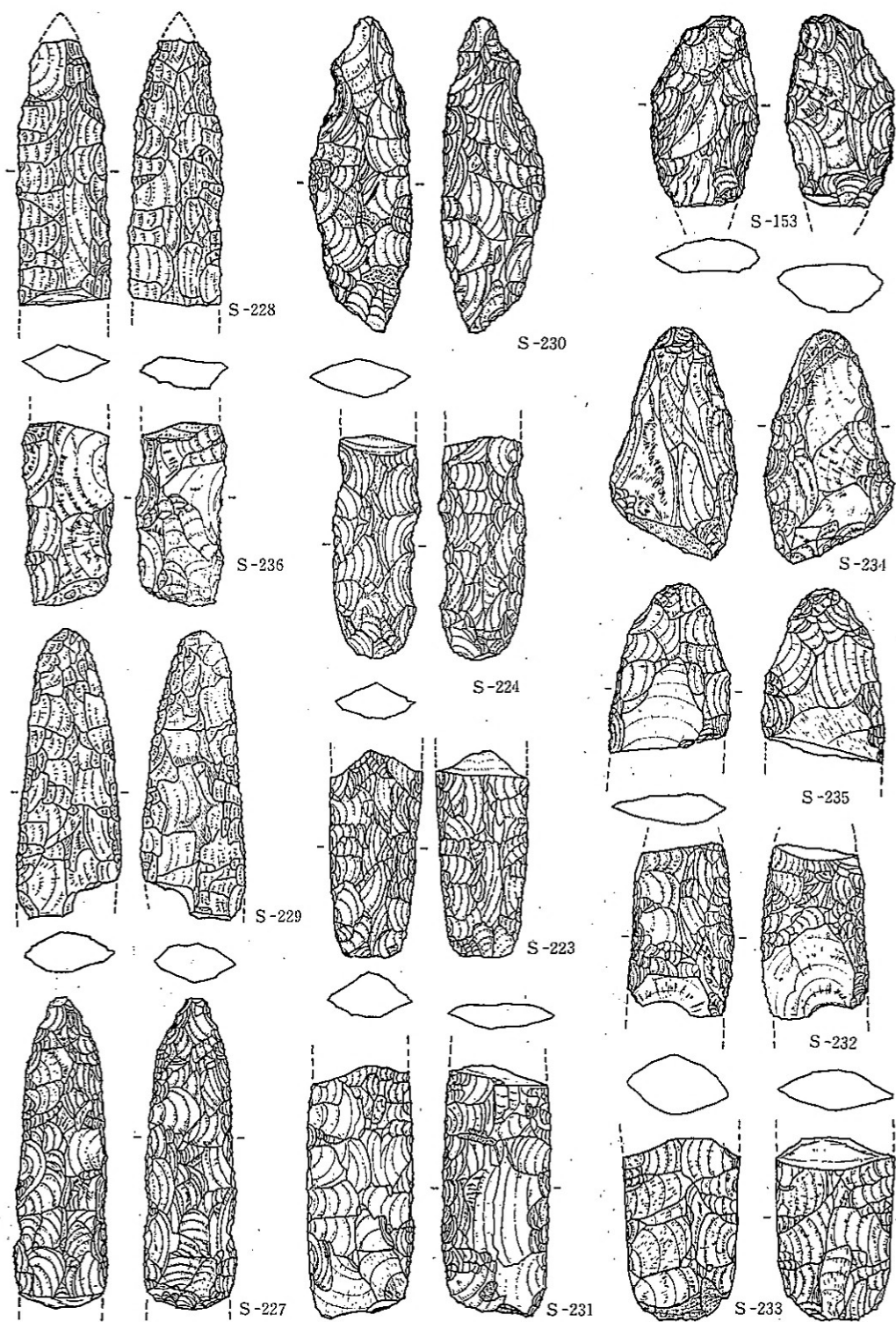
第104图 B地区出土石器(3)、土製品



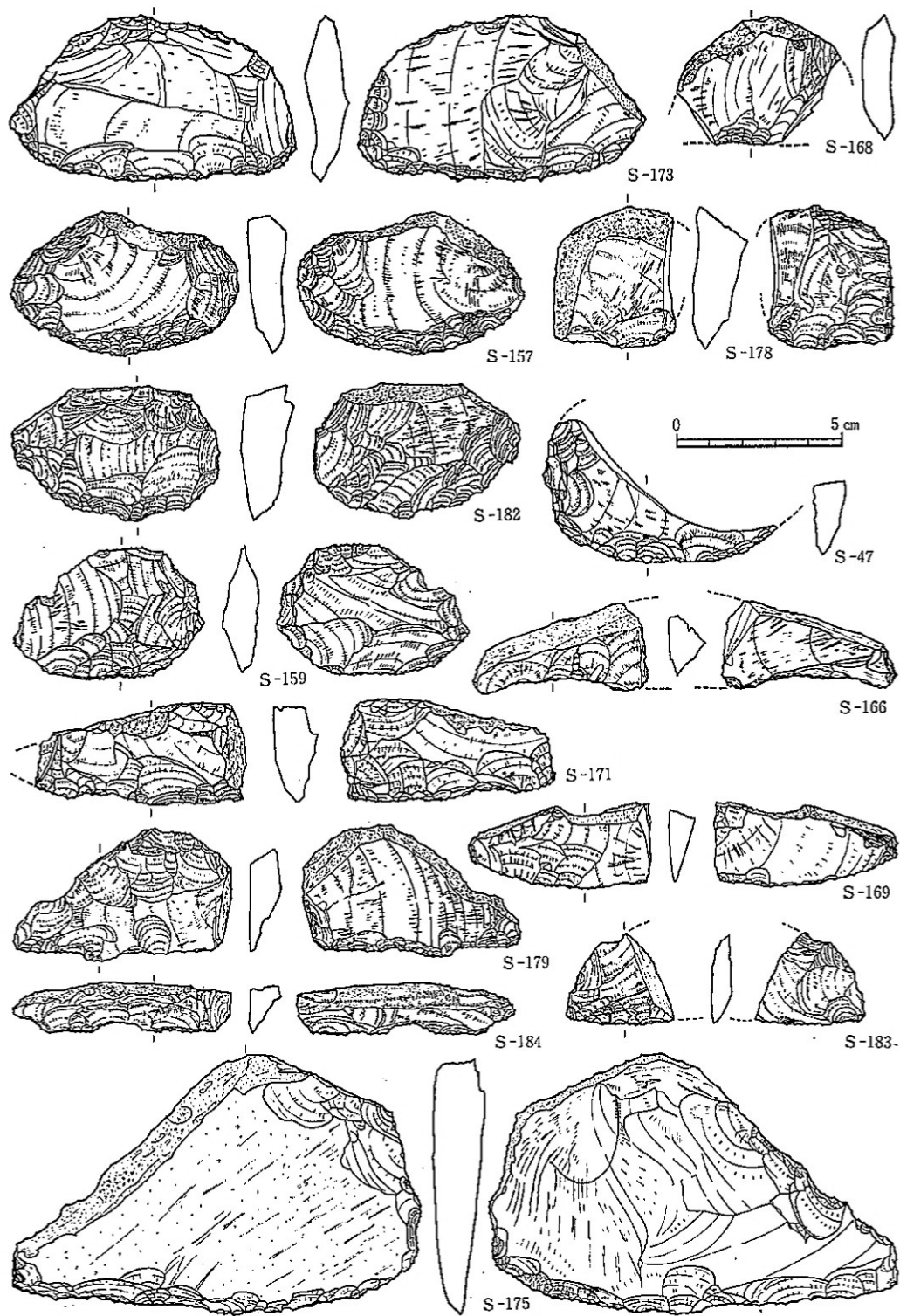
第105图 B地区出土石器(4)



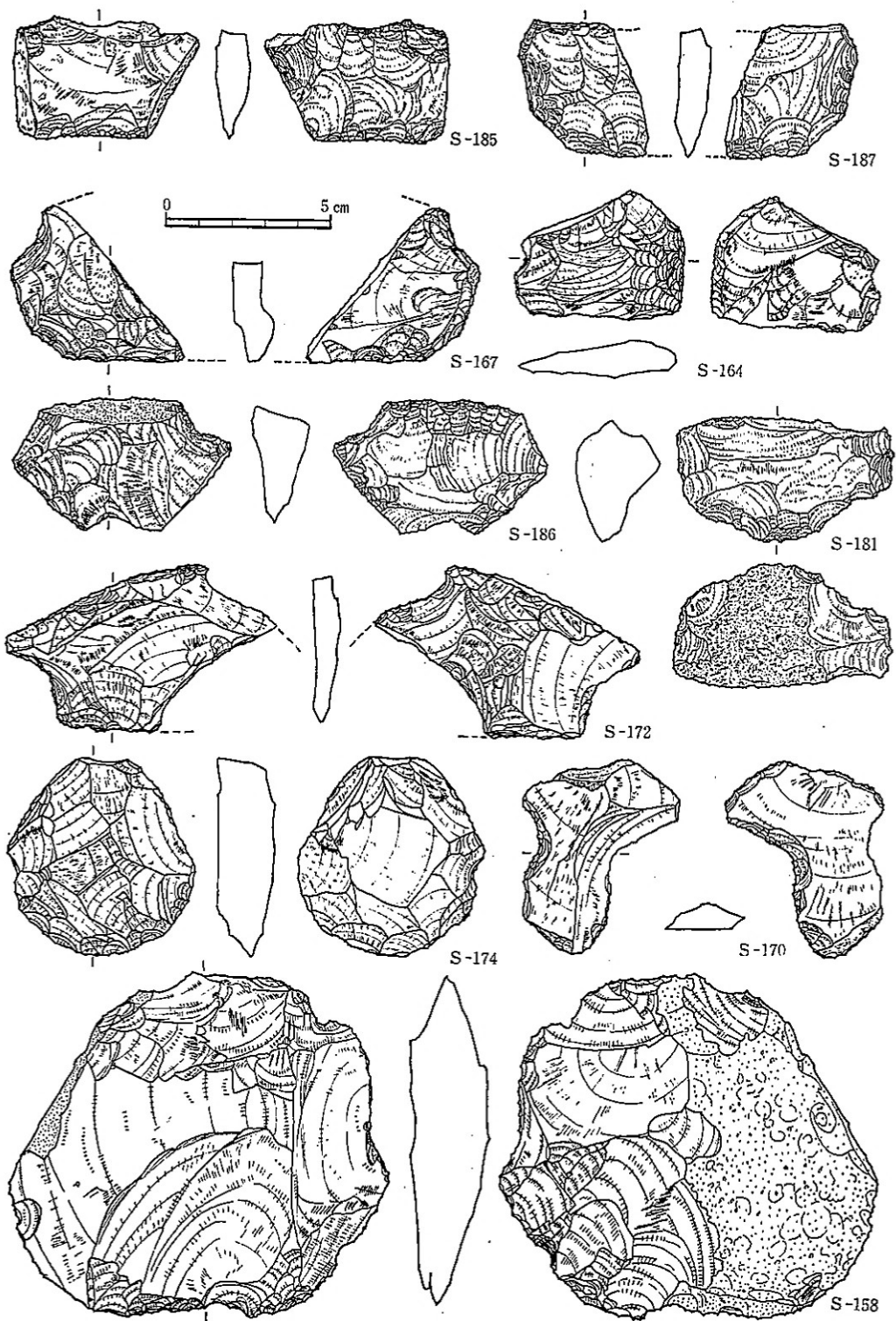
第106图 B地区出土石器(5)



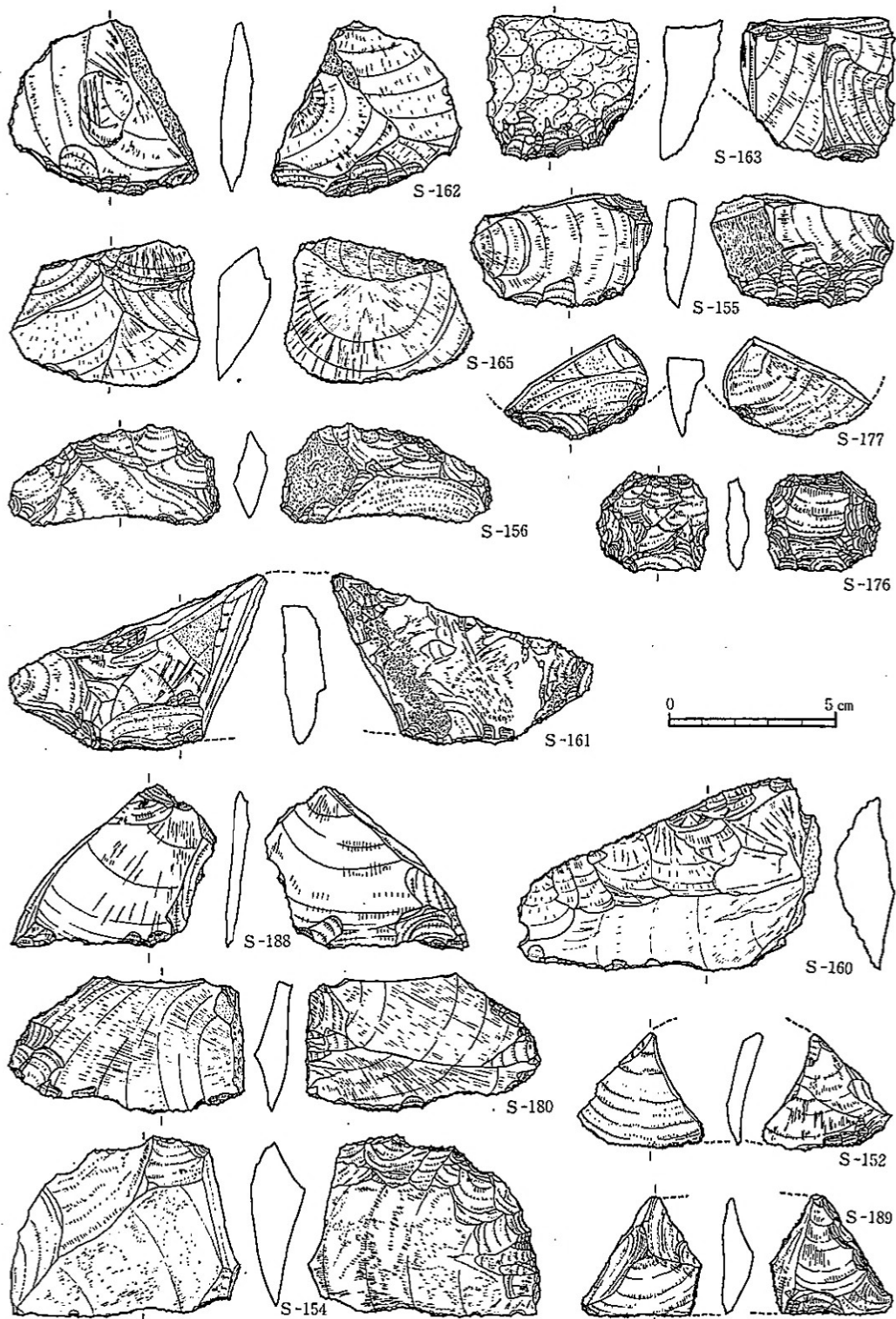
第107图 B地区出土石器(6)



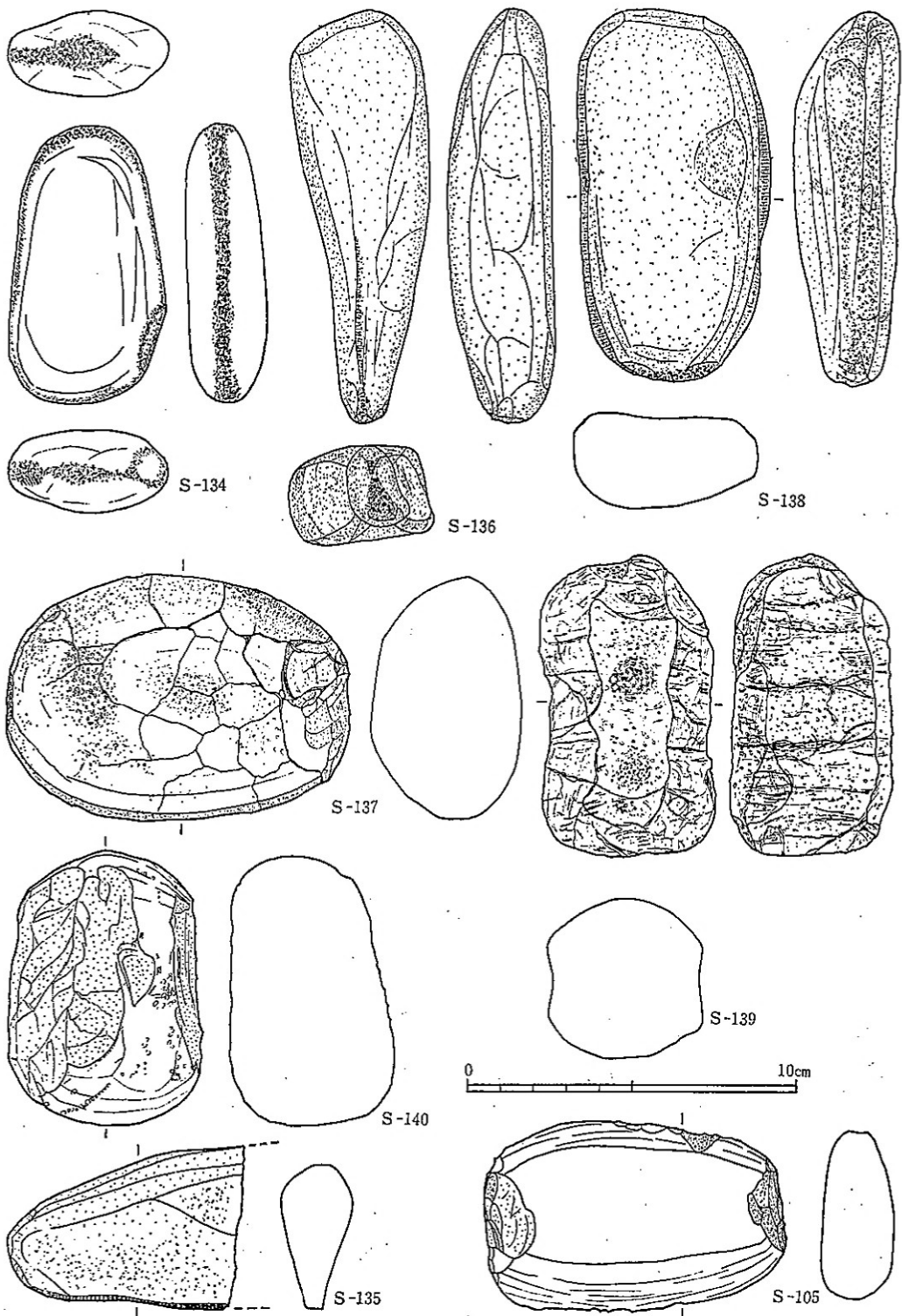
第108图 B地区出土石器(7)



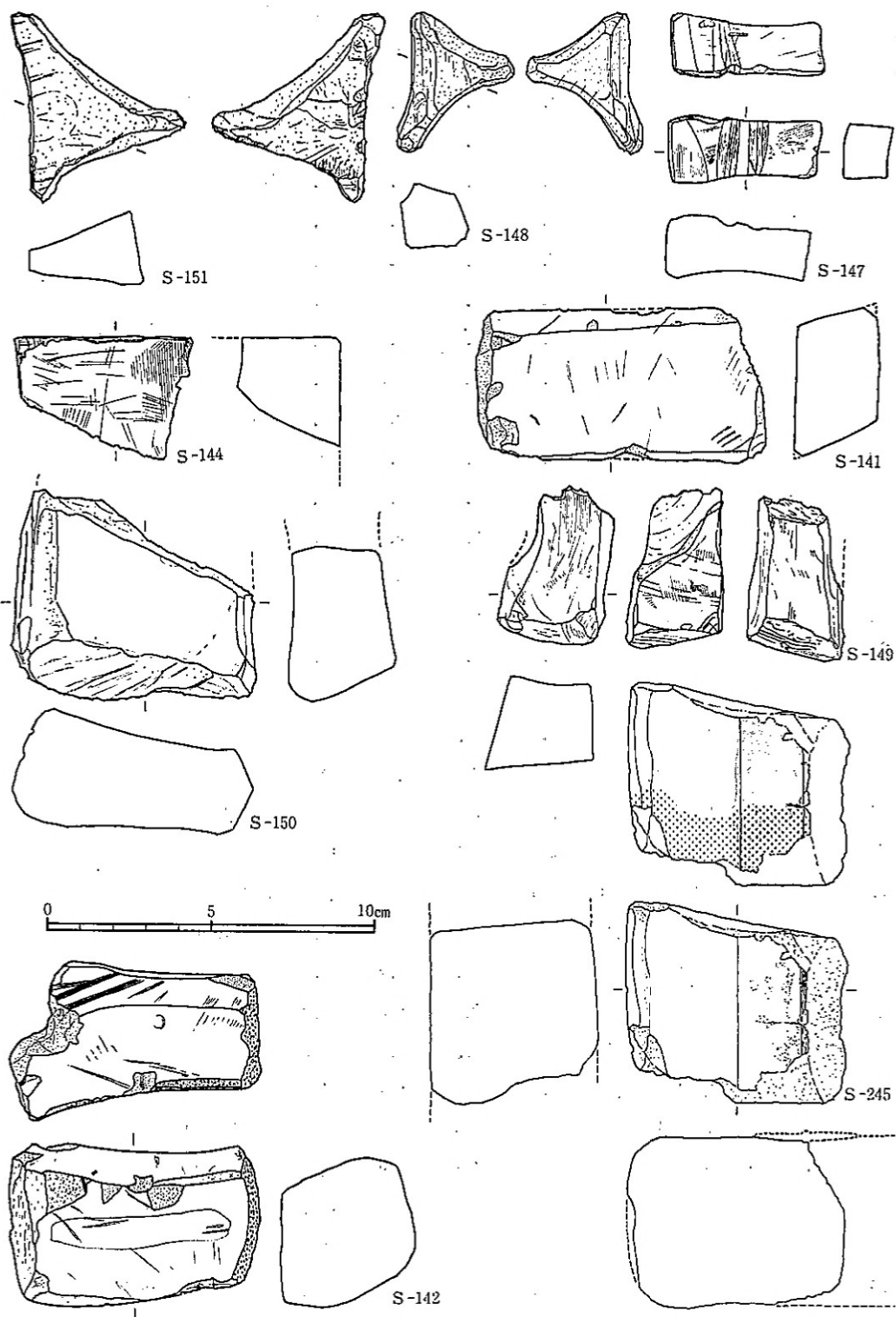
第109图 B地区出土石器(8)



第110图 B地区出土石器(9)



第111图 B地区出土石器(10)



第112图 B地区出土石器(11)

第11表 B地区出土石器類及び土製品一覧表(1)

番号	種類	材質	大きさ (cm)			重さ(g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
63	石 庖 丁	結 晶 片 岩	11.7	5.1	0.6	70.0	中期包含層 I
64	"	"	8.3	3.5	0.8	20.0	中期包含層 II
65	"	"	11.4	5.4	0.6	61.0	溝29
66	"	"	2.7	4.1	0.4	4.0	7号墓盛土
67	"	"	7.6	3.8	0.7	28.0	8号 "
68	"	粘 板 岩	15.1	3.8	0.8	80.0	10号 "
69	"	結 晶 片 岩	4.3	4.4	0.8	22.0	"、紡錘車に加工か?
70	"	"	2.8	1.8	0.3	2.2	土壙130
71	"	"	3.3	4.2	0.6	10.0	表採
72	"	"	3.5	5.7	0.8	29.0	中期包含層 II
73	"	粘 板 岩	4.8	7.2	0.4	15.6	9号墓盛土
74	"	結 晶 片 岩	2.7	5.4	0.6	12.6	溝19
75	"	粘 板 岩	2.2	3.1	0.2	2.0	土壙88
76	"	結 晶 片 岩	3.8	5.3	0.8	22.0	" 104
77	"	石灰質粘板岩	3.6	4.7	0.8	13.2	中期包含層 II
78	"	結 晶 片 岩	4.1	11.7	0.8	56.0	河川 8
79	"	粘 板 岩	4.2	8.2	0.9	44.9	土壙270
80	"	砂 質 片 岩	5.3	9.0	0.9	54.3	中期包含層 II
81	"	結 晶 片 岩	3.9	6.8	0.8	31.7	9号墓盛土
82	"	"	4.8	4.8	0.6	17.7	河川 1
83	"	ホルンフェルス	4.4	9.4	0.4	27.8	溝21
84	"	粘 板 岩	5.1	4.6	0.3	7.7	中期包含層 I
85	"	結 晶 片 岩	4.1	3.7	0.2	5.7	" II
86	"	"	5.1	3.2	0.8	9.9	7号墓盛土、未製品片
87	石製紡錘車	緑 泥 片 岩	4.3	4.3	0.5	15.8	溝46、完形
88	"	結 晶 片 岩	4.1	4.1	0.7	16.7	9号墓盛土、完形
89	"	安 山 岩	5.1	2.6	0.5	7.5	溝200、半欠
90	土製紡錘車	製 品	3.6	4.1	0.9	16.0	8号墓盛土、一部欠
91	"	土 器 片	5.3	4.1	0.5	13.7	7号 "、完形
92	"	"	2.6	3.5	0.5	5.0	"、半欠
93	"	"	3.7	3.7	0.5	6.6	"、破損品
94	"	製 品	4.2	4.1	1.1	21.5	8号墓盛土、完形

第11表 B地区出土石器類及び土製品一覧表(2)

番号	種類	材質	大きさ (cm)			重さ(g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
95	土製紡錘車	土器片	4.3	2.5	0.8	9.4	8号墓盛土、半欠
96	"	"	3.7	3.3	0.4	4.7	9号墓盛土、半欠
97	"	"	4.6	4.6	0.8	19.7	中期包含層Ⅱ、穿孔途中
98	"	"	4.5	3.0	0.6	7.9	溝200、半欠
99	土製円板	"	2.4	2.5	0.7	5.1	8号墓盛土、完形、周縁研磨
100	"	"	4.2	4.9	0.5	14.7	7号 "、"、"
101	"	"	3.1	3.0	0.4	5.4	" "、"、"
102	"	"	4.1	4.2	0.7	13.0	9号墓盛土、"
103	"	"	3.8	4.1	0.6	13.5	6号墓第2主体部、周縁打ち欠き
104	"	"	3.6	3.9	0.5	9.8	" " "
105	石 錘	硬質砂岩	5.8	9.2	2.2	160.4	中期包含層Ⅱ、両端に打撃痕
106	土 錘		5.3	2.9	2.5	36.3	後期Ⅱ包含層
107	柱状片刃石斧	粘板岩	5.0	2.0	3.8	55.6	溝29、挟入、熱を受ける
108	"	"	3.3	2.7	0.4	4.1	8号墓盛土
109	"	緑泥片岩	7.8	2.2	1.9	53.9	河川1
110	扁平片刃石斧	石炭質粘板岩	4.1	3.1	1.0	17.9	溝33、石剣転用
111	"	粘板岩	4.4	2.6	0.9	20.2	9号墓盛土、石庖丁片転用
112	環状石斧	輝石安山岩	5.8	8.9	1.8	100.0	6号墓盛土、半欠
113	石 錘	サヌカイト	3.6	1.6	0.8	3.3	中期包含層Ⅱ
114	"	"	2.5	1.6	0.4	1.6	"
115	"	"	3.2	0.9	0.4	1.2	8号墓南周溝
116	"	"	3.9	0.7	0.5	1.5	" 盛土
117	"	"	4.1	1.4	0.8	4.9	溝33、回転線条痕
118	"	"	3.0	1.0	0.4	1.3	6号墓盛土
119	"	"	2.6	2.4	0.6	3.8	10号 "
120	"	"	4.9	3.7	0.6	9.1	7号 "、回転線条痕
121	"	"	2.5	1.9	0.6	3.2	8号 "
122	"	"	4.5	1.9	0.6	7.0	9号 "
123	"	"	4.0	2.5	0.5	8.2	後期Ⅰ包含層
124	"	"	3.6	1.9	0.65	4.8	中期包含層Ⅰ、回転線条痕
125	"	"	3.4	3.1	0.6	12.2	土壙117
126	"	"	7.3	4.1	0.8	35.9	河川1

第11表 B地区出土石器類及び土製品一覽表(3)

番号	種 類	材 質	大 き さ (cm)			重さ(g)	出 土 場 所 ・ 備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
127	石 錐	サヌカイト	4.6	2.0	0.9	7.8	9号墓盛土
128	"	"	4.1	3.1	0.7	12.0	隅丸周溝
129	"	"	4.3	3.2	0.5	11.8	9号墓盛土
130	"	"	7.1	3.6	1.5	30.3	後期I包含層、回転線条痕
131	"	"	4.3	2.5	1.2	11.4	"
132	叩 き 石	硬質砂岩	7.6	4.6	1.4	65.0	10号墓盛土
133	"	"	8.5	4.6	2.5	209.0	"
134	"	"	8.4	4.8	2.4	140.0	溝19
135	"	"	5.0	7.0	2.2	87.3	中期包含層II
136	"	"	12.5	4.4	3.2	185.0	溝40
137	"	"	7.4	10.4	4.5	470.0	9号墓盛土、熱を受けひび割れ
138	"	"	11.2	6.0	3.1	295.0	土壙63
139	凹 み 石		9.2	5.3	4.7	400.5	中期包含層II
140	磨 石	閃 緑 岩	8.3	5.9	4.9	440.0	溝21
141	砥 石	凝 灰 岩	8.5	4.5	2.6	164.0	鎌倉・室町包含層
142	"	砂 岩	7.6	5.0	4.0	214.0	表採
143	"	泥 岩	9.0	8.5	5.2	503.0	庄内土壙330
144	"	"	5.4	3.7	3.1	68.0	溝29、局部的に火をうけ、タール付着
145	"	砂 岩	5.2	8.0	2.2	69.0	7号墓盛土
146	"	"	4.9	5.9	1.7	28.0	10号墓北周溝
147	"	凝 灰 岩	4.6	2.1	1.8	24.1	8号墓盛土
148	"	砂 岩	4.2	3.5	2.0	22.9	中期包含層II
149	"	泥 岩	4.8	3.4	2.9	49.7	"
150	"	黒雲母片岩	6.3	7.5	3.2	200.5	土壙23
151	"	砂 岩	5.7	5.3	2.2	36.7	中期包含層II
152	不定形刃器	サヌカイト	3.6	3.8	0.5	6.2	河川3
153	"	"	5.7	3.3	1.0	23.9	"3
154	"	"	5.5	7.0	1.6	53.0	8号墓盛土
155	"	"	3.4	5.5	0.9	19.4	"
156	"	"	3.0	6.3	1.0	16.7	"
157	"	"	4.4	6.9	1.3	41.5	10号墓盛土
158	"	"	10.4	11.5	2.4	270.0	"

第11表 B地区出土石器類及び土製品一覧表(4)

番号	種類	材質	大 き さ (cm)			重さ(g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
159	不定形刃器	サヌカイト	3.9	5.7	1.2	23.6	8号墓盛土
160	"	"	5.8	9.2	1.7	86.6	9号墓盛土
161	"	"	5.2	7.8	1.3	45.0	溝200
162	"	"	5.3	5.6	0.9	27.5	溝33
163	"	"	4.4	4.5	1.6	39.1	"
164	"	"	3.9	5.1	1.1	23.2	土城27
165	"	"	4.4	5.7	1.6	29.3	中期包含層II
166	"	"	4.7	5.2	1.2	15.2	後期II河川8
167	"	"	2.6	5.3	1.1	24.9	"
168	"	"	3.9	5.0	0.8	23.7	土城270
169	"	"	2.6	5.5	0.8	15.1	9号墓盛土
170	"	"	5.9	4.8	0.8	20.8	中期包含層II
171	"	"	3.1	6.4	1.4	30.8	中期包含層I
172	"	"	5.1	8.1	0.7	39.0	後期包含層
173	"	"	4.9	8.7	1.3	61.6	隅丸周溝
174	"	"	6.0	5.6	1.8	68.2	9号墓盛土
175	"	"	7.8	12.4	1.5	150.0	ピット607
176	"	"	2.1	3.4	0.9	10.0	後期II包含層
177	"	"	2.1	4.2	1.1	11.0	8号墓盛土
178	"	"	4.3	3.7	1.8	31.6	7号 "
179	"	"	4.0	6.5	1.3	28.9	8号 "
180	"	"	4.1	7.0	1.5	26.7	中期包含層II
181	"	"	6.4	4.0	2.6	58.7	7号墓盛土
182	"	"	4.2	6.2	1.6	45.4	土城14
183	"	"	2.8	3.2	0.7	4.4	10号墓盛土
184	"	"	1.6	6.5	1.0	10.8	中期包含層II
185	"	"	3.8	5.4	1.6	28.0	"
186	"	"	5.1	5.1	2.0	42.0	"
187	"	"	4.0	4.1	1.1	17.3	8号墓盛土
188	"	"	4.9	6.2	0.5	21.1	土城270
189	"	"	3.6	3.7	0.9	9.4	9号墓盛土
190	石 鏃	"	4.6	1.4	0.3	2.0	庄内土器溜I、古墳時代前期

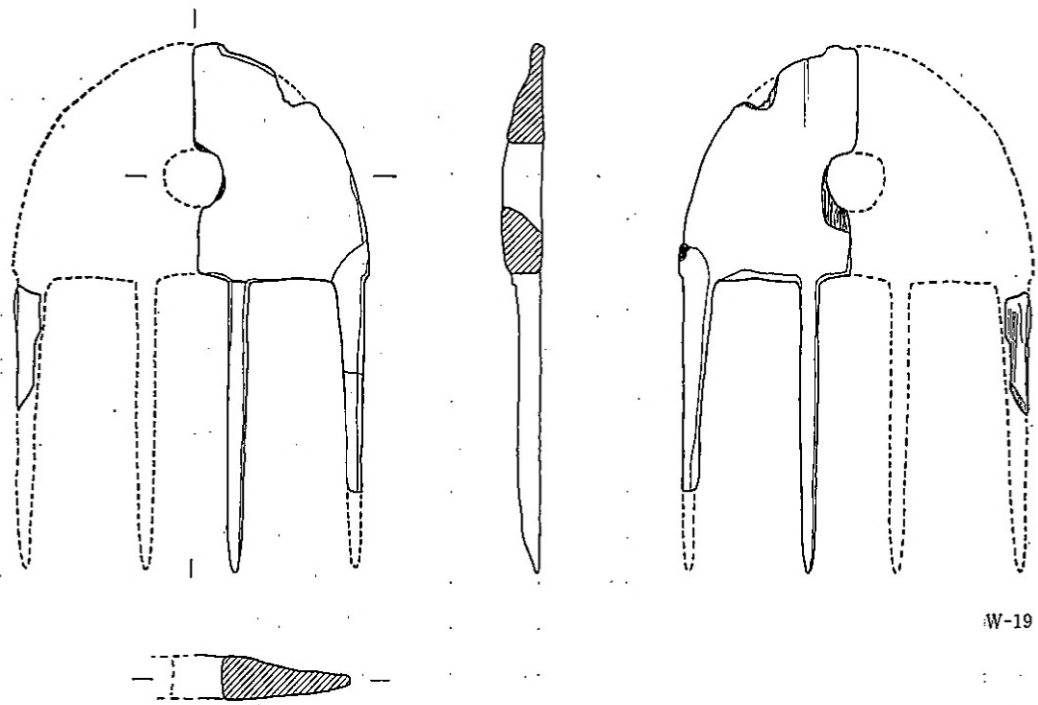
第11表 B地区出土石器類及び土製品一覧表(5)

番号	種 類	材 質	大 き さ (cm)			重さ(g)	出 土 場 所 ・ 備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
191	石 鏃	サヌカイト	5.2	2.4	0.7	12.7	8号墓南周溝、未製品か?
192	"	"	3.1	1.4	0.3	1.6	中期包含層II
193	"	"	3.9	1.6	0.5	2.5	8号墓盛土
194	"	"	4.3	1.7	0.4	2.5	"
195	"	"	6.0	2.1	0.6	8.9	"、未製品か?
196	"	"	2.5	1.1	0.3	0.9	10号墓盛土
197	"	"	5.4	1.8	0.6	5.2	7号 "
198	"	"	2.9	1.6	0.5	1.8	土壙32
199	"	"	4.8	1.5	0.4	2.6	8号墓盛土
200	"	"	3.9	1.2	0.3	1.3	土壙130
201	"	"	5.9	1.7	0.6	5.9	8号墓盛土
202	"	粘 板 岩	6.0	2.0	0.3	5.0	中期包含層I、磨製石鏃
203	"	サヌカイト	4.2	1.8	0.6	4.8	8号墓盛土
204	"	"	3.7	1.6	0.5	3.9	"
205	"	"	4.5	1.4	0.4	2.5	"
206	"	"	3.3	1.4	0.4	1.8	中期包含層II
207	"	"	3.1	1.2	0.2	0.9	表採
208	"	"	4.3	2.3	1.0	12.0	溝200、未製品か?
209	"	"	4.3	2.8	0.4	4.9	9号墓盛土
210	"	"	4.6	2.4	0.4	4.5	溝33
211	"	"	4.3	1.5	0.3	2.2	中期包含層II
212	"	"	2.6	1.4	0.5	1.9	"、両錐に転用
213	"	"	3.6	2.4	0.3	2.1	"
214	"	"	4.8	0.8	0.6	2.7	ヤスカ?
215	"	"	4.6	1.2	0.3	2.2	9号墓盛土
216	"	"	4.8	1.7	0.5	3.4	中期包含層II
217	"	"	3.1	1.6	0.5	2.5	"
218	"	"	5.2	1.5	0.8	7.0	中期包含層I、石錐に使用
219	"	"	3.5	2.0	0.4	1.6	9号墓盛土
220	"	"	6.2	2.7	0.4	5.6	"
221	"	"	4.5	2.3	0.5	7.8	"、未製品か?
222	"	"	3.5	2.3	0.7	4.9	中期包含層I

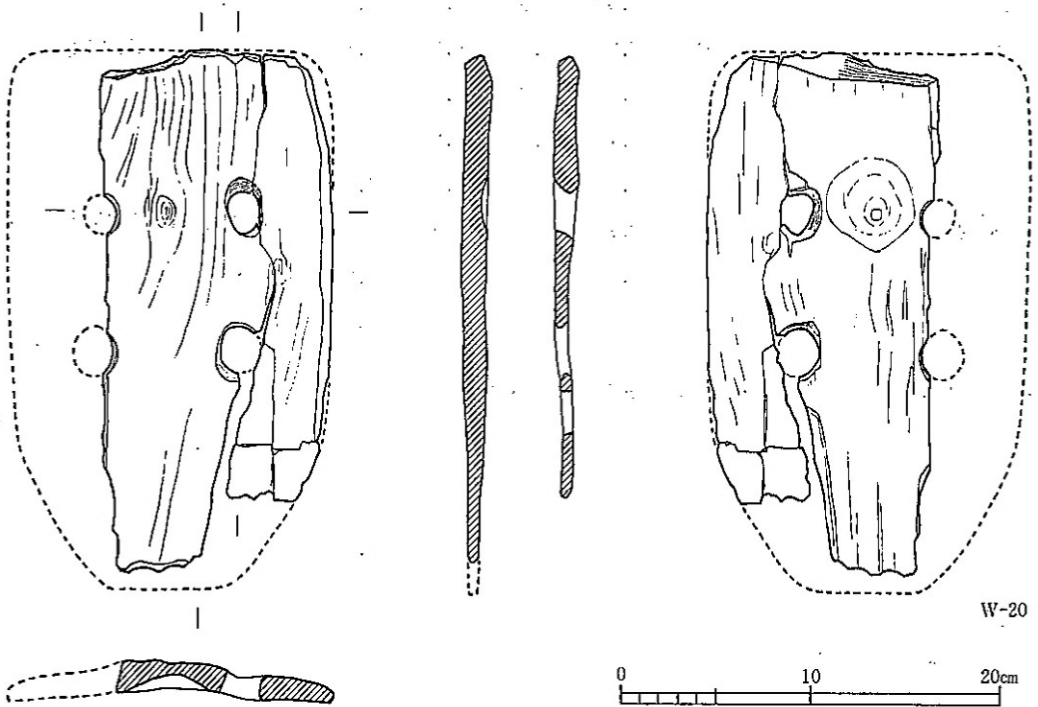
第11表 B地区出土石器類及び土製品一覧表(6)

番号	種類	材質	大 き き (cm)			重さ(g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
223	石 槍	サヌカイト	6.2	2.7	1.4	28.9	中期包含層Ⅱ
224	〃	〃	6.2	2.6	1.0	22.1	10号墓盛土
225	〃	〃	3.8	3.2	1.1	14.6	7号 〃
226	〃	〃	3.8	2.6	0.8	7.4	8号 〃
227	〃	〃	9.3	2.8	1.1	35.1	9号墓盛土
228	〃	〃	8.0	2.8	1.1	31.2	中期包含層Ⅱ
229	〃	〃	8.7	3.1	1.2	36.1	〃
230	〃	〃	9.5	3.1	1.1	31.5	後期Ⅱ包含層
231	〃	〃	7.6	3.2	0.7	26.8	土城270
232	〃	〃	5.2	3.2	1.7	33.2	中期包含層Ⅱ
233	〃	〃	5.4	3.6	1.1	27.5	中期包含層Ⅰ
234	〃	〃	7.0	3.8	1.4	40.7	土城56
235	〃	〃	5.2	3.7	0.9	18.7	〃 119
236	〃	〃	5.5	2.7	0.9	17.2	〃 27
237	磨製石剣	石灰質粘板岩	16.8	4.6	1.3	112.0	中期包含層Ⅱ、有樋式銅剣型石剣
238	〃	〃	1.5	4.0	0.2	1.7	7号墓盛土
239	〃	粘板岩	16.7	2.6	0.7	44.1	9号墓盛土、石盾丁の転用
240	〃	石灰質粘板岩	4.5	2.8	0.7	13.2	河川1
241	〃	〃	9.1	3.3	0.8	30.7	土城116
242	〃	〃	7.3	3.4	0.9	31.7	〃 270
243	管 玉	碧 玉	3.7	1.5	1.5	14.5	古墳中期包含層、古墳時代に属する
244	〃	〃	1.7	0.5	0.5	0.7	7号墓盛土
245	鋳 型	凝灰質砂岩	6.3	6.7	5.5	290.0	中期包含層Ⅱ

他に、サヌカイト剥片・細片が 279個 1,655.2g出土した。

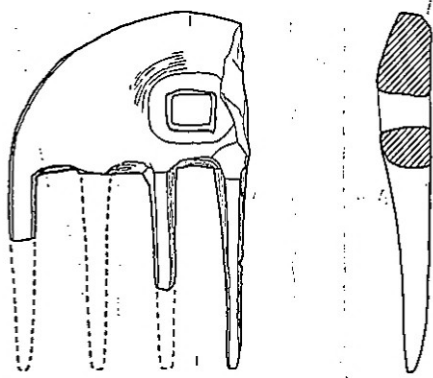


W-19

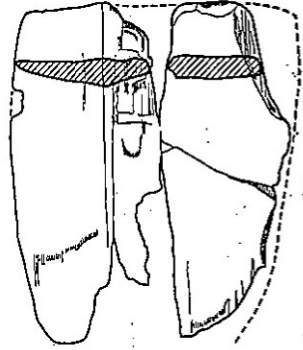


W-20

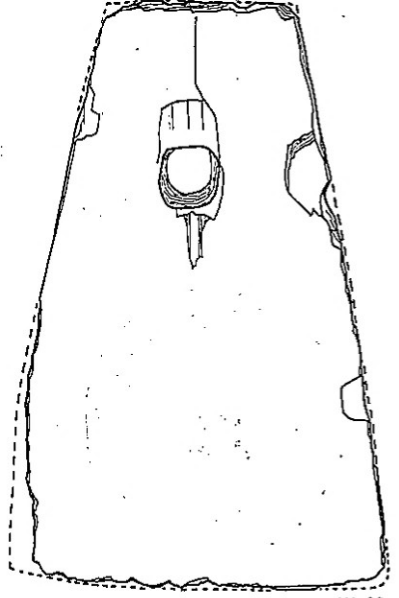
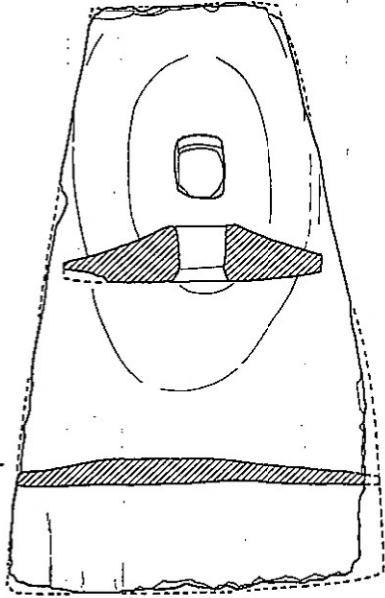
第113图 溝 31 出土木器



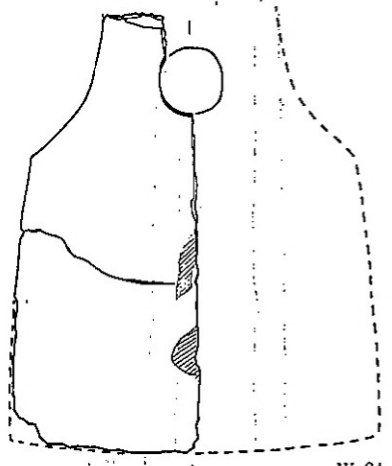
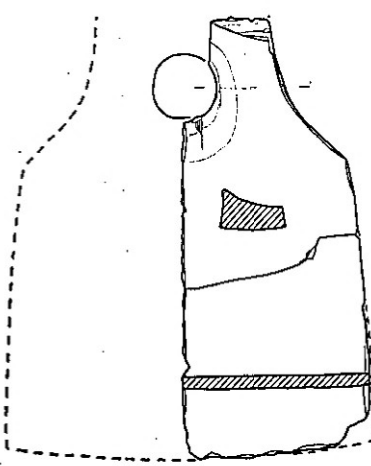
W-21



W-22

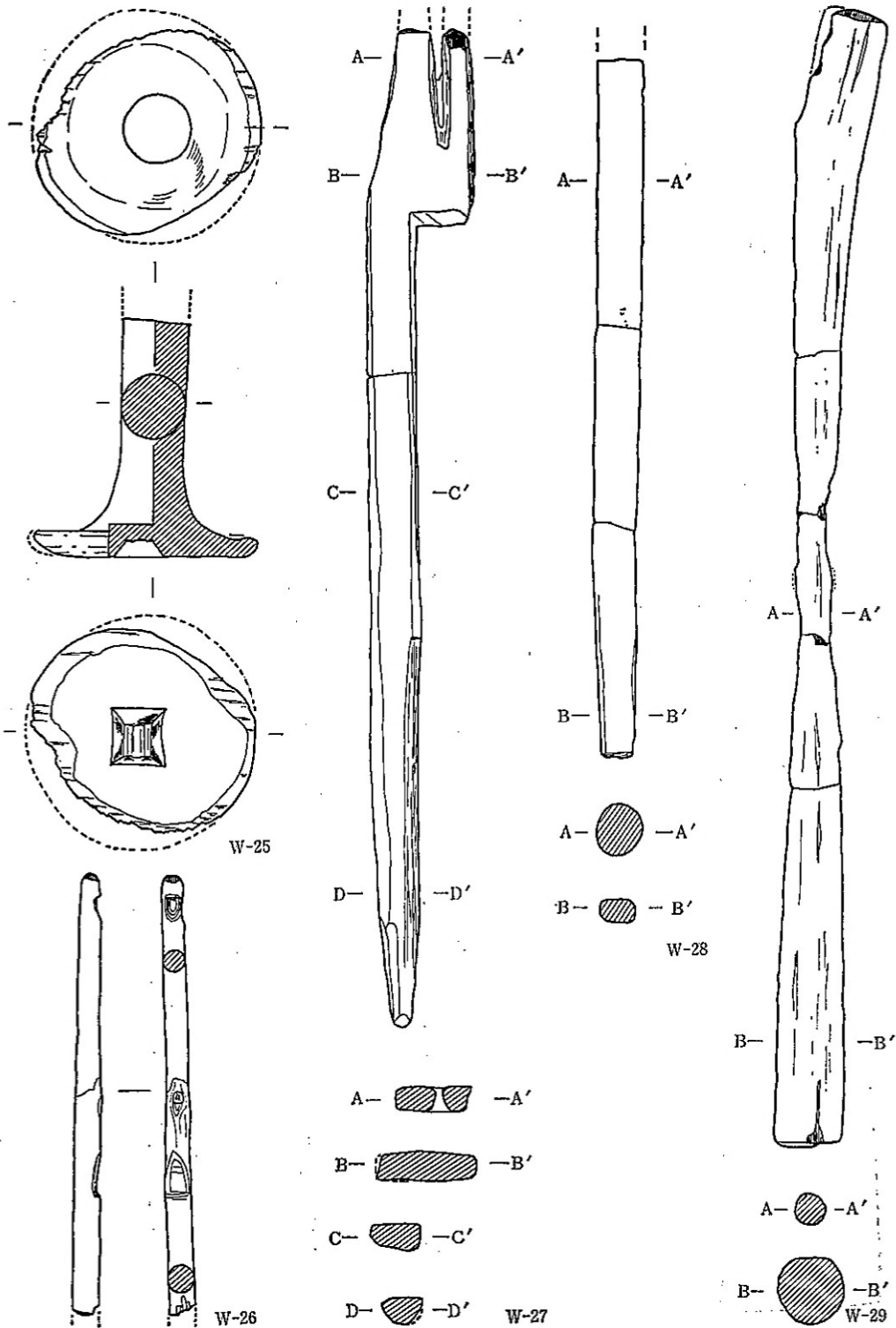


W-23

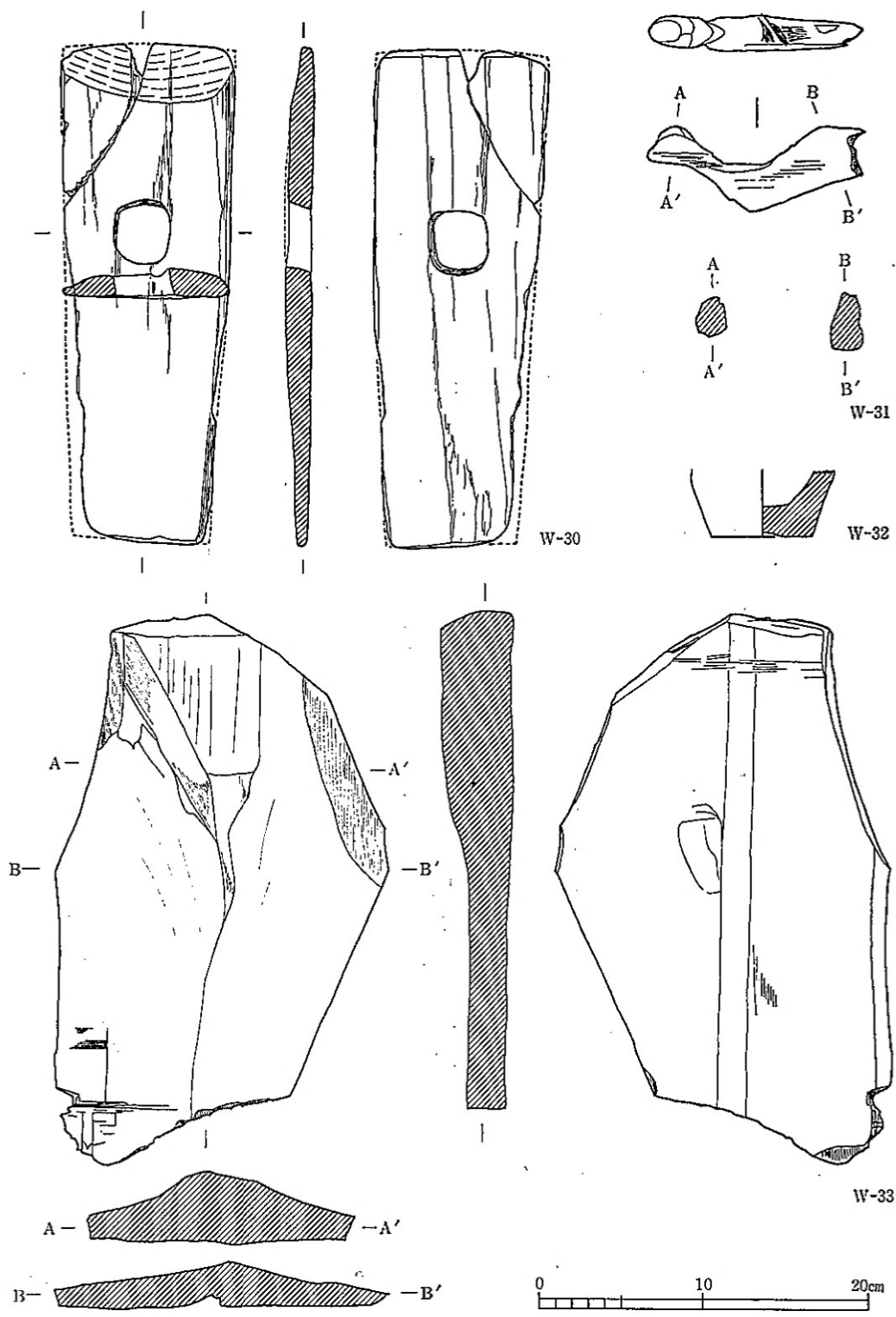


W-24

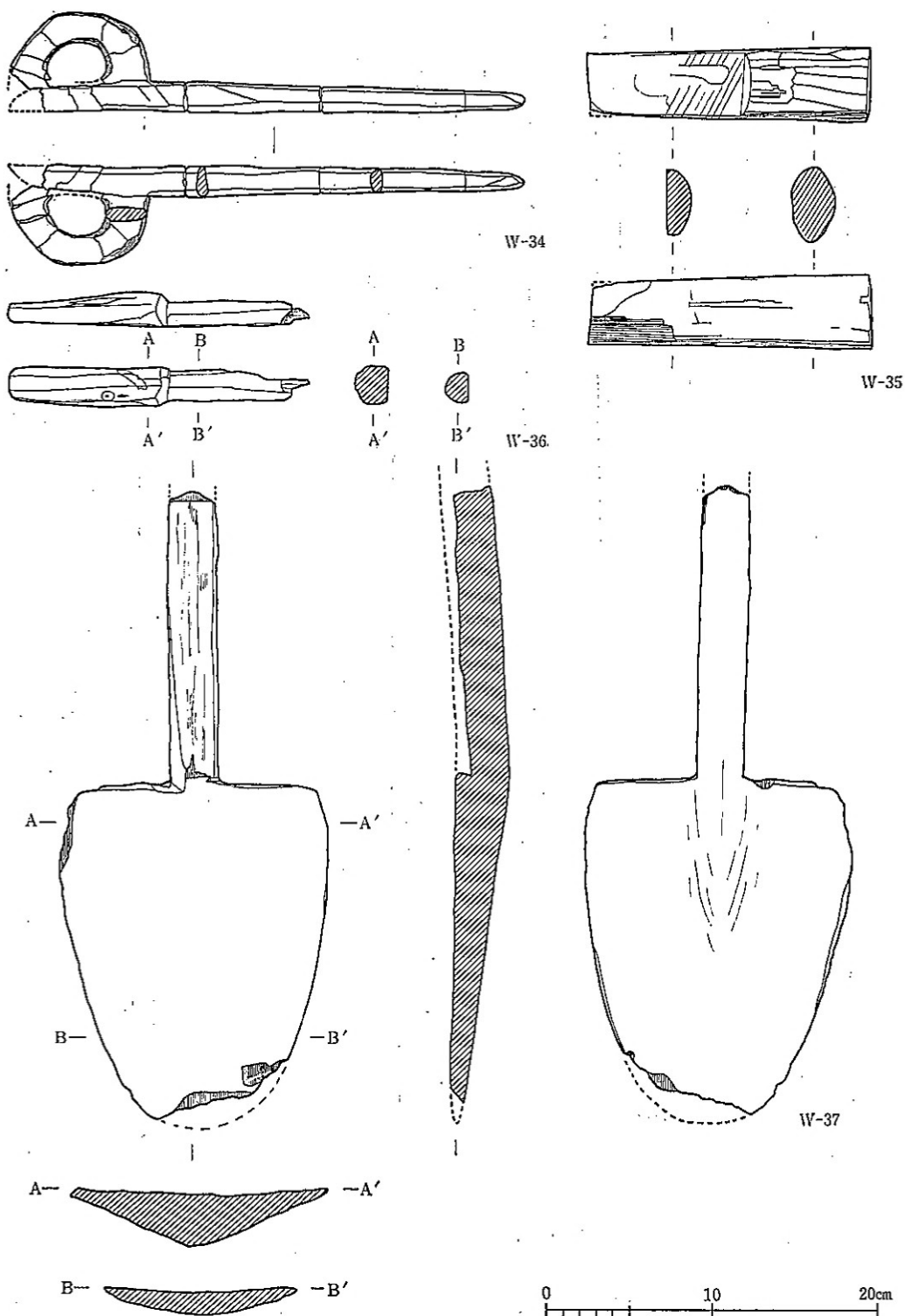
第114図 土城41 (W-21~23)、中期遺構面I包含層 (W-24) 出土木器 (1/2)



第115図 溝29 (W-25・26)、溝19 (W-27)、中期遺構面II包含層 (W-28)、土壙270 (W-29) 出土木器
 (W-25~28は¼、W-29は½)



第116圖. 土壙125 (W-30)、中期遺構面II包含層 (W-31)、土壙16 (W-32)、土壙270 (W-33) 出土木器



第117图 中期遺構面II包含層(W-33)、土城43(W-34)、第9号方形周溝基盛土内、(W-35)、
隅丸方形周溝(W-36)出土木器

3 弥生時代後期の遺構と遺物

1) 遺構面 I

弥生時代後期の遺構面の存在が知られていなかったため、遺構面を部分的にしか検出していない。遺構は、溝と土塋を検出しただけであり、他には河川を検出した。

A 溝 この面で検出した溝は1条だけである。

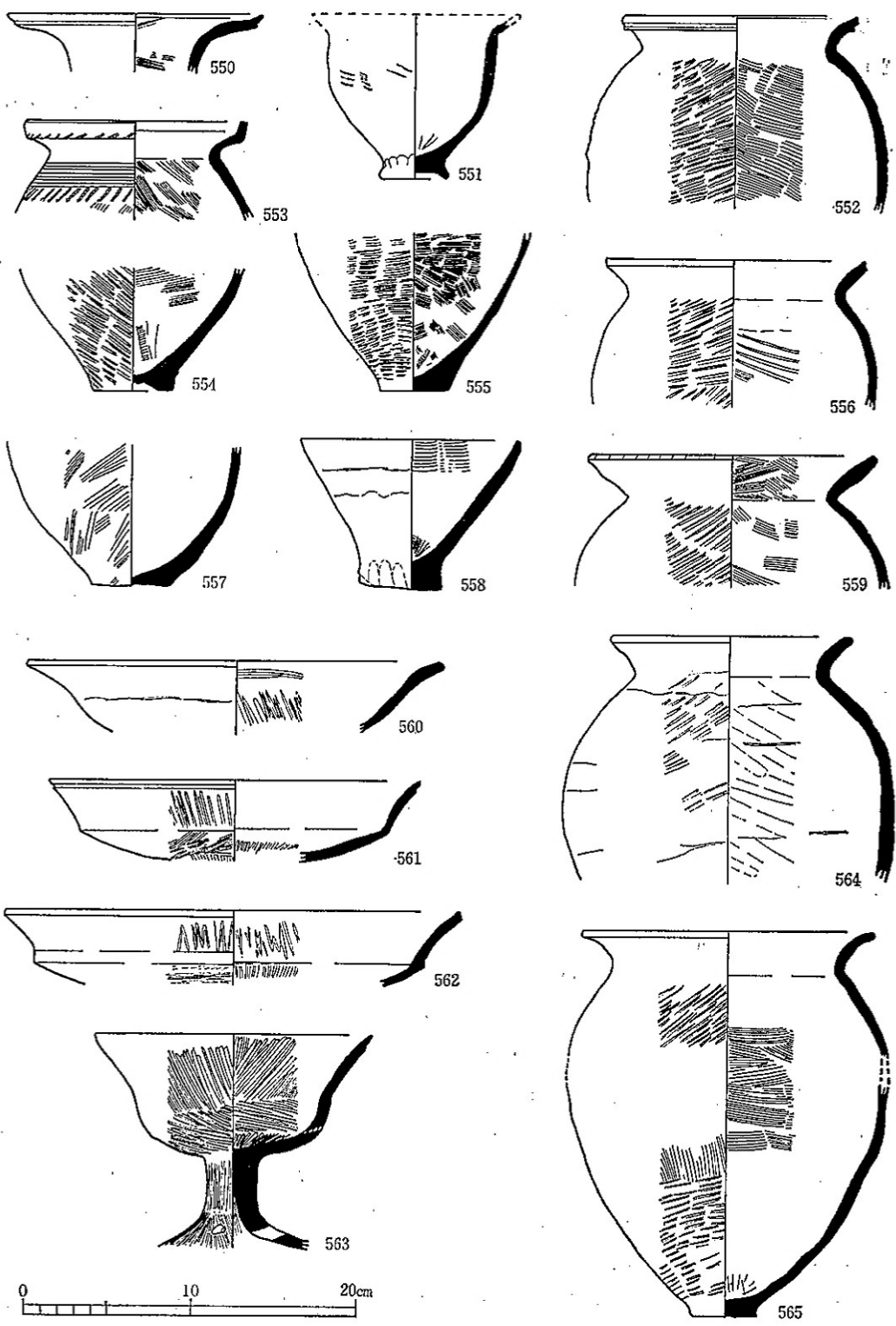
<溝 220>は、3 P R 8 地区から南に延びているが、3 P Q 9 地区までしか検出していない。3 P Q 9 地区以南は、掘削段階で確認し得なかった。検出長は6.5m、幅は0.7~0.9m、深さは0.2mを測る。埋土は、黒色粘土が1層堆積していた。3 P Q 9 地区において長さ3.0m、径0.5mの木を検出した。南北に長く、丁度、溝 220 の続きと考えられる位置にあった。下には、黒色粘土があり、完形に近い土器を検出したことから、本来は、溝 220 内にあったと考えられる。この木は、自然木ではあるが、数個所に切断しようとした痕跡があった。この溝の北端は河川 3 の南肩部であり、溝の流れとしては、北から南へ流れるようである。この溝が南へどこまで延びていたかは、全く明らかにし得ない。

溝内からは、多量の土器(第118図)を検出した。その器種構成は、壺・鉢・高杯・甕等である。壺が非常に少なく、第118図550のように口縁部が外反するものがある。鉢は、小型のもので、直口で突出した底部をもち、外面には粘土紐の継目を残している(第118図558)。高杯には、斜上方へ伸びる杯部が屈曲してさらに外反するもの(第118図561・562)と、外反する口縁部が、稜をもち、杯部へ続くもの(第118図560)がある。第118図563は、やや小型で、深い杯部をもち、生駒西麓産の土器である。甕には、小型のもの(第118図551)と、中型のものがあり、口縁端部が丸くおわるもの(第118図564・565)や、面をもつもの(第118図552・556・559)等がある。体部外面は叩目を施し、内面は刷毛目、ナデを施している。第118図553は、近江産と考えられる甕である。

B 土塋 この面で検出した土塋は、3 P 4 地区において2基検出ただけである。

<土塋 320>は、3 P O 4 地区において検出した。西端部が調査区外へ続くため、全体の形状は不明である。検出長は1.0m、幅は0.6m、深さは0.15mを測る。埋土は4層に分けられ、下から黒色炭化物層、砂混りの暗灰色粘土、黒色炭化物層、砂混りの灰黒色炭化物層が堆積していた。遺物は、土器を僅かに検出しただけである。

<土塋 321>は、3 P O 4 ~ 3 P P 4 地区において検出した。南端部は調査区外へ続き、西端部は後期遺構面Ⅱに伴う河川 8 により削平されてしまっているため、全体の形状は不明である。検出長は2.0m、検出幅は1.4m、深さは0.2mを測る。埋土は3層に分けられ、下層に青灰色粘土、中層に青灰色粗砂、上層に灰色粘土が堆積していた。遺物は、僅かに土器片や木片を検出しただけである。この付近は、後期遺構面Ⅱに伴う河川 8 により、削平が何度か繰り返されているため、人工開削の土塋ではなく、河道の落込かとも考えられる。なお、この土塋の上層に粗砂混り



第118图 濠 220 出土土器

の灰色粘土が堆積しており、その上面に足跡を検出した。

C 河川 河川は流路を変えて2度流れており、古い方を河川3、新しい方を河川4とした。

<河川3>は、B地区北端を東北から西南に流れ、調査区西端で僅かに西へ向きを変える。河川3の流路は、中期遺構面Ⅱの河川1とほとんど同方向であるが、僅かに南へ幅を広げている。埋土は、白色砂礫、青灰色細砂が主である。河川3の正確な規模は、河川4や後期遺構面Ⅱに伴う河川8が、調査区内で直交するように流れるため、明確にはし得ないが、幅約12m、深さ約0.8mを測ると考えられる。この河川は、中期遺構面Ⅱに伴う第5号方形周溝墓の西半部を削っている。遺物は、土器（第119図566～568）と、用途不明の木製品（第120図W-38・W-40）等を検出した。

<河川4>は、ほとんど同じ位置において、河川3と直交するように東南から西北に流れていた。幅約12.5m、深さ約0.8mを測る。南肩は河川3内堆積層である白色砂礫、青灰色細砂を肩としているところもある。河川4内には、灰白色砂礫が主に堆積していた。

3PR3地区から3PQ4地区へ西南に延びる堰を検出した。堰は、河川に直交するように造られており、検出長は5.5mである。その間に約30本の杭が打込まれており、上部を欠失しているため長いものでも露出部分は20cmしか残っていない。打込まれている長さは30～50cmである。杭は南北と東南向きに打込まれた2種があり、本来は組合わされて横木等も存在していたものと考えられる。堰は3PR6地区にも在ったようで、4・5本の杭が残っていた。これも流れに直交するように並んでいる。杭数も少なく、残りが悪いことから古いと考えられる。遺物は、土器（第119図569～577）等を検出した。

D 小結

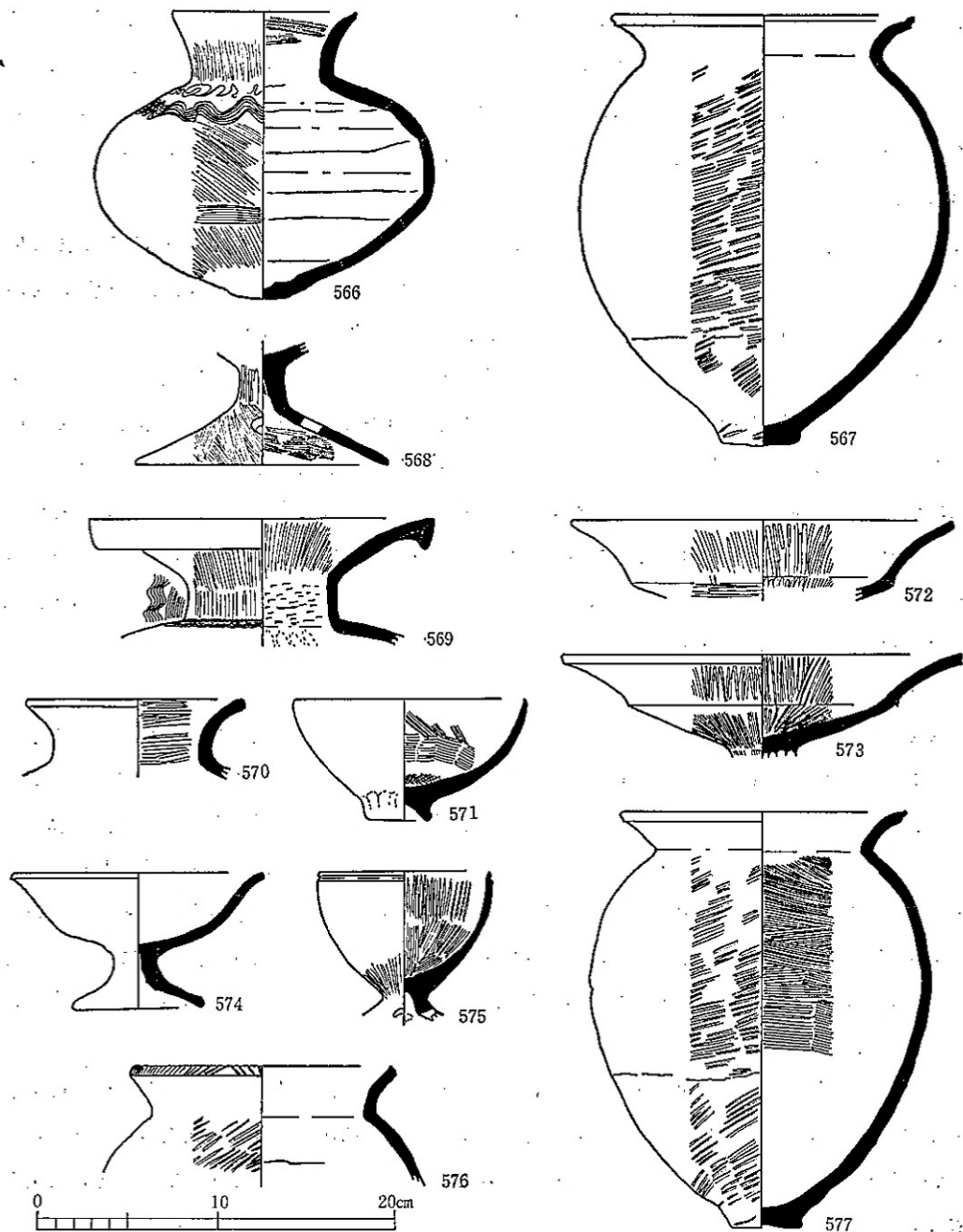
後期遺構面Ⅰで検出した遺構は、溝等であり、その他には河川を検出したにすぎない。従来考えられていたのは、瓜生堂遺跡において弥生時代中期後半には水没して集落が廃棄され、後期後半に再び集落が営まれたということである。それは、中期中葉の遺構面から次に検出される遺構面は、約1～1.5m上層に後期後半の遺構が検出されることがあったからである。しかし、今回の当調査区においては、中期遺構面Ⅱに伴う包含層に部分的に接するようなかたちで後期の遺構面が存在していたのである。この後期遺構面Ⅰで検出した土器から後期の前半に属するものと考えられる。しかし、後期後半と考えられる土器も若干混じっているようであるが、後期末に近いものはないようである。

この遺構面Ⅰから次の後期遺構面Ⅱまでは、約1mの堆積層がある。従来いわれていた海水面上昇は、後期の中頃にあたると考えられる。なお、この遺構面Ⅰに伴う遺物と遺構面Ⅱに伴う遺物を比較することにより、弥生時代後期の土器を時期的に2分することが可能になると考えられる。

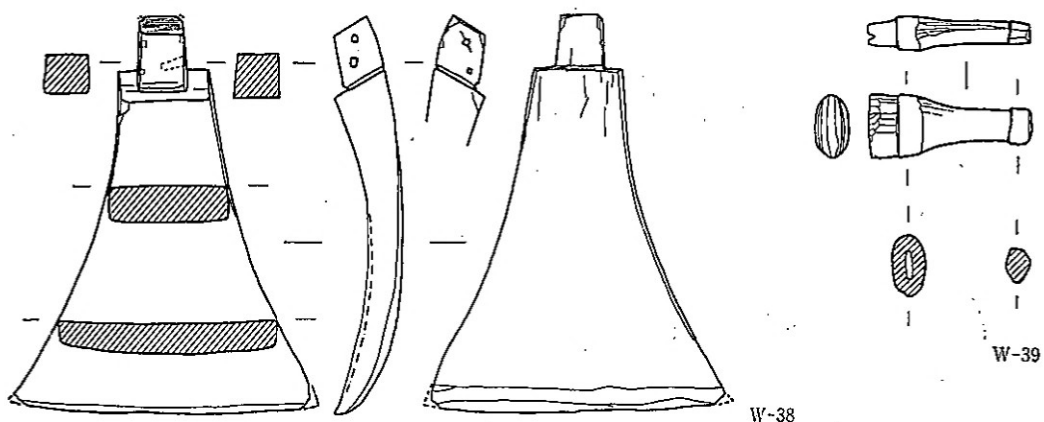
この時期において、過去の調査では全く遺構が確認されておらず、今回の調査でも僅かにしか

遺構を検出していない。今後この時期の遺構が検出されることにより、瓜生堂遺跡の内容が一層明確にされるであろう。

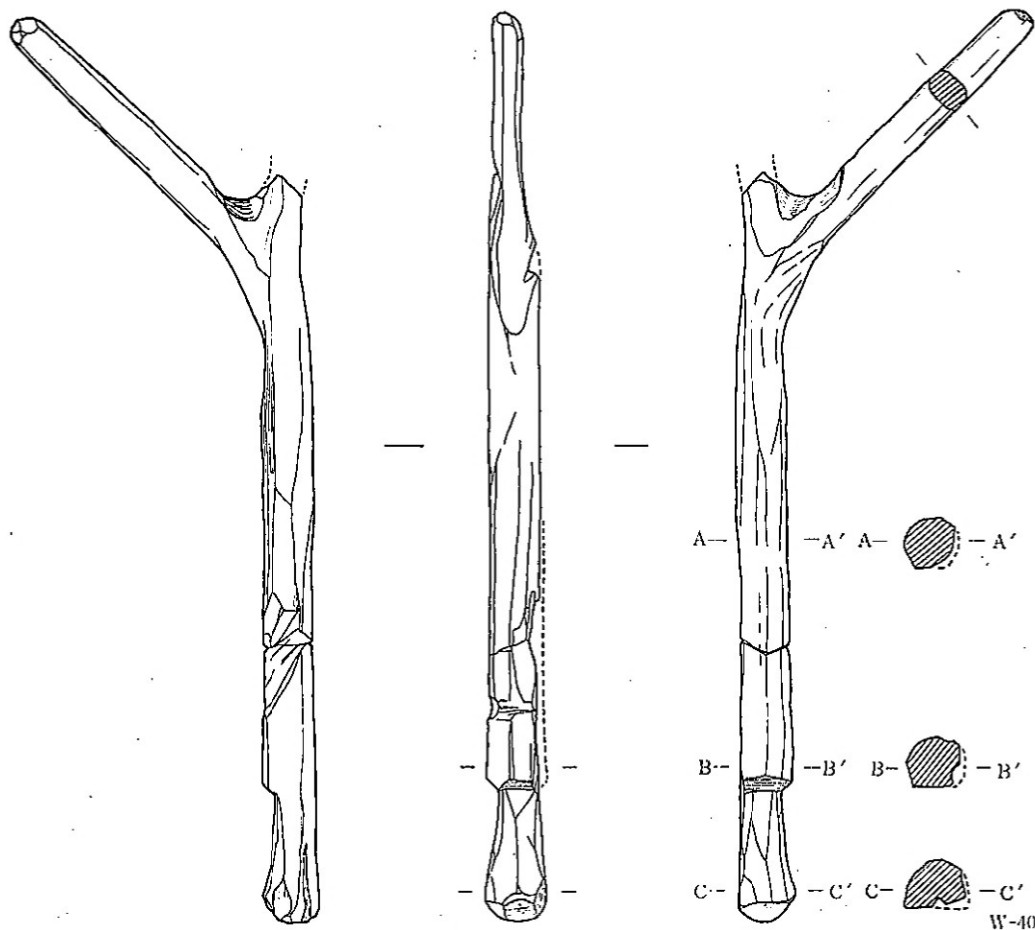
当調査地区は、居住区域から僅かに離れたところと考えられ、当地区の西部にこの時期の遺構が広がっている可能性が考えられる。



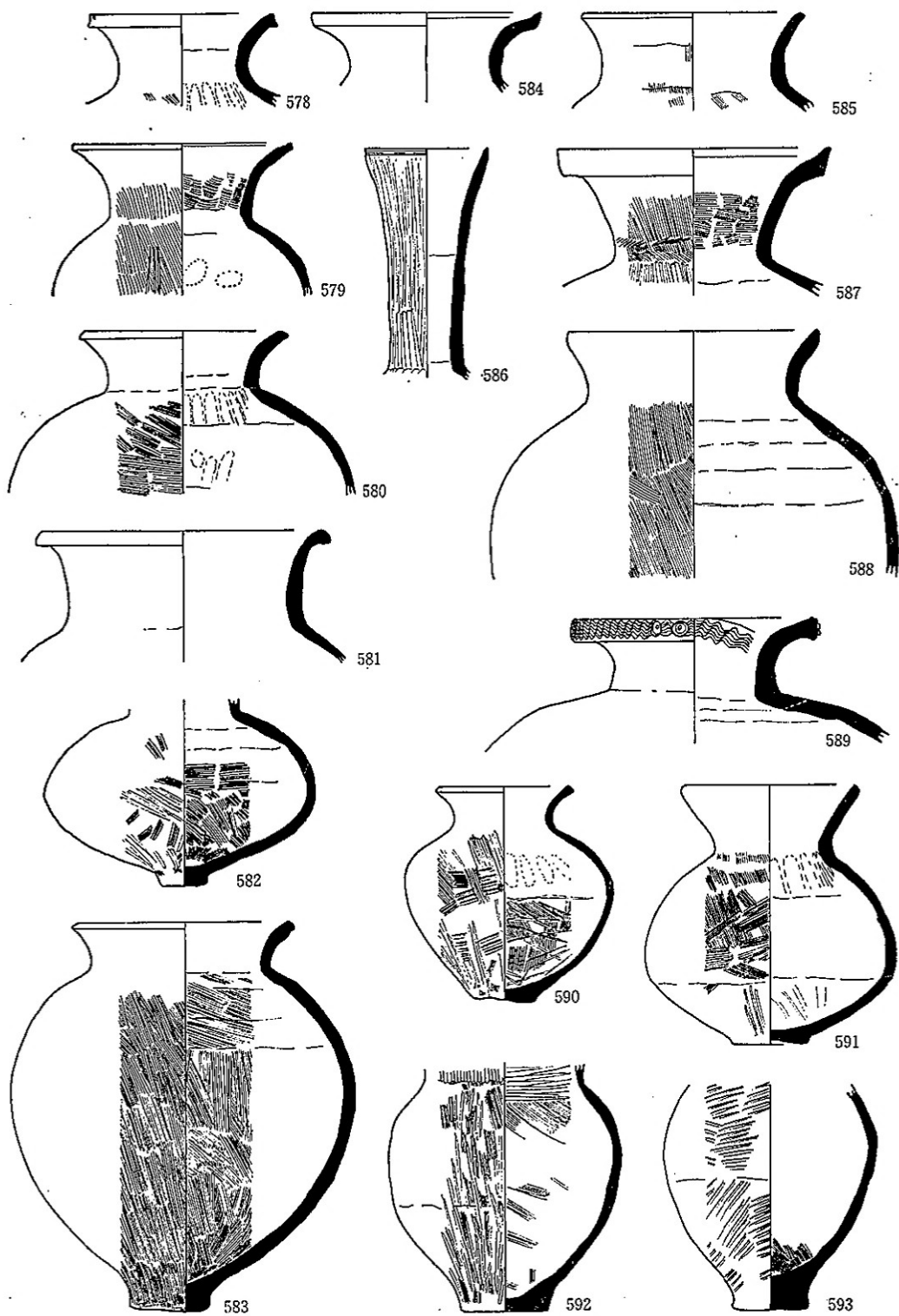
第119図 河川3 (566~568)、河川4 (569~577) 出土土器



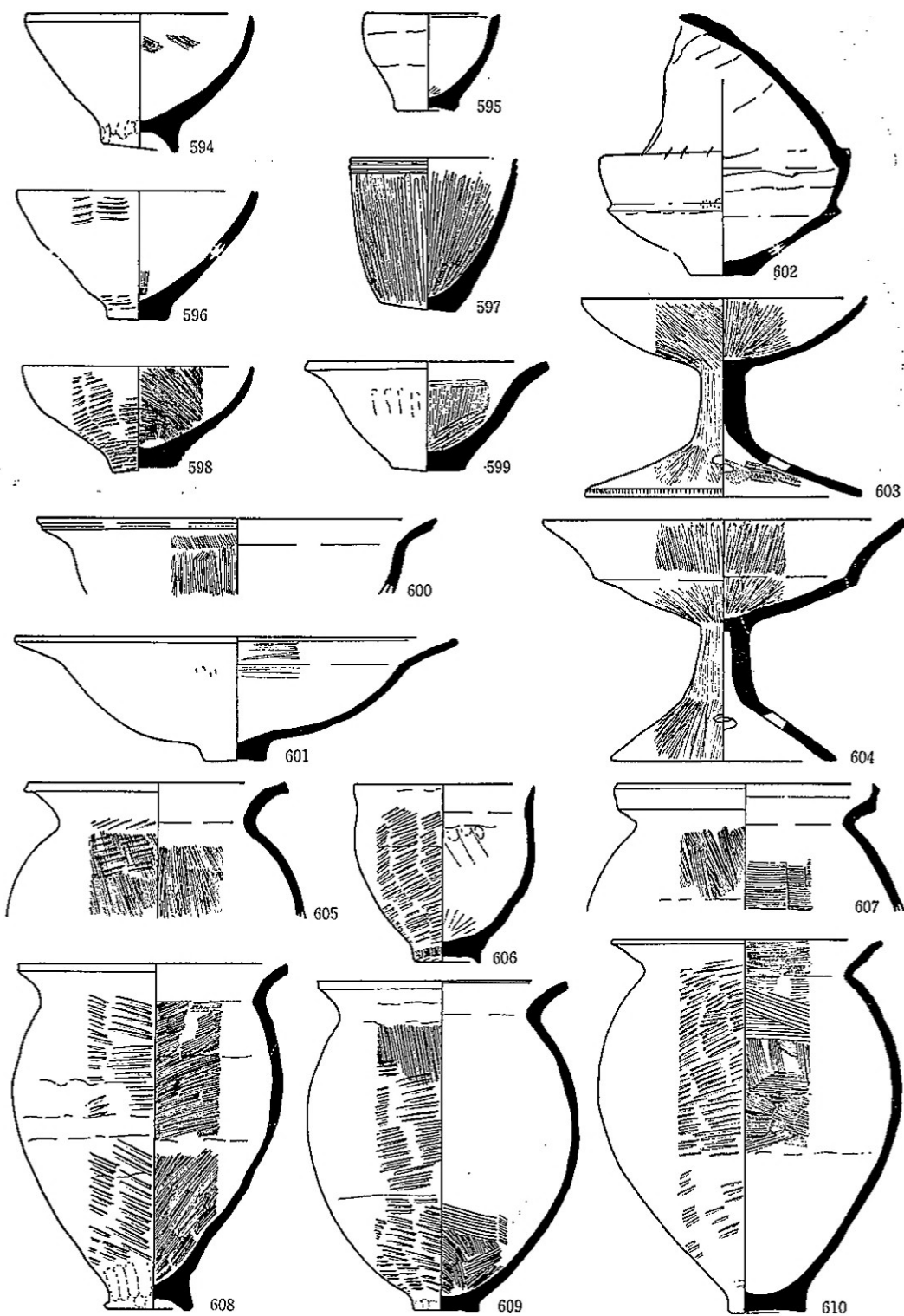
0 10 20cm



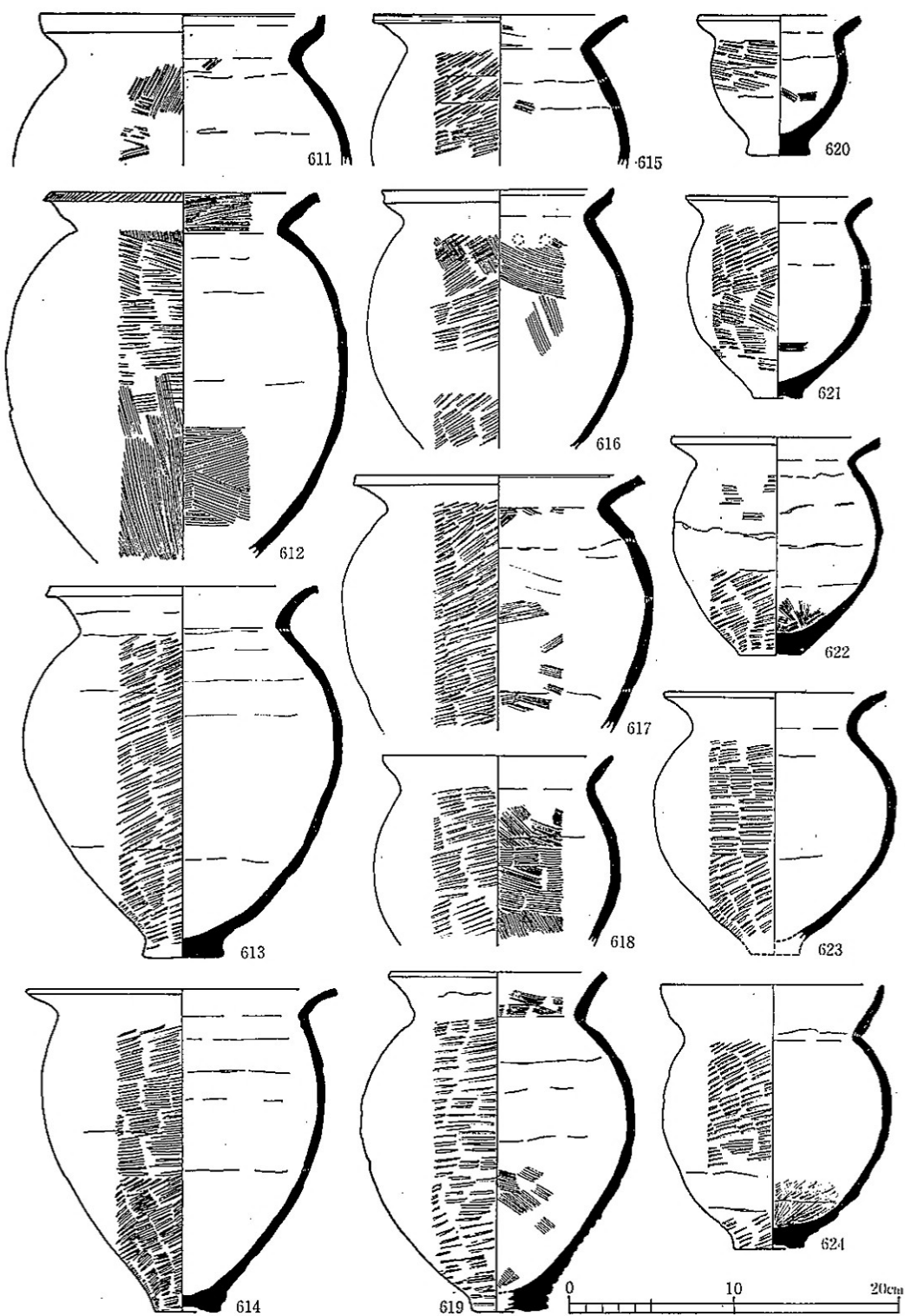
第120图 河川3 (W-38·40)、河川8 (W-39) 出土木器



第121図 弥生時代後期遺構面 I 包含層出土土器 (4)



第122図 弥生時代後期遺構面I 包含層出土土器 (1/4)



第123图 弥生时代後期遺構面 | 包含層出土土器

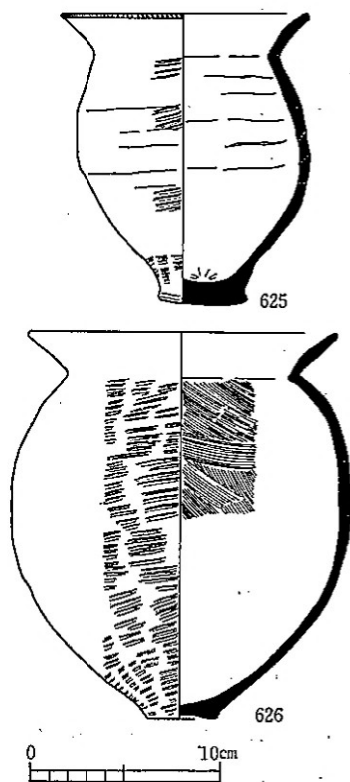
2) 遺構面Ⅱ

弥生時代後期遺構面Ⅱは、遺構面Ⅰから約1m上面にある。遺構としては溝、ピットを検出した。他には河川を検出した。

A 溝 溝は3条検出しただけであり、あまり大規模なものはない。

<溝 221>は、3PT2~3・3PU2~3地区において検出した。東端は調査区外へ続く。西端は河川8に切られていた。東北から南西方向の溝である。検出長は4.0m、検出幅は5m、深さは1.8mを測る。かなり大規模な2段掘りの溝である。肩口からほぼ垂直に1.15m掘られ、そこで平坦面を造り、幅1.4mとなり再び急角度で深さ0.65m掘られている。この平端面に、河川8に直交する方向で杭列がある。杭は直径4cmの細いもので、残存高は40cmを測る。約2mに20~30cm間隔で7本打ち込まれていた。堰の可能性があろう。底部は非常に凹凸が激しい。埋土は、中央部で礫混りの黄色粗砂層、肩口付近では白色細砂が堆積していた。遺物は、磨滅した土器片を僅かに検出しただけである。

<溝 222>は、3PS8地区から始まり南東に延び、3PT9地区で調査区外へ続く。検出長は7.2m、幅は2.6m、深さは0.4mを測る。肩口からは、ほぼ垂直に掘られている。埋土は、暗灰青色粘土が1層堆積しており、薄い炭化物層を2~3層間に挟んでいる。遺物は、土器(第124図)を僅かに検出した。土器は、甕を2点完形で検出しただけで、他は小破片である。第124図625は、口径8.8cm、腹径8.1cm、底径4.9cm、器高15.6cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面をもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、縦長の体部へ続く、底部は突出し平坦である。口径が腹径より大になるやや小型の甕である。調整は、口頸部内外面ヨコナデ、体部外面はやや左下がりの叩目後ナデ、体部内面は縦方向のナデを施している。体部上半内外面に粘土紐の継目を残している。口縁部端面には、部分的に刻み目が施されている。第124図626は、口径16.4cm、腹径18.4cm、底径3.9cm、器高20.8cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸みをもつ。頸部は「く」の字形に屈曲し、内面に明瞭な稜をもつ。体部はやや縦長の球形である。底部はやや突出し中央部がわずかに凹む。調整は、口頸部内外面ヨコナデ、体部外面やや左下がりの粗い叩目を施している。体部内面上半は斜方向の刷毛目、下半は表面磨滅のため、調整は不明である。外面全体に煤が付着している。



第124図 溝222出土土器

〈溝 223〉は、3 P S14地区から西南に延び、3 P R15地区で攪乱を受け、その先は明確にし得ない。検出長は5 m、幅は0.5m、深さは0.15mを測る。埋土は、暗灰色粘土である。遺物は、全く検出しなかったが、層位的に後期遺構面Ⅱに当たる。

B ピット

ピットは、溝223の南において、2個検出した。径0.3m、深さ0.15mを測る不定形な掘方である。埋土は、暗灰色粘土である。遺物は、全く検出しなかったが、層位的に後期遺構面Ⅱに当たるものである。

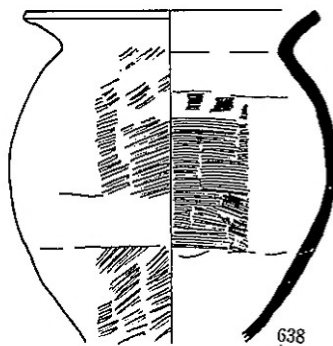
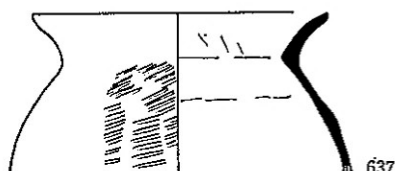
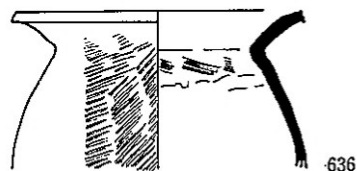
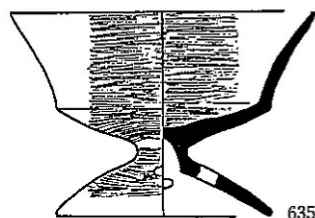
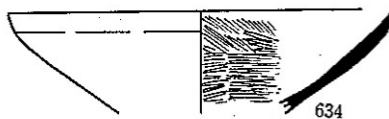
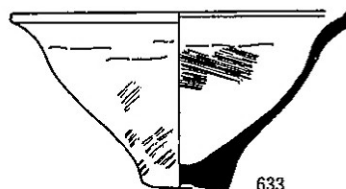
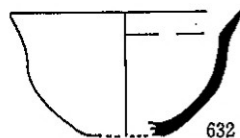
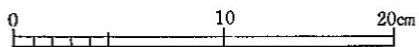
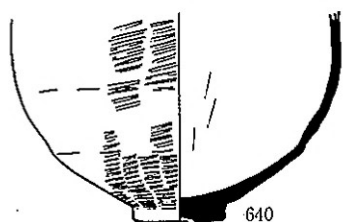
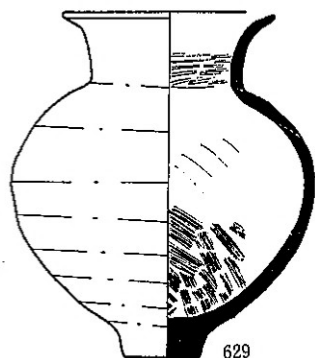
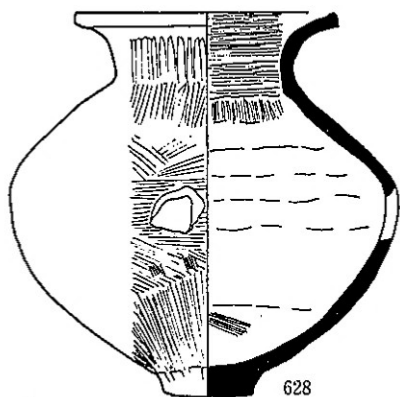
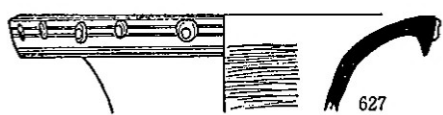
C 河川 河川は、調査区北端において検出したもので、今回検出した河川の中では最も大規模なものである。

〈河川 8〉は、B地区北端を東南から西北に流れており、幅約20m、深さ約2 mを測る。河川内の堆積層は、下層に灰色砂礫が1.5m、上層に褐色砂礫が0.5m堆積していた。河川中央部には、灰褐色砂礫層が褐色砂礫層・灰色砂礫層を削って堆積している。この部分は、河川が一度埋った後に、再び水が流れたと考えられる。この河川の堆積層上面には、古墳時代前期の遺構がある。河川は、次第に規模を縮小して、古墳時代中期まで残るものと考えられる。遺物は、土器（第125図）、木器（第120図W-39）等を検出した。時期的に古いものも混在している。なお、備中産の高杯（第125図635）も検出した。

D 小結

弥生時代後期遺構面Ⅱは僅かな遺構、溝3条とピット2個を検出しただけであり、他地区では全く検出していない。遺構内からはほとんど遺物を検出していない。しかし、遺構面上からは多量の土器を検出した。それも完形に近いものが多く、居住区域に非常に近いと考えられる。なお、居住区域がどの辺りになるのかは明らかにはし得ない。ただ、過去の調査でこの時期に近いと考えられる遺構がC地区東方で検出されており、その付近では河川が数多く確認されていた。当地区北端において幅約20mを測る河川8を検出しており、同一河川になる可能性もある。この時期の居住地域の中心はこれらの河川の周辺に僅かに存在していたと考えられる。古墳時代になっても同様のことが考えられる。なお、この遺構面はレベル的には弥生時代後期遺構面Ⅰから約1 m上にあり、古墳時代前期遺構面Ⅰに近い。しかし、弥生時代後期遺構面Ⅱとしたのは検出した遺物からである。ここでは、庄内式土器を古墳時代前期の土器として扱っており、庄内式土器を検出する面からを古墳時代とした。そのため、この遺構面を弥生時代後期としたのであるが、この面付近の層から検出した土器も時間幅が考えられ一部には古墳時代に入るものも含まれている可能性がある。

また、弥生時代後期に間に砂と粘土の互層の堆積が認められたことは、この間当地区付近では人間が居住していなかったと考えられ、後期の終り頃に再び居住し始めたということも、河内平野中心部における集落のあり方を考える上で重要な時期であろう。



第125図 河川 8 出土土器

4 古墳時代前期の遺構と遺物

この時期も遺構面を2面検出した。南部には2面あり、北部では重なっているようである。そのため、すべての遺構を遺構面Ⅰ・Ⅱに当てはめることは困難である。遺構面Ⅰに明らかに伴う遺構を遺構面Ⅰで説明し、遺構面Ⅱに明らかに伴う遺構とどちらに伴うか明らかにし得ない遺構を遺構面Ⅱで説明する。遺構番号は遺構面Ⅰ・Ⅱに分けず、北から通してつけた。

1) 遺構面Ⅰ

遺構面Ⅰに伴う遺構は、井戸、堤を有する溝、土塋等がある。

A 井戸 井戸は2基あり、明らかに遺構面Ⅰに伴うものである。

<井戸9>は、3P S11地区において検出した。直径1.7m、深さ0.6mを測る円形の素掘りの井戸である。2段掘りであり、1段目は緩やかな傾斜をもって、深さ0.3m掘られており、そこで直径0.9mとなり、ほぼ垂直に0.3m掘られている。埋土は、3層に分けられ、下層に灰色粗砂が30cm、中層に黄色粘土混りの灰色粘土が20cm、上層には茶褐色粘土が10cm堆積していた。中層は、人為的に埋められたようである。断面を観察しても杵を使用していたような痕跡は全くない、遺物はほとんどなく、中層から庄内式土器の小破片を僅かに検出しただけである。

<井戸10>は、3P S12地区において全体の約半分を検出した。残りは調査区から外れている。直径1.5m、深さ0.4mを測る。円形の掘方を持つ2段掘りの井戸である。1段目は深さ0.1mで緩やかな傾斜を持って掘られており、そこで直径0.6mとなって、ほぼ垂直に0.3m掘られている。埋土は、3層に分けられ、下層に青灰色粘土が20cm、中層に灰色砂が10cm、上層に灰黄色土が10cm堆積していた。井戸の中央部には、これらの3層を切って、茶褐色粘土が堆積していた。この茶褐色粘土は上・下2層に分けられ、下層には青灰色粘土が混在しており深さ20cmを測る。この中央部分は、井戸が一度埋められた後に、再び掘り直されたものと考えられる。遺物はほとんど検出しなかったが、層位的に遺構面Ⅰに伴う遺構である。

B 溝 溝は3条検出したが、2条は同一溝である可能性がある。

<溝225>は、3P O8地区から南東に延び、3P P9地区でやや東に向きを変え3P Q9地区へ続く。西端は調査区外へ延びる。検出長は10.7m、幅は0.6m、深さは0.1mを測る。埋土は、下層に薄く白色微砂層があり、中層に暗灰色微砂質土、上層に灰色粘質土が堆積していた。遺物は、僅かに土器片を検出しただけである。

<溝226>は、3P S10地区から蛇行しながら西北に延び、3P Q9地区へ続く。両端が調査区外へ続く。検出長は22m、幅は0.8~2.2m、深さは0.3mを測る。この溝は両側に堤を有している。堤は南と北でまるで形状が異なる。南堤は幅1.0~2.2m、高さ0.25mを測る。北堤は不定形であるが、高さ0.15~0.25mを測る。不定形ではあるが、この堤がなければ、溝としての用が果せないものである。この堤は盛土であり、黄色粘土と茶褐色粘土が混在する。溝内埋土は、灰黄色粘土が1層堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。この溝の性格は不明であるが、